琉球大学学術リポジトリ

在沖フィリピン人女性のアイデンティティと沖比国際結婚夫婦間コミュニケーションに関する研究：社会的構築主義の視点から

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学
	公開日: 2017-03-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 仲里, 和花, Nakazato, Kazuka
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33726

在沖フィリピン人女性のアイデンティティと
沖比国際結婚夫婦間コミュニケーションに関する研究
―社会的構築主義の視点から―

平成 27 年度　博士論文

琉球大学大学院
人文社会科学研究科　比較地域文化専攻
仲里　和花

目　　次

第１章　序章……6
第１節　研究の背景……6
第２節　研究の目的……7
第３節　調査方法……9
第４節　調査協力者の属性……10
第２章　沖縄人男性と結婚したフィリピン人女性ニューカマー……12
第１節　沖比国際結婚夫婦の現状……13
第２節　在沖フィリピン人女性が沖縄人男性と出会って結婚した経緯……22
第３章　沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程……32
第１節　研究の背景と目的……32
第２節　先行研究……32
第３節　結果……34
第４節　考察……54
第４章　在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ……58
第１節　研究の背景と目的……58
第２節　先行研究……58
第３節　在沖フィリピン人女性の言語……63
第４節　在沖フィリピン人女性の言語意識……67
第５節　在沖フィリピン人女性のアイデンティティ……70
第６節　考察……85
第７節　まとめ……90
第５章　在沖フィリピン人女性のジェンダー観と沖比国際結婚夫婦間コミュニケーション
第１節　研究の背景と目的……92
第２節　先行研究……93
第３節　結果……99
第４節　考察……110
第５節　まとめ……117
第６章　フィリピン人妻に対する沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為についての考察…120
第１節　研究の背景と目的……120
第２節　暴力の定義と DV の暴力形態……121
第３節　事例の紹介と内容の分析……122
第４節　考察……128
第７章　結論－社会的構築主義の視点から－……131
参考・引用文献……149

細　　目

第１章　序章……6
第１節　研究の背景……6
第２節　研究の目的……7
第３節　調査方法……9
第４節　調査協力者の属性……10
第２章　沖縄人男性と結婚したフィリピン人女性ニューカマー……12
第１節　沖比国際結婚夫婦の現状……13
1.1.　日比国際結婚件数の推移……13
1.2.　沖縄県の国籍別外国人登録者数（2006 年／2014 年）の分析……15
1.3.　沖縄県在住フィリピン人の人口（年齢・男女別／在留資格別）……17
第２節　在沖フィリピン人女性が沖縄人男性と出会って結婚した経緯……22
2.1.　出稼ぎ労働者（エンターテイナー）として出会ったケース……22
2.1.1.　B さんの事例……22
2.1.2.　送り出し国・フィリピンでのリクルート……23
2.1.3.　受入れ国・日本（沖縄）での事情……24
2.2.　家族・親戚の紹介によるお見合いで出会ったケース……26
2.2.1.　E さん・O さんの事例……26
2.2.2.　考察……26
2.3.　結婚仲介業者の紹介によるお見合いで出会ったケース……27
2.3.1.　K さんの事例……27
2.3.2.　考察……28
2.4.　フィリピンで沖縄人男性と出会ったケース……28
2.4.1.　N さんの事例……28
2.4.2.　考察……29
2.5.　まとめ……29
第３章　沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程……32
第１節　研究の背景と目的……32
第２節　先行研究……32
第３節　結果……34
3.1.　夫婦の葛藤課題……35
3.2.　夫婦間の葛藤課題の調整過程……37
3.2.1.　肯定的言語コミュニケーション……40
3.2.2.　否定的言語コミュニケーション……43
3.2.3.　非言語化から言語化へ変化……44

3.2.4. 肯定的非言語コミュニケーション……46
3.2.5. 否定的非言語コミュニケーション……48
3.2.6. 言語化から非言語化へ変化……52
第 4 節　考察……54
4.1. 夫婦の葛藤課題……54
4.2. 夫婦間の葛藤課題の調整過程……55
第 4 章　在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ……58
第 1 節　研究の背景と目的……58
第 2 節　先行研究……58
2.1. 言語意識……58
2.2. 言語とアイデンティティ……59
2.3. フィリピン人の言語アイデンティティ……61
第 3 節　在沖フィリピン人女性の言語……62
3.1. 一般的な概要……63
3.2. 夫婦間の言語……63
3.3. 親子間の言語……64
3.4. 職場の言語……65
3.5. 教会／フィリピン・コミュニティーでの言語……66
第 4 節　在沖フィリピン人女性の言語意識……67
4.1. 言語の階層性……67
4.2. 日本語に対する意識……68
4.3. 英語に対する意識……68
4.4. タガログ語と地方語に対する意識……69
第 5 節　在沖フィリピン人女性のアイデンティティ……69
5.1. 妻として……69
5.2. 母親として……72
5.3. 嫁として……75
5.4. 就労者として……76
5.5. フィリピン人として……78
第 6 節　考察……82
6.1. 多元的アイデンティティ……82
6.2. 母語アイデンティティと第二言語アイデンティティ……84
6.3. アイデンティティの揺れ……85
6.4. アイデンティティの更新……86
第 7 節　まとめ……87

第５章　在沖フィリピン人女性のジェンダー観と沖比国際結婚夫婦間コミュニケーション
第１節　研究の背景と目的……89
第２節　先行研究……89
2.1. フィリピン人女性のジェンダー観について……90
2.1.1. フィリピンの歴史と女性……90
2.1.2. 現代のフィリピン人女性のジェンダー観……92
2.2. 夫婦間コミュニケーションとジェンダーについて……94
第３節　結果……95
3.1. 在沖フィリピン人女性のジェンダー観……96
3.1.1. 調査協力者の生育環境について……96
3.1.2. 男／女らしさに関する意識……97
3.1.3. 性的役割分業と男女共同参画への意識……97
3.1.4. 男女平等社会の現状について……98
3.2. 家庭内の性的役割分業の実践……99
3.2.1. 平等主義的性役割分業の実践……99
3.2.2. 伝統主義的性役割分業の実践……99
3.2.3. 伝統主義的実践から平等主義的実践への変化……100
3.3. 夫婦間コミュニケーションに見られる言語態度……101
3.3.1. 非対称性的関係を求める言語態度……102
3.3.2. 対称性的関係を求める言語態度……105
第４節　考察……107
4.1. 在沖フィリピン人女性のジェンダー観……107
4.2. 在沖フィリピン人女性の性的役割分業の実践……109
4.3. 夫婦の関係性を構築する言語態度……110
4.3.1. 夫婦間の上下関係……111
4.3.2. 夫婦間の平等関係……113
第５節　まとめ……114
第６章　フィリピン人妻に対する沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為についての考察…116
第１節　研究の背景と目的……116
第２節　暴力の定義と DV の暴力形態……117
第３節　事例の紹介と内容の分析……118
3.1. 経済的暴力……118
3.2. 身体的暴力……119
3.3. 社会的隔離……119
3.4. 心理的暴力・言葉による暴力……120
3.5. 男性の特権をふりかざす……120

3.6. 強要・脅迫・威嚇……121
3.7. 法的立場を利用した暴力……122
3.8. 文化的暴力……123
3.9. 親族との関係……123
第4節　考察……124
第7章　結論－社会的構築主義の視点から―……127
第7.1節　沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程……127
第7.2節　在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ……133
第7.3節　在沖フィリピン人女性のジェンダー観と沖比国際結婚夫婦のコミュニケーション……137
第7.4節　フィリピン人妻に対する沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為についての考察……141
第7.5節　まとめ……142
参考・引用文献……145

第１章　序章

第１節　研究の背景

近年、グローバル化の時代を迎え、国家間、言語間、文化間を超えた人々の移動が増加している。日本でも外国人との接触機会が増えたことにより、日本人と外国人の国際結婚が年々増加傾向にある。日本の国際結婚件数は 1970 年に 5,546 件であったのが、2010 年には 30,207 件となり、40 年間で約 5 倍に増加している（厚生労働省人口動態統計、2012）。その中でも「夫日本人・妻外国人」の件数が 76%を占め、アジア出身の外国籍妻が多く見られる。フィリピン国籍妻の比率は高く、2006 年には、国際結婚の組み合わせの中でも最多の 12,150 件であった。2013 年には、3,118 件と減少しているが、中国国籍妻の組み合わせに次いで 2 番目に多い（厚生労働省人口動態統計、2013）。これらフィリピン国籍妻が多い背景には、フィリピンと日本の経済格差の問題がある。

世界でも有数の出稼ぎ大国フィリピンでは、2006 年時点で、海外在住者は 800 万人に達し、全人口の 10%を占めている（佐竹・ダアノイ、2006）。フィリピンは、1982 年、失業対策の一環として、海外雇用奨励、外貨獲得、海外技術の取得を目的とした海外雇用庁を設立し、86 年以降、海外フィリピン人による送金は国家最大の外貨獲得源となっている（前掲、2006）。70 年代後半には男性が中東諸国へ建設労働者として出稼ぎに出ることが多かったが、80 年代後半以降、香港、シンガポール、中東へ家事労働者、日本へエンターテイナーとして出稼ぎに出る女性が増えた（前掲、2006）。2003 年、興行ビザで来日したフィリピン人は 80,048 人に上る（法務省入国管理局、2013）。母国の高い失業率と貧困から逃れ、仕事を求めて来日し、興行ビザでエンターテイナーとして働くフィリピン人女性は、職場で出会った日本人男性客と結婚するケースが多い。

沖縄県では、2013 年、フィリピン人の人口は 1,625 人で在沖外国人総数の約 16%を占める。その内、女性は 1,136 人で約 70%を占め、永住者、日本人の配偶者、定住者等の在留資格で滞在しているフィリピン人は 1,364 人で約 84%を占める（法務省入国管理局、2013）。沖縄県でも、県出身男性と結婚し定住しているフィリピン人女性が多いことが推察できる。

筆者が、在沖フィリピン人女性のアイデンティティと沖比国際結婚夫婦間コミュニケーションの問題に関心を持ったきっかけは、1998 年の 1 年間、フィリピンで活動する NGO スタッフとして元エンターテイナーのフィリピン人女性支援に携わったことから始まる。これらフィリピン人女性達は、雇用者から搾取されたり、虐待を受けた者や、日本人の恋人との間の子供を出産した後恋人と連絡が取れなくなったりした者で、日本での体験が原因で心に傷を持ち、フィリピン社会での再統合が困難になっていた。筆者はそのような女性達を社会復帰させるための支援活動を行っていた。沖縄に帰国後、カトリック教会を訪ねたところ、フィリピン人シスターに出会った。彼女を通して、沖縄県にも県出身男性と結婚し定住しているフィリピン人女性達がいることを知った。

そこで、2011 年、133 人の在沖フィリピン人女性を対象にアンケート調査を実施した[1]。その結果、25%（n=34）の女性が沖縄人夫と夫婦関係が上手くいっていないと回答し、その内 8 人が DV・離婚問題を抱えていた。また、15%（n=19）の女性が沖縄人夫との間に何らかのコミュニケーションの問題を抱え、さらに、78%（n=104）の女性が日本語を話すことに不便を感じると回答し、言語上の問題を抱えていることがわかった。

この調査を通して、在沖フィリピン人女性が沖縄人夫との間に抱える異文化コミュニケーションの問題、そして、言語上の問題が彼女達のアイデンティティ構築に与える影響などに関心を持つようになった。この博士論文は、15 人の在沖フィリピン人女性を対象に、2012 年から 2015 年にかけて、4 回のインタビュー調査を実施し、その結果と考察をまとめたものである。

第 2 節　研究の目的

本論文は、在沖フィリピン人女性のアイデンティティと沖比国際結婚夫婦間コミュニケーションの問題を明らかにすることによって、彼女達の異文化適応の問題に対する理解を深め、フィリピン人女性が沖縄人夫と上手くコミュニケーションを遂行して沖縄社会に適応するために、ホスト社会はどのような支援ができるのか、提言を行うことを目的とする。

本論文の結論では、在沖フィリピン人女性のアイデンティティと沖比国際結婚夫婦間コミュニケーションの問題を社会的構築主義の理論的枠組みで考察していく。社会的構築主義では、人間のアイデンティティや人間の関係性は、言語によって構築されるという視点に立つ。在沖フィリピン人女性は言語を媒介にして、どのようなアイデンティティを構築しているのか、そして、沖縄人夫との言語による相互作用を通して、どのような夫婦関係を構築しているのかを明らかにする。そして、彼女達が健全なアイデンティティや建設的な夫婦関係を築いていくために、言語はどのような役割を果たすことができるのか、そして言語を通して、ホスト社会は彼女達をどのようにサポートしていくことができるのかを考察する。

本論文では、まず、「第 2 章　沖縄人男性と結婚したフィリピン人女性ニューカマー」で調査協力者の在沖フィリピン人女性 15 人の事例を基に、彼女達が沖縄人男性と出会い結婚に至った経緯を述べる。最初に彼女達の事例を紹介し、その事例に解説を加える。この章が第 3 章から第 6 章の背景知識となる。

「第 3 章　沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程」では、在沖フィリピン人女性 10 人の事例を基に、夫婦間コミュニケーションの問題に焦点をあて、在沖フィリピン人妻が沖縄人夫との間に抱える葛藤課題とその葛藤課題を調整する仕方について考察する。この調査では、葛藤課題の調整過程において、在沖フィリピン人妻は低コンテキスト・コミュニケーション態度、沖縄人夫は高コンテキスト・コミュニケーション態度をとる傾向が

[1] 「沖縄県在住フィリピン人女性の生活実態調査」、九州コミュニケーション研究、第 11 号、2013 年を参 照。

あり、夫婦間のコミュニケーション・パターンに文化の相違と性差による違いが見られることを明らかにする。また、上手くいっている夫婦と上手くいっていない夫婦の事例を比較して、上手くいっている夫婦では、沖縄人夫のコミュニケーション態度が高コンテキストから低コンテキストへ変化する傾向があることを述べる。

「第 4 章　在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ」では、在沖フィリピン人女性 6 人の事例を基に、在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ構築について考察する。在沖フィリピン人女性は、日本語、英語、タガログ語、地方語の 4 つの言語を状況に応じて使い分ける。この 4 つの言語について、彼女達はどのような意識を持っているのか、この 4 つの言語を媒介にして、彼女達はどのようにアイデンティティを構築しているのかを考察する。

「第 5 章　在沖フィリピン人女性のジェンダー観と沖比国際結婚夫婦間コミュニケーション」では、在沖フィリピン人女性のジェンダー観と沖縄人夫との夫婦間コミュニケーションの問題について考察する。在沖フィリピン人女性は、母国でどのようなジェンダー観を培っており、そのジェンダー観が沖縄人夫との夫婦間コミュニケーションにどのような影響を与えているのか、さらに、沖比国際結婚夫婦間コミュニケーションにおいて、どのようなジェンダーの違いによる言語態度が見られるのか、この言語態度は、フィリピン人妻と沖縄人夫のコミュニケーションにどんな影響を与えているのかを考察する。

「第 6 章　フィリピン人妻に対する沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為についての考察」では、沖縄県 A 市在住フィリピン人女性 4 人の事例を基に、彼女達が沖縄人夫から被る暴力的言語・非言語行為について考察する。在沖フィリピン人女性は、ジェンダー、外国人、マイノリティーという弱い立場で周縁化されやすいことから、暴力の背景に夫と妻の間に「支配－従属」関係があると捉える視点に立つ。また、DV・離婚問題を抱える在沖フィリピン人妻と沖縄人夫の「支配－従属」関係が、どのような言語・非言語態度を通して構築されるのか、社会的構築主義の視点から考察する。

「第 7 章　結論」では、第 3、4、5、6 章の結果と考察を踏まえて、社会的構築主義の理論的枠組みを用いて、この論文全体の結論を導き出していく。例えば、第 3 章については、葛藤課題の調整過程で、上手くいっている夫婦では、沖縄人夫のコミュニケーション態度が変化する傾向が見られ、上手くいっていない夫婦では変化が見られなかった。その要因を社会的構築主義の視点で考察する。第 4 章については、在沖フィリピン人女性が 4 つの言語を媒介にして、どのようなアイデンティティを構築するのか、社会的構築主義の視点で考察する。さらに、第 5 章については、在沖フィリピン人女性が夫婦間で、どのような言語による相互作用を行って、今の「立場づけ」、つまり、平等主義的性役割観を実践する妻、伝統的性役割観を実践する妻という「立場」を構築しているのか、そして、在沖フィリピン人女性が、自分の満足のいく「立場」やアイデンティティを構築していくために、言語はどのような役割を果たすことができるのかを考察していく。第 6 章については、DV・離婚問題を抱えた夫婦間の「支配－従属」関係がどのように言語・非言語態度を通して構

築されるのかについての考察を踏まえて、この「支配－従属」関係を変えていくために、言語がどのような役割を果たすことができるのかを検証する。まとめとして、在沖フィリピン人女性が健全なアイデンティティを構築し、沖縄人夫と建設的な夫婦関係を構築していくために、ホスト社会は、言語を手段として、どのようなサポートをすることができるのか、社会的構築主義の視点から提言する。

第 3 節　調査方法

本論文では、4 回のインタビュー調査を実施した。データは、2012 年 11 月から 2015 年 1 月にかけて、質問紙およびインタビューにより収集した。調査協力者は、沖縄人男性と結婚し、県内に在住している 15 人のフィリピン人女性である。調査協力者には、インタビューの前に研究の目的および方法、研究協力の自由意思、途中辞退の権利、匿名性の厳守、プライバシーの保護、研究結果の公表等について文書（英語）および口頭（日本語）で説明し、研究協力の承諾の意思を確認し署名を得た。

質問紙（英語）は調査協力者のプロフィール等面接に必要な基本情報を収集する目的で、インタビューの前に記入してもらった。インタビューは 1 人につき 30 分から 90 分の半構造化インタビューを日本語および英語で実施し、調査協力者の承諾を得て録音した。

まず、1 回目の調査では、沖縄人男性と結婚した 10 人のフィリピン人女性を対象にインタビューを実施し、①「夫婦の間で、違いやズレを感じるのはどのような場面ですか」（葛藤課題）、②「違いやズレを感じる場合、どのように調整していますか」（葛藤課題の調整の仕方）という問いを投げかけ、それに対する調査協力者の語りを引き出した。この調査の結果と考察は、「第 3 章　沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程」に示した。

2 回目の調査では、沖縄人男性と結婚した 6 人のフィリピン人女性を対象にインタビューを実施し、①教会生活、フィリピン・コミュニティー、②家庭、③職場での場面における言語使用と、その使用言語に対する意識等について質問し、調査協力者の語りを引き出した。この調査の結果と考察は、「第 4 章　在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ」に示した。

3 回目の調査では、沖縄人男性と結婚した 6 人のフィリピン人女性を対象にインタビューを実施し、①調査協力者のジェンダー観について、②性的役割分業の実践について、③夫婦間コミュニケーションにおいて見られる言語態度について、質問し、調査協力者の語りを引き出した。この調査の結果と考察は、「第 5 章　在沖フィリピン人女性のジェンダー観と沖比国際結婚夫婦間コミュニケーション」に示した。

4 回目の調査では、DV・離婚問題を抱えた沖縄県 A 市在住の 4 人のフィリピン人女性を対象に、彼女達の来日経緯や結婚生活での問題点について質問し、彼女達の語りを引き出した。この調査の結果と考察は、「第 6 章　フィリピン人妻に対する沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為についての考察」に示した。

第 4 節　調査協力者の属性

本論文の調査協力者は、沖縄人男性と結婚した 20 代後半から 60 代の在沖フィリピン人女性 15 人である。沖縄人夫の年齢は、40 代から 80 代である。その中の 1 人で 80 代の夫は 69 歳で他界していた。夫婦の年齢差は、平均 11 歳である。調査協力者の最終学歴は、小学卒 1 人、高校卒 8 人、専門学校卒 2 人、短大卒 1 人、大学卒 2 人、大学中退 1 人である。夫の最終学歴は、高校卒 13 人、大学卒 2 人である。調査協力者の結婚前の職業は、エンターテイナー9 人、販売員 4 人、事務員 1 人、教員 1 人であった。結婚後の職業は、清掃員 3 人、保育所のアシスタント 3 人、食堂の給仕 1 人、レンタカー会社の社員 1 人、販売員 1 人、パート 1 人、自営業 1 人、専業主婦 1 人、農業 1 人、工場の従業員 1 人、ALT1 人である。夫の職業は、会社員 5 人、タクシー運転手 2 人、運転手 1 人、建設業 1 人、土木作業員 1 人、調理師 1 人、自営業 1 人、仏教徒僧侶 1 人、農業 1 人、事務職員 1 人である。結婚期間は、7 年から 34 年で、平均結婚年数は 17 年である。15 人中、1 人は離婚し、2 人は離婚調停中である。1 人を除いて 14 人が 1 人から 4 人の子供を持っている。子供の年齢は、2 歳から 30 歳である。

調査協力者のフィリピンの出身地は、ルソン島（ラグナ州（3 人）、ビコール地方（2 人）、リサール州（2 人）、マニラ首都圏（2 人））出身が 9 人、ミンダナオ島（ダバオ市）出身が 2 人、セブ島（セブ市）出身が 1 人、ネグロス島（ドゥマゲテ市）出身が 1 人、レイテ島（タクロバン市）出身が 1 人、パナイ島（イロイロ市）出身が 1 人である。調査協力者の第一言語は、タガログ語 5 人、セブアノ語 4 人、ビコール語 2 人、イロカノ語 2 人、ワライ語 1 人、イロンゴ語 1 人の 6 言語である。調査協力者の日本語能力を、上級（自分の意見や考えを難なく表現することができる）、中級（自分の思っていることを会話に困らない程度に表現できる）、初級（思ったことを表現するのに困難を感じる）の 3 段階に分けて筆者が判断した結果、上級 8 人、中級 4 人、初級 3 人であった。以下、調査協力者の属性を表 1 に示した。

表１　調査協力者の属性

No.	名前	妻の年齢	夫の年齢	妻の最終学歴	夫の最終学歴	妻の職業		夫の職業	結婚期間	子供の数と年齢	妻の出身地	妻の第一言語	妻の日本語能力***
						結婚前	結婚後						
1	A さん	40	52	小学卒	高校卒	エンターテイナー	清掃員	事務職員	8 年	2 人（6 歳、12 歳）	ルソン島ラグナ州	タガログ語	初級
2	B さん	52	55	高校卒	高校卒	エンターテイナー	清掃員	土木作業員	13 年*	3 人（15 歳、20 歳、22 歳）	ネグロス島ドゥマゲテ市	セブアノ語	上級
3	C さん	41	41	高校卒	高校卒	エンターテイナー	食堂の給仕	調理師	19 年*	2 人（16 歳、18 歳）	ルソン島ビコール地方	ビコール語	中級
4	D さん	41	60	高校卒	高校卒	エンターテイナー	レンタカー会社員	タクシー運転手	16 年*	1 人（16 歳）	ルソン島ラグナ州	タガログ語	上級
5	E さん	54	61	短大卒	高校卒	事務員	保育アシスタント	会社員	23 年	2 人（19 歳、21 歳）	ミンダナオ島ダバオ市	セブアノ語	上級
6	F さん	66	68	高校卒	高校卒	販売員	販売員	会社員	34 年	2 人（28 歳、30 歳）	ルソン島リサール州	イロカノ語	上級
7	G さん	28	54	高校卒	高校卒	販売員	清掃員	運転手	7 年	2 人（3 歳、6 歳）	ルソン島ラグナ州	タガログ語	初級
8	H さん	48	61	高校卒	高校卒	エンターテイナー	パート	会社員	19 年	3 人（5 歳、12 歳、17 歳）	ルソン島ビコール地方	ビコール語	中級
9	I さん	50	52	高校卒	高校卒	エンターテイナー	自営業	自営業	22 年	3 人（16 歳、20 歳、21 歳）	マニラ首都圏マニラ市	タガログ語	上級
10	J さん	41	44	高校卒	高校卒	エンターテイナー	専業主婦	会社員	12 年	3 人（2 歳、6 歳、10 歳）	レイテ島タクロバン市	ワライ語	初級
11	K さん	55	64	大学卒	高校卒	販売員	農業	農業	16 年	0 人	セブ島セブ市	セブアノ語	中級
12	L さん	45	56	専門学校卒	大学卒	エンターテイナー	保育アシスタント	建設業	16 年	2 人（11 歳、12 歳）	マニラ首都圏ケソン市	タガログ語	上級
13	M さん	52	64	専門学校卒	高校卒	エンターテイナー	保育アシスタント	タクシー運転手	23 年	1 人（19 歳）	ルソン島リサール州	イロカノ語	中級
14	N さん	45	84**	大学中退	高校卒	販売員	工場の従業員	仏教徒僧侶	10 年	2 人（23 歳、25 歳）	ミンダナオ島ダバオ市	セブアノ語	上級
15	O さん	47	59	大学卒	大学卒	教員	ALT	会社員	22 年	4 人（5 歳、15 歳、20 歳、21 歳）	パナイ島イロイロ市	イロンゴ語	上級

*B さん、C さん、D さんは、現在、夫と離婚または離婚調停中である。　**N さんの夫は 69 歳で他界している。

***調査協力者の日本語能力を、上級（自分の意見や考えを難なく表現することができる）、中級（自分の思っていることを会話に困らない程度に表現できる）、初級（思ったことを表現するのに困難を感じる）の 3 段階に分けて筆者が判断した。

第 2 章　沖縄人男性と結婚したフィリピン人女性ニューカマー

日本が太平洋戦争で敗戦してから、日本は米軍が主導する国連進駐軍に占領され、国土も荒廃し、経済的に貧しかった。当時、世界で最も物質的に豊かだったアメリカの米軍将校・兵士は日本女性の憧れとなった。アメリカ人と結婚し、金持ちの国、米国に移住する。それが、戦後から 1960 年代頃までの国際結婚の傾向だった。戦後、米軍関係者と結婚する 5 万～6 万人に及ぶ「戦争花嫁」が生まれた（佐竹・ダアノイ、2006：31）。

1950 年～1970 年代の高度経済成長期を経て、80 年代、日本は経済大国となった。南の国々との経済格差を背景に、80 年代半ばから、フィリピン人女性出稼ぎ労働者をはじめ、他の諸国からの外国人労働者が増えたことにより、日本人が外国人と出会う機会が多くなり、国際結婚も増加してきた（佐竹・ダアノイ、2006：31）。経済大国の日本人男性と結婚することによって、物質的に豊かな生活を手に入れたいと夢見るアジア人女性も増え、特に、日本人男性とアジア人女性の国際結婚件数が大幅に伸びていった。その中でも、日本人夫とフィリピン人妻の結婚件数は顕著な伸びを示している。沖縄県でも、1980 年代以降、沖縄人男性と結婚するフィリピン人女性が増加している。

本論文の「第 3 章　沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程」、「第 4 章　在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ」、「第 5 章　在沖フィリピン人女性のジェンダー観と沖比夫婦間コミュニケーション」、「第 6 章　フィリピン人妻に対する沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為についての考察」では、在沖フィリピン人女性を対象にインタビュー調査を行い、その結果に考察を加えている。各章のインタビュー調査の調査協力者は、沖縄人男性と結婚した合計 15 人の在沖フィリピン人女性である。彼女達は、1980 年代以降に来沖したニューカマーフィリピン人と呼ばれる。

本章では、在沖フィリピン人女性が沖縄人男性とどのように知り合ったのか、彼らの出会いの経緯を考察する。なぜなら、この考察は、第 3 章から第 6 章の沖比国際結婚夫婦間コミュニケーションの問題を検証する上で、背景知識として参考になるのではないかと考えたからである。

定松（1996）は、日本人の配偶者として日本に定住しているフィリピン人女性を、来日経緯によって、次の 4 つに分類している。①「現地出会い型」は、日本人男性がフィリピンに海外赴任中あるいは旅行中にフィリピン人女性と出会い結婚したケース。②「国内出会い型」は、フィリピン人女性が「興行」ビザで来日し、日本で知り合った日本人男性と結婚したケース。③「行政仲介型」は、行政の仲介によって見合いし結婚したケース。④「ブローカー仲介型」はブローカーによって斡旋されて結婚したケースである。

本論文の調査協力者が沖縄人男性と出会って結婚した経緯は、以下の 4 つに分類することができる。

1）出稼ぎ労働者（エンターテイナー）として出会ったケース

2）家族・親戚の紹介によるお見合いで出会ったケース

3）結婚仲介業者の紹介によるお見合いで出会ったケース

4）フィリピンで沖縄人男性と出会ったケース

1）出稼ぎ労働者（エンターテイナー）として出会ったケースは、定松（1996）の類型の②「国内出会い型」にあたる。また、3）結婚仲介業者の紹介によるお見合いで出会ったケースは、④「ブローカー仲介型」にあてはまる。さらに、4）フィリピンで沖縄人男性と出会ったケースは、①「現地出会い型」に対応する。定松の類型の③「行政仲介型」にあてはまるケースが、本論文の調査協力者の事例には見られなかった。その代り、2）家族・親戚の紹介によるお見合いで出会ったケースが、他府県のケースとは異なる在沖フィリピン人女性の出会いの特徴として挙げられる。

この章では、まず、第 1 節で、厚生労働省の人口動態統計と法務省入国管理局の在留外国人統計の資料を参考に、沖比国際結婚夫婦の現状を分析する。そして、第 2 節で、本論の調査協力者が沖縄人男性と知り合って結婚した経緯の 4 つのカテゴリーについて、彼女達の事例を紹介しながら詳述していく。

第 1 節　沖比国際結婚夫婦の現状

1.1. 日比国際結婚件数の推移

ここでは、表 1 に示した厚生労働省の人口動態統計を基に、日本における日比国際結婚件数の推移を、他の国籍の組み合わせと比較しながら見ていく。表 1 では、1990 年までの「夫日本人・妻フィリピン人」の結婚件数は、「その他の国」に含まれ、詳細な件数がわからない。しかし、「夫日本人・妻外国人」の「その他の国」の件数は、7,212 件で、「夫日本人・妻韓国・朝鮮人」の件数 8,940 件よりも少なく、フィリピン人妻の件数は、韓国・朝鮮人妻の件数よりも少ないことがわかる。1995 年のデータを見ると、「夫日本人・妻フィリピン人」の件数が 7,188 件となり、中国人妻、韓国・朝鮮人妻をしのいで、最も多い件数となっている。その後、2000 年には、中国人妻の件数に追い越されているが、フィリピン妻の件数は、7,519 件で二番目に多くなっている。

「夫日本人・妻フィリピン人」の結婚件数は、1995 年に 7,188 件、2000 年に 7,519 件、そして、2005 年に 10,242 件とピークを迎え、2010 年には 5,212 件と半減し、2013 年には 3,118 件となっている。2005 年をピークに、件数が半減している理由として、2004 年の米国の国務省による日本は人身売買を防ぐための法整備や被害者保護が不十分である監視対象国であるとした批判を受けて、日本政府が、フィリピン人エンターテイナーの受け入れ手続きを 2005 年に変更したことが挙げられる（武田、2005：38）。この法改正によって、エンターテイナーとして就労するための資格基準が厳しくなり、フィリピンからのエンターテイナーの入国者数が減少したことが考えられる。

「夫日本人・妻フィリピン人」の結婚件数は減少傾向にあるものの、その後も、中国人妻の件数に次いで二番目に多い件数を維持している。2013 年、国際結婚件数全体の 21,488 件のうち、「夫日本人・妻フィリピン人」の結婚件数は 3,118 件で 14.5%を占める。また、

表１　婚姻件数，年次×夫妻の国籍別

国　　籍	昭和 60 年 (1985)	平成 2 年 (1990)	平成 7 年 (1995)	平成 12 年 (2000)	平成 17 年 (2005)	平成 2 年 (2010)	平成 25 年 (2013)
総　　数	735 850	722 138	791 888	798 138	714 265	700 214	660 613
夫妻とも日本	723 669	696 512	764 161	761 875	672 784	670 007	639 125
夫妻の一方が外国	12 181	25 626	27 727	36 263	41 481	30 207	21 488
夫日本・妻外国	7 738	20 026	20 787	28 326	33 116	22 843	15 442
妻日本・夫外国	4 443	5 600	6 940	7 937	8 365	7 364	6 046
夫日本・妻外国	7 738	20 026	20 787	28 326	33 116	22 843	15 442
妻の国籍							
韓国・朝鮮	3 622	8 940	4 521	6 214	6 066	3 664	2 734
中　　国	1 766	3 614	5 174	9 884	11 644	10 162	6 253
フィリピン	…	…	7 188	7 519	10 242	5 212	3 118
タ　　イ	…	…	1 915	2 137	1 637	1 096	981
米　　国	254	260	198	202	177	223	184
英　　国	…	…	82	76	59	51	38
ブラジル	…	…	579	357	311	247	212
ペ　ル　ー	…	…	140	145	121	90	70
その他の国	2 096	7 212	990	1 792	2 859	2 098	1 852
妻日本・夫外国	4 443	5 600	6 940	7 937	8 365	7 364	6 046
夫の国籍							
韓国・朝鮮	2 525	2 721	2 842	2 509	2 087	1 982	1 689
中　　国	380	708	769	878	1 015	910	718
フィリピン	…	…	52	109	187	138	105
タ　　イ	…	…	19	67	60	38	31
米　　国	876	1 091	1 303	1 483	1 551	1 329	1 158
英　　国	…	…	213	249	343	316	247
ブラジル	…	…	162	279	261	270	286
ペ　ル　ー	…	…	66	124	123	100	107
その他の国	662	1 080	1 514	2 239	2 738	2 281	1 705

資料：統計情報部「平成 25 年人口動態統計」

注：フィリピン，タイ，英国，ブラジル，ペルーについては平成４年から調査しており，平成３年までは「その他の国」に含まれる。

「夫日本人・妻外国人」の件数全体の 15,442 件のうちでは、20%を占めている。日本の国際結婚カップル 10 組のうち、2 組は日本人夫とフィリピン人妻の組み合わせということになる。

1.2. 沖縄県の国籍別外国人登録者数（2006 年と 2014 年の比較）の分析

法務省入国管理局の在留外国人統計の 2006 年（表 2）と 2014 年（表 3）のデータを基に、沖縄県に、どのくらいのフィリピン人が住んでおり、在沖外国人全体の何パーセントを占めているのか、他の国籍の在沖外国人の数、そして、全国の在日外国人の数と比較しながら考察していく。

2006 年の統計では、全国で、アジア人の数は、在日外国人全体の 73.9%を占め、沖縄県では、アジア人の数は 59.5%を占めている。日本をはじめ、沖縄県に住む外国人の 6～7 割はアジア人ということになる。

全国では、アジア人の中で、韓国・朝鮮人が一番多く 28.7%を占め、次いで、中国人 26.7%、そしてフィリピン人 9.3%となっている。沖縄県では、アジア人の中で、中国人が多く 22.2%を占め、次いで、フィリピン人 19.9%、韓国・朝鮮人 7.0%となっている。また、全国と沖縄県で大きく異なる点は、全国では、韓国・朝鮮人、中国人、フィリピン人などアジア人の割合が高いのに比べて、沖縄県では、米国人が 25.1%となり、中国人をはじめ他のアジア人の数をしのいでいる。これは、沖縄県に米軍基地が集中している関係から、米国国籍の人々（軍人・軍属を除く）が多く定住しているためであると考えられる。フィリピン人の割合は、全国で 9.3%であるのに対し、沖縄県では 19.9%と、約 2 倍高くなっている。全国と比較して、沖縄県に住むフィリピン人の割合が高いことがわかる。

2014 年の統計を見ると、2006 年と比較して、全国では 7.7%、沖縄県では 4.9%、アジア人の割合が増加している。2006 年度には、全国では、韓国・朝鮮人の割合が一番高かったが、2014 年度には、中国人の割合が最も高く 30.8%、次いで、韓国・朝鮮人 23.6%、三番目にフィリピン人 10.3%となっている。一方で、沖縄県では、2006 年、米国人の割合が最も高く、次いで中国人の割合が高かったが、2014 年には、米国人の割合が 21.2%で最も高く、次いで、フィリピン人 15%となっている。

フィリピン人の割合は、全国の 10.3%と比較して、沖縄県は 15%となっており、約 1.5 倍高い数値を表わしている。しかし、沖縄県では、2006 年には、フィリピン人の割合は 19.9%であったのが、2014 年には 15%となり、4.9%減少している。これは、上述したように、2005 年に、入国管理法の改正によって、興行ビザを取得するための資格基準が厳しくなったことから、沖縄県に出稼ぎに来るフィリピン人女性の数が徐々に減少しているためであると考えられる。

表 2　全国・沖縄県の国籍別外国人登録者数（2006 年）

	総数	アジア	中国	韓国・朝鮮	フィリピン	タイ	英国	米国	南米
全国	2,084,919	1,540,764	560,741	598,219	193,488	39,618	17,804	51,321	388,643
沖縄県	8,703	5,179	1,936	612	1,733	104	143	2,188	660

表 3　全国・沖縄県の国籍別外国人登録者数（2014 年）

	総数	アジア	中国	韓国・朝鮮	フィリピン	タイ	英国	米国	南米
全国	2,121,831	1,731,896	654,777	501,230	217,585	43,081	15,262	51,256	236,724
沖縄県	11,229	7,227	1,604	879	1,684	117	72	2,382	591

表 4　沖縄県在住フィリピン人の人口　年齢・男女別（2014 年）

総数		0～10 歳		11～20 歳		21～30 歳		31～40 歳		41～50 歳		51～60 歳		61～70 歳		71～80 歳	
1,684		91		125		257		408		441		254		79		29	
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
502	1,182	45	46	55	70	107	150	100	308	61	380	82	172	37	42	15	14

表 5　沖縄県在住フィリピン人の人口　在留資格別（2014 年）

総　　数	興　　行	永　住　者	日本人の配偶者等	定　住　者
1,684	7	1,094	148	127
100%	0.42%	64.9%	8.7%	7.5%

1.3. 沖縄県在住フィリピン人の人口（年齢・男女別／在留資格別）

ここでは、法務省入国管理局の在留外国人統計の 2014 年のデータ（表 4～5、図 5～8）を基に、沖縄県在住フィリピン人の人口を男女別と在留資格別に分析していく。

まず、図 5 が示すように、在沖フィリピン人の男女の人口比率は、男性 30%であるのに対し、女性は 70%であり、約 2.3 倍、女性の人口比率が高くなっている。これは、出稼ぎ労働者として来沖し、職場やその他の場所で、沖縄人男性と出会い、結婚して定住するフィリピン人女性が多いことを表わしている。男性よりも女性の比率が高いのは、男性よりも女性の方が、沖縄県でエンターテイナーとしての出稼ぎ労働者の需要が高いことが要因であると考えられる。

次に、図 6 の年齢別の比率から、41～50 歳が最も多く 26%で、次いで、31～40 歳が 24%、21～30 歳と 51～60 歳が 15%と続いている。30 代～50 代の働き盛りの中年層のフィリピン人が多いことがわかる。

図 7 と図 8 が示すように、男性では、21～30 歳の人口が最も多く 21%で、20 代の比較的若い層のフィリピン人男性が多いのに比較して、女性では、41～50 歳が 32%で最も多く、40 代の中年層が多いことがわかる。これは、1980 年～1990 年代にかけて、日本をはじめ沖縄に多くのフィリピン人女性が出稼ぎ労働者として来沖したピーク時の頃が、ちょうど、今 40～51 歳の女性達が 20～30 歳の若い時期と重なる。よって、1980 年～1990 年代に 20～30 歳の若さでエンターテイナーとして来沖したフィリピン人女性が、その後、沖縄人男性と出会い結婚して、そのまま定住しているために、現在、40 歳から 50 歳のフィリピン人女性が多いことが推察できる。本稿の調査協力者のフィリピン人女性の平均年齢も 47 歳であり、沖縄に定住している最も多い年代層のフィリピン人女性がこの調査の対象者となっている。

最後に、5 頁の表 5 の在留資格別の人口比率が示すように、沖縄県では、永住者が最も多く 64.9%で、次いで、日本人の配偶者等 8.7%、定住者 7.5%となっている。永住者の在留資格は、3 年以上の結婚生活、在留期間を経た外国人配偶者に与えられる。「永住者」資格を取ると、更新の手続きがなくなり、離婚後も沖縄に住み続けることができる。本論の調査協力者の内 15 人中 9 人が、最初は「興行」資格で出稼ぎ労働者として来沖し、その後、沖縄人男性と結婚して「日本人の配偶者等」の資格を取得し、3 年後に、「永住者」の資格を取得するというパターンを経て、現在に至っている。このように、「興行」→「日本人の配偶者等」→「永住者」という順序で、在留資格を獲得していったフィリピン人女性が多いことが推察できる。

本節で示した統計資料の結果をまとめると、近年、全国では「夫日本人・妻フィリピン人」の国際結婚件数は、減少傾向にあるものの、国際結婚件数全体の 14.5%を占めていることがわかる。また、沖縄県在住のフィリピン人は、在沖外国人全体の 15%を占め、米国人に次いで 2 番目に多い在沖外国人となっている。その中でも、フィリピン人女性の数は 70%を占める。「永住者」「日本人の配偶者等」「定住者」の在留資格を得て、沖縄県に滞在

全国・沖縄県の国籍別外国人登録者数（2006）

図 1

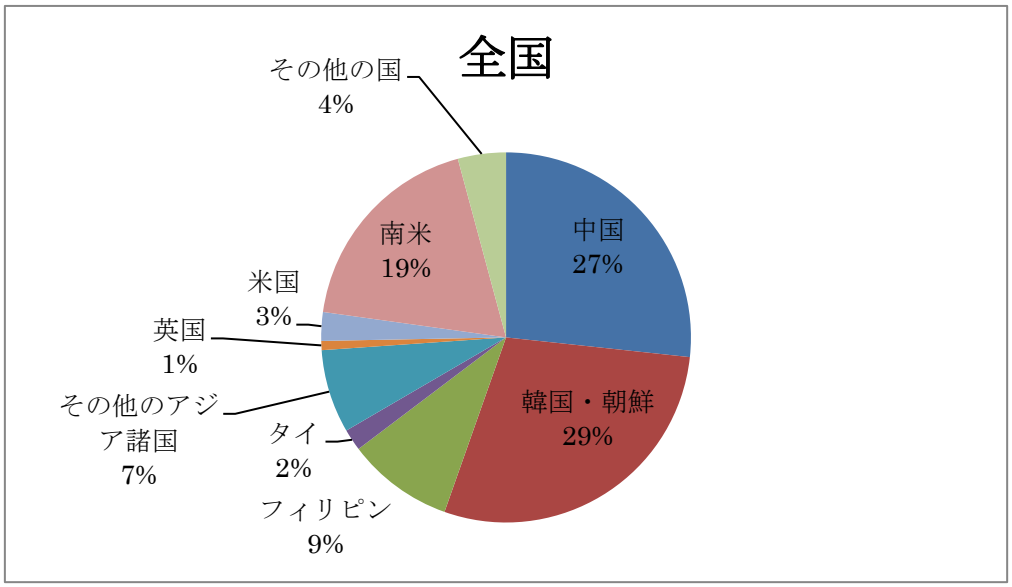
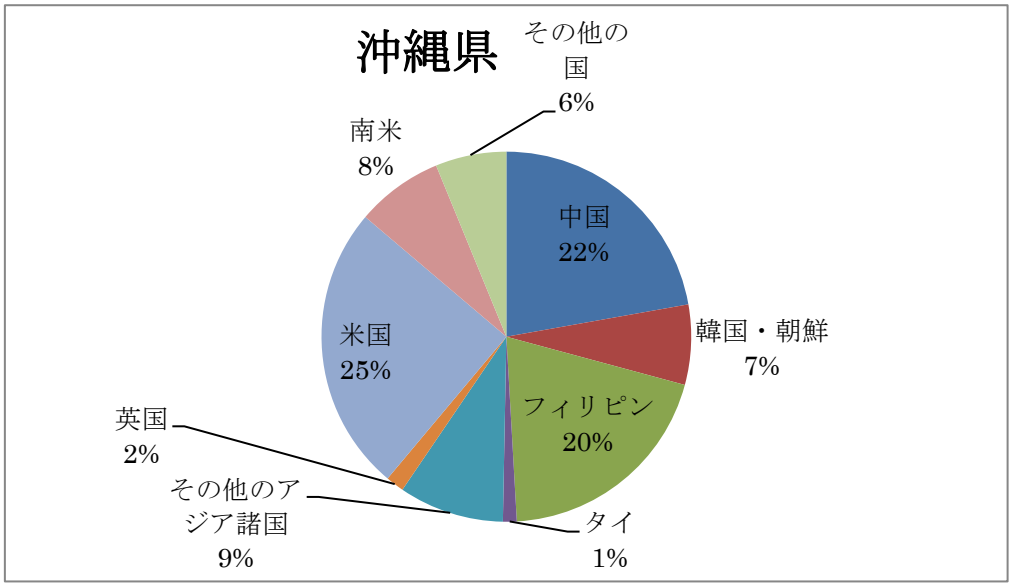


図 2



全国・沖縄県の国籍別外国人登録者数（2014）

図 3

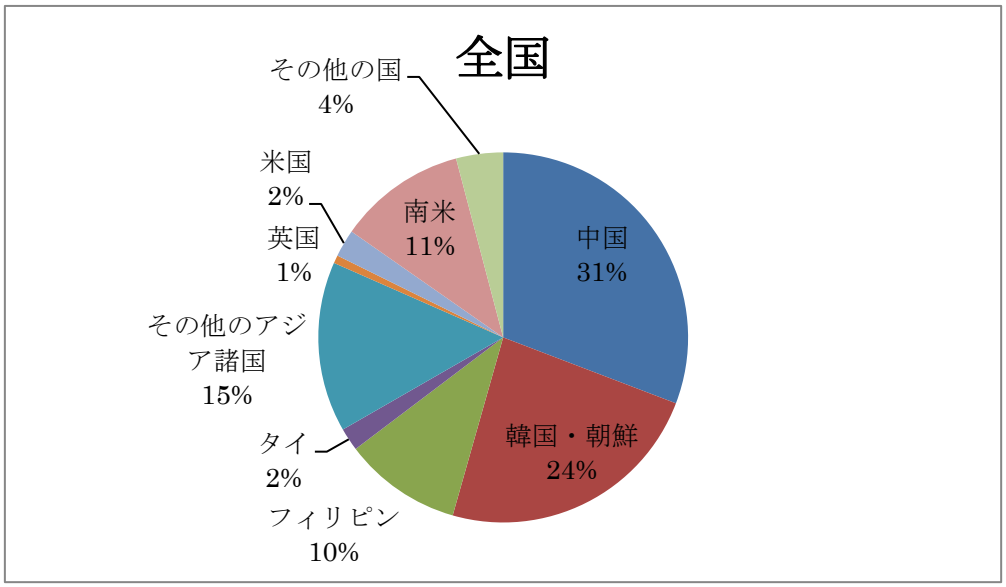
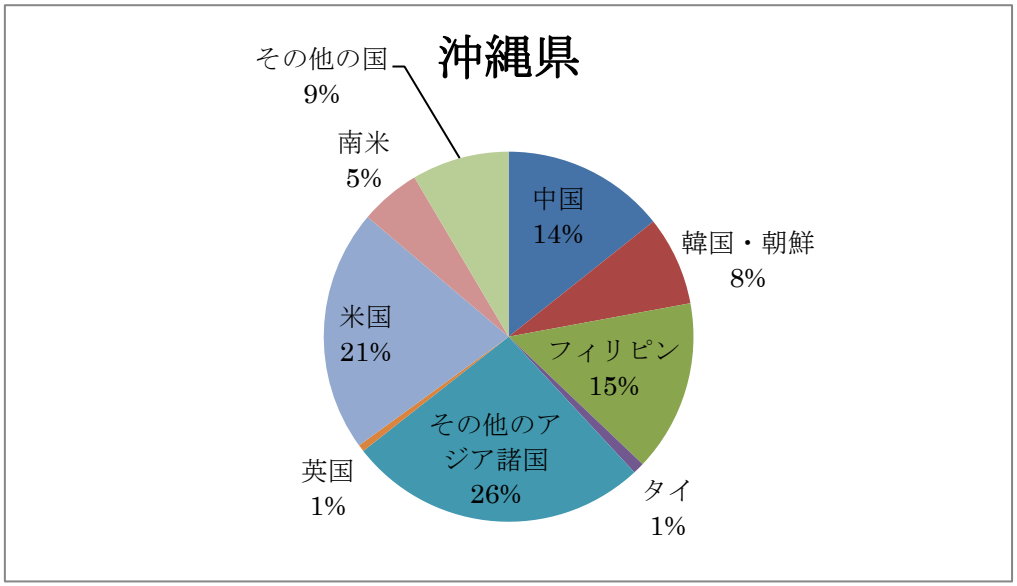


図 4



沖縄県在住フィリピン人の人口　年齢・男女別（2014 年）

図 5

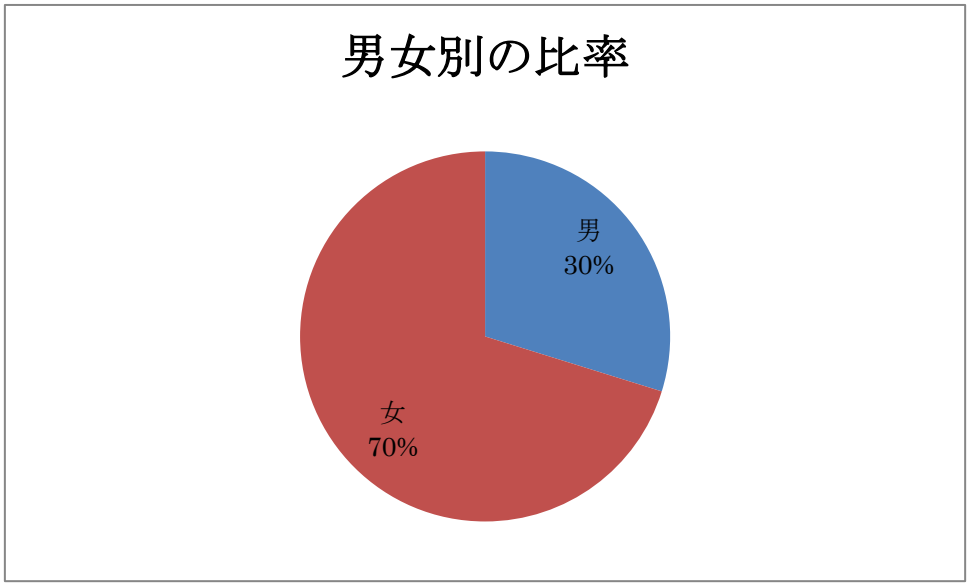
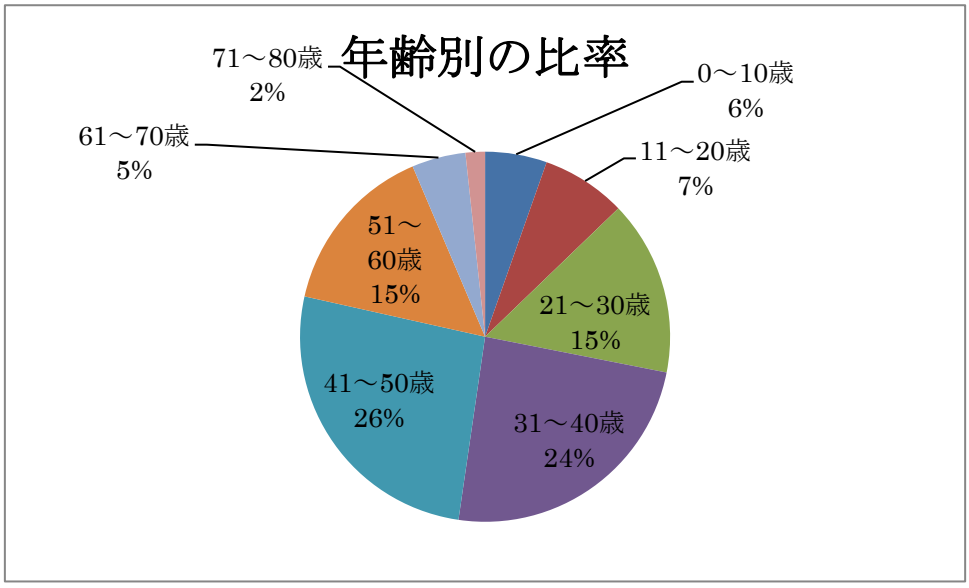


図 6



沖縄県在住フィリピン人の人口　年齢・男女別（2014 年）

図 7

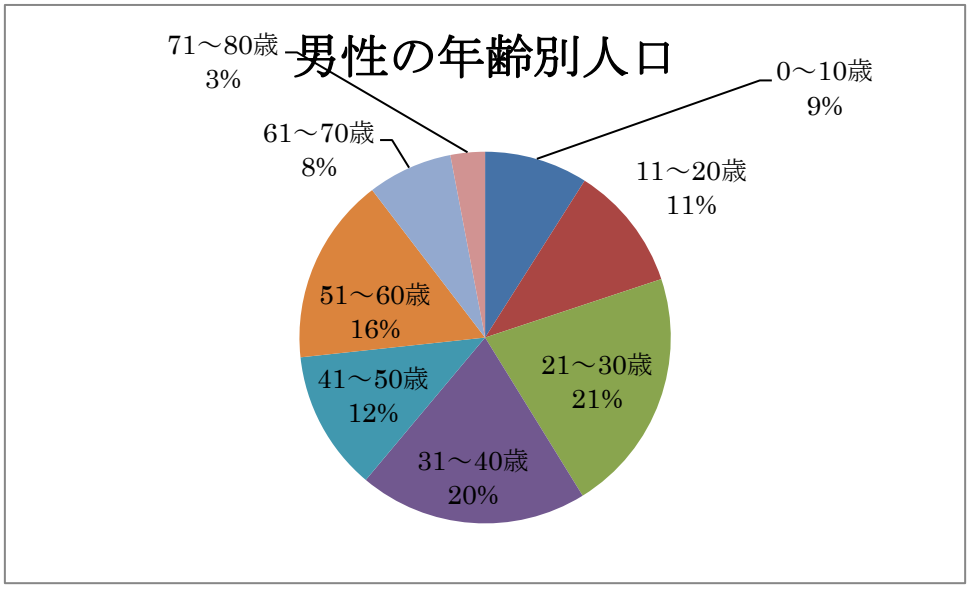
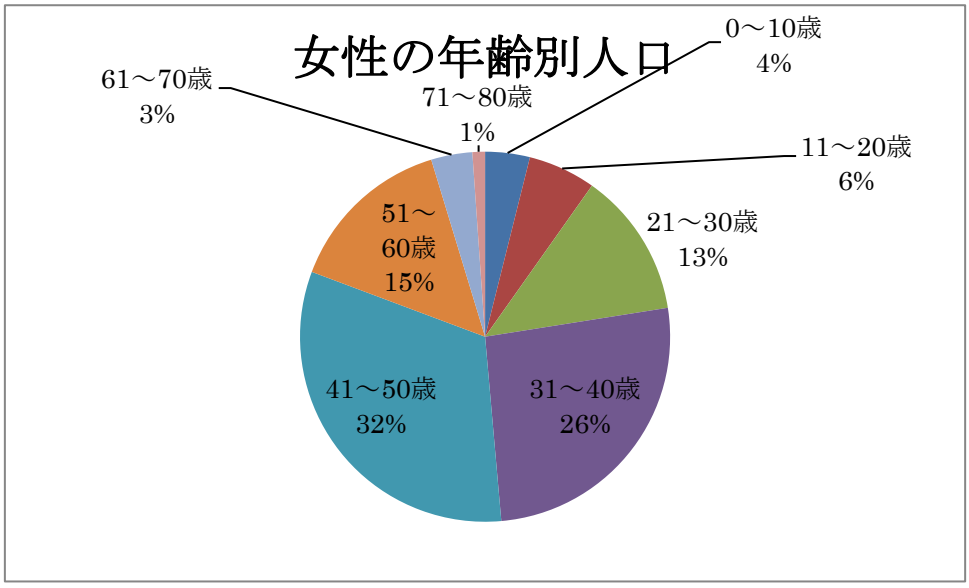


図 8



しているフィリピン人が 81.1%いることから、沖縄人男性と結婚して定住しているフィリピン人女性が多いことがわかる。

第 2 節　在沖フィリピン人女性が沖縄人男性と出会って結婚した経緯

この節では、本論の調査協力者が沖縄人男性と知り合って結婚した経緯の 4 つのカテゴリーについて、彼女達の事例を紹介しながら詳述していく。

2.1. 出稼ぎ労働者（エンターテイナー）として出会ったケース

本論文の調査協力者の内 15 人中 9 人は、出稼ぎ労働者（エンターテイナー）として働くために来沖し、沖縄人男性と出会って結婚した。ここでは、調査協力者 B さんの事例を紹介し、受け入れ国・日本での事情と送り出し国・フィリピンでの事情を概観しながら、フィリピン人女性が沖縄人男性と出会い結婚した経緯について述べる。

2.1.1. B さんの事例

B さんは、フィリピンの離島出身で、5 人兄弟姉妹の次女として生まれた。父母は農業をして生計を立てていた。家には電気も水道も通っておらず、かなり貧しい生活をしていた。家族を経済的に支えるため、B さんは、マニラで就職口を探したが、仕事が見つからず、日本への出稼ぎを決意した。

最初、B さんは、妹に誘われて、一緒に、マニラのエンターテイナーを養成するプロモーション事務所に入った。歌やダンスのレッスンをしている時、最初に、妹が芸能歴証明書（Artist Record Book）を取得して、関東のクラブのオーディションに受かり、関東へ出稼ぎに行った。さらに、妹は、2 回目のオーディションに受かり、再び、関東で 3 か月働いた。B さんは、その間、プロモーション事務所に所属して、芸能歴証明書を取得したが、なかなか、オーディションのオーファーがなかった。隣近所の知人の女性が紹介してくれた別のプロモーション事務所に、妹と一緒に移った。

妹が、九州に 3 回目の出稼ぎに行き、続いて、B さんも九州に派遣された。B さんは、最初の派遣先で大変、辛い思いをしたと言う。お酒も飲めないし、言葉もわからない、食事ものどを通らず、1 週間で 5 キロ痩せた。お客の接待が上手くできず、毎日、悩んでいた。いつも、今日は、いいお客さんが来るようにと祈っていた。妹に電話で、泣きながら、フィリピンに帰りたいと愚痴をこぼしていた。しかし、なんとか、半年間、働き続け、終わりの頃には、仕事にも慣れて、だんだん楽しくなってきたという。2 回目の派遣先は再び、九州で、3 回目の派遣先が沖縄だった。

沖縄が派遣先と決まった時、米軍基地の近くのクラブで働くのだったら、英語が通じるから仕事はやりやすいかもしれないと思った。しかし、沖縄の空港に着いて、ホテルで一泊した後、さらに飛行機で離島に連れて行かれた。離島のクラブでは、バニーのコスチュームを着せられて、毎日、ショータイムで踊った。これが半年間続いた。前のクラブでは、

こんな経験がなかったので、とてもきつかったと言う。その後、クラブのマネージャーである沖縄人男性と知り合い、結婚した。

2.1.2. 送り出し国・フィリピンでのリクルート

フィリピンには、海外派遣労働者を管轄するフィリピン海外雇用庁と技術教育技能開発庁がある。これらの行政機関は、ダンサーや歌手としての技術の認定やビザ取得に必要な書類を発給し、フィリピン人が他国へ出稼ぎに行くのをサポートしている。日本へエンターテイナーとしての出稼ぎを希望する女性は、まず、これらの行政機関から芸能歴証明書というエンターテイナーとしてのライセンスを取得し、日本のプロモーターのオーディションを受けた後、日本国内のフィリピン・パブやスナックに斡旋される（武田、2005:31-32）。

ここでは、武田（2005）を参考に、「マネージャーやプロモーションとの契約」「芸能歴証明書の取得」「オーディション」「ビザ取得」「来日」というフィリピン人女性達のたどってきたプロセスを紹介する。

フィリピン人女性達は、まず、フィリピンでプロモーションの事務所のスカウトマンやマネージャーに声をかけられたり、日本でエンターテイナーとして働いたことがある友人、知人、親戚から声がかかり、現地のプロモーション事務所と契約を結ぶ。プロモーション事務所は、彼女達に、生活費、ライセンス取得費用、パスポート作成費用を支給し、彼女達が日本でエンターテイナーとして稼いだ後に、彼女達の給料から差し引かれたコミッションを得ることができる（32-33）。

フィリピン人女性達は、歌唱力やダンスの能力があることを証明する芸能歴証明書を取得しなければ、興行ビザを取得することはできない。そのため、彼女達は、プロモーション事務所で、3～6 か月間、ダンサーや歌手としてのレッスンを受け、その後、技術教育技能開発庁が行っている実技試験に合格してはじめて、芸能歴証明書を取得することができる（34）。鈴木・玉城（1997）によれば、日本本土に向かう場合と沖縄に向かう場合とでは、この段階でのレッスンが全く異なってくることがあるという。日本本土に行く場合は、日本語での接待方法やカラオケの練習が課されるのに対して、沖縄に行く場合は、米兵相手のお店に派遣されることが多いため、そのような練習はないことが多いようだ（254）。

芸能歴証明書を取得したフィリピン人女性は、日本のプロモーターが実施するオーディションに合格しなければならない。日本のプロモーターは、フィリピン海外雇用庁から認可されたフィリピン現地の派遣業者に接触し、この派遣業者が現地のプロモーションにオーディションの日時と場所を連絡し、フィリピン人女性達をオーディションに参加させる。日本のプロモーターは、オーディションを開催し、気に入ったエンターテイナーを選んで、契約を結ぶことができる（武田、2005：34-35）。

その後、日本のプロモーターが、日本での派遣先の所在地を管轄している入国管理局から、フィリピン人女性の在留資格認定証明書を取得する。この在留資格認定証明書は、さらに在日フィリピン大使館あるいは領事館で確認の手続きが行われた後に、フィリピンの

各派遣業者に送られ、パスポートなど他の書類と一緒に在フィリピン日本大使館領事館に提出されることによって、ようやく興行ビザが取得できる（35-37）。

興行ビザを取得したフィリピン人女性達は、日本の空港に到着すると、出迎えのプロモーターによって各自の働くお店に派遣されていく。この興行ビザでの滞在可能期間は 6 か月間である。彼女達は 6 か月間日本に滞在して、エンターテイナーとして働くことになる（37）。

武田（2005）によれば、フィリピン人女性が、日本に出稼ぎに来る要因としては、フィリピン国内の経済の低迷が大きいと考えられる。高失業率、低賃金などのフィリピンの経済的問題への対策として、1970 年代にマルコス政権は雇用を海外に求めることにより、失業率を緩和し、出稼ぎ労働者の送金による外貨獲得、出稼ぎ労働者によるフィリピンへの技術移転を目的とする政策を推進した（39）。この政策の下、多くのフィリピン人がエンターテイナーとして日本へ出稼ぎに来るようになった。

エンターテイナーとして来沖するフィリピン人女性は、フィリピン家族からの経済的・物質的援助の期待を背負って、沖縄にやってくる。このようなフィリピンの家族や親戚からの過剰な期待は、自分のことを犠牲にしても、この出稼ぎを成功させて、家族・親戚に仕送りしなければならないというプレッシャーを彼女達に与えている。このプレッシャーは、沖縄人男性と結婚した後も続いている。中には、沖縄人男性との結婚が再婚の場合もあり、前夫との間の子供をフィリピンの母親や親戚にあずけているフィリピン人女性は、養育費を仕送りしなければならない。また、フィリピンの両親のために家を購入したり、両親が病気になったら治療費を送ったり、兄弟のために学費や生活費を援助したりしている。エンターテイナーとして来沖した本稿の調査協力者は、沖縄人夫と結婚後、エンターテイナーを辞めて、清掃婦、食堂の給仕、保育所のアシスタント、レンタカー会社の従業員など、昼間の仕事をしているが、彼女達の給料からわずかな額でも捻出して、フィリピンの家族・親戚に仕送りを続けている。

2.1.3. 受け入れ国・日本（沖縄）での事情

ここでは、佐竹・ダアノイ（2006）を参考に、日本がフィリピン人女性をエンターテイナーとして受け入れるようになった経緯を見ていく。

日本では、1960 年代からの高度経済成長期を通じて、大量消費の時代を迎え、海外旅行が増えた。特に 70 年代以降、台湾、韓国などの東アジア、タイ、フィリピンなどの東南アジアへの団体旅行が増えたが、男性観光客の割合が高かった。こうした旅行では、数多くの男性が現地の女性にお金を支払って性行為を求めるという買春観光が増加していた（9-10）。

1978 年、フィリピンは観光立国を標榜して、1980 年には、100 万人以上の観光客が訪れた。その内、日本人は約 27 万人で、その 8 割が男性であった。その日本人男性の 9 割が買春目的であったと言われている（11）。しかし、1981 年には、マニラで買春観光に反対す

る抗議運動が繰り広げられ、この模様が各国で大きく報道されると、日本の旅行会社は送客を控え、マニラへの観光客も減っていった（11-12）。フィリピンでは、マニラを中心に、日本人男性に依存した観光産業が形成されていた。しかし、1984 年には、1980 年と比べて、日本人客が 10 万人減っていた。日本人がフィリピンに来なくなったのなら、フィリピン人女性を日本に行かせようという流れが生まれた（13）。

その背景として、マニラに拠点を置く日本人業者の存在が大きかった。マニラでは、日本人業者[2]が売買春の隠れ蓑としてカラオケ・バーやクラブを営業し利益を上げていた。その他に、日本の観光会社とタイアップして買春斡旋で儲ける日本人業者もいた。しかし、83 年以降、日本人観光客が減ったため、彼らの儲けは激減したが、買春旅行でマニラに来た日本人業者[3]が、そうしたマニラの日本人業者と関係を作った。日本人業者はフィリピン人女性を日本に送り込めば、利益を上げることができると考えた。そのため、フィリピン人女性に興行ビザを取らせて、日本に呼ぶようになった。日本のバー、クラブも人手不足に悩み、歌って踊れるフィリピン人女性は大歓迎だった。フィリピン人女性も本国なら月 50～100 ドルの収入であるのに対し、日本なら月 500 ドル稼げる。女性達を送り、受け入れる業者、ならびに送り出される女性達の利益が重なった。こうして、日本人男性のために日本人によって営まれていた買春観光業がもうからなくなったので、フィリピン人女性を日本に送り込もうという流れが出来上がっていった（13）。

次に、鈴木・玉城（1997）の先行研究を参考に、沖縄県の現状を述べてみたい。1972 年の日本復帰後の海洋博覧会にはじまる沖縄県の観光政策によって、来県する観光客の数は一気に増加した。そして、沖縄の観光は売春によって一部支えられていた。1970 年代、台湾・韓国といった地域に日本人男性の買春観光が始まったが、一方で、沖縄行きの買春ツアーもあった（258）。また、ベトナム戦争（1965～1973 年）の間、在沖米軍基地に多くの米軍兵士が派遣されてきた。多くの兵士の派遣は、基地歓楽街にあった売買春産業を活気づけた（258）。このように、1960 年代後半から 1970 年代前半、ベトナム戦争のために派遣された米軍兵士、復帰から海洋博の好況期に来沖した日本人男性観光客は、沖縄の売買春産業に高額のドルと円を落とした。この間に、観光地歓楽街、基地歓楽街における売買春産業に従事していた沖縄人女性が、かなりの収入を得て、同産業から離れていった（257）。その後、空洞化した部分を埋め合わせたのが、出稼ぎ労働者としてやってくるフィリピン人女性達であった（257）。以上のように、日本、そして沖縄がフィリピン人女性をエンターテイナーとして受け入れてきた背景には、国内の風俗産業での労働者不足などの事情があることがわかる。

[2] 佐竹・ダアノイ（2006）では、日本人業者の代わりに「元暴力団関係者」と表現している。
[3] 佐竹・ダアノイ（2006）では、日本人業者の代わりに「ヤクザ」と表現している。

2.2. 家族・親戚の紹介によるお見合いで出会ったケース

本論文の調査協力者の内 15 人中 4 人は、家族・親戚の紹介で、沖縄人男性と出会い、結婚し、沖縄に定住している。ここでは、調査協力者 E さんと O さんの事例を通して、フィリピン人女性が家族・親戚の紹介で、沖縄人男性と出会い結婚した経緯を考察する。

2.2.1. E さん・O さんの事例

まず、E さんの事例を見る。E さんには、沖縄人女性と結婚して、沖縄に在住しているフィリピン人の叔父がいる。E さんが結婚する前、フィリピンで両親と暮らしている時、沖縄に住む叔父から、よく電話がかかってきた。ある日、叔父の沖縄人妻の従弟にあたる沖縄人男性を紹介したいので沖縄に来るように叔父に言われた。しかし、E さんは、全く知らない人だからと言って、断った。しばらくして、叔父が、その沖縄人男性を連れて、フィリピンにやってきた。E さんは、その沖縄人男性と会った。最初は、言葉も通じないし、全く、どういう人かわからないので怖かった。しかし、その男性が、1 か月間、フィリピンに滞在している間に、彼の態度を見ていた E さんの父親から、「いい人だから結婚しなさい」と言われた。E さんは、最初、言葉もわからないのに、何がわかるのかと思ったが、父親が、「彼はいい人だ」と言った言葉で、E さんの気持ちが変わった。その男性が帰沖後、2 カ月間、E さんは彼と電話でのやり取りを通して、信頼関係を築いた。その後、沖縄に渡り、その男性と結婚した。E さんは、結婚して、22 年になるが、二人の息子がいる。

次に、O さんの事例を見る。O さんの実姉は、沖縄で働いている時に、沖縄人男性と知り合って結婚した。実姉から、フィリピンにいる O さんに沖縄に来るように勧められた。O さんは、県内大学で日本語を勉強するために来沖した。O さんは、実姉の家にホームステイしながら、大学に通った。その時、実姉の沖縄人夫から O さんに、彼の従弟を紹介された。O さんは車を持っていなかったので、その従弟に、家から大学まで送り迎えしてもらった。その後、2 人の仲が深まり、O さんはその従弟と結婚した。O さんは、彼と結婚して 21 年になるが、4 人の子供がいる。

2.2.2. 考察

家族・親戚の紹介で沖縄人男性と結婚した E さんや O さんの事例に見られるように、彼女達の家族・親戚が彼女達より先に、沖縄へ行き、沖縄人と結婚して定住している。その親戚や兄弟姉妹の紹介を通して、沖縄人男性と出会い、結婚に至っている。（この場合、彼女達の親戚や兄弟姉妹の沖縄人配偶者の従弟など親戚関係にある男性がほとんどである。）

この場合、フィリピン側と沖縄側の互いの家族・親戚が仲立ちしたお見合いなので、フィリピン人女性の両親も沖縄人男性の両親も結婚に同意する場合が多い。このケースで出会ったフィリピン人女性は、結婚後も沖縄人男性との夫婦関係を上手く維持しているのではないかと推察する。その理由として、1 つ目に、フィリピン人女性の家族・親戚が先に沖縄に滞在しているので、彼らから沖縄の文化、生活習慣、価値観などについて、日頃から、

聞かされており、沖縄の事情をよく理解していることが考えられる。彼女達は、沖縄の事情をよく納得したうえで、沖縄に嫁ぐことを決意している。2 つ目に、紹介された結婚相手の沖縄人男性が、フィリピン人女性の家族・親戚の配偶者と親類関係にあるため、ある程度、その沖縄人男性の家族背景や性格などを知らされていると考えられる。彼女達は、その沖縄人男性についてよく知らされたうえで、結婚を決意している。3 つ目に、結婚相手の沖縄人男性も自分の親戚がフィリピン人と結婚しているので、その親戚からフィリピンの文化、生活習慣、価値観などについて聞かされており、フィリピンの事情を理解したうえで、結婚を決意していると考える。4 つ目に、先に結婚したフィリピン人・沖縄人夫婦の家族が、そのフィリピン人女性と結婚相手である沖縄人男性にとってロールモデルとなり、そのロールモデルを見習って、結婚生活が上手くいく可能性があると考える。

このように、家族・親戚の紹介によるお見合いで出会ったケースの場合、結婚する前から、お互いに相手の出身国の文化、生活習慣、価値観などを家族・親戚を通して知らされているため、お互いの状況を理解し納得したうえで結婚を決めている。また、家族・親戚が彼らの結婚生活が上手くいくように相談にのってくれたり、助けてくれたりするので、彼らの結婚生活は上手くいく可能性が高いと推察できる。

また、フィリピン人は、親戚間、兄弟姉妹間の結束が強く、自分たちの親戚や兄弟姉妹を沖縄に呼び寄せることによって、沖縄社会で、新たなフィリピン・コミュニティーを形成する傾向がある[4]。沖比国際結婚夫婦が周囲の支援を得ることができる相互扶助のネットワークが作られると考える。

2.3. 結婚仲介業者の紹介によるお見合いで出会ったケース

本論文の調査協力者の内 15 人中 1 人が、結婚仲介業者の紹介によるお見合いで沖縄人男性と知り合い、結婚した。ここでは、K さんの事例を通して、フィリピン人女性が結婚仲介業者の紹介によるお見合いで沖縄人男性と出会い結婚した経緯を考察していく。

2.3.1. K さんの事例

K さんは、フィリピンの離島出身である。結婚する以前は、その出身地の百貨店の化粧品売り場で働いていた。フィリピン人の結婚仲介業者が K さんの職場にやってきて、日本人男性がフィリピン人女性の結婚相手を探しているので、もし、日本人男性との結婚に興味がある人は、写真を撮らせてほしいと言われた。その写真を、日本人男性に送って、もし、日本人男性がその写真の女性に関心を持てば、お見合いをすることができるということだった。K さんを含めて数人の女性が、その結婚仲介業者に写真を撮影してもらい、その写真の裏に、自分たちの名前と連絡先を書いた。

その後、しばらくして、K さんに、その結婚仲介業者から電話があり、K さんの写真を

[4] これらの傾向は、特に、沖縄県の離島で顕著に見られる現象であるらしい。筆者が離島でインタビュー調査をした際に、離島在住のフィリピン人女性達が話してくれた。

選んだ日本人男性が、K さんに会うために、フィリピンにやってくるという知らせを受けた。そして、K さんは、フィリピンで、その男性に会った。彼は沖縄県出身者だった。2 人は意気投合して、K さんは、結婚を決意し、沖縄に来て、正式に結婚した。K さんは、沖縄人夫の農業を手伝いながら、沖縄で暮らしている。

2.3.2. 考察

本論文の調査協力者である K さんは、民間の国際結婚仲介業者による紹介でお見合いし結婚に至った。日本では、1980 年代半ば、山形県や徳島県で、行政機関が農村の花嫁不足を解消し、過疎化対策、地域の活性化を図る目的で、民間の結婚仲介業者と提携して、地域の男性とフィリピン人女性の結婚を取りまとめる動きがあった（佐竹・ダアノイ、2006）。沖縄県では、行政機関が仲介役となって沖縄人男性とフィリピン人女性のお見合いを取りまとめるという話は聞いたことがない。しかし、K さんのように民間の仲介業者による紹介で結婚した沖比国際結婚夫婦のケースは見られた。K さんの結婚相手も農業に従事している男性であった。彼も農家の嫁不足、つまり結婚難のため、国際結婚仲介業者を通してフィリピン人花嫁を求めたのか、その理由は定かではない。

しかし、このケースで出会った沖比国際結婚夫婦の場合、行政機関が仲介した農村花嫁の問題のように、結婚後、様々な問題を引き起こす可能性があることが推察できる。その理由として、1 つ目に、沖縄人男性が結婚仲介業者に多額の手数料を払ってお見合いしていること、そして、沖縄人男性はフィリピン人女性の写真を見ただけでお見合いを決めていること、さらに、沖縄人男性が先に、フィリピン人女性を選ぶ権利があるため、メール・オーダー・ブライドのような人身売買的な要素が垣間見られることが挙げられる。2 つ目に、沖縄人男性もフィリピン人女性もお互いの出身国の文化、生活習慣、価値観などについての知識を交換する充分な時間もないまま、わずか数週間で結婚を決意している。相手の家族背景や相手の性格などを深く知る余裕もないままに結婚に至っている。

このように、結婚仲介業者の紹介によるお見合いで出会ったケースの場合、沖縄人男性が、メール・オーダー・ブライドのような手続きを通してお見合いを決めていること、そして、お互いが置かれている状況を深く理解する時間もないままに、短期間で結婚に至っていることから、結婚後、夫婦間に様々な問題が生じることが推察できる。

2.4. フィリピンで沖縄人男性と出会ったケース

本論文の調査協力者の内 15 人中 1 人が、フィリピン現地で沖縄人男性と知り合い結婚していた。ここでも、調査協力者の N さんの事例を通して、フィリピン人女性がフィリピン現地で沖縄人男性と出会い結婚した経緯を分析する。

2.4.1. N さんの事例

N さんの沖縄人夫は仏教徒の僧侶であった。（夫は、14 年前に死亡している。）N さんは、

フィリピンの離島の出身で、N さんの村には、第二次世界大戦で亡くなった日本人の慰霊碑が建てられているが、N さんの夫となる沖縄人の仏教徒僧侶は、長年の間、沖縄出身の遺族を引率して、慰霊祭を行っていた。N さんは、フィリピンに滞在中の遺族に付き添って世話をしていた。N さんは、カトリック教徒であるが、沖縄人遺族の世話を任されていた。

N さんは、年の離れた沖縄人の仏教徒僧侶と何度も交流を重ねるうちに、お互い、より理解するようになり、交際が進み、N さんは彼との結婚を決意した。その後、沖縄人夫の出身地である沖縄県に移住し、結婚生活が始まった。

しかし、2 人が結婚後、10 年後の 2001 年に、夫が癌により死亡した。まだ幼い 2 人の子供が残されていたが、N さんはシングルマザーとして、二人の子供を育て上げた。

2.4.2. 考察

この「フィリピンで沖縄人男性と出会ったケース」の調査協力者 N さんの事例は、第 2 章の冒頭で述べた定松（1996）の類型の中の①「現地出会い型」のタイプに当てはまる。①「現地出会い型」のタイプは、他の 3 つのタイプと比較して、夫婦の関係が比較的平等で、配偶者の家族の他文化が理解されているという特徴を持つという（70）。また、この①「現地出会い型」の日本人配偶者は一般に大企業のホワイトカラー層が多く、経済的基盤がしっかりしている傾向があり、家庭内で話されている言語も日本語だけでなく、英語、フィリピン人女性の母語を使用しているという（70）。

N さんの沖縄人夫は、大企業のホワイトカラー層ではなく、仏教徒僧侶であり、経済的基盤はしっかりしているものの、家庭内で話される言語は日本語であった。定松（1996）の事例と多少異なるところはあるものの、配偶者の家族の他文化が理解されているという特徴は共通していると思われる。N さんは、長年、フィリピンを訪れる沖縄人男性と知り合い、自由恋愛を通して長い交際期間を経た後、結婚を決意した。N さんの場合、純粋に好きになった人が沖縄人男性であったことがわかる。

N さんの夫となる沖縄人男性は、何度もフィリピンと沖縄を行き来しており、フィリピンの文化、生活習慣、価値観などを、ある程度、熟知していたことが窺える。フィリピン人に対する理解も深いと推察できる。N さんも、結婚前、フィリピンで日本語の勉強をしたり、日本や沖縄の文化について学んでいた。N さんもまた、沖縄の文化、生活習慣、価値観などを結婚前から、ある程度理解していたと考えられる。

このように、フィリピンで沖縄人男性と出会ったケースでは、お互いが平等な立場で、お互いの文化をよく理解し、尊重する中で、自由恋愛を通して仲を深めていき、結婚に至ったことが推察できる。

2.5. まとめ

これまで、本論文の調査協力者である在沖フィリピン人女性が沖縄人男性と出会って結

婚した経緯を 4 つのカテゴリーに分類して考察してきたが、ここでは、その考察をまとめる。

1）出稼ぎ労働者（エンターテイナー）として出会ったケースでは、結婚前、在沖フィリピン人女性は、出稼ぎ目的で来沖している。彼女達の出稼ぎ目的は、母国の貧しい家族を経済的に支援するためだった。彼女達は、エンターテイナーとして働いていた時、そして、結婚後、別の仕事で働きながらも、母国の家族への送金を続けていた。このように、在沖フィリピン人女性と沖縄人男性の間には経済的格差があり、経済的に自立している沖縄人男性と結婚することにより、エンターテイナーの世界から脱け出して、経済的に安定した生活を得ることができる、あるいは、配偶者ビザや永住者ビザを取得して、別の仕事をしながら沖縄に滞在することができるという期待があったのではないかと推察できる。実際に、興行ビザが切れた時に、沖縄に滞在し続ける手段として結婚を選び、配偶者ビザ、永住者ビザを取得した後、夫と離婚し、沖縄で働き続けている女性もいる。ほとんどの女性は自由恋愛で沖縄人男性と親しくなり、結婚に至ったと語っているが、中には、経済的事情や滞在資格を得るために結婚したという女性もいた。

また、結婚相手の沖縄人男性は、結婚前、ほとんどフィリピンへ行った経験がなく、フィリピンの文化、生活習慣、価値観などの理解がないままに結婚に至っている。さらに、沖縄人男性が結婚後も、水商売の延長線で夫に奉仕することを期待することがある。実際に、沖縄人夫がフィリピン人妻に家事・育児・介護などの性役割を押し付けるケースが見られ、DV や離婚問題に発展する事例も、このケースの女性の中に見られた。このケースで出会ったフィリピン人女性 9 人の内 5 人は、DV・離婚問題を抱えたり、夫との関係が上手くいかないと悩んでいる女性であった。

2）家族・親戚の紹介によるお見合いで出会ったケースでは、結婚前、フィリピン人女性も沖縄人男性も、家族や親戚を通して、お互いに相手の出身国の文化、生活習慣、価値観などについて聞かされていたり、相手の家族背景や性格などにつても知らされている。結婚前、お互いが結婚相手のバックグラウンドをよく理解し、納得したうえで結婚を決意している。また、結婚後も、自分達より先に沖縄に定住している家族や親戚が結婚生活について相談にのってくれたり、支援してくれる態勢が整っていると考えられる。このケースで出会った沖比国際結婚夫婦は上手くいく可能性が高いと推察できる。実際、本論文の調査協力者のフィリピン人女性 4 人の全員が沖縄人夫との夫婦関係が上手くいっていると語った。

3）結婚仲介業者の紹介によるお見合いで出会ったケースでは、沖縄人男性が結婚仲介業者に多額の手数料を払い、フィリピン人女性の写真を見て、沖縄人男性が一方的にお見合いする決定権を持っており、メール・オーダー・ブライドのような問題を孕んだ出会い方をしていること、そして、お互いに自分達の家族背景、性格、文化、生活習慣、価値観などについて理解を深める充分な時間もなく結婚に至っていることから、結婚後、夫婦は多くの問題を抱えることが推察できる。本論文の調査協力者である K さんも、インタビュー

調査で、夫との関係が上手くいかないと語る女性の 1 人である。

4）フィリピンで沖縄人男性と出会ったケースでは、結婚する前から、結婚相手である沖縄人男性がフィリピンを何度も訪れ、フィリピンの文化、生活習慣、価値観などに熟知しており、フィリピン人女性の性格や家族背景をよく理解したうえで、長年の交際を経て結婚に至っている。フィリピン人女性もその交際期間中、日本や沖縄の言語、文化、生活習慣、価値観などを学習して、沖縄人男性のバックグラウンドを理解しようと努めていた。この出会いのケースでは、お互いが対等な立場で、お互いの文化を理解し尊重する中で、時間をかけて中を深めていき結婚に至っていることから、結婚後も、夫婦間で起こる問題が少ないのではないかと推察できる。実際、このケースに属する N さんは、沖縄人夫との夫婦関係が上手くいっている女性の 1 人であった。

以上、在沖フィリピン人女性が沖縄人男性と出会って結婚した経緯を 4 つのカテゴリーに分類して考察した。どのように結婚相手と知り合ったのか、その出会いの経緯を調べることによって、そのカップルが結婚後、どのような夫婦関係を築いているのか、ある程度、推察することが可能である。これらの考察が、第 3 章から第 6 章の沖比国際結婚夫婦の夫婦間コミュニケーションの問題点を考察するうえで、背景知識として参考になると考える。

第 3 章　沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程

第 1 節　研究の背景と目的

結婚とは、生まれも育ちも異なる文化的背景を持つ二人が、それぞれの文化を共同生活の中に持ち込み、摺り合わせ、調整をして、新しい家庭文化を構築していく場である（矢吹、2012）。夫婦が異なる文化を摺り合わせ新しい家庭文化を構築していく過程で、どのような葛藤課題を抱え、その葛藤課題をどのように調整しているのか、その調整過程で、どのような夫婦間コミュニケーションのやりとりがなされているのかという調査は、結婚のあり方や夫婦間の問題点を考察する上で重要な研究であると思われる。

夫と妻が異なる文化をすり合わせる結婚の場において、人種、民族、宗教が異なる者同士の国際結婚夫婦の場合、夫婦はどのような葛藤課題に直面し、その葛藤課題をどのように調整しているのだろうか。そこには、どのような文化差が現れてくるのだろうか。また、国際結婚において、上手くいっている夫婦と上手くいっていない夫婦では、葛藤課題の調整の過程において、夫婦のコミュニケーションのあり方にどのような相違が見られるのだろうか。

本章の調査では、沖縄人夫との夫婦関係が上手くいっているフィリピン人妻がいる一方で、なぜ、沖縄人夫と夫婦関係が上手くいかないフィリピン人妻がいるのか、沖比国際結婚夫婦の関係性が上手くいかない原因はどこにあるのか、その原因を追及することとした。沖縄人夫と上手くいっているフィリピン人妻と沖縄人夫と上手くいっていないフィリピン人妻の 2 つのグループを対象に、インタビューを実施し、両グループの葛藤課題や葛藤課題の調整過程を比較調査して、沖縄人夫とフィリピン人妻の関係性が上手くいく要因と夫婦関係が上手くいかない原因を考察した。

第 2 節　先行研究

国際結婚夫婦のコミュニケーションの問題を考察するにあたっては、まず、同国人夫婦間コミュニケーションの問題を調べてみる必要がある。同国人夫婦間コミュニケーションの問題を扱った研究には、東海林（2006）、K.M. リンダール（1998）、A.E. フルツェッティ（1998）の研究がある。

東海林（2006）は、日本人夫婦を対象にインタビュー調査を行った結果、夫婦間葛藤への対処の仕方を「主張的対処」、「協調的対処」、「譲歩的対処」という 3 つのカテゴリーに分類した。そして、「譲歩的対処」には、その場の情緒状態が険悪になるのを避けるという情緒調整の役割があることや、夫婦関係を維持する上で、有効的対処法として積極的に意味づけられていることがわかった。また、K.M. リンダール（1998）は、米国人夫婦を対象に調査した結果、苦痛を抱えた夫婦は否定的情緒、葛藤に満ちたコミュニケーションスタイル、話しを聞くスキルの乏しさによって特徴づけられ、苦痛を感じる夫婦は満足している夫婦より、高い水準での否定的情緒の応酬や、高い水準での問題解決における抑制と情動的無効性という否定的コミュニケーション行動を示すと指摘した。さらに、A.E. フル

ツェッティ（1998）は、同じく米国人夫婦を対象に調査した結果、苦痛を感じていない夫婦は否定的情緒を表出しても、その否定的情緒の原因となっている葛藤を、話し合いによって突き止め、解決し、互いに理解したり、新しい方法で対応するのに対し、苦痛を感じている夫婦は、否定的相互作用が組織化されてしまい、否定的で解決できない状態が長く続いたり、同じ否定的相互作用を繰り返す傾向があると指摘した。

これらの先行研究から、同国人夫婦の場合、葛藤課題の調整過程において、日本人夫婦は「譲歩的対処」が葛藤課題を解決していく上でより有効的方法であると捉えていることや、米国人夫婦は、否定的コミュニケーション・スタイルよりも、肯定的コミュニケーション・スタイルの方が、葛藤課題を調整し、より良い夫婦関係を築いていく上で有効的方法であると捉えていることがわかる。

一般的な国際結婚夫婦のコミュニケーションの問題を扱った先行研究には、竹下（1997）、施（2001）、伊藤（2009）の研究がある。竹下（1997）は、夫外国人（欧米人／非欧米人）と妻日本人の夫婦を対象に夫婦間の結婚満足度を分析した結果、コミュニケーションの問題が夫婦の結婚満足度に影響を与えていることがわかった。また、施（2001）は、日本人と外国人（アジア人／欧米人）の夫婦を対象に夫婦間コミュニケーションの構造を調べた結果、「自己開示」、「会話行動」、「相互理解」の 3 つの側面が存在し、互いに関連し合っていることがわかった。つまり、国際結婚夫婦間では「自己開示」によって自己と他者の違いを明らかにし、「会話行動」を通して「相互理解」をはかり、夫婦間の絆を強め統合していくことがわかった。さらに、伊藤（2009）は、夫日本人と妻外国人（アジア人／南米人）の夫婦のコミュニケーション態度の認識の特徴を日本人夫婦の特徴と比較した結果、国際結婚夫婦の方が、日本人夫婦よりも互いに親和的態度を取っていると認識していると同時に、夫婦間の円滑なコミュニケーションを損なうような不適切な態度を取っていることも併せて認識していることがわかった。これは、国際結婚夫婦の方が、言葉の違いや文化的相違を乗り越えるために、自分の気持ちや情報を互いに言葉で伝え合おうとする意思がより強い一方で、夫婦の母語やコミュニケーション・スタイルが異なるため、それぞれのコミュニケーション態度に不適切さや非円滑さをより多く感じているためである。

これらの先行研究から、同国人夫婦と比較して、国際結婚夫婦の方が、コミュニケーションと結婚満足度の関連性が強く、コミュニケーションによって相互理解が促されると同時に夫婦の統合が強められる傾向があり、また、国際結婚夫婦の方が、夫婦関係を維持していく上で、よりコミュニケーションの重要性を認識していることがわかる。

日米夫婦と日日夫婦のコミュニケーションの問題を比較した先行研究には矢吹（2012）の研究がある。矢吹（2012）は、日米夫婦と日日夫婦の葛藤課題の調整過程において、夫婦が言語コミュニケーションと非言語コミュニケーションのどちらを使っているかに注目し、さらに、夫婦のコミュニケーションが言語化から非言語化へ変化する過程と、非言語化から言語化する過程を捉えた。その結果、日米夫婦は、言語コミュニケーションを使うことが多く、非言語コミュニケーションをとっていた日本人妻も米国人夫に合わせて、非言語化

から言語化へ変化している一方で、日日夫婦は非言語コミュニケーションを使うことが多く、結婚当初、言語コミュニケーションをとっていた妻も日本人夫に合わせて、言語化から非言語化へ変化していることを発見した。そして、日米夫婦は低コンテクストスタイル、日日夫婦は高コンテクストスタイルで葛藤課題を調整する傾向があると結論付けた。

夫日本人／妻フィリピン人の夫婦が抱えるコミュニケーションの問題を扱った研究はほとんどない。そこで、夫日本人／妻フィリピン人の夫婦の抱える問題点や葛藤課題を扱った先行研究（定松、1996：高畑、2003：佐竹・ダアノイ、2006）を紹介する。まず、定松（1996）の研究では、フィリピン人妻を受け入れる日本人夫の家庭が、「家」制度に則った習慣や価値観をもつ傾向がある一方で、フィリピン人妻は結婚における夫婦の愛情の重視と個人主義の価値観をもち合せているため、両者の間に認識のズレが生じ、ストレスの重要な原因になっていることを指摘している。また、高畑（2003）の研究では、フィリピン人妻と日本人夫の結婚観の認識の相違や、夫の両親との強い上下関係のため、家庭内でフィリピン人女性が嫁として低い位置に置かれること、フィリピン人女性が日本という外国で暮らす不安からくる自信欠如のため夫婦関係で劣位の立場におかれ、夫がフィリピン出身の妻を見下す態度などが指摘されている。さらに、佐竹・ダアノイ（2006）の研究は、フィリピン人妻・日本人夫の国際結婚の背景にある日比の経済格差の問題を指摘している。また、この国際結婚の異文化適応の問題点として、フィリピン人女性と日本人夫のジェンダー観の認識の相違を挙げている。さらに、日本社会でのフィリピン人女性に対するネガティブなイメージや偏見を変えていくための彼女達の活動やフィリピン人女性と結婚した日本人夫の意識が変えられていく姿を描き、フィリピン人女性の存在が、日本社会をより多文化共生へ促していることを述べている。

これらの先行研究から、日比国際結婚夫婦の抱える問題点として、日比間の経済格差を背景にした国際結婚であるため、フィリピン人女性が日本の社会や家庭内で不利な立場におかれやすいことや、「家」のしきたりや存続を重視する日本的家族文化を持つ日本人夫の家族と、個人主義的価値観を持つフィリピン人妻の間の認識のずれ、家父長的志向を持つ日本人夫と、男女平等志向を持つフィリピン人妻の間の葛藤などがあげられる。

以上の先行研究をふまえて、本調査では、沖比国際結婚夫婦がどのような葛藤を抱え、その葛藤に対してどのように対処しているのか、さらに、上手くいっている夫婦と上手くいっていない夫婦では、葛藤課題の対処方法において、コミュニケーションのあり方に、どのような相違が見られるのかを比較検証することによって、建設的な夫婦関係構築に何が必要なのかを探ることを目的とする。

第3節　結果

本章の調査協力者は、Bさん、Dさん、Eさん、Fさん、Gさん、Hさん、Iさん、Jさん、Kさん、Lさんの10人である。（彼女達の属性については、「第1章　序論　第3節　調査方法と調査協力者の属性」を参照。）インタビュー調査の結果とカトリック教会の神父や

シスターの意見を参考にした結果、調査協力者は、夫と関係が上手くいっている女性（E さん、F さん、G さん、H さん、I さん、J さんの 6 人）（以下、「上手くいっている夫婦」）と夫と関係が上手くいっていない女性（B さん、D さん、K さん、L さんの 4 人）（以下、「上手くいっていない夫婦」）の 2 つのグループに分かれた。

ここで、夫婦関係が「上手くいっている夫婦」と「上手くいっていない夫婦」を分類した基準を参考に、この 2 つのタイプの夫婦について定義してみたい。

「上手くいっている夫婦」とは

1）フィリピン人妻自身が、自分は沖縄人夫と上手くいっていると考えている。

2）過去に、夫婦間で DV や離婚問題が生じた経験がなく、カトリック教会の神父やシスターに相談した経験がない。

3）カトリック教会の神父やシスターが、日頃の交流を通して、この夫婦は何の問題もなく、上手くいっている夫婦であると判断している。

「上手くいっていない夫婦」とは

1）フィリピン人妻自身が、自分は沖縄人夫と上手くいっていないと考えている。

2）夫婦間で DV や離婚問題が生じ、カトリック教会の神父やシスターに相談したことがある。

3）カトリック教会の神父やシスターが、日頃の交流を通して、この夫婦はなんらかの問題を抱え、夫婦関係が上手くいっていないと判断している。

以上の定義を基に、調査協力者を「上手くいっている夫婦」と「上手くいっていない夫婦」の 2 つのグループに分け、フィリピン人妻が沖縄人夫との関係において、どのような葛藤課題を抱えているのか、そして、その葛藤課題をどのように調整しているのか、比較調査していく。

3.1　夫婦の葛藤課題

インタビュー調査の結果、フィリピン人妻は、夫との関係において 1)「夫婦関係」、2)「子育て」、3)「経済的問題」、4)「夫の両親との関係」、5)「フィリピン人に対する負のイメージ」、6)「文化の相違」の 6 つの葛藤課題を抱えていることがわかった。

これらの葛藤課題を挙げた「上手くいっている夫婦」と「上手くいっていない夫婦」それぞれの人数と具体的例を示したのが表 1 である。

フィリピン人妻が抱える 6 つの葛藤課題のうち、矢吹（2012）の先行研究で明らかになった日米夫婦、日日夫婦が抱える葛藤課題と共通しているものは、1)「夫婦関係」と 2)「子育て」の 2 つであった。また、日比夫婦に特有の葛藤課題は、3)「経済的問題」、4)「夫の両親との関係」、5)「フィリピン人に対する負のイメージ」の 3 つであった。さらに、沖縄

県在住の日比夫婦（以下、沖比夫婦）に見られる特有の葛藤課題は、6)「文化の相違」であった。

まず、日米夫婦、日日夫婦、日比夫婦に共通してみられる葛藤課題のうち、1)「夫婦関係」については、例えば、夫婦の会話が少ないという「夫婦のコミュニケーション」の問題、夫婦の言語能力の不足が原因で生じる「言葉の問題」、夫婦がどれだけ家事・育児を分担するかという「家事・育児の分担」の問題、夫の愛情表現が稀薄などの「愛情表現」の問題、夫の会社づきあいが多いという「夫の交際関係」の 5 つのサブカテゴリーが挙げられた。また、2)「子育て」に関しては、夫が子供に厳しすぎるなどの「子供の育て方」の問題が挙げられた。

次に、日比夫婦に特有の葛藤課題として、3)「経済的問題」、4)「夫の両親との関係」、5)「フィリピン人に対する負のイメージ」の 3 つが挙げられたが、そのうち、3)「経済的問題」では、例えば、夫が妻の在比家族に仕送りをすることを拒否するなどの「フィリピンへの仕送り」の問題、そして、夫が妻に生活費を渡さないという「家庭経済」の問題が挙げられた。また、4)「夫の両親との関係」においては、朝帰りをする夫を味方し、妻が夫に黙従することを強いる「夫の両親との上下関係」の問題が挙げられた。さらに、5)「フィリピン人に対する負のイメージ」では、フィリピン人は金のことばかり考えている、クリスチャンは戦争ばかりしているという夫が抱くフィリピン人に対する「負のイメージ」の問題が挙げられた。

さらに、沖比夫婦の特有な葛藤課題としては、6)「文化の相違」が挙げられた。6)「文化の相違」には、例えば、フィリピン人妻が、沖縄の年中行事（清明祭、盆、正月）に参加することに煩わしさを感じるという問題が挙げられた。

また、「上手くいっている夫婦」と「上手くいっていない夫婦」で共通に見られた葛藤課題は、「夫婦のコミュニケーション」、「言葉の問題」、「家事・育児の分担」、「夫の交際関係」、「子供の育て方」、「フィリピンへの仕送り」、「夫の両親との上下関係」であった。「上手くいっている夫婦」に特有の課題は「愛情表現」「文化の相違」であった。一方で、「上手くいっていない夫婦」は、夫が生活費を渡してくれない「家庭経済」や「フィリピン人に対する負のイメージ」など、もっと根本的な葛藤課題を抱えていることがわかった。

表１　夫婦間の葛藤課題

カテゴリー	サブカテゴリー	上手くいっている夫婦	上手くいっていない夫婦	具体例
夫婦関係	夫婦のコミュニケーション	(4)	(4)	夫婦の会話が少ない 夫が妻に気持ちを言わない
	言葉の問題	(6)	(2)	夫の英語・タガログ語能力の不足、妻の日本語能力の不足
	家事・育児の分担	(3)	(1)	夫が家事・育児に協力的でない
	愛情表現	(2)	(0)	妻が沖縄人夫は、フィリピン人男性と比べて愛情表現が稀薄と感じる
	夫の交際関係	(1)	(1)	夫の職場関係・友人関係の付き合いの多さ
子育て	子供の育て方	(2)	(3)	夫が長男に厳しく、次男に甘い、夫が子供に厳しすぎる
経済的問題	フィリピンへの仕送り	(1)	(1)	夫がフィリピンへの仕送りを拒否する
	家庭経済	(0)	(2)	夫が妻に生活費を渡さない
夫の両親との関係	夫の両親との上下関係	(1)	(1)	朝帰りをする夫を味方する夫の両親､妻が夫に黙従することを強いる夫の両親
フィリピン人に対する負のイメージ	フィリピン人に対する負のイメージ	(0)	(1)	フィリピン人は金のことばかり考えているという負のイメージ
	クリスチャンに対する負のイメージ	(0)	(1)	クリスチャンは戦争ばかりして人殺しだと考える負のイメージ
文化の相違	文化の相違	(2)	(0)	妻が沖縄の年中行事に煩わしさを感じる

3.2　夫婦間の葛藤課題の調整過程

夫婦が葛藤課題をどのように調整しているかを分析した結果､「言語コミュニケーション」で調整する過程と「非言語コミュニケーション」で調整する過程の 2 つに分けられた。さらに、「言語コミュニケーション」は「肯定的言語コミュニケーション」、「否定的言語コミ

ュニケーション」、「非言語化から言語化へ変化」の 3 つのサブカテゴリーに、「非言語コミュニケーション」は「肯定的非言語コミュニケーション」、「否定的非言語コミュニケーション」、「言語化から非言語化へ変化」の 3 つのサブカテゴリーに分けられた。夫婦間の葛藤課題の調整過程のカテゴリー、サブカテゴリーと「上手くいっている夫婦」、「上手くいっていない夫婦」それぞれの数を示したものが表 2 である。

まず、「言語コミュニケーション」のサブカテゴリーについて詳述する。「肯定的言語コミュニケーション」では、妻の側が、夫に葛藤課題をはっきり告げたり、夫に葛藤課題を言語化することを要求したり、葛藤課題を調整する過程で、妻の側が積極的に夫に働きかけていることがわかる。一方で、「否定的言語コミュニケーション」では、妻の積極的な働きかけにもかかわらず、夫が罵倒したり、不平不満を言ったり、妻の言うことを聞かずに、一方的に自分のやり方を押し通している。この傾向は、上手くいっていない夫婦の事例に多く見られたが、上手くいっている夫婦の間では見られなかった。また、「非言語化から言語化へ変化」では、妻の積極的な働きかけに対して、夫が妻の問いかけに応えたり、自分の葛藤課題を言語化するようになっている。この傾向は、上手くいっている夫婦の事例に多く見られ、上手くいっていない夫婦には見られなかった。

次に、「非言語コミュニケーション」のサブカテゴリーについて詳述する。「肯定的非言語コミュニケーション」では、妻の積極的な働きかけに対して、夫が妻の話を傾聴したり、妻の提案を受け入れたり、夫が肯定的態度を示していた。この傾向は、上手くいっている事例で多く見られた。一方で、「否定的非言語コミュニケーション」では、妻の積極的な働きかけにもかかわらず、夫が妻の話を傾聴しない、夫が物を投げる、夫が妻の言うことにイライラする、夫が逃げる、夫が妻に相談しないで一人で決めるなど、夫の側に否定的態度が示された。この傾向は、上手くいっていない夫婦の事例に多く見られた。また、「言語化から非言語化へ変化」では、妻の積極的な働きかけにもかかわらず、夫の否定的態度が繰り返されるので、妻が夫に話しかけることをあきらめ、夫婦の会話がなくなっていくという傾向が見られた。これは上手くいっていない夫婦に多く見られた。

以上のように、上手くいっている夫婦の間では、妻の積極的な働きかけに対して、夫が肯定的非言語コミュニケーションで対応し、さらに、夫が妻の問いかけにこたえたり、自分の葛藤課題を言語化するなど、夫の態度が非言語化から言語化へ変化している。一方で、上手くいっていない夫婦は、妻の積極的な働きかけにもかかわらず、夫が否定的言語・非言語コミュニケーションで対応し、その結果、妻が話をすることをあきらめ、妻の態度が言語化から非言語化へ変化し、夫婦の会話がなくなっていた。

次項では、サブカテゴリーごとに、インタビューでの妻の語りを示し、実際の妻の言葉から、葛藤課題とその調整の仕方を見ていきたい。

表２　夫婦の葛藤課題の調整過程

カテゴリー	サブカテゴリー1	サブカテゴリー2	上手くいっている夫婦	上手くいっていない夫婦
言語コミュニケーション	1　肯定的言語コミュニケーション	1-1　妻が夫に自分の課題を言語化することを要求する	(4)	(3)
		1-2　妻が夫にはっきり意見を言う	(5)	(4)
		1-3　夫婦が互いに話し合う	(5)	(0)
		1-4　夫婦が、言葉が通じない時、互いの言いたいことを例えを用いて詳しく説明し合う	(4)	(1)
	2　否定的言語コミュニケーション	2-1　夫が罵倒語を吐く	(0)	(1)
		2-2　夫が妻に不平不満を言う	(0)	(2)
		2-3　夫が妻に一方的に、自分のやり方ですることを要求する（家事や育児、夫婦の共同作業に関して）	(0)	(3)
	3　非言語化から言語化へ変化	3-1　夫が妻の問いかけに答えるようになる	(4)	(0)
		3-2　夫が自分の課題を言語化するようになる	(4)	(0)
		3-3　夫が妻に感謝の言葉をかけるようになる	(1)	(0)
非言語コミュニケーション	4　肯定的非言語コミュニケーション	4-1　夫が妻の話を傾聴する	(5)	(0)
		4-2　夫が妻の提案を受け入れる	(4)	(0)
		4-3　夫婦が互いの文化・宗教に対して暗黙の理解を示す	(4)	(1)

	5　否定的非言語コミュニケーション	5-1　夫が妻の話を傾聴しない	(1)	(3)
		5-2　夫が物を投げる	(0)	(1)
		5-3　夫が妻の言うことにイライラする	(0)	(2)
		5-4　妻が話をすると夫が逃げる	(0)	(2)
		5-5　夫が妻に相談しないで一人で決める	(0)	(3)
	6　言語化から非言語化へ変化	6-1　夫が愛情を表現しなくなった	(3)	(0)
		6-2　妻が夫に話すことをあきらめる	(1)	(3)
		6-3　夫婦の会話がなくなった	(0)	(3)

3.2.1　肯定的言語コミュニケーション

肯定的言語コミュニケーションとは、葛藤課題を調整する過程において、夫婦が葛藤課題を相手に言葉で伝え、夫婦間の言葉のやりとりが肯定的であるコミュニケーション態度を指す。肯定的とは、夫婦が積極的に相手の意見を聞き、受け入れると同時に、自分の意見を積極的に発言し、建設的関係を築く姿勢が言葉のやりとりの背後に見られる状態である。

サブカテゴリーとして、3.2.1.1「妻が夫に自分の課題を言語化することを要求する」、3.2.1.2「妻が夫にはっきり意見を言う」、3.2.1.3「夫婦が互いに話し合う」、3.2.1.4「言葉が通じない時、互いの言いたいことを詳しく説明し合う」の 4 つがあがった。

3.2.1.1　　妻が夫に自分の課題を言語化することを要求する

（上手くいっている夫婦　4 組）（上手くいっていない夫婦　0 組）

10 人中 7 人の妻が自分の夫は「大人しすぎる」「自分の気持ちを言わない」「話をしない」という印象を持っていた。

（上手くいっている夫婦）

≪旦那さんはよくしゃべる？≫あんまり、もう、あんまりしゃべらないねえ。≪H さんがずっとしゃべってる？≫そうそうそう、旦那さんも大人しいよ。≪旦那さんが何を考えているか分からなくて困ったことは？≫あー、ありますよね。うん、あんまりしゃべらないから、『心配してる』って、『何考えてる』って言う。≪『何考えてる？』って H さんが聞くんですか？≫うん、聞く。―大人しいだから、優しすぎるさ、旦那は。もーう、優しすぎる。たまには、あんなに

しゃべらないから、たまには、H も怒って、たまにもう、『しゃべれー、もう、H はわからない、あの、ちゃんと怒ったら、もうしゃべってちょうだい』何が悪いか、言わない、すごい優しい。（H さんの語り）

（上手くいっている夫婦）

≪旦那さんはよくしゃべる？≫ううううん、あんまりしゃべらないんですよ。一言だけ言って、G はしゃべるんですよ。≪G さんはしゃべるんですか？≫何でも聞くんですよ、旦那さんに。だけど、たまに、何、あの言わない時もあるんですよ。だから、なんで夫婦なのに、なんで何でも話するんですよね、そしたら仲良くになるんですよ。けど、もう、なんか、静かな人だから。≪G さんはそれは不満ですか？≫はい。≪G さんから話すと？≫はい、話やりますよ。はい、G から話して。（G さんの語り）

G さんの語りでは、フィリピン人妻は、夫婦で何でも話し合うことが、夫婦の関係性を上手く維持できる秘訣だと考えているが、沖縄人夫は自分からあまり話をしない。それで、H さんの語りのように、フィリピン人妻が夫に「今、何を考えているのか」「何で怒っているのか」、自分の気持ちや悩みを言語化することを夫に求めている。上手くいっている夫婦では、妻が夫に課題を言語化することを要求することに対して、夫が肯定的に反応し、自分の気持ちを言語化するように変化している傾向が見られた。

3.2.1.2　妻が夫にはっきり意見を言う

（上手くいっている夫婦　5 組）（上手くいっていない夫婦　0 組）

（上手くいっている夫婦）

あの、『もし、あんた、あの、何ていう、お互い様にやらないと、もう、別れることになるんだよ』って言ったさ、言ったんですよ。でも、どんどん、なに、あの『一緒にこれやって』って言ったら、する。あんた、なんかお互い様にやってたんですよ。自分が休みの時は自分が。今は大きく変わりましたよ。≪それは、G さんが何度も言って。≫はい、はい、はっきり、『こんなことは嫌です』って言うんですよ。―なんか、あの、同じように、なんか旦那さんは、『おまえの仕事だよ』って言う。『子供の面倒見るのとか、家のこととかおまえの仕事だよ』って言う、言ったんですよ。だから、たまには嫌ですよ、なんか。≪G さんは、嫌って言うことを言った？≫はいはい、なんか、『あんたもやらないと、あの、これは、なんで、あんたの、二人の子供だから、二人で面倒見ないとダメだよ』≪話し合って≫はい、どんどん変わりました。はい、大きく。（G さんの語り）

（上手くいっている夫婦）

何もやらないで。でも、最初から、私はもう、こんなしないから。もうパンツはこっち、T シャツはこっち、自分で取らんと。タオルこっち、こんなしてるから。だから、もうお風呂の時、自分で持っていく。『これ持ってきて、これ持ってきて』そんな言わない。最初からもう決めて。≪E さんが？≫完全でやったからさあ、もう、『タオル持っておいで』これ一番嫌。これだけ私一番言った。『取ってこい、取ってこい、持ってこい』とか、これ言葉が最初から、『もう嫌だ

から』って言ったからさ。もう言わない。（E さんの語り）

G さんと E さんの語りでは、妻が夫に家事・育児の分担について自分の意見を明確に言語化することによって、夫がそれに肯定的に反応し、妻の意見に従って、態度を変化させ、家事・育児に協力的になっていく様子が窺える。

3.2.1.3　　夫婦が互いに話し合う

（上手くいっている夫婦　5 組）（上手くいっていない夫婦　0 組）

この傾向は、上手くいっている夫婦の間に見られ、特に「子供の育て方」について互いに話し合う夫婦が多かった。

（上手くいっている夫婦）

後は、もう二人とも忘れて、また同じ話となって。そんなに、やっぱりねえ、子供にこんなしてとか、お互い、そうだねえ、ごめんねえとか、あんなにして、あの、それでだけ。≪旦那さんが子供に厳しい？≫うーん、厳しいとき、だから、何ていう、自分の仕事でも、たまに、やっぱり人間はね、もう、こんなあるよ。自分もそう、ある時もある。だから、お互い、私が子供怒っている時、旦那さんが子供カバーして。だから、あの、これ前から、子供は育てるのは夫婦だから、うん。私がこういう時には、自分がカバーしてね。で、自分が怒っている時はカバーしてね。何でかーって言ったら、子供は、あの、自分を守るのは親しかいないから、だから二人とも怒ってどうするの子どもは。それでだから、いつも、このだけが、大体ね。（I さんの語り）

I さんの語りでは、仕事でストレスを溜め、子供に厳しく当たりすぎた夫が、妻に反省の気持ちを打ち明けている。子供を守れるのは親しかいないのだから、夫が子供を叱る時は妻がかばい、妻が子供をしかる時は夫がフォローし、二人で同時に叱らないようにしようと、夫婦で話し合っている。二人で話し合うことによって、良い「子供の育て方」を模索している様子が窺える。

3.2.1.4　　夫婦が、言葉が通じない時、互いの言いたいことを例えを用いて詳しく説明し合う

（上手くいっている夫婦　4 組）（上手くいっていない夫婦　1 組）

国際結婚夫婦において、言葉の壁は相互理解を阻む大きな要因となる。相手の言っていることがわからない時、自分の言っていることが通じない時、いかに忍耐強く、別の言葉を使って、相互に分かり合えるまで詳しく説明し合うことが、夫婦間でできるかということは、夫婦の関係性を維持していく上で重要な点である。

（上手くいっている夫婦）

もし、あの、わからない時は、もう、あの、旦那さんの何言っているか分からない、例えば、あの、『こんなこと、こんなこと』って言ったら、『あーわかた』って、あの、『example、example ちょうだい』って言う。わからない言葉の意味で、example。≪G さんが example あげる？≫

旦那さんが example あげて、で G も example あげるんです、それで少しずつ。(G さんの語り)

（上手くいっている夫婦）

昔のことは、えっと、昔はね、私も、もちろん、みんな、それで、こっちで生まれて育ったんじゃないから、フィリピンが英語で。うーん、コミュニケーション、あの主人も英語、単語単語しかわからないんだけど、何となく通じて。私もわからない時に、『ちょっと説明して、どう言う意味？』ちょっと難しい言葉使ったら。自分もあの、こっち来た時に、辞書持って、それで自分調べて、あ、なるほどなあって、それで自分も使って。それで何となくもう、どんどんどんどん、日本語も覚えて、で旦那さんも、英語は使わなくなって、もう日本語の。(I さんの語り)

G さんの語りでは、夫婦の間で言っていることが分かり合えない時、「example」例示を互いに提示することで、言葉の壁を乗り越えている。また、I さんの語りでは、結婚当初、妻の日本語が充分でない時、英語の単語を並べることで、夫婦の意思疎通を図っている。

3.2.2　否定的言語コミュニケーション

否定的言語コミュニケーションとは、葛藤課題を調整する過程において、夫婦が葛藤課題を言葉で伝えているが、夫婦の言葉のやりとりが否定的であるコミュニケーション態度を指す。否定的とは、相手の意見を聞かずに自分の意見を一方的に押し付けたり、相手を非難したり、相手を傷つける言葉を言ったり、非建設的姿勢が夫婦の言葉のやり取りの中で見られる状態である。

サブカテゴリーとして、3.2.2.1「夫が罵倒する」、3.2.2.2「夫が妻に不平不満を言う」、3.2.2.3「夫が妻に一方的に自分のやり方ですることを要求する」の 3 つがあがった。

3.2.2.1　夫が妻を罵倒する

（上手くいっている夫婦　0 組）（上手くいっていない夫婦　1 組）

（上手くいっていない夫婦）

うん、たまに、たまに、汚い言葉するわけよ。≪どんなことを？≫こんなあの、『フラーぐぅあ』とか、あの、たまに、『馬鹿たれ』とか、最近また、なんかすぐ。≪すぐ切れる？≫うん、もう、私、もう仕事やめる、もう歩いて帰る。―≪どんな時に、フラーとか馬鹿とか言うんですか？≫なんか、仕事やる時に、もうなんか、早くしたい、早くしたい。≪夫が早くしたい？≫うん、たまに、間違いあるさあね。だから、こんな時、汚い言葉が出るよ。(K さんの語り)

K さんの語りでは、夫婦が共に農業の仕事をしている時、夫が妻に速く作業をやるように急かし、妻が作業を間違った時に、夫が「フラーぐぅあ（沖縄の方言「あほ」「ばか」という意味)」とか「馬鹿たれ」という罵倒している。妻は夫に罵倒された後、怒って農作業を中断し家に帰宅している。結局、農作業ははかどらず、非生産的結果となっている。

3.2.2.2　夫が妻に不平不満を言う

（上手くいっている夫婦　0 組）（上手くいっていない夫婦　2 組）

（上手くいっていない夫婦）

もう、今、なんか、ちょっと違ってるさ。もう前、とてもうるさいよ。もう、ぶつぶつが。うん、必ずお酒飲んでる時にも、言いたい放題だわけよ。夜中も起こす。もうこれが大変なのよ。―外で飲むでしょ。帰ってから、遅い時間帰ってから、もう、私眠ってるさ。大体いつも、2 時、3 時ぐらい、前よ。帰ってから起こすわけよ。『はい、起きて、こっち座って、自分の話聞いて』また話、一回、切り替え切り替えよ、大変だわけよ。また次の日、仕事さ、畑。睡眠不足になるのに。（K さんの語り）

K さんの語りでは、夫が酒を飲んで夜遅く帰宅し、眠っている妻を起こし、不平不満を言っている場面である。ここでの夫の不平不満の内容は、「フィリピンの家族への仕送り」に対する不満、「フィリピン人・クリスチャンに対する偏見」であった。夫が妻に繰り返し、繰り返し、同じことを語ることによって、妻は睡眠不足になり、翌日の仕事に支障を来すという問題を生んでいる。

3.2.2.3　夫が妻に一方的に自分のやり方ですることを要求する（家事や育児、夫婦の共同作業に関して）

（上手くいっている夫婦　0 組）（上手くいっていない夫婦　3 組）

（上手くいっていない夫婦）

あの、なんかさ、旦那さんの、今、なんか、気づいている私の気づいた性格は、例えば、自分、向こうの言うとおり、私がやってほしい、あの、旦那の思うとおり、何でも、あの、言い訳しないで、すぐやってほしいみたいな感じで。―こないだなんだっけ。あの、怒ってた時に、なんか、そんな時、家にいるから、家のことであれしてる、それで怒ってた。≪家のことで？≫そうそうそう、なんか、少し、私、自分の言い訳が、『こんながいいんじゃないか』、例えば、それで怒ってた。≪L さんがこんながいいんじゃないかって言ったらだめって？≫ダメって言う。いつも、なんか言ったら、『いいよ好きにしていいよ』とかで、そんなで怒る声。（L さんの語り）

L さんの語りでは、例えば、家事のことや家族のことに関して、妻が「こんなやり方がいいんじゃない」と提案すると、夫が怒り出している。夫は自分の言うとおりに妻がやってくれないと不機嫌になる。妻はそれを察して、夫の言うとおりにやらざるを得ない様子が窺える。

3.2.3　非言語化から言語化へ変化

この状態は、最初、夫婦が葛藤課題を言葉にして伝えていなかったが、徐々に言語化するようになるコミュニケーション態度を指す。日比国際結婚夫婦の場合、フィリピン人妻は結婚当初から、課題を言語化する傾向があるが、沖縄人夫は課題を言語化する傾向が少なく、妻の問いかけに対して、徐々に、夫が非言語化から言語化へと態度を変化させる傾向が見ら

れた。

サブカテゴリーとして、3.2.3.1「夫が妻の問いかけに応えるようになる」、3.2.3.2「夫が自分の課題を言語化するようになる」、3.2.3.3「夫が妻に感謝の言葉をかけるようになる」の３つがあがった。

3.2.3.1　夫が妻の問いかけに応えるようになる

（上手くいっている夫婦　4 組）（上手くいっていない夫婦　0 組）

（上手くいっている夫婦）

なんか、『あんたもやらないと、あの、これは、なんで、あんたの二人の子供だから二人で面倒見ないとだめだよ』≪って言って話し合って≫はい、どんどん変わりました。はい、大きく。≪今は？≫今はお互い様に、あの『今迎えに行きたくないからあんたお願いねえ』って言ったら、『ああいいよ』って迎えに行くんですよ、はい。（G さんの語り）

G さんの語りでは、以前、「育児は妻の仕事だ」と言っていた夫が、「二人の子供だから二人で面倒を見る責任がある」という妻の主張に対して、肯定的に反応し、現在は、育児に協力的になり、妻の「子供を迎えに行ってほしい」という問いかけにも応えるようになっている。

3.2.3.2　夫が自分の課題を言語化するようになる

（上手くいっている夫婦　4 組）（上手くいっていない夫婦　0 組）

10 人中 7 人のフィリピン人妻が語っているように、沖縄人夫は無口で、あまり自分の気持ちを言葉で表さない傾向があるようである。しかし、7 人中 4 人の妻が、最初は無口だったけど、妻が問いかけると話すようになったと答え、夫が自分の課題を言語化するようになる事例が見られた。

（上手くいっている夫婦）

そうそう、黙ってる時に、もう食事しながら、ずっと黙ってる時に、『なんかあったの？』とか聞く。『会社でよ、こんなあ、こんなあよ』話すこと話すんだけど。≪F さんが聞いたら？≫そうそうそう、自分からはあんまり話そうと、話すこともあるんだけど、大体、もう黙ってるんだけど。『なんかあったの？』『なんかでよ、こんなでよ、会社でよ』とか、それでいい始める。（F さんの語り）

F さんの語りでは、食事をしながら、黙っている夫に妻が、「会社で何かあったの？」と問い掛け、夫が会社で発生した問題や会社で抱えている悩みを妻に打ち明けている。

3.2.3.3　夫が妻に感謝の言葉をかけるようになる

（上手くいっている夫婦　1 組）（上手くいっていない夫婦　0 組）

（上手くいっている夫婦）

遅く帰ってきて、また、赤ちゃんが起きたりこんなやったりしたから、その時は、とっても嫌

だった。うん、でも、今は、できてる。もう、『いろいろ迷惑かけたねー』とか。≪旦那さんが？≫そうそう、『いろいろ苦労させたけど』って言う。『あっ、わかってるんだ、わかってるの？』って。娘たちにも言ってる。『お母さん、よく頑張ったよ』って。（F さんの語り）

F さんの語りでは、結婚当初、夫が会社の付き合いで夜遅く帰宅し、眠っている赤ちゃんを起こすなど、妻に嫌な思いをさせたことに対して、「いろいろ迷惑をかけた」「いろいろ苦労させた」と妻にねぎらいの言葉をかけている場面である。結婚当初、夫の交際関係（会社の付き合い）が夫婦間での葛藤課題の原因となり、喧嘩をしていた夫婦だったが、夫が自分の態度を反省し、妻に感謝の気持ちを言語化するようになっている。

3.2.4　肯定的非言語コミュニケーション

肯定的非言語コミュニケーションとは、葛藤課題を調整する過程において、夫婦が葛藤課題を明確な言葉で伝えていないが、夫婦の非言語コミュニケーション態度が肯定的な状態を指す。肯定的とは、課題に向き合う時に、積極的に相手の存在や態度を受け入れ、建設的関係を築く姿勢が夫婦の非言語的態度の背後に見られる状態である。

サブカテゴリーとして、3.2.4.1「夫が妻の話を傾聴する」、3.2.4.2「夫が妻の提案を受け入れる」、3.2.4.3「夫婦が互いの文化・宗教に対して理解を示す」の 3 つがあがった。

3.2.4.1　　夫が妻の話を傾聴する

（上手くいっている夫婦　5 組）（上手くいっていない夫婦　0 組）

本調査では、妻の語りから、沖縄人夫は無口なタイプが多く、フィリピン人妻が一日の出来事や悩みを話し、夫は妻の言うことを聞いているという態度が多く見られた。

（上手くいっている夫婦）

≪E さんが話しても聞いてくれないとか？≫あー、そんなのはないね。≪ちゃんと話聞いてくれる？≫うん。≪どちらがよくしゃべりますか？≫よくしゃべるのは、そうね、誰かな、私かな。お父さんは無口だから。≪そうなんですか？≫でも、話しする時は話する。なんか、必要な時はね、話しする。≪旦那さんがいつも E さんの話を聞いている感じですか？≫うん、聞いてる。聞いてる。そうそうそうそう、聞いてる。（E さんの語り）

（上手くいっている夫婦）

はい、聞くんですよ。で、自分のこう 1 日のやったことは旦那さんに言う、言ってるんですよ。で、旦那さんは言わないんですよ。≪旦那さんは聞いているだけ？≫聞いている、自分の今日 1 日やったのは、言わないんですよ。≪でも、ちゃんと聞いてくれる？≫はい、聞いてくれる。（G さんの語り）

（上手くいっている夫婦）

私の主人が私が悩みがある時にはすぐわかる。なんでって、あのお家、私のお家に、えーっと、こっちに、あの、こんなみたいな、神様の像おいて、あの、マリア様のとか、私は毎日はちょっとだけ、あのお祈りして寝る前にとか。だけど、向こうに長いことおったら、『何で？』とか

聞くからさ、旦那さん、『何があったか？』とか、うん、とか、そういう話聞く。≪I さんがお祈りしたりすると？≫もし、長いこと、お祈りしてるからね、たぶん、『何かあったのー？』ってから聞く。(I さんの語り)

E さんと G さんの語りでは、夫からは、あまり話さないが、妻が一日の出来事などを話すのを夫が傾聴している。I さんの語りでは、自宅にあるマリア像の前で長い間、祈っている妻を見た夫が心配して、妻に何か悩みがあるのか尋ねている。そして、妻は夫に自分の悩みを打ち明けている。このような傾向は、上手くいっている夫婦の間で見られた。夫が妻の話を傾聴することによって、妻の考えや悩みを夫が共有し、相互理解が生まれ、夫婦の関係性もより深まっている。

3.2.4.2　夫が妻の提案を受け入れる

（上手くいっている夫婦　4 組）（上手くいっていない夫婦　0 組）

（上手くいっている夫婦）

えっと、今は仕事一緒ですね。あの旦那さんは海ブドウの養殖して、で自分は、あの最初はね、手伝うことなるんだけど。どんどんどんどん、なんか、このやり方も、私もこれがいいこれがいい、もう主人も聞いて、ああ、それで、お互い、誰かがいないと、なんか、できないとかなってるんですよ。(I さんの語り)

I さんの語りでは、夫が海ブドウの養殖の仕事をし、それを妻が手伝っている。最初は、妻は手伝うだけだったが、徐々に、仕事のやり方について、いろいろな提案をするようになり、夫もそれを受け入れている。そして、妻がいないと仕事が成り立たないようになっている。

3.2.4.3　夫婦が互いの文化・宗教に対して暗黙の理解を示す

（上手くいっている夫婦　4 組）（上手くいっていない夫婦　1 組）

国際結婚夫婦において、文化・宗教の相違を乗り越えることは重要な課題である。本調査に参加したフィリピン人女性は皆、カトリック教徒であり、彼女たちの夫は皆、祖先崇拝であった。また、沖縄では祖先崇拝にまつわる祭事が多く、妻はその準備のため精神的・肉体的負担を負う。このように、まったく違う宗教や文化を持つ夫婦がどのように互いの文化・宗教を受け入れているのだろうか。

（上手くいっている夫婦）

うん、別に問題ない。うん、だから、もう何ていう、でもやっぱし、沖縄のことだから、あの、ね、旦那の所のなんかある時には、やっぱし行きますよね。クリスチャンだけど。やっぱし向こうのやり方もある、やらないといけないと思う。やらないと、『なんで？』って言われるから、言われるって、言われはしないんだけど。うん、だから、なんていう、結婚するときも、私、教会行ってるって最初に伝えてるから、もう、『うちはクリスチャンで教会行ってる』って言って、別に何も反対はしなかったけど、結婚式の時、『教会で結婚式挙げたい』って言ったら、『も

う、いい』って言って。（F さんの語り）

（上手くいっている夫婦）

でも、結婚する前に私はちゃんと旦那さんに、『私はカトリックだよ』ってちゃんと。あの、で、あの、日本の、沖縄のそれもちゃんと話して、自分の親もこんな、うん、あの、沖縄の文化がものすごい大事、沖縄のそのものすごい大事で、で、こんなにして自分もこんなのできるとか、だいたい、もうみんな信じる、信じる人は信じる。あの信者とか、あんなの信じなくても、もう神様は 1 人だよ、だからみんな気持同じだよって。それで、だから、旦那さんも、あの、私に、教会、もうこっち来てからすぐ、教会連れて。（I さんの語り）

（上手くいっている夫婦）

私はもう最初からクリスチャンだから、もう、『駄目よ』っと言ったら、これがもう、もう、たぶん、二人は合わないかもしれないし、そんなんじゃないから、わかってるから。―もう旦那もわかってる。最初からわかってますよ。もう、旦那もそんなのも言わないから。こんなことは、旦那も教会も一緒に行く時もあるし。だから、そんな問題はない。≪旦那さんは祖先崇拝ですよね？そういうのはどうですか？≫ううううん、反対はしないよ。とにかく、私、だから、私もクリスチャンだから、とにかく、私のマイパート反対しないから、私、旦那理解してるさあね。だから私も理解する、お互い。（E さんの語り）

F さんの語りでは、夫婦が結婚する時、妻は自分がクリスチャンであることを打ち明けているが、夫は何も反対をしなかった。また妻も沖縄の祭事（盆・正月・清明祭など）がある時には、夫の実家へ行き、祭事の準備を手伝っている。夫婦は、自分の文化・宗教を守りながら、相手の文化・宗教も尊重していた。

I さんの語りでは、結婚する前、妻が夫に自分がカトリック信者であることを打ち明け、また夫も沖縄の文化について妻に話をしたことで、結婚後も互いに、相手の文化・宗教を暗黙の内に受け入れ、尊重するようになっている。また、夫婦には、宗教は違っても神様は一人しかいないという共通理解がある。

E さんの語りでは、夫が妻の宗教を理解し受け入れているので、妻も夫の宗教や文化を理解し受け入れていると語っている。お互いに、相手の大切な信仰の部分については、尊重し合い、反対しないという態度を取っている。

3.2.5　否定的非言語コミュニケーション

否定的非言語コミュニケーションとは、葛藤課題を調整する過程において、夫婦が葛藤課題を明確な言葉で伝えていない状態で、さらに、夫婦の非言語的態度が否定的な状態を指す。否定的とは、相手の存在や態度を受け入れることに消極的で、建設的関係を築く姿勢が夫婦の非言語的態度の背後に見られない状態である。

サブカテゴリーとして、3.2.5.1「夫が妻の話を傾聴しない」、3.2.5.2「夫が物を投げる」、3.2.5.3「夫が妻の言うことにイライラする」、3.2.5.4「妻が話をすると夫が逃げる」、3.2.5.5「夫が妻に相談しないで一人で決める」の 5 つがあがった。

3.2.5.1　夫が妻の話を傾聴しない

（上手くいっている夫婦　1 組）（上手くいっていない夫婦　3 組）

夫が妻の話を傾聴しないという態度の裏には、妻への関心が薄い、妻が考えていることを理解しようとしない、自分のことで精いっぱいなど、夫に相手のことを顧みず自己中心的な態度があることが推察できる。

（上手くいっている夫婦）

私、あの、he never told, he never advised, he never. “OK, do what you want.” He doesn’t who will comfort, who will beside me if ever I had problem. If I had said something about his family, if I have ever said something about his family, he doesn’t, he will, 私のこと、なんか、知らんぷりする。（J さんの語り）

（上手くいっていない夫婦）

それで、何聞いても、なんか、話聞いてない感じ。『はぁ？』とか、こないだ言ってたのに、そのまた次の日、聞く時に『わからない』って。それで、だから、あの、怒るの始まるんだよ。それで、何聞いても、あの、『飯、テレビ』それだけ。帰ったら『ご飯、飯』ね、あとテレビ見るのはそれでもう、で寝る。（L さんの語り）

J さんの語りでは、妻が問題を抱えている時、夫はそばにいて、妻の話を聞き、慰めてくれる存在ではないことを語っている。妻が同居している夫の家族との問題を抱えていて、そのことを打ち明けても、夫は聞いてくれず、アドバイスもしてくれない。

L さんの語りでは、夫が仕事から帰宅後、妻が夫にいろいろ話をするのに、夫は上の空で聞いていない。そのため、妻が怒る結果になっている。妻が何かを尋ねて、会話を始めようとしても、夫は「飯、テレビ、寝る」という言葉しかいわない。

3.2.5.2　夫が物を投げる

（上手くいっている夫婦　0 組）（上手くいっていない夫婦　1 組）

（上手くいっていない夫婦）

≪手を出すこともありますか？≫ない、あんまり出さないだけど、コップとか灰皿とか飛ぶわけよ。大変わけよ。―去年の何月だった。一番最後の喧嘩。もう、あれ酔っぱらってから、いっぱい、酔っぱらってるわけよ。また、ぶつぶつしてから。で、私も我慢できなかったわけよ。『うるさい』。なに、ジョーロ、水かけるの、バケツみたい、シャワー。飛んだわけよ。頭あたったわけよ。だから、びっくりして、あまり、あのやらないわけよ。飛ぶあるだけど、あたったわけよ。（K さんの語り）

K さんの語りでは、夫婦喧嘩の最中、妻が夫に反論すると、夫が激怒して、コップや灰皿、ジョーロを投げている。昨年の夫婦喧嘩では、夫が不平不満を言ったことに対して、妻が「うるさい」と反論したことで、夫がジョーロを投げつけ、それが妻の頭に当たっている。物を投げる行為は、ドメスティック・バイオレンスの形態の「脅し」に含まれており、夫は

物を投げつけることで、妻に恐怖心を植え付け、反論できないように脅しをかけている。このような否定的行為は、夫婦の信頼関係に傷をつけ、健全な関係を構築することを阻んでいる。

3.2.5.3　夫が妻の言うことにイライラする

（上手くいっている夫婦　0 組）（上手くいっていない夫婦　2 組）

夫が妻の問いかけに対して、イライラしたり、不機嫌になるという否定的態度は、妻がさらに会話を発展させて、夫婦のきずなを深めようとすることを躊躇させている。

（上手くいっていない夫婦）

『何で遅く帰って来るの？』とか、そんな、たぶん向こうも聞くのはイライラしてるんじゃないかな。だけど、毎日毎日だから、聞かないと、『何してるの？』とかそんな聞きたいさ。≪C さんが聞くことに対してイライラしている？≫そかな、たぶん。聞かれるのは嫌じゃない。―それと、なんかわからないけど、なんで、私のこと、なんか、イライラしている、いつも。その時に、50 歳になってる時にね、友達が、50 歳はたまにそんな性格なるって。何もしてないのに、なんかいつも、イライラしてるよ、私のこと。だから、『何かしたの？私、何もしてないよ、何で怒るの？』それで、しゃべらないのは、それで始まったんですよ。（L さんの語り）

L さんの語りでは、会社の付き合いで、毎日のように遅く帰宅する夫に対して、妻が「何でいつも遅いの？」と問いかけると、夫がイライラした態度を取っている。また、妻の問いかけだけでなく、妻の態度に対しても、夫はいつもイライラしている。妻が友達にこのことを相談すると、年齢のせいだと答えている。妻は、夫がなぜイライラしているのか理解できない。この夫の否定的態度が原因で、妻は夫にあまり話しかけなくなっている。

3.2.5.4　妻が話をすると夫が逃げる

（上手くいっている夫婦　0 組）（上手くいっていない夫婦　2 組）

夫の消極的な態度として、妻が話をすると夫が逃げるという語りが見られた。

（上手くいっていない夫婦）

で、今も、なんか、話しする時に、いつも逃げる。今まで、そんな一番問題はお金。それとこの会話。なんか、ほんとに口が堅いんですよ。なんか自分の気持ち、なになに問題とか、悩むこととか、何でそんなに。―あれ、いつもみたいに、黙ってて、逃げる、とか返事も、どんな、そんな私のそんな気持ち言った気持ち、返すのは、何か向こうが何の、何考えてる分からない。返す返事が欲しいの。何でそんなとか、怒ってもいいから、ただ、『自分の気持ちそんなあるよ』ってか、『そんな思ってるよ』って。（L さんの語り）

（上手くいっていない夫婦）

そうですねえ、もう喧嘩、喧嘩の時は、うちも負けない、負けないぐらいなんで、向こうもね、もう我慢できなかったら、手えだすかもしれないから、だから、逆にあっちがもう、もう、どっか出ていくねえ。後から、またたぶん落ち着いてるんだろうなあって帰ってくるんだけど。（B

さんの語り）

L さんの語りでは、妻が夫に話しかけると、夫がいつも逃げ腰で、自分の気持ちや問題、悩みをなかなか話してくれない。妻は自分の気持ちを夫に打ち明けるが、夫は返事もせず、黙ってその場を立ち去る。妻は、妻の問いかけに対して、怒ってもいいから「自分はこんな気持ちだ」「そんな風に思っている」と答えて欲しいと感じている。

B さんの語りでは、夫婦喧嘩になると、妻が夫に負けないぐらい言い返すので、夫は我慢できなくなって妻に手を出すかもしれないという恐れから、外へ出ていく。そして、妻の怒りがおさまった頃に帰ってくる。喧嘩がピークに達した時、互いに頭を冷やすという意味で、どちらか一方が外に出るということは良い選択のようにも思える。しかし、夫が逃げてしまうことで、結局、課題を最後まで解決することができず、棚上げ状態で、夫婦喧嘩が繰り返されている。

3.2.5.5　夫が妻に相談しないで一人で決める

（上手くいっている夫婦　0 組）（上手くいっていない夫婦　3 組）

（上手くいっていない夫婦）

なんかね、急に、今日で帰って、『今日、石垣行くよ』、相談事も何もしてない、前から。だから、それも私、問題。相談することはないから。そんな気持ち、あの、奥さんとして、こんな話やる前に、私に相談して、『これでいいの？こんなお金使うけどいいの？』、それ一切もない。だからそれが、それで変わってほしいのよ。そんなの。奥さんとして、そんななんか、決めること、私も権利あるから、それがほしいなんですよ。（L さんの語り）

（上手くいっていない夫婦）

あの今度、この友達の椅子車乗ってるのは、体が悪くなってるから、ハワイとか行きたいって、その人がハワイ行きたいから、パパは何もないの、用事。けど、あっち、仕事もないけど、行くって言ってたから、私たちも連れて行くみたい。で、急に、それから、だけど、それより、ハワイも行きたいけど、子供たちはパソコン買いたいって。パソコン買いたいからそれでほうがいいんじゃないかなと思って。≪じゃあ、L さんはハワイ行かないでパソコン？≫行きたいけど、だけど、先に、その問題じゃなくて、なんで、前からパソコン買ってほしいからって言って、買ってちょうだいって言ってるのに、そんなに、何もやってくれない。考えないで急に、『ハワイ行くよ』って言ったから、それより、もっと前からのお願いあるから。（L さんの語り）

L さんの語りでは、夫が妻に相談もしないで、突然、旅行に行ってしまうことに妻が不満を抱いている。妻は、夫に「旅行に行くけどいいか？」「こんなことで金を使うけどいいか？」ということを自分に相談してほしいと思っているし、妻には夫が旅行することや夫が出費することについて提言する権利があると思っている。しかし、夫は一言も相談しないで、一人で決めてしまう。

2 段目の L さんの語りでは、車いすの夫の友達がハワイへ行きたいので付き添ってほしいと頼まれたので、家族に相談もしないでハワイへ行くこと、家族も同伴させることを決めて

いる。妻は、以前から、パソコンを買ってほしとお願いする子供のことは聞かずに、友達に頼まれて、ハワイへ行くことを即決した夫の態度に不満を持っていた。

3.2.6　言語化から非言語化へ変化

この状態は、最初、妻が葛藤課題を言語にして伝えていたが、徐々に、非言語化していくコミュニケーション態度を指す。本章の事例では、フィリピン人妻は結婚当初から、課題を言語化する傾向があるが、沖縄人夫は課題を言語化することが少ない傾向が見られた。夫の非言語的態度に、フィリピン人妻は最初は夫に問いかけていたが、しだいに、夫に話をしなくなり、夫婦の会話も少なくなっていく傾向が、特に上手くいっていない夫婦の間で見られた。

サブカテゴリーとして、3.2.6.1「夫が愛情表現をしなくなった」、3.2.6.2「夫婦の会話がなくなった」、3.2.6.3「妻が夫に話すことをあきらめる」の 3 つがあがった。

3.2.6.1　　夫が愛情表現をしなくなった

（上手くいっている夫婦　3 組）（上手くいっていない夫婦　0 組）

フィリピン人は夫も妻も愛情表現が豊かである。それと比較して、沖縄人男性は、愛情表現をあまりしないとフィリピン人妻は考えている。また、若い頃は、愛情表現をした沖縄人夫も年齢を重ねるうちに、愛情表現が少なくなったと感じるフィリピン人妻もいた。

（上手くいっている夫婦）

He is hiding his feeling, that's why I'm asking. I don't know if he loves me or not, sometimes. Yeah, I'm always saying to him "I love you," sometimes, he did not reply me, I'm always yeah.

（J さんの語り）

（上手くいっている夫婦）

年寄りでも、なんか一緒に。こっちは、例えば、旦那さんと奥さんと、なんか眠る時は最初は一緒でしょ。子供産んだら、もう、みんなは、お父さんとお母さん別々の部屋でしょ。あれが一番。私、フィリピンは違う。最後も、あの、なんか年寄りまで一緒、眠るは一緒です。あれが全然違うね、うん。スタイルはフィリピンの方がいいけど、―なんか日本人に、なんか子供いたら、もうなんか冷たい感じ、仕事仕事だけに考えしてさ、フィリピンでは、もう全然違う。

（H さんの語り）

J さんの語りでは、夫が自分の気持ちを表現しないので、妻が夫はほんとうに自分を愛しているのかわからないと語っている。妻は夫に「愛している」と伝えるが、夫は妻の愛情表現に対して答えない。

H さんの語りでは、フィリピン人と沖縄人の夫婦を比較して、フィリピンの場合、夫婦は子供が産まれた後も、夫婦は寝室が一緒なのに対して、沖縄では子供が産まれると、寝室が別々になって、夫婦の態度も互いに冷たくなることを指摘している。

3.2.6.2　妻が夫に話すことをあきらめる

（上手くいっている夫婦　1組）（上手くいっていない夫婦　3組）

（上手くいっている夫婦）

≪言葉で困ったっことは？≫そう、こんな、あるよ。だからもう話しない。あの、expression、日本語、私、expression、何ていうのかわからないから、私、じゃあ、もういいよ、話ししない、それで終わり。（J さんの語り）

（上手くいっていない夫婦）

だんだんだんだん、なんか、なんか面倒くさいって言うか、もうコミュニケーション取れないって言うか、もう、冷たい、なんか、わからない。疲れたすぎ、なんか。（D さんの語り）

（上手くいっていない夫婦）

私、何も言わない。喧嘩のは、ずっと前から私も喧嘩ばかりだから。だからもう、5 年、3 年前から、私黙ってた方が、何も聞かない方が、のことになってる。（L さんの語り）

J さんの語りでは、妻が夫に伝えたいことがあるのに、日本語での表現方法がわからず、途中で伝えることをあきらめている。妻の方に、最後まであきらめずに言いたいことを伝えようとする意志と忍耐力が欠如しているようにも見えるが、聞き役の夫の方にも、妻が言いたいことを言えるように、いろいろな表現方法を提示してサポートしたり、妻に言いたいことを言えるように励まし、最後まで傾聴しようという態度が薄い傾向があると考えられる。

D さんの語りでは、妻が夫とコミュニケーションをとっても、夫の態度に変化が見られず、夫とコミュニケーションをとることが無意味に感じられ、面倒くさいと妻が思っている。夫の方に、建設的に夫婦の関係性を築いていく態度が見られないので、夫とのコミュニケーションの中に可能性を見出しきれず、話すことをあきらめている。夫婦がコミュニケーションをとらないので、関係性はますます冷めた状態になっている。

L さんの語りでは、妻が夫に話しかけても、会話が成り立たず、喧嘩に発展していくので、妻は、3～5 年前から、黙っていた方がいい、夫に話しかけない方がいいと考えるようになっている。妻が夫婦の関係性を深めたいと思っているにもかかわらず、妻の問いかけに対する夫の否定的態度が繰り返されるので、妻が夫に話すことをあきらめている。

3.2.6.3　夫婦の会話がなくなった

（上手くいっている夫婦　0組）（上手くいっていない夫婦　3組）

（上手くいっていない夫婦）

あの、それと、向こうが、私、しゃべらなかったら、向こうも全然しゃべらない、長いこと。もう、3 日間くらい話しない。―だけど、普通ではないよ、そんなしゃべらないの。なんか、私の話聞きたくないからじゃなくて、たぶん、そんな、なんか年に、あれになってるんじゃない。なんか、general じゃない、日本で、なんか男性があんまりしゃべらないって。こんな仕事帰ってから、あまりしゃべらないって。パパは、そんな中で一人なんじゃないかなあと。≪それは沖縄の文化ですかね？≫そうじゃない、沖縄のなんか。沖縄だけじゃないでしょう、違う。あ

の日本で多いんじゃないですか。夫婦の深い話し合いがないんですよ、ここ。仕事帰って、ご飯食べて、テレビ見て眠る、が多いんじゃないですか。（L さんの語り）

L さんの語りでは、妻が夫に話しかけなければ、3 日間くらい話をしないこともあり、妻がこの状態は普通ではないと思っている。また、妻は夫が話さなくなったのは、一つには年齢のせいであると考え、他の理由として、夫がしゃべらないのは、典型的な日本人男性の一人だからだと考えている。夫は、帰宅すると、ただ食事をして、テレビを見て、寝るだけで、夫婦の間に深い会話がないと妻は語っている。

第 4 節　考察

4.1.　夫婦の葛藤課題

調査結果から、フィリピン人妻は夫との関係において、1)「夫婦関係」、2)「子育て」、3)「経済的問題」、4)「夫の両親との関係」、5)「フィリピン人に対する負のイメージ」、6)「文化の相違」の 6 つの葛藤課題を抱えていることがわかった。この 6 つの葛藤課題の中でも、日米・日日・日比夫婦に共通している課題は 1)「夫婦関係」、2)「子育て」であった。

日比夫婦に特有の葛藤課題は、3)「経済的問題」、4)「夫の両親との関係」、5)「フィリピン人に対する負のイメージ」であった。3)「経済的問題」には、フィリピン人に特有の「仕送り」の問題が含まれていた。フィリピンでは、先進国に出稼ぎ、又は移住している者が母国の家族や親戚に経済的援助をするため仕送りをするという習慣がある。本調査に参加したフィリピン人女性のうち、7 割が結婚前、在比家族を支える為、出稼ぎ目的で来日しており、結婚後も仕送りを続けていた。在比家族からの経済的支援の期待は大きく、フィリピン人妻は彼らの期待に応えるために、僅かな額でも家計から捻出して送金する。夫から送金を反対されることはフィリピン人妻にとって大きな精神的苦痛となる。

また、4)「夫の両親との関係」では、夫の朝帰りを容認し、夫に黙従することを妻に強いる夫の両親との強い上下関係にストレスを抱えるフィリピン人妻の葛藤が挙げられた。日本の「家」におけるアジア人女性のストレスの源として、義父母が家庭内で絶大な支配力を持っていることへの戸惑いが指摘されている（宮島・長谷川、2000）。この関係がフィリピン人妻に義父母への服従を強い、夫の自由を容認し、それが妻に強いストレスを引き起こしている。

さらに、5)「フィリピン人に対する負のイメージ」では、夫がフィリピン人女性に対して「負のイメージ」を持っていることが、妻の葛藤課題として挙げられた。宮島・長谷川（2000）は、日比夫婦間に見られる問題点として、日本人夫の側に、アジア人である妻を見下げる気持ちがあり、それが夫婦生活を対等でないものにしていると指摘している。本調査の事例でも、夫が抱くフィリピン人女性を見下す感情が夫婦間において上下関係をつくり、フィリピン人妻がストレスを抱える要因となっている。この「フィリピン人に対する負のイメージ」の葛藤課題は、「上手くいっていない夫婦」に見られる特有の問題点であった。この点を考慮すれば、夫婦が上手くいっていない原因の 1 つには、夫のフィリピン人女性に対する負

の感情がコミュニケーションの問題の根本にあるためではないかと考えられる。

沖比夫婦に特有な葛藤課題は、6)「文化の相違」であった。フィリピン人妻は、沖縄の年中行事（清明祭、盆、正月など）に参加することに煩わしさを感じていた。沖縄には、門中制度と呼ばれる家族制度がある。門中とは父系血族によって結びつく集団のことで、この集団内では親族の結束が強く、男性親族を中心に祖先祭祀などの年中行事が行われる。祭事は男性が仕切り、料理など下準備で働きまわるのは女性であるなどの性役割観が見られる。このような家父長的制度が根強く残っている家庭では、しきたりに従うことのできない女性は夫や親族から非難を受ける対象となる。男女同権意識の強いフィリピン人女性は、このような慣習の中で強い葛藤を経験することが推察できる。

以上のように 6 つの葛藤課題が挙げられたが、次に、このような葛藤課題を調整する過程において、沖縄県在住の日比夫婦の特徴的な傾向を考察する。

4.2. 夫婦間の葛藤課題の調整過程

本調査結果から、沖縄県在住の日比夫婦間の葛藤課題の調整過程について、以下の 3 点が明らかになった。

1）葛藤課題の調整過程において、フィリピン人妻が沖縄人夫に言語コミュニケーションによる積極的な働きかけを行っている。

夫婦間コミュニケーションには、文化・社会的性差―男性優位の文化・社会的規範や男女の勢力・権力関係などの影響が加味していると捉える立場がある（伊藤、2006）。例えば、夫は「威圧」的態度、妻は「依存・接近」的態度など、夫と妻が対照的に異なるコミュニケーション態度をとる背景には、性的社会化の影響、男女間の社会的・経済的地位の格差があるためであると推察している先行研究（平山・柏木、2001）がある。また、伊藤（2006）は、男女差の社会的・経済的背景には、権力が上の者（夫）は下の者（妻）を理解する必要性が大きくないことが考えられ、妻は夫を理解することによって夫の支配を感じつつも夫の財力を手に入れることで、自分の結婚幸福感を得られると指摘している。

本調査の日比夫婦の場合、言葉、価値観、習慣などの文化的側面、社会的・経済的側面、ジェンダーの側面を考慮しても、沖縄人夫は、ホスト社会側に属する者として、又は男性として、権力が上の者であり、フィリピン人妻は、外国人として、又は女性として権力が下の者であると捉えることができ、このような不利な立場にあるフィリピン人妻は、これらのハンディを乗り越えて、ホスト社会にうまく溶け込み、夫を理解し夫婦関係を深めていくために、多大の努力を測ることが推察できる。そのため、フィリピン人妻は、夫婦の間で葛藤課題が生じた時、その課題を調整するために、言語コミュニケーションを通して、積極的に夫に働きかけていることが窺える。

2）フィリピン人妻の積極的な働きかけに対して、沖縄人夫が肯定的コミュニケーション態度をとっているか、否定的コミュニケーション態度をとっているかで、「上手くいっている夫婦」と「上手くいっていない夫婦」に分かれる。

施（2000）は、夫婦間コミュニケーションが婚姻満足度に寄与する要因について調査した結果、夫の婚姻満足度は夫自身のコミュニケーション特性によって規定されるが、妻の場合は、妻自身のコミュニケーション特性以外に夫の言語コミュニケーションへの意欲によっても規定されていることを指摘した。つまり、国際結婚夫婦において、自分のコミュニケーション態度にのみ満足度の重点を置く夫に対して、妻は自分のコミュニケーション態度に加えて、夫の関係性も含んでの満足度となっていることが明らかになった。また、否定的コミュニケーション・パターンが与える心理的影響は、他者との関係性をより重視する妻側でより深刻であることが指摘されている（平山・柏木、2004）。

このことから、フィリピン人妻の結婚満足度は、自分の積極的なコミュニケーション態度に加えて、夫がどれだけ妻とのコミュニケーションに対して意欲的であるかという夫側のコミュニケーション態度にも規定される。葛藤課題の調整過程において、夫が妻の積極的なコミュニケーション態度に否定的態度をとり続ければ、妻の結婚満足度は下がり、妻の心理的影響も深刻になものとなり、夫婦関係は上手くいかないものとなっている。

3）沖縄人夫は高コンテキスト・コミュニケーション態度を、フィリピン人妻は低コンテキスト・コミュニケーション態度をとる傾向があり、「上手くいっている夫婦」では、夫の高コンテキスト・コミュニケーション態度が低コンテキスト・コミュニケーション態度に変化している傾向が見られる。

Ting-Toomey & Chung（2005）によると、低コンテキスト・コミュニケーションは、意図や意味が、いかに、明白な言語メッセージを通して表現されるかに強調がおかれ、高コンテキスト・コミュニケーションは、意図や意味を、コンテキスト（社会的役割、社会的地位など）や非言語メッセージで表現することが強調される。よって、低コンテキスト・コミュニケーションは、直接的（ダイレクト）言語形式で行われ、高コンテキスト・コミュニケーションは、間接的（インダイレクト）言語形式で行われる。

また、矢吹（2012）は、ホール（Hall, 1992）の考えを引用して、「高コンテキスト文化」は特定の地域に 1 つの民族が定住する場合に形成され、ここでは言葉よりも文脈や状況に情報が埋め込まれている一方で、「低コンテキスト文化」は人々が移動型の居住形態をとり、多民族多言語が混じり合う場合に形成され、ここでは状況よりも、言葉に情報が含まれていると述べている。

本調査では、10 人中 7 人のフィリピン人妻が、夫は「無口な性格」「あまり自分から話さない」「大人しい」と語っている。これは、非言語的コミュニケーションを重視する日本の高コンテキスト文化的背景が、沖縄人夫の性格にも大きく影響しているためであると推察できる。一方で、フィリピンは、長い間、スペインや米国の植民地支配下にあったことから、

欧米式に言語的コミュニケーション重視の文化（宮島・長谷川、2000）を持つ傾向があり、さらに国には多くの民族が住み、100 以上の言語が話されていることから、多民族多言語国家であるため、このような環境で育つフィリピン人妻は低コンテキスト文化を身に付ける傾向があると考えられる。

本調査でも、フィリピン人妻は、率先して、夫婦の葛藤課題を言語化し、調整しようとしている様子が窺える一方で、夫はあまり自分から話さず、葛藤課題を言語化することも少なかった。このことから、フィリピン人妻は低コンテキスト・コミュニケーション態度をとり、沖縄人夫は高コンテキスト・コミュニケーション態度をとる傾向があることが推察できる。

「上手くいっている夫婦」では、夫のコミュニケーション態度が非言語化から言語化へ変化している傾向が見られた。低コンテキスト文化を持つフィリピン人妻は、高コンテキスト文化を持つ沖縄人夫に対して、最初は「何を考えているか分からない」という不満を持つが、妻が「何を考えているのか」「何で怒っているのか」「何を悩んでいるのか」と問いかけることによって、夫が徐々に心を開き、自分の気持ちや悩みを妻に言語化するようになっている。これは、高コンテキスト・コミュニケーション・スタイルだった夫の態度が、徐々に、妻の問いかけにより、低コンテキスト・コミュニケーション・スタイルへと変化しているためだと考えられる。

今回の調査では、沖比夫婦が葛藤課題を調整する過程において、妻の問いかけに対し、どれだけ夫が肯定的言語・肯定的非言語コミュニケーションで対応することができるか、また、妻の低コンテキスト文化に協調して、どれだけ夫が自分の高コンテキスト・コミュニケーション態度を低コンテキスト・コミュニケーション態度へと変え、夫婦の関係性を深めていくことができるかという点で、「上手くいっている夫婦」と「上手くいっていない夫婦」は異なることがわかった。

「第 7 章　結論　第 2 節　沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程」では、特に、考察 3)「沖縄人夫は高コンテキスト・コミュニケーション態度を、フィリピン人妻は低コンテキスト・コミュニケーション態度をとる傾向があり、『上手くいっている夫婦』では、夫の高コンテキスト・コミュニケーション態度が低コンテキスト・コミュニケーション態度に変化している傾向が見られる。」という点に焦点を絞って、社会的構築主義の理論的枠組みで考察する。この考察 3）の点について、さらに次の 3 つの観点を提示する。1）なぜ、フィリピン人妻は低コンテキスト・コミュニケーション態度をとり、沖縄人夫は高コンテキスト・コミュニケーション態度をとる傾向があるのか、2）なぜ、「上手くいっている夫婦」では、沖縄人夫のコミュニケーション態度が高コンテキストから低コンテキストへと変化したのか、3）なぜ、「上手くいっていない夫婦」では、沖縄人夫のコミュニケーション態度が高コンテキストから低コンテキストへ変わらないのか。第 7 章の結論で、これら 3 つの観点について、社会的構築主義の視点から議論していく。

第 4 章　在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ

第 1 節　研究の背景と目的

第 3 章では、上手くいっている沖比国際結婚夫婦と上手くいっていない沖比国際結婚夫婦の 2 つのグループに分けて比較調査をした結果、沖縄人夫とフィリピン人妻の間にはコミュニケーション態度に違いがあることがわかり、上手くいっている夫婦では、沖縄人夫のコミュニケーション態度がフィリピン人妻に合わせて変化している一方で、上手くいっていない夫婦では、沖縄人夫のコミュニケーション態度が変わらない傾向があることがわかった。

本章では、在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティに焦点をあてて考察する。本論文の調査協力者である在沖フィリピン人女性達は、沖縄社会において、言葉の壁にぶつかりながらも、沖縄人男性と結婚し、出産・育児を経験し、就労をし、多様な生き方を模索しながら、沖縄社会に適応し定住していた。彼女達は、日本語、英語、タガログ語、地方語の複数言語を使いこなし、妻、母親、嫁、就労者として様々な顔を持つ。本章は、在沖フィリピン人女性達が、自分達の培ってきた複数言語に対してどのような意識を持っているのか、そして、それらの言語意識に基づいて、どのようなアイデンティティを構築しているかということを明らかにしていくことを目的とする。

第 2 節　先行研究

ここでは、先行研究を参考に、言語意識と言語とアイデンティティの関係についての定義づけを行う。この定義に基づいて、後の項（4～7）で、結果と考察を行っていく。

2.1.　言語意識

真田（2006）によれば、言語意識とは、「ことばのイメージ」であり、我々が、ある言葉から受ける印象、あるいはその言葉について思い描く性質や特徴などのことであると言う。例えば、京都弁に対しては、一般的に「優雅な」「おっとりした」というイメージがある一方で、東北弁に対しては「田舎者の」「素朴な」といったイメージを抱く人が多い。「ことばのイメージ」は、人と会話を交わす際には、そのイメージに基づいて相手の属性（出身地や職業など）を推測するといったことも行われる。言語意識とは、「人が言葉の違いをどのように認識しているか」という視点を考慮することであり、言い換えれば、言語変種の実態ではなく、言語変種についての認識のあり方について考慮することに焦点が当てられる（163）。

真田（2006）は、言葉についての評価は、その言葉の使用者自身に対する評価につながると述べる。この評価が誇張され一般化されると、例えば「京都の人は上品だ」「東北の人は田舎者だ」といった、集団に対するステレオタイプを生じることがある。こうしたステレオタイプ化は社会的な偏見を生み出し、特にマイナスのイメージを付与された言語変種

の話者がコンプレックスを抱くことになっていくと言う（163）。

本稿では真田（2006）を参考に、言語意識を以下のように定義する。

1）言葉のイメージであり、ある言葉から受ける印象、あるいは、その言葉について思い描く性質や特徴である。

2）人々が言葉の違いをどのように認識しているかという言語変種についての認識のあり方である。

3）その言葉の使用者自身がどのように評価されているかというものである。

そして、在沖フィリピン人女性が、自分達の培ってきた複数言語に対して、どのようなイメージや印象を持ち、その言語の違いをどのように認識し、使い分けているのか、そして、この言語意識が彼女達の言語行動にどのような影響を与えているのか、また、言語意識が彼女達のアイデンティティ構築にどのような影響を与えているのか、ということを考察していく。

2.2. 言語とアイデンティティ

ライアンズ（1987）は、言語には、記述的意味と非記述的意味があると述べている（153）。記述的意味とは、例えば、述定と質問と命令の間の機能上の違いは、平叙文、疑問文、命令文の間の構造上の違いと相関するといった、言語の構造上の機能に焦点を当てて、言語の意味を解釈するものである（153）。非記述的意味には、表現的意味と社会的意味があって、表現的意味とは、例えば、感嘆に見られる、話し手の感情や態度や信念や個性を表現するものである（154）。社会的意味とは、社会的役割や社会的関係をうち立て、それを維持するための言語の使い方に関係する（155）。ライアンズ（1987）は、人間の態度や感情や信念、つまり人間が個人性や自我として考えるものはすべて、人間の社会化の産物であり、よって、表現的意味は社会的関係や社会的役割に依存すると同時に、人間の自己表現もまた、これらの社会的役割や社会的関係を確立したり変容させたりするのに役立つと述べる。つまり、表現的意味と社会的意味は相互に依存していると述べる（156）。

井出（1992）は、この非記述的意味（表現的意味・社会的意味）がアイデンティティに関わるものであると指摘している（29-30）。つまり、人間は言語を媒体として、自己の社会的関係・役割を認識しながら自己のアイデンティティを確認していくと同時に、その社会的関係・役割の中で、言語を媒体として、感情・態度・信念・個性を表出し、自己アイデンティティを表現していく。また、言語を媒体として、個性を表出していくことによって、社会的関係・役割を変容させ、新しいアイデンティティを作っていくこともできるのである。

ゴフマン（1987）は、アイデンティティを社会的アイデンティティと個人的アイデンティティに分けて考えている。社会は、人々をいくつかのカテゴリーに区分し、それぞれのカテゴリーの成員に一般的で自然と感じられる属性を割り当てる。様々の社会的場面が、そこで出会う人々のカテゴリーを決定する。よって、未知の人が前面に現れても、人々は、

最初に目につく外見から、その人のカテゴリーとか属性、即ち、その人の「社会的アイデンティティ」を想定することができる（10）。「社会的アイデンティティ」とは、個人が社会において属する組織やグループへの帰属意識としてのアイデンティティである。個人的アイデンティティとは、例えば、組織内では、各々の成員は、他の成員たちに＜かけがえのない（ユニークな）＞個人として知られるようになる。このかけがえのないユニークな個人に関する既知の事実全体は独自の組み合わせとして、この世の他の誰にも当てはまることはないというものである（94-95）。「個人的アイデンティティ」とは、その個人が持っているある特定の名前、容姿、服装、知識、教養、経験などを基に形成される（井出、1992:31 - 32）、その個人だけが持つユニークなアイデンティティである。

真田（2006）は、我々は、コミュニケーションを行う場合、「自分は何者なのか」ということを何らかの形で認識し、それに沿って行動していると述べる。話し手の「自分は何者なのか」ということについての認識のあり方が、「アイデンティティ」であり、言い換えれば、アイデンティティとは「自己の属性に対する意識」であると述べている（177）。

真田（2006）は、言葉は、多様な言語要素を容易に操作することができるという点で、アイデンティティを表出するのに最も効果的な手段であると述べる。一方で、自分の用いる言語や変種の種類が、そのアイデンティティを確認するのに重要な役割を担うことがあると述べている（177-178）。

中村（2001）は、言葉を抽象的な構造ではなく、社会を作り上げる行為と捉える「構築主義」の考え方を導入し、言葉は伝達の道具以上に、社会に密着した「行為」であるとしている。「言葉を使う行為（ディスコース）」は、社会から影響を受けるだけでなく、社会に影響を与える社会的行為であり、「言葉を使う行為」は、社会の権力関係やその社会で常識となっている考え方（イデオロギー）を作り上げる過程であると指摘する。つまり、社会の中の知識や個人のアイデンティティは厳然として存在しているのではなく、歴史・社会的に作り上げられており、この過程において言語が大きな働きをしていると述べる。そして、ディスコースによって「知識・イデオロギー・常識」が作り上げられる視点と、ディスコースによってアイデンティティや人間関係が作り上げられる視点の 2 つの視点について詳述している。本稿では、2 つ目の視点、言葉を使って相互に関わり合うことで、自分はどういう人間なのか、相手とどのような関係にあるのかを表現しているという視点、つまり「言葉を使う行為」によって、アイデンティティや人間関係を作り上げるという視点を参考にする（90）。

本稿では、ライオンズ（1987）、ゴフマン（1987）、真田（2006）、中村（2001）を参考に、言語とアイデンティティの関係について次のように定義する。

1）アイデンティティとは、個人が社会において属する組織やグループへの帰属意識、または「自己の属性に対する意識」である。（ゴフマン、真田）
2）言語は自己のアイデンティティを表出する。（ライオンズ、真田）
3）言語は自己のアイデンティティを認識する。（ライオンズ、真田）

4）言語は自己のアイデンティティを構築する。（ライオンズ、中村）

5）言語は他者との関係性を構築する。（中村）

これらの定義に基づき、本稿では、在沖フィリピン人女性が、日本語、英語、タガログ語、地方語を使い分けることによって、家族、職場の人々、教会の人々、地域の人々をはじめとする他者との言葉の相互行為を通して、自分の属する社会的カテゴリー（民族、性、地域、職業、役割）に気づき、その規範の中で、妻、母親、嫁、就労者、フィリピン人としての役割を遂行しながら、自己のアイデンティティを呈示し、また他者の目を通して自己の新しいアイデンティティを認識し構築していく過程を、彼女達の事例を通して見ていく。

2.3. フィリピン人の言語アイデンティティ

小野原（2004）は、フィリピン、マニラの上流階級の通う私立高校生と一般大衆の通う公立高校生を対象にアンケート調査を実施し、彼らが使用する言語やそれに対する想い（言語意識）を手がかりに、社会構造とアイデンティティの関係を考察している。

小野原（2004）は、言語には、伝達機能（実用的機能）とアイデンティティ機能の二つの大きな機能があり、前者は、情報の伝達や言語交際の機能であり、後者は、特定の言語や表現を選択・使用して自己のアイデンティティを形成したり、確認したり、表出する機能であると説明している。人は、ある言語や云いまわし（表現）を使い分けることで、自分のアイデンティティを主張することができるというのが言語アイデンティティの定義である（26）。

小野原（2004）は、フィリピンのような多言語社会では、それぞれの言語を使う集団間に社会的、経済的な力の差があり、それが個人の使用言語の選択に影響を与えていると述べる。例えば、フィリピンには次のような言語階層性がある。英語→フィリピノ語（タガログ語）→9 大言語→地方語→弱小語（29）。そして、弱い立場の言語を母語とする者は言語間に見られる支配―被支配関係により、生活のためにより強い言語へ同化するか、公私の場面での使い分けを強いられると言う。人は慣れ親しんだ母語に対する想いに独特の郷愁や感情を抱くが、生活の手段として言語を使用・選択しなければならず、経済的な「力」の前に、言語アイデンティティが萎んでしまうと言う（29）。

アンケート調査の結果、エリート校生は、英語を使用することが多く、一般校生はタガログ語を使用することが多かった。フィリピンで英語を使用する者は高収入、高学歴の上流階級であり、タガログ語を使用するものは準支配階級に属すると見做される（31）。つまり、職種や職域が英語とタガログ語ではっきり区別されると指摘する（32）。

一般校生はタガログ語族であり、フィリピンでの民族言語間の言語階層性では、タガログ語が最上位に位置する。しかし、彼らは英語を日常的に使用する上流階級とは異なる自分たちの境遇を意識している（45-46）。そこには「上流階級を意識した時の大衆の母語への想い」が現れる（46）。他方、エリート校生は、社会的上昇を果たした家族に属している

ため、階級アイデンティティが優先し、母語アイデンティティへの執着は二の次になるという。言語アイデンティティも（政治的）経済的利害状況の変化で活性化したり潜在化するものであると指摘する（47）。

人は、本来、出自や階級、母語の獲得等、自分で選択することはできない。小野原（2004）は、不条理の主要因を経済的格差と捉え、それが社会構造に深く浸透していることに着目している（49）。

河原（2004）は、金沢市在住フィリピン人女性の言語アイデンティティについて考察している。彼女達は、日本語、英語、タガログ語、地方語を話すマルチリンガルである。河原は、彼女達のように複数の言語に馴染んでいると、そこには「アイデンティティの分裂」という現象が生じていると言う。在日フィリピン人女性は、新たな言語と出会い、それを学んでいく過程において、とまどい、混乱が生じて、言語アイデンティティは分裂を経験することになるが、その分裂は、やがては統合へと向かい、多元的な言語アイデンティティとなっていくと述べる（199）。

河原（2004）は、「言語アイデンティティの分裂」と「多元的言語アイデンティティ」の違いについて、その人が複数の言語を前にして、とまどい、混乱を感じたり、自分が何者か分からなくなるのならば、否定的な表現である「分裂」という表現を用い、この状態に対して、納得したり、自信を持つようになるならば、肯定的な表現を用いて、言語アイデンティティは「統合」されたと称することができると述べる（199）。

フィリピン人の言語アイデンティティに関する先行研究をまとめると、例えば、小野原（2004）の研究では、フィリピンのような多言語社会では、それぞれの言語を使う集団間に社会的・経済的な力の差があり、英語を使用する者は上流階級、タガログ語を使用する者は準支配階級、地方語を使用する者はそれより低い低・中流階級など、使用言語と社会的・経済的階級差に密接な関連性があり、それらの関連性がフィリピン人のアイデンティティ構築にも影響を与えていることがわかる。

また、河原（2004）の研究では、在日フィリピン人女性が日本語、英語、タガログ語、地方語の複数言語を使い分ける過程で、戸惑い、混乱、葛藤を感じ、「アイデンティティの分裂」を経験しながら、それを乗り越えて「多元的言語アイデンティティ」を統合させていく様子を見ることができた。

これらの先行研究をふまえて、本稿の調査協力者である在沖フィリピン人女性たちが、日本語、英語、タガログ語、地方語について、どのような言語意識を持ち、それぞれの状況において、それらの言語を使い分けることによって、どのように妻、母親、嫁、フィリピン人としてのアイデンティティを構築しているのか、またアイデンティティの分裂や統合といった現象を経験しているのか、事例を通してみていく。

第3節　在沖フィリピン人女性の言語

本章の調査協力者は、E さん、K さん、L さん、M さん、N さん、O さんの 6 人の在沖

フィリピン人女性である。（調査方法、調査協力者の属性については「第 1 章　序章　第 3 節　調査方法と調査協力者の属性」を参照。）ここでは、在沖フィリピン人女性の夫婦間、親子間、職場、教会／フィリピン・コミュニティーで使用する言語の使用状況について述べる。

3.1.　一般的な概要

本稿の調査協力者であるフィリピン人女性達は、様々な経緯を経て沖縄県に定住することになったのだが、彼女達には複数言語話者が多い。例えば、O さんは、西ビサヤ地方のイロイロ州出身で、ビサヤ諸語の一つであるイロンゴ語を話し、フィリピンの公用語であるタガログ語を、そして、英語、日本語も話すことができる複言語話者である。この O さんのように、本稿の調査協力者であるフィリピン人女性は、複数言語の話し手である。

在沖フィリピン人女性は、マニラ首都圏出身なら、日本語、英語、タガログ語の三言語を話すことができ、地方出身者なら、さらに地方語を話すことができる。例えば、ビサヤ地方出身者同士が出会えば、同地の共通語であるビサヤ語を話す。彼女達の会話に他の地方からの出身者が加わると、フィリピンの公用語であるタガログ語に切り替わる。さらに、日本人や英語話者が会話に加われば、日本語や英語へと言語の切換えが行われる。このように、会話の構成メンバーに応じて、ふさわしい言語が選択される。

彼女達に自分の日本語能力について尋ねたところ、「あまり日本語が上手くない」と答えた人が 2 人、「日本語はまあまあできる」と答えた人が 3 人、「日本語がよくできる」と答えた人は 1 人であった。来日前に、日本語教育を受けた経験のある者は 1 人であった。残りの女性は、来日後、県内大学の日本語クラスで 3 年間学んだものが 1 人、就業を通して、又は生活の中で独学で日本語を習得していった者が 4 人であった。筆者がインタビューした限り、「日本語が上手くない」と答えた女性でも、自分の思いや考えを、日本語で難なく伝えることができ、ある程度の日本語能力を持っていることが窺えた。彼女達は日本語学習に対する強い意欲を持っており、来日後、様々な方法で日本語学習に力を入れ、急速に日本語を身につけていった様子がわかる。

3.2.　夫婦間の言語

本稿の調査協力者に夫婦間の会話で何語を用いるかと質問したところ、全員が「日本語」と答えた。さらに、沖縄人夫がわかる英語やタガログ語はあいさつ程度であることがわかった。彼女達は、夫婦の会話で日本語を用いているが、これは沖縄県に限らず、日本のどこでも同じようだ。河原（2004:180）は、フィリピンの言語は使われずに、ほぼ日本語だけが使われるという点は、フィリピン人女性と日本人男性の夫婦間の大きな言語的特徴となると述べている。

山本（2013）は、フィリピン諸語の母語話者と日本語の母語話者からなる異言語間家族を対象に実施した家族内言語使用の実態調査の結果と、英語母語話者と日本語母語話者か

らなる別の異言語間家族グループのそれとを比較し、グループ間に顕著な違いがあることを見いだしている。そして、この違いの主要因を「言語の威信性」という枠組みの基に考察を行っている。

その結果、夫婦の間での言語使用では、日本語を母語とする親（日親）とフィリピン諸語を母語とする親（フィ親）の日―フィ家族については日本語が多く、フィ親の母語使用が極めて限定的である一方で、日―英家族では英語の使用が多いことがわかった。その要因として、山本は、「言語の威信性」を挙げている。「言語の威信性」とは、「言語の話者集団の政治的、経済的、社会的な力に応じて、その言語に付与される価値に準じた、相対的な序列のこと」（山本、2010:206）で、ある集団の政治的、経済的、社会的な力が大きければ、その集団が用いる言語には高い価値があると見なされ、言語の序列の上位に位置する威信性の高い言語として扱われる（山本、2013:15）。

世界で支配的優位性を持つ英語を一方の言語とし、社会の多数派言語である日本語をもう一方の言語とする日―英家族と、社会の少数派言語であるフィリピン諸語と日本語の組み合わせになる日―フィ家族とが、それぞれ異なった視点から、社会的評価を捉え、日常の使用言語を選択している状況を説明している（山本、2013:15）。

この点を考慮すると、本稿の調査協力者が、沖縄人夫との間で、日本語を使用言語として選択する要因についても、社会の少数派言語であるフィリピン諸語よりも社会の多数派言語である日本語を使用する方が、在沖フィリピン人女性にとっても、その家族にとっても有益だと考える傾向があり、そこには、日本語の話者集団の政治的、経済的、社会的な力が、フィリピン諸語のそれよりも力強いと感じており、日本語に付与された価値を、フィリピン諸語の価値よりも高いと捉え、また、日本語を威信性の高い言語として扱っていることが推察できる。

以上のように、日本語とフィリピンの言語の間に本質的な価値の差はないと思われるが、言語に付随する政治的・経済的・社会的有益性が、言語に対する付加価値をつけ、言語間に差を生み出し、言語選択に影響を及ぼしていることがわかる。在沖フィリピン人女性が夫婦間の会話に日本語を選択するのも、日本語に政治的・経済的・社会的実用性を見出しているからであり、この実用性の高さが、彼女達の日本語に対する言語意識に影響を与えていると言える。

3.3. 親子間の言語

ここでは、在沖フィリピン人女性と子供の親子間での言語状況について述べる。

フィリピン人女性は、皆、子供達に自分の母語であるタガログ語や地方語を教えていないようである。インタビューした範囲でも、子供に積極的に自分の母語を継承しようとしている例は見られなかった。

例えば、M さんは、子供が 5 歳の頃までは、タガログ語、英語、日本語をミックスさせて話していたが、子供が公立の幼稚園、小学校へ行き始め、学校で日本語の世界にどっぷ

りつかるようになってから、家庭でのコミュニケーションも日本語になっていったと語る。子供達は今では日本語しか話せない。

子供にタガログ語や地方語を継承したいかどうか尋ねたところ、教えたいと思うことはあるが、まず、家庭外でタガログ語を話す機会がほとんどないため、タガログ語を教えても使える場所がないので無駄に感じる、子供達には日本語を覚えてもらうことが優先事項で、タガログ語を教える余裕がないなど、継承することが難しいと答えた。まずは、タガログ語よりも英語を教えたいと答える女性が圧倒的に多かった。例えば、O さんには、4 人の子供がいるが、末の子には 0 歳から英語で話しかけ、4 歳の頃には、英語と日本語を話すバイリンガルになったと語る。このように、英語を教えることには熱心であるが、タガログ語や地方語を教えることには消極的であった。ここに、タガログ語や地方語よりも英語に実用性を見出している在沖フィリピン人女性の言語観が見られる。

また、E さんと N さんは、子供達が、フィリピン人と日本人のダブルであることで学校でいじめられるのではないかと心配していた。しかし、子供達の容姿が日本人に近かったため、学校ではダブルであることを知られず、いじめられることがなかったと語った。このように、学校で、子供達は、いじめにあわないために、自分がダブルであることを伏せ、なるべく知られないようにしている。このような状況では、子供達が母親の母語であるタガログ語や地方語を身につけることは難しいと思われる。

柿原（2009）は、何よりも英語が重要であるという現在の日本社会における言語観は、日本人が非英語話者である外国人を差別する可能性を秘めており、非英語話者である外国人が自分の母語を低く評価してしまう要因になると述べている（273）。いかなる言語を母語とする者も、言語を理由に差別されるべきではなく、全ての人の言語権を尊重するための母語保障教育として、国際結婚夫婦の子供達にも、いずれかの親の母語である日本語以外の言語を学ぶ機会を与えることが必要であると主張している（273）。

柿原が言うように、子供達が自分の親の言語を話すことを「恥ずかしいと感じる」ことのないような社会を作っていくためにも、国際結婚家庭において、父親から継承されるアイデンティティと母親から継承されるアイデンティティをバランスよく自己アイデンティティとして確立するため、子供達は父親と母親の両方の言語を話せるバイリンガルになることが理想とされるが、在沖フィリピン人女性がおかれている状況では、母親側の母語継承が困難であることが窺える。

3.4. 職場の言語

本稿の調査協力者の職場は、保育園（3 人）、ALT（1 人）、工場（1 人）、農業（1 人）であった。6 人のうち 4 人の女性は職場で複数言語を使用していた。ここでは、保育園で働く 3 人の事例を紹介する。

彼女達は保育士の免許を持っていないが、保育士のアシスタントとして働いている。これらの保育園では、米国人や日本人の子供を預かっている。彼女達は、フィリピン人スタ

ッフとはタガログ語、米国人の子供とは英語、日本人の子供とは英語と日本語を話す。カードで英単語を教えたり、アルファベットの書き方や、英会話を指導している。日本語がわからないフィリピン人スタッフと日本人の子供達の間に入って、日本語で通訳することもある。彼女達は、これらの職場で 8 年以上働くベテランのアシスタントである。

彼女達は、これらの保育園で働く以前は、いろいろな仕事を転々としていた。E さんは、JA（農協）で 4 年、菓子屋で 2 年働き、M さんは、弁当屋で 1 年、パン屋で 3 年、清掃婦として 3 年働いていた。どの仕事も、言葉の問題や、自分の能力を活かせているのか、自分に適した仕事なのか疑問を感じていたため、長く続けることができなかった。そして、今の保育園での仕事にたどり着き、やっと、自分のやりがいのある仕事を見つけることができたと考えている。今の仕事は、自分の母語であるタガログ語、フィリピンの学校教育で身につけた英語、そして日本語と、3 つの言語能力を活かして、業務を遂行することによって、自分の能力を活かせているという充実感を持って働いている。彼女達は、複数言語を使用できる職場で働く機会を得ることによって、自分達の培ってきた複数言語に対して肯定的・積極的意義を見出し、複数言語能力を活かすことによって、主体的に沖縄社会に参加し、自分たちの可能性を伸ばし、人生を切り開いている様子が窺える。

3.5. 教会／フィリピン・コミュニティーでの言語

本稿の調査協力者はカトリック教会を拠点にフィリピン・コミュニティーを形成し定期的に集会を開いていた。教会でのタガログ語ミサの後の茶話会は、タガログ語、地方語、英語、日本語が飛び交い、国際色豊かな雰囲気を醸し出している。

調査協力者であるフィリピン人女性達の出身地は、マニラ首都圏（1 人）、ルソン島北部のリサール州（1 人）、ミンダナオ島のダバオ市（2 人）、セブ島のセブ市（1 人）、パナイ島のイロイロ市（1 人）など、フィリピンの様々な地域から集まっている。

フィリピンの公用語はタガログ語であるが、その地域によって、母語が地方語であるという人もいる。例えば、マニラ首都圏出身はタガログ語だが、リサール州出身はイロカノ語、ダバオ市やセブ市出身はセブアノ語、イロイロ市出身はイロンゴ語を母語とする。本稿の調査協力者 6 人の母語は、4 言語である。同郷出身者同士では、その地域で話される言葉が使われるが、様々に異なる地域の出身者が集まると、共通語であるタガログ語に切り替わる。

母語が地方語であるため、タガログ語を話すことに劣等感を感じる女性もいる。例えば、O さんは、母語がイロンゴ語であるため、タガログ語があまり上手に話せず、タガログ語を話す時に劣等感を感じるという。タガログ語で速く話されると、会話についていけず、ついつい日本語や英語が口から出たりする。そんな時、「何でフィリピン人なのにタガログ語が話せないのか」という目で見られ恥ずかしい思いをすると言う。

このように同じフィリピン人同士でも、地方出身者はタガログ語に対する劣等感を持っていることがわかる。河原（2004:190）は、フィリピンでは、地方語はタガログ語よりも

一段下の言語と考えられていて、この意識は日本に来てもあまり変わらないと言う。ビサヤ訛りのタガログ語を話して田舎者扱いされることがあると述べる。在沖フィリピン人女性の事例でも、地方出身者の女性は、タガログ語話者に対して劣等感を抱く傾向があることがわかった。

第 4 節　在沖フィリピン人女性の言語意識

上述したように、本稿の調査協力者は、日本語、英語、タガログ語、地方語の複数言語を話す。彼女達が、自分たちの培ってきた複数言語に対して、どのような言語意識を持っているのか、ここでは、彼女達の言語の階層性、日本語、英語、タガログ語、地方語に対する彼女達の意識について詳述する。

4.1.　言語の階層性

河原（2004:186-187）は、在日フィリピン人達は複数の言語を操るが、その言語は同じ価値を持つのではなく、言語の持つ社会的なステータス、言語のイメージ、経済的な有用性などを勘案すると、各言語の階層的な地位は異なると述べている。そして、金沢在住のフィリピン人女性達の事例を挙げて、彼女達の中には共通認識として、日本語→英語→タガログ語→地方語という順で言語の階層性があることを指摘している。

河原の指摘を参考に、在沖フィリピン人女性の言語の階層性について考えてみたい。本稿のインタビュー調査の中で、最も自分が大切にしている言語は何か、順番にあげてもらったところ、1 位は日本語、2 位は英語、3 位はタガログ語、4 位は地方語という結果が得られた。これは、河原が指摘した在日フィリピン人女性の持つ言語の階層性と一致する。すべての在沖フィリピン人女性が、同じ階層性を持っているとは限らないが、少なくとも、本稿の在沖フィリピン人女性の事例では、日本語→英語→タガログ語→地方語の言語の階層性を持っていることが推察できる。

その要因としては、やはり、日本語は居住地の主流言語であることから、沖縄県内での日本語の社会的ステータスが高く、また、沖縄社会での経済活動に参加するためには日本語能力が最低限要求されるため、経済的な実用性も高いことが考えられ、沖縄社会で生きていくために必要不可欠な大切な言語として捉えていると推察できる。また、本調査では、調査協力者 4 人が、英語に関して、日常的に使用する言語ではないが、国際共通語としての社会的ステータスがあると考え、また職場で実際に英語を使っていることから、日本語の次に大切な言語として捉えている可能性が高い。タガログ語や地方語は、彼女達の母語であるが、日本語や英語と比較すると、社会的ステータスが低く、経済的実用性も低いと捉えている傾向がある。しかし、母語であるタガログ語や地方語は、彼女達が自分達のエスニック・アイデンティティを確認する言語であり、階層性は低いが、彼女達にとって大切な言語であることがわかる。

4.2.　日本語に対する意識

前述したように、在沖フィリピン人女性は日本語を最も大切な言語として認識していた。彼女達の語りからは、「生活で身近に感じる言語」「家族とのコミュニケーションで使う言語」「日本語を話せることでプラスになる」などの声が聞かれた。彼女達にとって、日本語は、沖縄社会で暮らしていく上で、生活に一番密着した言語であり、夫や子供とコミュニケーションを図り、家族のきずなを強めるうえで欠かせない言語であることがわかる。

河原（2004:193-194）は、言語には二つの機能があると述べる。一つは、他人に何かを伝達したり、何かを要求したり依頼したりする実用機能であり、もう一つの機能は、自分が何者であるかを確認する自己確認機能であると説明する。そして、在日フィリピン人女性にとって、実用機能の言語は日本語であり、自己確認機能の言語はタガログ語や地方語であるという。

本稿の調査でも、在沖フィリピン人女性にとって、日本語は、夫や子供との意思疎通を図り、家族を支える生活の基盤となる実用的機能を果たす言語となっていた。しかし、一方で、日本語は、彼女達が、妻として、母親としての社会的アイデンティティを確認する自己確認機能を果たす言語にもなっていた。彼女達にとって、タガログ語や地方語が、フィリピン人としてのエスニック・アイデンティティを確認する自己確認機能を果たしているのと同様に、日本語は、彼女達が妻として、母親としての社会的アイデンティティを確認する機能を果たしているということが事例から窺うことができる。

4.3.　英語に対する意識

フィリピンでは、米国植民地をきっかけに英語教育が推進され、現在でも、小学校から大学までの学校教育では、タガログ語以外の授業は、全て英語で行われる。フィリピンで高等教育を受けてきた在沖フィリピン人女性達も、かなり高い英語力を持っていることが窺える。

インタビューで、彼女達の英語力について尋ねたところ、「話す」能力は、「よくできる」が 3 人、「まあまあできる」が 3 人、「聞く」能力は、「よくできる」が 4 人、「まあまあできるが」2 人、「読む」「書く」能力については、全員が「よくできる」と答えた。日本語の「読む」「書く」能力よりも、英語の「読む」「書く」能力を高く評価していた。日本人と比べると、フィリピン人女性は、英会話能力が高く、英語の運用能力も優れていることがわかる。

また、結婚当初、日本語があまり話せない時に、フィリピン人女性は、夫との会話で英語の単語を並べて意思疎通を行った。子供達には、タガログ語や地方語よりも英語を教えることに熱心である。さらに、自分の英語力を活かして、インターナショナルな保育園や ALT の仕事に就き、就労にも役立てている。彼女達が日本語の次に大切にしている言語は英語であると答えている理由がわかる。

以上のように、彼女達は、かなり高い英語力を持っていると同時に、自分達の英語力に

プライドを持っており、さらに英語の社会的・経済的実用性を認識していることが窺える。

4.4. タガログ語と地方語に対する意識

前述したように、在沖フィリピン人女性は、公用語としてタガログ語を話すが、地方出身者は地方語も話す。本稿の調査協力者は、イロカノ語、セブアノ語、イロンゴ語の地方語を話す。彼女達がタガログ語や地方語を話す場所は、主に、同国人同士が集まるカトリック教会やフィリピン・コミュニティーなどである。

在沖フィリピン人女性は同国人との出会いや交流を求める傾向が強いが、これらのエスニック・グループの役割について、定松（1996）、石井（2003）の文献を参考にしてみると、（1）「悩みの相談」、（2）「情報交換」、（3）「ストレスや孤独の解消」、（4）「エスニック・アイデンティティの保持／エスニック集団の連帯」の 4 つの機能を果たしていることがわかる。

本稿のインタビュー調査からも、教会でのフィリピン・グループの集まりで、同国人同士で家庭や職場の問題や悩みを相談し合ったり（1）、沖縄社会で生活していく上で必要な情報を交換したり（2）、同国人同士、母語でコミュニケーションをすることによって、ストレスや孤独を解消したり（3）、同じ母語を話せる同国人が集まることで、自分がフィリピン人であるというエスニック・アイデンティティを確認し、連帯を強めている（4）様子が窺えた。

本稿の調査協力者である在沖フィリピン人女性にとって、タガログ語や地方語は、自分達が本音や悩みを発散し、自分がフィリピン人であるというエスニック・アイデンティティを取り戻し、確認して、連帯を強めていく役割を果たしている言語であることがわかる。

第 5 節　在沖フィリピン人女性のアイデンティティ

本稿の調査協力者は、複数言語話者であるが、彼女達は、日本語を話すことによって、妻・母親・嫁としての社会的アイデンティティを構築し、また、日本語・英語・タガログ語を話すことによって、就労者としての社会的アイデンティティを構築し、さらに、タガログ語・地方語を話すことによって、フィリピン人としてのエスニック・アイデンティティを確認していた。ここでは、彼女達の語りを通して、在沖フィリピン人女性が、日本語、英語、タガログ語、地方語などの言語を使い分けることによって、妻・母親・嫁・就労者・フィリピン人としてのアイデンティティを構築していく様子を見ていく。

5.1. 妻として

在沖フィリピン人女性と沖縄人夫のコミュニケーションでは、ほぼ日本語だけが使用される。これは他府県のフィリピン人妻・日本人夫の言語的特徴と一致している。

在沖フィリピン人女性にとって、日本語に対する言語意識は、「生活で身近に感じる言語」「家族とのコミュニケーションで使う言語」「日本語を話せることでプラスになる」など肯

定的なものであった。彼女達にとって、日本語とは、家族との意思疎通を図る機能的役割を果たす言語であると同時に、妻や母親としてのアイデンティティを構築していく言語でもあるということが推察できる。ここでは、事例を基に、彼女達が日本語を話すという言語行為を通して、妻としてのアイデンティティを構築している様子を見ていく。

フィリピン人女性達は、日本語での言語行為を通して、様々な妻としてのアイデンティティを構築している。しかし、フィリピン人女性にとって、日本語は第二言語である。当然、母語と違って、自分自身を表現するのには限界がある。日本語を第一言語とする沖縄人夫との間に言語能力の差も生じる。ここに、言語能力の不足によって、妻としての「アイデンティティの揺れ」を経験している女性の事例を紹介する。

例えば、O さんは ALT として働いているが、職場でミーティングがあって、とても集中した後、疲れて帰宅し、夫と会話をする時に、つじつまの合わない日本語を話してしまうことがあった。そんな時、普段は上手に会話ができるのに、夫につじつまの合わない日本語を指摘されてショックを受けた。

> 最近疲れると、私、日本語が、concentrate しないといけないんです。1 回、1 時間ぐらいの、concentration で終わって、もう疲れる。そう、仕事場で、ミーティングするんですよね。もうストレス、難しい、そういうのが疲れてくると、会話がなかなかできない。…それで、（夫と）しゃべる時に、「今日はこんなだよ。」そしたら、夫が、「何？」とか、「どういう意味なの？私はこんなしてやった、しかわからないけど、あなた何言いたいの？」って、<u>そんな時は、すごく、「はっ、私は、日本語で、日本人にはなれない」っていうのは（感じます）。すごく、今まで、上手に会話ができるから、いつも会話上手なのに、こんなして言われたら、すっごく、あれなんだはず。</u>（O さんの語り）

彼女は、自分では、日本語での会話が上手くできると自負していたが、集中力が続かなくなった時に、自分の日本語能力の限界を感じている。そして、「やはり、自分は日本人にはなれない」という、とまどい、混乱を感じている。このように、O さんは、日本語に対する能力の限界から、とまどい、混乱を感じ、自分が何者か分からなくなるという「アイデンティティの揺れ」を経験していることが窺える。このように日本語能力に対する限界や劣等感から、「アイデンティティの揺れ」を経験するフィリピン人女性がいることがわかる。このようなとまどい、混乱を克服し、このような状態を受け入れ、納得し、アイデンティティを再構築していくために、フィリピン人女性はどのように対処しているのであろうか。次に、N さんと E さんの事例を見てみたい。

N さんは、結婚当初、日本語があまりわからなくて、夫との会話で困ることがあったが、辞書を携帯し、わからない言葉をメモし、一生懸命、日本語習得に力を入れた。夫に対して、日本語がわからないことで劣等感を感じていたが、「悔しい」という気持ちをばねにこの劣等感を克服していた。

> ≪夫との会話で困ったことはありますか？≫最初の時ありましたね。自分が、日本語、まだ分からない時、うん。でも、あとはね、自分が、もう聞き取れて、もう何言ってるんだろうっ

て、うん。…うん、そうそう、だいたい、あと、自分で理解して、もう、こんなこと言ってるんだろうなって。うん。そんな感じでしたね。最初の方だけ、困ってましたね。うん、はい、だけど、もう、わからんかったら、すぐ辞書引いて、何言ってるって、すぐ、何か調べものして、あの、わからない言葉、すぐメモして、すぐ調べたりして、うん。…≪unfair を感じることもありますか。≫unfair、不公平ね。うーん、それはないですね。うん、やっぱり、もう、仕方ない。日本人じゃないから、うん、それは仕方ないと思って、うん。うーん、あっち（夫）も（英語とビサヤ語）興味はなかったから、喋ろうと思っていないから、うん。だから別に。しょうがない。子供にも日本語しか教えてないですね。…逆に自分、必死で日本語学ばないといかんから、いかないと思って、うん、余裕がなくて、子供に教える余裕なかったですね。…≪劣等感を感じた ことも ありますか？≫うん、それもありますね。やっぱり自分よりも、上手じゃないですか、 こっちの、日本人じゃないから、うちは。それもありますね。「悔しい」って。≪そんな時な どんなふうに夫に言ってました？≫ううううん、それは黙ってる。そうそう、（悔しい）気持ち　ありますね。それは、感じていましたね。うん。≪「悔しい」と思って、また勉強して。≫そ うそう、結構、日本語も難しいですよね。（N さんの語り）

N さんは、自分の言語能力を向上させるために日々努力していた。しかし、日本語の第一言語話者である夫との会話で、劣等感を感じることはたびたびあった。その時、「悔しい」という気持ちをばねに一層の勉強による劣等感の克服を決意し、妻としてのアイデンティティを再構築していった。

しかし、どんなに努力しても、第一言語話者並みに完璧な日本語をしゃべれるようになれる女性は少ない。ここで E さんの事例を見てみよう。

E さんは、結婚当初、夫との間に、言語能力の差を感じて、劣等感を抱くことがあった。言いたいことが上手く伝わらず、イライラすることもあった。しかし、劣等感やイライラした気持ちを「もう、いいや」と開き直り、ありのままを受け入れることで、マイナスな気持ちをプラスに変えて、克服していた。

≪夫は日本人なので日本語上手じゃないですか。そんな時、inferiority complex　みたいなものはありますか。≫あー、私が？日本語の言葉で？≪はい。≫うーん、あったかな、まあ、多分、最初はあったはず。≪今は？≫今は、うん、別に。≪克服した？≫「いいよ」こんな感じ。≪乗り越えてる？≫乗り越えてる。最初だけ、これはちょっと、最初っていうか、何年かな、何か年ぐらい、あったね。うん、イライラする時もある。…あるよ、うん、言いたいのも言えないし。≪今は？≫別に。イライラしてるものも、うん、「いいや」そんな感じ。（E さんの語り）

フィリピンには、「バハラ・ナ」という価値観がある。佐竹・ダアノイ（2006:110-111）によれば、この価値観は「もうしょうがない」という宿命主義的な意味と解釈されることもあるが、いかなる結末をも受け入れる勇気と力強さをも示すという。「やるだけやった、あとは、神に任せる」という決断を意味するという。

E さんの態度の背景には、この価値観が見える。ネガティブな状況を、ありのまま受容れ

ることで、ポジティブ思考へと転換させている。日本語に対する劣等感から、妻としての「アイデンティティの揺れ」を経験することもあるが、完璧な日本語を話せなくてもいい、ありのままの自分を受け入れることで、日本語を上手く話せないフィリピン人妻としての姿をそのまま受け入れている E さんの様子が窺えた。

5.2. 母親として

在沖フィリピン人女性は、子供との会話で日本語を使用していた。日本語は、子供との関係において、彼女達が母親としてのアイデンティティを表出する言語であると同時に、子供と日本語を話すことで、彼女達が母親としてのアイデンティティを確認し、構築していく言語でもある。

しかし、彼女達にとって、日本語は第二言語であるため、子供とのコミュニケーションにおいて、様々な問題が生じる。ここでは、日本語能力の欠如が原因で、子供とのコミュニケーションにおいて問題を抱えた O さんの事例を見てみよう。

> 小さい時はいいんですけど、大きくなると、中学生、やっぱり、子供の使う言葉が、変わってくるんですね。単語とかもいろいろな。で、言い方とかも、使い方も、会話が違うんですよね。それで、キャッチボールができないんです。普通の会話だといいんです けど、なになにかやる時は、キャッチボールできない。すぐ考えない。やっぱり日本語完璧じゃない。ま、意味が分かるんですけど、理解して、それを、返す時間がほしい。 ゆっくりですね、自分は、子供が言いたいことはこうだなあと思って、日本人だったらすぐ返すんですよね。…できるんですけど、自分たちは、ちょっと整理してから返すんです。それが遅いので、子供は思春期の時は難しくなってくる。そう、早いんです、子供は。…負けるっていうか、会話が、やっぱり、怒られる時には それが多いんです。 困ることは、子供が、親のいう事聞かない時が、多いっていうのが。（O さんの語り）

O さんの子供は中学生になって思春期を迎え、言葉遣いが変わったことで、O さんは、子供との会話のキャッチボールが難しくなったと語った。子供の言葉に対して、O さんの返答が遅く、テンポの良い受け答えができない。O さんは、それは、自分の日本語能力が完璧でないためだと言う。会話のやり取りで、子供に負けてしまい、子供が O さんの言うことを聞かない。子供にアドバイスをあげたいと思っても、言葉が上手くつながらない。ここでも、O さんは、日本語能力の欠如により、母親としての「アイデンティティの揺れ」を感じていることが推察できる。

O さんの事例のように、在沖フィリピン人女性にとって、日本語は母親としての日本語アイデンティティを表現したり確認したりする言語であるが、その言語が第二言語であるために、言語能力の欠如という問題が、子供とのコミュニケーションでの葛藤を引き起こし、母親としての「アイデンティティの揺れ」を感じる要因となっていることがわかる。

在沖フィリピン人女性達は、自分の日本語能力に限界を感じながらも、その葛藤を乗り越え、日々の生活の中で、母親としてのアイデンティティを作り上げている。在沖フィリ

ピン人女性が、母親としてのアイデンティティを構築する際に、母親としてのロールモデルが存在している。在沖フィリピン人女性の中には、理想の母親像があり、その母親像に近づけるように、彼女達は試行錯誤しながら、母親としてのアイデンティティを表出し、確認し、構築していく。ここでは、O さんと L さんの事例を見てみたい。

> クッキング、子供の世話、買い物、仕事、掃除はしないけど、買い物とご飯作るのは（O さんの）お父さんが、やってます。…お母さんから習うことはあまりないんですよ。ご飯、作り方、そういうのは、お母さん何もしない人、うん。≪じゃあ、沖縄とフィリピンのスタイル、違うじゃないですか。≫違います。≪沖縄は。≫はい、自分が全部やる。≪どう思いますか。≫最初はね、びっくりしましたんですけどね。親、自分のお母さんから何も習ってなくって、何もゼロなんですよ。だから、びっくりした。≪でも、今は慣れてる？ ≫慣れてるのかな、うん。自分の親が、やらなかったことを、同じことやりたくないから、子供に見せてるのかな、と思って。「お母さんがご飯作るんだよ。」とかさ、自分のお家ではお母さんご飯作らなかったので、で、大きくなってから、友達がとか、沖縄の人がこんなして、沖縄のお母さんが教えたり、ご飯作ったりするのが気持ちいいなあと思って。自分にはなかったから、お母さんが作るのは、全然違うねえと思って。やっぱり自分も家に入ったら、ちゃんとご飯は作ろうって感じ。（O さんの語り）

O さんは、子供の頃、フィリピンで暮らしていた時、食事を作るのは父親の役割だったため、母親から食事の作り方を習った記憶がない。ここに、フィリピンと沖縄の文化の性役割観の違いを見ることができる。インタビューで、フィリピン人女性達に、子供の頃の両親の家事分担について尋ねたところ、全員が父親も家事や育児に協力的だったと語り、沖縄では、家事や育児が母親だけに任されていることに驚きを感じていた。O さんも、沖縄に嫁いできた時には、家事や育児を全部、自分がやらないといけないので「びっくりした」と語っている。しかし、O さんは、沖縄文化の性役割観を肯定的に受け止め、自分の母親を反面教師として、母親が幼い頃、何もやってくれなかったことと同じことを自分は繰り返したくないと語っている。「沖縄のお母さんが（ご飯作るのを）教えたり、ご飯作ったりするのが気持ちいい」と答えている。家事や育児をこなす沖縄の母親像に肯定的イメージを抱き、それを理想の母親像として、その理想に近づけるように、自分の母親としてのアイデンティティを構築している様子が窺える。

次に L さんの事例を見てみよう。

> ≪自分は、どんなお母さんだと思いますか？≫うーん、厳しいではないよ、私。≪愛情いっぱい？≫あ、そう、もちろん、小さい時の寂しかったことを、もう、必ず子供にさせたくない。今、そんな気持ちがある、いつも。≪小さい時、寂 しい思いをしたんですか？≫なんか、寂しいというか、みんな、いっぱいから。≪兄弟 11 人≫お母さんができなかったことを、ほとんど、子供、兄弟たちが。面倒看てたから。お母さんは、いつも、市場で働いてるから。小さい時から中学まで、朝はいない。朝ご飯が兄弟たちがやってる。あと、今、他のお母さんみたいな、夜の学校の行く準備はお母さんがやるの、あったことないから、自分。もちろん兄弟は、

お母さんみたいには全部できないよね。みんな同じ、近く年だから、だから、それは、子供にさせたくない。（L さんの語り）

L さんは、１１人兄弟の中で育った。両親は市場で働き、毎日、忙しい日々を送っていたため、L さんは、ほとんど、兄弟たちに育てられた。母親が恋しくて、いつも寂しい思いをしていたと言う。だから、自分の子供達には、自分と同じような寂しい思いをさせたくないと語る。L さんは、子供の頃、翌日の学校へ行く準備をする時、母親が手伝ってくれた記憶がなく、兄弟達に手伝ってもらった。そのようなことを、自分の子供には繰り返しさせたくないという。

このように、L さんは、フィリピンで、子沢山の家庭に育ち、母親の愛情を一身に受けた経験がないため、寂しい思いをして育った。同じ気持ちを自分の子供達には味あわせたくないと感じ、学校へ行く準備は、前夜、一緒にやるなど、子供達に愛情を注ぐように努めている。L さんの母親像は、自分の母親を反面教師として、子供を少なく産んで、子供達に愛情をたっぷり注ぐ現代の沖縄社会の核家族に一般的に見られる母親像をイメージし、母親としてのアイデンティティを構築しようとしている様子が窺える。

しかし、フィリピン人女性は、自分が幼少期を過ごしたフィリピンで、自分に何もしてくれなかった母親を反面教師として、フィリピン人の教育観を全面否定しているわけではなかった。フィリピン文化には、年上の人を敬うという習慣が根強く残っていて、この習慣を子供達にも継承していきたいと強く願っている母親がいる。ここに O さんの事例を紹介する。

あの、やっぱりね、フィリピンはね、あの、口答え駄目だとか、 親に対しては、年上の人達、親だけじゃなくて年上の人も、ほんとに、口答えしない、大事にする、年寄りを大事にする、それが、あー、自分から、他の子ども、日本人の子ども、普通にしゃべることは許せない、あー、イヤダなあとかね、で、自分の子供がそんなこと、口答えしたりとか、いろいろな人に失礼なこと言う、変な言葉すると、すごく怒るんですよ、それはいけないことで、ちゃんと、その場で、しつけする。（O さんの語り）

O さんは、日本人の子供達が年上の人に失礼な態度をとることが許せないと言う。もし、自分の子供が、日本人の子供のように年上の人に口答えをしたり失礼なことを言うと、O さんは怒る。それはいけないことであると、子供達を強くしつけるという。

このように、フィリピン人女性は、日本の習慣を全面的に受け入れているわけではなく、教育に関して、日本の良い習慣は受け入れるが、悪いと思われる習慣は受け入れない。そして、フィリピン文化の良い習慣を子供達にも継承していきたいと思っている。彼女達は、子供をしつける時には、日本語で話すという言語行為を行っているが、日本語の言語行為を行いながらも、そのしつけの仕方にフィリピンの習慣も導入している。彼女達は、母親としてアイデンティティを表出しているが、そのアイデンティティが模索され構築される過程で、フィリピン人としてのアイデンティティも認識し、日本の習慣を客観的に比較しながら、日本の良い習慣とフィリピンの良い習慣を選び取って、上手く折り合いをつけな

がら、日本人の母親、沖縄人の母親とはまた違った、フィリピン人母親としてのアイデンティティを構築している様子がわかる。

5.3. 嫁として

在沖フィリピン人女性は、妻や母親としての役割に加えて、夫の両親との関係における嫁としての役割も担っている。先行研究では、フィリピン人妻が日本人夫の義父母との間に抱える問題が指摘されている。例えば、定松（1996）は、フィリピン人妻を受け入れる日本人夫の家庭が、「家」制度に則った習慣や価値観を持つ傾向がある一方で、フィリピン人妻は結婚における夫婦の愛情の重視と個人主義の価値観を持ち合わせているため、両者の間に認識のズレが生じ、ストレスの原因になっていると指摘している。また、宮島・長谷川（2000）は、日本の「家」におけるアジア人女性のストレスの源として、義父母が家庭内で絶大な支配力を持っていることへの戸惑いを指摘している。

筆者は、「第 3 章　沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程」の調査で、夫の両親との関係において葛藤を抱えるフィリピン人女性とインタビューする機会があった。彼女（以下、L さん）は、夫の両親と同居しているが、夫の人付き合いの多さ、朝帰りの多さに悩み、義父母に相談した。義父母は、「男は、このぐらい当たり前だ」と言って、L さんに、夫の朝帰りを容認し、夫に黙従するように強制した。L さんは、夫との葛藤に加えて、義父母との葛藤を経験し、悩み苦しんでいた。今回、再び、L さんに本調査のインタビューに協力してもらった。L さんに、義父母との関係について再び尋ねたところ、ある出来事をきっかけに、義母との関係が改善していったことを語った。以下、L さんの語りを紹介する。

> **息子が、小 6 年生の卒業が、ばあちゃんが、卒業式に行った時に、その前も全然、私達、もう、ほんとに家族じゃなかったみたいな感じ。もう、二度と、入るぐらいもしたくない。ばあちゃんたちの所、下で。だけど、卒業、息子の卒業式の時に、ばあちゃんは、後ろに座ってて。見たから、私の気持ちが、おばあちゃん見た時に、自分の息子が、ちゃん と気持ちあるんだなあと思って。だから、ちょっと心が、柔らかいなって、嬉しかったよ、おばあちゃんが、ちゃんと考えてるんだ、私、息子のために。 だから、その時に、私、後ろ座った時に、近くにいて、「おばあちゃん、ありがとねえ」とか、そんな言った時に、ばあちゃんも、ちゃんと、返事してくれて。例えば、一緒にもう、終わったら、卒業式の後、「ありがとう」した後、「一緒にコーヒー飲もう」 とか、そんな、家で、みんなで一緒にご飯食べに行った。（L さんの語り）**

L さんの息子の小学校の卒業式の日に、L さんの義母も一緒に参加していた。義母は L さんの後ろに座っていた。L さんが義母を振り返ってみた時に、義母が息子のことをちゃんと考えてくれていることを感じ、そして卒業式に参加してくれたことが嬉しかった。L さんの心が柔らかくなって、義母に「おばあちゃん、ありがとうねえ」と声をかけた。義母も返事をしてくれた。卒業式の後、一緒にコーヒーを飲んで、その後、義父母と L さん一家は外食した。L さんの続きの語りを見てみよう。

> **旦那さんが事故をなった時に、おばあちゃんが、毎日病院行って、息子、そんな、何かあって**

も、この人が、ちゃんと、あれ、面倒看てくれるなとか、看たからじゃないかなあ。で、嬉しい、ばあちゃん嬉しかったよ。で、旦那さんも、もう、いろいろな、昔の、その事故、何の原因とか、ばあちゃんが聞いたときに、「ほんとに、 申し訳ない」と、いろいろあったからよ、その事故があって、旦那さんのせいで、みんながわかって。だから、「ごめんなさい」とか、そんな言って、「こんななんか大変だったのに」とか。(L さんの語り)

また、卒業式の後、しばらくしてから、夫が運転中、事故に遭って、大けがをして入院した。事故の原因は、夫の飲酒であった。L さんは、毎日、病院に行って夫を看病した。そんな L さんの献身的な姿を見た義母は心を打たれた。このような事故があってから、義母は自分の息子に対する信頼を失い、夫の付き合いや朝帰りの多さは普通ではなかったと思うようになった。夫の味方をして、L さんに夫の態度を容認するように強制していた義母も、L さんに悪いことをしたと思うようになり、自分の息子の過失を謝るようになった。L さんは、義母からの信頼を得て、関係性が改善したことを喜んでいる。L さんの次の語りを紹介する。

よく、おばあちゃんが、「よくアレ（我慢）してるねえ」とか、「しょうがないねえ、ごめんなさいねえ」とか「頑張れ」とか言ってるよ。≪おばあちゃんが。≫そうそう、「頑張れしかできんからねえ」とか、言ってたから、「こんな息子だから、頑張ってねえ」とか言ってるよ。今、だから、なんというの、言葉だすのは、なんか、嬉しいね。それ、前あったこと、忘れちゃう。いじめられたのを、思い出さない。おばあちゃんはあんなこと言ってるんだったら、上等だと思ってる。続けるよ、私。おばあちゃんおじいちゃんが喜ぶだけ、だから、二人でいることできるよ。私。ほんと、私に認めてるんだったらね。旦那が何言っても、私、別に。(L さんの語り)

義母は、L さんに、自分の息子の態度を謝りながら、L さんと息子が夫婦関係を続けていけるように応援する言葉をかけるようになった。L さんは、義母の言葉を、とてもうれしく受け止め、過去にいじめられていたことを全部忘れてしまうと言う。そして、義父母が L さんを嫁として認め、信頼し、夫と夫婦関係を続けていくことを喜んでいるのであれば、夫が何を言っても、自分は、夫婦生活を続けていけるように頑張ると述べている。

このように、L さんは、以前、夫や義父母との間に葛藤を抱える嫁としての「アイデンティティの揺れ」を経験していた。しかし、息子の卒業式と夫の事故という二つの出来事をきっかけに、義母との関係性が改善され、葛藤が解消されたことにより、前向きに夫婦生活を送るために努力する嫁としてのアイデンティティへと更新されていった。

5.4. 就労者として

在沖フィリピン人女性は、日本語、英語、タガログ語、地方語を話す複数言語話者である。本稿の調査協力者 6 人のうち、4 人のフィリピン人女性がこの複言語能力を活かして、就労者として沖縄社会に参加していた。彼女達の中には、今の職場に就く以前に、いろいろな仕事を転々としている者もいた。例えば、M さんは、最初、日本人の経営する保育所

で働いていたが、次に、弁当屋、蕎麦屋、パン屋、清掃員を経て、今のインターナショナルな保育所での仕事にたどり着いている。以下、M さんの語りを紹介する。

≪今の仕事は、いい仕事だと思いますか。≫うん、楽しいです。うん、楽しい。　私も、あっちこち仕事なんですよ、最初の仕事の時、私来た時、こっち、日本の保育園、全然、日本語分からないさ。でも、あっち、8 時間、もう、初めての仕事の保育園、子供達、「馬鹿」とか、言う。「はっ」びっくりした、私。「はー、こんな言うの」、あまり、日本語、まだ分からないだから。もう、1 か月だけ、私、旦那さんに、「私やめます」、「はー何で」。「いや、きつい。」次は、ほかほか亭、仕事してます。1 年間、あっち。最初、もう、料理も、あっちの鍋、重たいでしょう。こっち火傷して、フィリピンやったことない、だから、もう、それ、あと、食堂で、また、私、今度、お蕎麦屋さん、働いて、蕎麦屋さんで辞めて、パン屋さん、西原。辞めて、掃除する。 掃除のあれ 3 年。パン屋さんは、もう、 3 年やって。あっち辞めて、掃除、あと、掃除辞めて、今、こっちの。 ≪ここで 8 年。≫はい、8 年。いろいろ仕事した。今、一番楽しい、子どもたちと、遊んだり勉強したり。うん。≪じゃあ、今の仕事が一番。≫そうです。一番楽しい、疲れても、子供達が、たまに肩たたいて、それで。≪やっぱり英語が通じるのがいいんですね。≫　そう、はい、英語。（M さんの語り）

M さんは、最初、日本人の経営する保育所で働いていたが、言葉の問題で、子供達とのコミュニケーションが上手くいかず辞めている。そして、弁当屋、蕎麦屋、パン屋、清掃員と、単純労働の仕事を転々とするが、自分の能力を活かせていると実感できないためなのか、1～3 年のうちに辞めている。そして、今のインターナショナルな保育所の仕事にたどり着き、9 年間働いている。今では、ベテランのアシスタントとして認められている。M さんは、今、自分の得意とする英語で子供達とコミュニケーションできることが楽しいようだ。また、同時に、日本語やタガログ語も使うことがあり、自分の複数言語能力を活かせているという実感を持って働いている様子が窺える。

次に、英語の言語能力を活かして、就労者としてのアイデンティティを表現すると同時に、そのアイデンティティを構築している O さんの事例を紹介する。

≪何か仕事をしていて問題を感じることはありましたか。≫いっぱいありますね、やっぱり英語なので、全然違う言葉なので、職場の人は抵抗があるのかな、日本語もわからないのに何で英語勉強しないといけないのって言う気持ちがあると子どもには伝わるんですよ。やっぱり、英語というのは楽しく、勉強して、好きにさせたい、子どもが勉強するために、好きにならないといけないんですよ。…だから、英語というのは、先生がわからなくてもいい、一緒に勉強しましょうっていうの、いつも、そういう気持ちで教える、自分も日本語分からないよ、だから、みんなで、教えてね、とかね、日本語は嫌いって言ったら、もう勉強にならないです。勉強じゃなくて、遊ぼうって。≪楽しみながら。≫うん、そしたら、遊びながら勉強できるし、すごいん　じゃないって、言う気持ちを持ってほしいなと思うんですね、だけど、急に、上から言われるじゃないですか、今年から英語やりましょうって言ったら、もう、抵抗があるのね。今までも忙しかったのに、なんで、こんな英語教えないといけないのかなって、先生立ち忙し

いんです　よ、だから、そういう時間がない。（O さんの語り）

O さんは、ALT として小学校で 10 年間、英語を教えている。職場で何か問題を感じることがあるか尋ねたところ、一緒に働いている日本人教師が英語に対する抵抗感や苦手意識を持っており、それが生徒達にも伝わって、生徒達が楽しく英語を勉強することを阻んでいるという。O さんは、日本人教師達が、生徒達に日本語で他教科を教えることも難しく、いろいろな雑用も多くて忙しいのに、さらに、上からの命令で英語を教えなさいと言われていることに抵抗感を感じていると語った。その抵抗感が生徒にも伝わって、生徒達が楽しく英語を勉強できる雰囲気作りができていないと言う。

O さんは、日本語教師が英語に対して、抵抗感や苦手意識があるとしたら、「まず、英語がわからなくてもいいから、私達（ALT）と一緒に勉強しましょう、ALT も日本語はわからない、だから、お互い教え合って楽しく勉強しましょう」というような肯定的な気持ち、そして遊びながら勉強するという遊び心が大切であると述べる。生徒達に、英語を教えるには、まず、日本人教師が英語に対する苦手意識を取り除くこと、そして、英語がわからないというありのままの姿を受け入れて、英語を教えるという姿勢ではなく、生徒達と ALT と一緒に楽しみながら英語を学んでいくという姿勢が大切であると述べている。ここに、教師も ALT や生徒と共に学ぶという、L さんの英語教育に対する信条が見られる。これは、おそらく、O さんが、フィリピンで体験してきた英語教育[5]のあり方を反映していると思われる。このように、O さんは、自分が培ってきた英語能力、そして自分が経験してきた英語教育のあり方を通して、沖縄社会の学校の英語教育のあり方を批判的に観察し、そして、沖縄社会の英語教育を改善していくために、日本人教師の姿勢に何が必要であるかを提言している。ここに、英語という言語能力を培ってきた経験を活かして、O さんが、英語教育者としてのアイデンティティを表現すると同時に、彼女が日本人教師に英語教育のあり方を提言するという言語行為を通して、英語教育者としてのアイデンティティを確認し、構築していく姿を見ることができる。

5.5. フィリピン人として

フィリピン国民の約 83%はカトリック教徒である。カトリック教徒の信仰生活や習慣、カトリック教会の年中行事は、フィリピン人の生活の一部であり、また、フィリピン文化

---

[5] フィリピンの私立小学校では、国語とフィリピンの歴史の授業だけはタガログ語で行われるが、それ以外の全ての科目は英語で授業が行われる。例えば、小学校 1 年の最初のレッスンでは、224 語の英文を読んで、英文内容に関する質問を英語で答えるワークが最初に行われる。母語が英語以外であっても、テレビ、ラジオなどのマスメディアがほとんど英語であることなどから、生活の中で英語にたくさん触れている子供は、小学校入学段階ですでに英語で「聞く・話す」はできるので、すぐに「読み・書き」も開始できるという。小学 6 年生では、生物・科学・環境などの記述文や物語文が扱われ、最後のレッスンでは、「幸せの意味」について、901 語の英文を読んで、英文内容の要約を英語で記述するワークがある。日本の公立高校入試問題で、読解問題の英文は比較的多い県でも 600－700 語程度、書く問題は 3－5 文のまとまった英語を書く問題が 1 問出題される程度であることと比較すると、フィリピンの私立小学校では卒業段階で相当高いレベルの英語の学習をしていることがわかる。日常生活において英語を実践的に使用する場がほとんどなく、英語を身につけるインセンティブ（進学・就職・報酬など）のインパクトも小さい日本と比較すると、フィリピンでは、英語が生活に密着した言語であり、日本のように、試験対策で詰め込み式で英語を勉強する方法とは異なり、もっと実践的な方法で英語教育が行われていることがわかる。
（http://berd.bebesse.jp/global/opinion/index2.php?id=2554）

の一部となっている。

本稿の調査協力者であるフィリピン人女性も皆、カトリック信者である。彼女達は、毎週日曜日のミサに加え、月 1 回のタガログ語・ミサ、毎週 1 回のロザリオ祈祷会[6]（英語）、クリスマス礼拝・祝会、バザー、毎年 10 月開催の Gathering for Christ[7]、毎年 1 月開催のサント・ニーニョの祭り[8]など、年中行事を通して、フィリピン人同士が交流を深め、フィリピン人同士のエスニック集団としての連帯を確かめ合っている。これらの交流を通して、彼女達は、フィリピン人としてのエスニック・アイデンティティを確認していくと同時に、フィリピン人同士でタガログ語や地方語を交わすことによって、フィリピン人としてのアイデンティティを表現していた。ここでは、L さんの語りを見てみたい。

> **≪他にどんな活動をしてますか、教会では。≫そうだね、クリスマス、毎年、与那原に来てから、何で すか、クリスマスの。≪クリスマスの出し物。≫みんな一緒に考えて、ロザリオの時とか、毎週。ロザリオ、終わって、みんな家族みたいに、祝って、一緒に食べるが、こっちで普通なってる。あと、ミサの後、家族みたいにみんな一緒にご飯食べる、その後、バザー。バザーは何かね、毎年、一緒にみんな考えてる、なになにだす、あと、だれだれの担当とか、その前に、何ていうの、ミーティングして、毎年毎年、そんな、誰の担当とか、いくら出すとか、ね、あの、みんな、なになにあげられるか、そんなミーティングとかあります。（L さんの語り）**

L さんの語りでは、例えば、クリスマスの祝会の時に、フィリピン人のグループはどんな出し物をするのか、毎週 1 回のロザリオ祈祷会の時に集まって、みんなでミーティングをする。その時には、みんな家族のように一緒になって食事をしながら話し合いをする。また、バザーでどんな品物を出すか、誰がどんな役割を担当するか決めるためのミーティングをしている。このようなイベントを協力して実行する時には、フィリピン人同士が家族のように結束して、連帯感を強め、フィリピン人としてのアイデンティティを強く実感する時である。この時に、タガログ語や地方語でのコミュニケーションという言語行為が彼女達のエスニック・アイデンティティの認識をさらに強め、エスニック集団の連帯感を強める働きをしていることが窺える。

在日フィリピン人女性は、カトリック教会を拠点に、フィリピン・コミュニティーを形

---

[6] ロザリオは、カトリック教会において聖母マリアへの祈り（アヴェ・マリア）を繰り返し唱える際に用いる数珠状の祈りの用具、およびその祈りのことである。ロザリオの祈りは、カトリック教会における伝統的な祈りで、「アヴェ・マリア」を繰り返し唱えながら福音書に記されているイエス・キリストの主な出来事を黙想していく祈りであるが、ミサなどの典礼行為ではなく、私的な信心業として伝わるものである。基本となる祈り方が定められていて、珠の数・形状もそれに沿って作られている。（Wikipedia）

[7] 年に 1 回、10 月頃に、沖縄本島・離島地域のカトリック教会の信者が、一同に集まり、礼拝を行い、その後、交流会を持つ。

[8] 毎年 1 月の第 3 日曜日は、サント・ニーニョ（幼きイエス）祭りがフィリピン各地で行われる。フィリピンのカトリックでは、他のカトリック国に比べて、とりわけ「サント・ニーニョ（幼きイエス／Sto.Nino）」を熱く信仰することで知られている。そのルーツは、フランダースの職人が作成したサント・ニーニョ像が、1521 年にフェルディナンド・マゼランによってセブに持ち込まれ、希望と幸福への祈りの一環として始められたことにある。フィリピン各地では、それぞれ趣向を凝らした衣装に身を包んだ各ダンサー・チームが、サント・ニーニョ像を先頭に軽快なドラム音楽に合わせてパレードを繰り広げる。沖縄でも、この時期に、ある一つの教会堂に、フィリピン人のカトリック信者が集まって、サント・ニーニョの祭りを祝う。（http://ph.access-a.net/fiesta/01_sinulog.html）

成するが、このようなエスニック集団は、在日フィリピン人女性が、例えば、日本人の友達や家族には打ち明けられない、又は理解してもらえない、フィリピン人として抱える問題や悩みを、同国人同士で共有できる場となる。悩みや問題を、自分の母語で発言することができるので、心の奥底にある気持ちや細かいニュアンスを含んだ気持ちを吐露することができる。ここでは、K さんの語りを紹介する。

> ≪タガログ語マスとかで、フィリピンの人と集まるじゃないですか。≫うん。≪それはどうですか？≫うん、もう、なんか、ちょっと、ストレスのリリー バーみたい、もう、みんな、話しできる。…≪このフィリピンの人と話してる時はどういう感じがしますか。≫話な、うん、あの、家、なんとか。あー、お家のこととか。うん、うちのこととか、仕事なにか、どんななってるか。≪このフィリピンの方に、自分の抱えている悩みとか相談することもありますか。≫うん、もう、できるはね、たまにね、うん。これが、友達に、悩み話してから、ちょっと、リラックスなるさあね。≪あ、そうですね、旦那さんのこととか。≫うん。≪仕事のこと。≫仕事のこととか。（K さんの語り）

K さんは、教会でフィリピン人同士が集まり、交流することが、「ストレスのリリーバー」つまり、ストレス解消につながっていると話す。同国人同士、自分の母語で自分の思っていることや、いろいろな悩み、問題を話し合うことで、リラックスすることができ、フィリピン人としての自分を見つめ直し、自分のフィリピン人としてのアイデンティティを確認して、再び、沖縄社会へと戻っていく。この教会での集会は、フィリピン人女性が、もう一人の自分であるフィリピン人としての自己アイデンティティを取り戻し、本来の自分を表現する場であることがわかる。

在沖フィリピン人女性が教会へ来る目的は、同国人との交流を深めるだけではない。彼女達は神様との対話を大切にしている。彼女達は、ミサや集会がない時でも、礼拝堂に来て、静かに座って、神様との対話をする。誰にも言えない悩みや問題、心の葛藤を、全て神様に打ち明ける。神様との対話によって、彼女達は癒され、また元の日常生活へと戻っていく。E さんは、この神様との対話の大切さは、ノンクリスチャンである沖縄人には理解できないだろうと述べた。在沖フィリピン人女性は、この神様との対話を通して、フィリピン人クリスチャンとしてのアイデンティティを表現すると同時に、また、フィリピン人クリスチャンとしてのアイデンティティを確認していることが推察できる。ここに、M さんの語りを見てみよう。

> うーん、必ず毎週行きたいけど、でも、たまに用事があるけど、行かない時も、でも、いつだったかな、1 年前、必ず行くんです、ここ。でも、行かなかったら、夢、神様、私の夢に、出るんですよね。（泣く）すいません。なんか、1 週間行かなかったら、私の夢の中に神様、神様が出たんです。出た、たぶん、なんとかなんて、私、教会行かなかったから。びっくりして。だから、あの、用事ないとき必ず行く。教会行きます。…≪もう、教会がないとやっていけない？≫いけないですね。たまに、でも、行かないと、なんか、苦しいときと、神様と話したい。≪話したい、そうなんですね。相談できる友達もいますか？≫うーん、友達、でも、全

部、あれ、全部の秘密、友達に相談できないんですよね。≪そういう時は。≫そういう時は、神様に。≪相談する。≫はい。（M さんの語り）

M さんは、教会に行かないことがしばらく続いたとき、夢の中に神様が出てきて驚いたことを語っている。M さんは、長い間、教会に行かなかったので、夢の中に神様が現れてきたと感じ、今は、用事がない時は、必ず教会へ行くようにしている。また、M さんは、苦しい時、神様と話をしたいと語る。友達にも相談できないような苦しいことがある時には、神様と話をするという。次に L さんの事例を見てみよう。

≪L さんにとって、教会はどんな場所ですか。≫うーん、私の、なんていうの、実家、みたいな。なんか、自分のお家。実家。みたいなって、そう、なんか、困った時、誰かに言えないくらい、は、こっちで言う、いつも言ってる。そう、一人でも、一人になりたいとか、祈りしたいとか、こっちでいつも、来るんです。≪なんか問題があった時に。≫そうそうそうそう。≪こっちに来てお祈りしたり。≫なんか、気持ちが、アレしてる時に、だから、なんか、したいとできない時は、こっちにくる。そう。…日曜日じゃないでも、自由、まだ開いている間に、行きたいときなんか、何か、気持ちがあれじゃなくても、いいことがある時、ありがたいなあとか、そんなね、この日だけ、できるから、それ、いつも教会でなんか、伝えてきたい、なんとかね。≪あ、嬉しいこと。≫嬉しいこと、そうそうそう。≪があった時も、教会で伝えると。≫それが、あの、いつも教会に来る。（L さんの語り）

L さんは、教会は、自分の実家のように落ち着く場所だと語っている。誰かに言えないくらい困ったことがあった時、教会で、一人になって祈る。L さんは、フィリピンでも同じことをする習慣があった。苦しい時だけでなく、嬉しいことがあった時にも、神様に感謝の祈りをささげる。L さんは、苦しいこと、嬉しいこと、すべてを神様の対話の中で打ち明けることによって、心が癒され、悩みの解決策を見いだし、そして、そのことに感謝するということが彼女の信仰生活の習慣となっていた。

インタビューで、在沖フィリピン人女性に、祈る時に、どの言語を使用するか尋ねたところ、6 人中 5 人の女性が母語であるタガログ語か地方語を使うと答えた。阿不都（2010）は、教会での祈りは、神を礼拝し、罪を告白し、悩める心の奥底を吐露する行為であり、そこで使用される言語には、人間の最も原初的な感情が表れているという。このように、在沖フィリピン人女性にとって、原初的感情を表出する時に使用する言語はタガログ語や地方語であることがわかる。在沖フィリピン人女性は、神様との対話、祈るという言語行為をタガログ語や地方語で行うことによって、自分達のルーツであるフィリピン人クリスチャンとしてのアイデンティティを表現すると同時に、それを確認している様子が窺える。

本稿の調査協力者である在沖フィリピン人女性の中には、マニラ首都圏出身者と地方出身者がいる。地方出身者は、公用語であるタガログ語を話すことができるが、彼女達の母語は、イロカノ語、セブアノ語、イロンゴ語などの地方語である。地方出身者は、マニラ首都圏出身者や他の地方語を話す地方出身者と会話をする時、共通語であるタガログ語を話す。しかし、タガログ語が母語でないため、タガログ語に対して劣等感を抱く地方出身

者の女性もいる。ここでは、O さんの事例を見てみた。

> 私、タガログ語あんまりできなくて、難しい。すごく、inferiority complex って言うのかな、タガログしゃべるのも、すごく、フィリピン人なのにタガログ語しゃべれないっていうのが、みんな、だから、みんな、何、変に思う、思われるのが、すごく恥ずかしい、自分は恥ずかしいなあと思って、しゃべれなくて。…すごく、気を付けてます、もう、タガログ語でバーッとしゃべられると、自分もしゃべりたいんですけど、なかなか出て来なくって、英語で出たり、日本語で出たりするのを、なんか、逆に、変な感じ。≪変な感じにとられたりとか。≫そうそうそうそう、自分がフィリピン人なら、何でこんなしてしゃべるのって感じなんですよ。…すごく恥ずかしいなあと思うんですけど。…≪O さんがビサヤ語を話すと落ち着きますか、やっぱり。≫あー、すごい、嬉しい、あの、この同じ、島の人、すっごい嬉しいですよ、もう、イロンゴがしゃべれる、あーしゃべれるしゃべれる。≪じゃあ、一番イロンゴしゃべれる人が楽しい。≫楽しい、楽しく感じる、なんか、懐かしいって言うの、なんか、そんな感じかな。（O さんの語り）

O さんは、イロイロ市出身で、ビサヤ諸語の一つであるイロンゴを母語とする。O さんは、タガログ語を話すことが難しいと感じ、タガログ語を話すことに劣等感（inferiority complex）を感じると述べている。「フィリピン人なのに、なんでタガログ語をしゃべれないのか」と思われることが、とても恥ずかしいと思っている。タガログ語を速いスピードで話されると、自分も早く話したいと思うが、タガログ語の言葉が思いつかず、ついつい英語や日本語が出るという。

一方で、O さんの母語であるヴィサヤ諸語のイロンゴ語を話せる人と出会う時は、イロンゴ語をお互いに話すことができるので、嬉しく、懐かしい感じがするという。では、次の O さんの語りを見てみよう。

> あんまり、変なんだけど、日本にいると、Japanese、English、Tagalog がしゃべれる人が多いんですよね、で、local language は、あんまり、いないんですよね、だから、例えば、自分は姉がいるので、姉と一緒にいる時、local language でしゃべると誰にも、なんか、private な話ができるって言うのは、good point、advantage ではあるんですよね。（O さんの語り）

O さんは、母語であるイロンゴ語が話せる利点について、例えば、沖縄に在住している O さんの実の姉と、誰にも聞かれたくないプライベートな話をする時役に立つという。周囲の人がイロンゴ語を理解できないので、姉と親密な話をすることができる。O さんは、自分の母語で、姉と親密な話をすることによって、フィリピン人の中でも、西ビサヤ地方イロイロ州出身者としてのアイデンティティを表現し、そのアイデンティティを確認している様子が窺える。

第 6 節　考察

6.1.　多元的アイデンティティ

在沖フィリピン人女性は、それぞれの場面において、異なる言語を使用し、その言語の

使い分けによって 3〜4 種類のアイデンティティを持っていることを表 2 に示した。

表２　在沖フィリピン人女性のアイデンティティと使用言語

帰属意識を持つ場所	アイデンティティの種類	使用言語
家庭	妻・母親・嫁	日本語
職場	就労者	英語・日本語・タガログ語
教会／フィリピン・コミュニティー	フィリピン・タガログ民族	タガログ語
	フィリピン・ヴィサヤ民族	ヴィサヤ語

言葉には、一般的に、意思疎通を図る手段としての機能と自分は何者であるのかというアイデンティティを確認するための機能があると言われている。そして、アイデンティティを確認する言語は、主に、母語であると考えられている場合が多い。

しかし、本調査で、在沖フィリピン人女性は、母語であるタガログ語や地方語を使うことで、フィリピン人としてのエスニック・アイデンティティを確認すると同時に、第二言語である日本語を使うことによって、妻、母親、嫁としての「アイデンティティ」を構築していた。さらに、英語などの複数言語を使い分けることで、就労者として「アイデンティティ」を構築している。

窪田（2005）は、ESL の学習者を例に挙げて、第二言語の学習者は、学習言語の社会に参加しようとする中で、常に自身のアイデンティティを模索し、作り上げ、それを表現しているという。例えば、これを、在沖フィリピン人女性の場合に置き換えてみると、フィリピン人女性は沖縄社会で生活する中で、日本人または沖縄人というグループの行動上の特徴について、毎日の自と他の比較を通して、いろいろなことに気づいていく。この過程は、自分自身のアイデンティティを再認識する機会となると共に、自分とは異なる日本人または沖縄人のアイデンティティについても何らかの思いや期待を構築する機会にもなる。日々の生活の中で、フィリピン人女性は日本語を習得しながら、彼女達の考えの中に、学習言語のアイデンティティ、つまり「日本語アイデンティティ」[9]を構築していく。これは、日本人や沖縄人そのものの中にあるアイデンティティを指すものではなく、日本語を学ぶフィリピン人女性の日本語に対する思いや期待を基盤に構築されるアイデンティティである。

また、窪田（2005）は、Saville-Troike（1989）を参考に、「言語のレパートリー」、つまり、人々が話すために持っている様々な言語の形やスタイルについて触れている。この言語のレパートリーという概念は、ただ 1 つの話し方しか持たない人は、この世に存在しないという考えが前提にあって、全ての人々は、場面ごとに呈示すべき自分自身のアイデ

[9] 窪田（2005）は、英語の学習者が出身地を離れアメリカで生活する中で、英語という学習言語を使うことによって構築していくアイデンティティを「アメリカ英語のアイデンティティ」と呼んでいる。窪田の文献に従えば、ここでは、フィリピン人女性が日本語という学習言語を使うことによって構築していくアイデンティティを「日本語のアイデンティティ」と呼ぶのが適切であると思われる。しかし、筆者は、「日本語のアイデンティティ」という用語から、日本語という言語の中に付随しているアイデンティティという印象を受けた。これを、「日本語アイデンティティ」とすることで、日本語を話すことによって構築されるアイデンティティという意味として捉えることができると考え、本稿では、「日本語アイデンティティ」の用語を使用している。

ンティティを構築するために、必ずいくつかの言語のレパートリーを持っていると言う。適切にコミュニケーションを図るために、人々は話し相手、状況などに合わせたスタイルをレパートリーの中から選んでいると述べる（窪田、2005:42）。

本稿の在沖フィリピン人女性の事例では、彼女達は、日本語、英語、タガログ語、地方語という言語のレパートリーを持っていて、その場で適切にコミュニケーションを図るために、話し相手、状況などに合わせて、レパートリーの中から言語を選択し、「5.1. 妻として」、「5.2. 母親として」、「5.3. 嫁として」、「5.4. 就労者として」、「5.5. フィリピン人として」の社会的役割を果たす中で、様々なアイデンティティを呈示している。

例えば、妻としては、日本語能力の不足から妻としての「アイデンティティの揺れ」を感じながらも、日本語を一生懸命学ぶことによって、その揺れを克服し、妻としてのアイデンティティを再構築していくフィリピン人女性の姿が見られた。また、母親としては、家事や育児をしっかりこなし、沖縄の母親をロールモデルとしてアイデンティティを構築すると同時に、年上の人を敬うというフィリピンの習慣を子供達に継承するという言語行為を通して、沖縄とフィリピンの習慣の良い所を取り入れ子育てをする母親としてのアイデンティティを構築していた。嫁としては、義母との間に葛藤を抱えながら、それを乗り越えて、アイデンティティを更新し、前向きに夫婦生活を送るために努力する嫁としての新しいアイデンティティを再構築していた。就労者としては、日本語、英語、タガログ語の複数言語能力を活かして就労者としてのアイデンティティを呈示したり、英語という言語能力を活かして、英語教育者としてのアイデンティティを構築する女性の事例が見られた。フィリピン人としては、タガログ語や地方語での同国人とのコミュニケーションを通して、彼女達がフィリピン人としてのエスニック・アイデンティティの認識を強めていた。また、フィリピン人同士の間でも、タガログ語と地方語を使い分けることで、タガログ民族とヴィサヤ民族のアイデンティティを認識していた。

このようにして、在沖フィリピン人女性は、状況に応じて、レパートリーの中から適切な言語選択を行い、その場で良いと認められ、適切で、好意的と思われるアイデンティティを構築していくことによって、自身の中に多元的アイデンティティを統合している様子がわかった。

6.2. 母語アイデンティティと第二言語アイデンティティ

窪田（2005）は、台湾、韓国、日本などから渡米した留学生を対象に調査を行い、彼らの母語と第二言語のアイデンティティの関係について考察を行っている。米国で英語を第二言語として学ぶ留学生は、彼らのグループ内（母語のアイデンティティ）と外（アメリカ英語のアイデンティティ）の区別を固定化することなく、常に、多面的な社会的アイデンティティを模索し構築していると述べる。この留学生の母語アイデンティティと第二言語アイデンティティの関係は、在沖フィリピン人女性のものと共通する部分があると思われる。日本語を第二言語として学ぶフィリピン人女性の場合も、彼女達のグループ内の言

語（タガログ語と地方語）と外の言語（日本語）の区別は固定化されているというよりも、日常生活を通して、「日本語」に触れながら、常に自己の母語と調整して、妻、母親、嫁としてのアイデンティティを再構成するために葛藤していることになる。そして、これらの模索、構築されたアイデンティティは、社会生活の中で呈示されることになる。在沖フィリピン人女性にとって、このアイデンティティの呈示のために重要な働きをするものの一つが日本語という言語になる。

例えば、「5.1. 妻として」の事例の中で、日本語能力の不足から、妻としての「アイデンティティの揺れ」を感じながらも、「バハラ・ナ」（「やるだけやった、後は神に任せる」という意味）というフィリピン人の価値観を取り入れながら、その揺れを克服していくフィリピン人妻の姿や、「5.2. 母親として」の事例の中で、日本語で教育するという言語行為を行いながらも、フィリピンの習慣を子供達に継承しているフィリピン人母親の姿が見られた。

彼女達の中には、母語と日本語の区別は固定化されているものではなく、日常生活を通して、常に、日本語と母語の間を揺れ動きながら、二つの間を調整して、日本語を使うという言語行為を行いながらもフィリピンの価値観や習慣を取り入れたりして、妻や母親としてのアイデンティティを再構築していた。母語と日本語の狭間を行き来しながら、模索され、構築されたフィリピン人女性のアイデンティティは、社会生活の中で呈示され、このアイデンティティの呈示の為に重要な働きをするものの一つが日本語という言語であった。

6.3. アイデンティティの揺れ

河原（2004）は、在日フィリピン人女性のように複数の言語に馴染んでいると、そこには「アイデンティティの分裂」（河原、2004:177）という現象が生じると言う。在日フィリピン人女性は、新たな言語と出会い、それを学んでいく過程において、とまどい、混乱が生じて、アイデンティティの分裂を経験することになる（河原、2004:199）。

本稿の在沖フィリピン人女性の事例では、「アイデンティティの分裂」の現象は見られなかったが、「アイデンティティの揺れ」を経験していると思われる女性を確認することができた。「アイデンティティの分裂」と「アイデンティティの揺れ」の違いについて、「分裂」とは、新しい言語に出会う中で、戸惑いや混乱を感じること、つまり、A という言語を基につくられたアイデンティティが、B という新しい言語が入ることによって、本来あった A という言語を基につくられた「アイデンティティ」が 2 つに分裂する状態であると考えられる。一方で、「アイデンティティの揺れ」は、A という言語を使う時に、その言語能力の不足や言語に対する劣等感から生じる A という言語を基につくられた「アイデンティティ」の中での揺れを感じる状態であると考える。

例えば、O さんは、夫との会話で、自分の日本語能力の限界を感じ、自分は「日本人になれない」というとまどい、混乱から、妻として「アイデンティティの揺れ」を経験して

いた。また、O さんは、日本語能力の欠如から、子供との会話のキャッチボールが上手くいかず、母親としての葛藤を抱え、その結果、「アイデンティティの揺れ」を経験していた。

在沖フィリピン人女性にとって、日本語は妻として母親としてのアイデンティティを構築していく言語であるが、日本語が第二言語であるために、当然、日本語の第一言語話者である夫や子供との間に言語能力の差を感ぜずにはいられない。日本語能力の限界を感じた時に、彼女達は、葛藤の中で、妻として、母親としての「アイデンティティの揺れ」を経験していた。このように、本稿では、言語能力の不足が、彼女達に第二言語のアイデンティティの揺れを引き起こす要因となっていることが窺えた。

しかし、「アイデンティティの揺れ」は、混乱や戸惑いを乗り越えることによって、再構築されていく。例えば、N さんは、「悔しい」という思いをばねに、一層の日本語学習によって葛藤を克服し、E さんは、「日本語が完璧でなくてもいい」とありのままの自分を受け入れることによって、妻として新しいアイデンティティを作り上げていた。このように、「アイデンティティの揺れ」を経験しながらも、その葛藤の中で試行錯誤を繰り返しながら、「多元的アイデンティティ」が彼女達の中で構築されていく様子が見られた。

6.4. アイデンティティの更新

高橋（2012）は、人間は、他者との出会いを通して、自己を発見するという。自己が先に存在し、他者との関係を作るのではなく、自己は他者の理解によって維持され、存在する、間主観性であると述べる。つまり、自己アイデンティティは他者との間に意味づけられた意味体系として出発すると言う（高橋、2012:42）。

また、高橋（2012）は、岡本（2000、p. 6）の言葉を引用して、人間の生とは、

> 生物学的にも、社会的、文化的にも自分が存在し、成長し、他者や世界を理解し、自己を再編成しながら新たな自分を形成していくとともに、周囲の環境を人間よりふさわしいように改変していく過程、それは人間が自己と周囲を絶えず「意味づけ」、意味世界を形成していく過程。

であると述べている。つまり、言葉は自己アイデンティティと密接な関わりがある。自己アイデンティティは、他者との言葉のやり取りを通して、関係性的に意味づけられていく。自己アイデンティティは他者との間に間主観的に立ち現れる動態であると述べる。そして、言葉と自己アイデンティティの意味体系は、人が物語（経験）を通して、また他者の物語（経験）との交錯を通して、相互に更新し、発達していくものであると述べている（高橋、2012:43）。

「更新」とは、「新しく改めること、また、改まること」という意味がある。「アイデンティティの更新」とは、元々あった古いアイデンティティに、新しく生まれたアイデンティティが加わって、古いアイデンティティと新しいアイデンティティが混ざり合って融合し、さらに新しいアイデンティティが生まれることであると解釈できる。

本稿の調査協力者の中にも、前回のインタビュー調査から、「アイデンティティの更新」

を成し遂げたフィリピン人女性の事例が見られた。「5.3.　嫁として」の項目の中で紹介した L さんの事例である。前回のインタビューで、L さんは夫の朝帰りを容認し、夫に黙従することを強制する義母との間に葛藤を抱えていた。しかし、今回、息子の卒業式と夫の交通事故という二つの出来事が、L さんと義母の関係性を変えていった。

義母が息子の卒業式に参加したことによって、L さんは義母の息子に対する愛情を感じ、義母に感謝の言葉を伝えている。この言葉が、さらに二人の関係性を親密なものにしていった。そして、飲酒運転で事故に遭った夫を献身的に看病する L さんの姿に心を打たれた義母は、以前に L さんにしたことを謝るようになった。また、義母は、夫婦関係が上手くいくように、L さんに応援の言葉をかけるようになった。

これらの出来事をきっかけに、L さんは義母をより深く理解し、義母は L さんをより深く理解し、互いの関係性が深まっていった。互いに肯定的な言葉をかけあうことによって、二人の関係がより親密なものとなり、互いの存在に新しい意味を見出している。L さんは義母との新しい関係性により、自己を再編成しながら、新たな自己を形成している。以前は、義母との間に問題を抱える嫁として葛藤を経験していたが、現在では、前向きに夫婦生活を送るために努力する嫁としての新しいアイデンティティへと更新されていった。これは、L さんが、様々な経験を通して、自己と周囲を絶えず「意味づけ」、新しいアイデンティティを更新していく過程である。L さんが自分の経験を通して、また義母の経験との交錯を通して、自己のアイデンティティを相互に更新し、発達していく様子が窺える。

第 7 節　まとめ

本稿では、在沖フィリピン人女性が、日本語、英語、タガログ語、地方語の 4 つの言語を、それぞれの状況によって使い分け、様々なアイデンティティを表出したり、確認したり、構築していく様子が窺えた。

在沖フィリピン人女性の日本語に対する言語意識は、生活に一番密着した言語、夫や子供とコミュニケーションを図り、家族の絆を強めるうえで欠かせない言語というものだった。このような日本語に対する肯定的な言語意識の基に、日本語で言語行為を行うことを通して、彼女達は、妻、母親、嫁としてのアイデンティティを構築していた。日本語能力に対する劣等感という否定的言語意識が、時として、妻、母親として、「アイデンティティの揺れ」を引き起こすことはあるが、試行錯誤し葛藤を乗り越えながら、アイデンティティの再構築を果たしていた。

また、在沖フィリピン人女性の英語に対する言語意識は、自分達が高い英語力を持っているというプライドや英語の社会的・経済的実用性の高さを認識している中に現れていた。このような英語に対する肯定的言語意識は、彼女達が、就労者として、または英語教育者としてのアイデンティティを構築するのを促していた。

さらに、タガログ語や地方語に対する彼女達の言語意識は、自分達が本来の自分を取り戻せる言語、フィリピン人としてのエスニック・アイデンティティを確認できる言語、フ

ィリピン人同士の連帯を強めていく言語というものだった。地方出身者がタガログ語に対して抱く劣等感という否定的言語意識を示す女性も中にはいるが、彼女達は、タガログ語や地方語に対する肯定的言語意識を基盤に、同国人同士、同郷人同士で、タガログ語や地方語を話すという言語行為を通して、フィリピン人として、地方出身者としてのアイデンティティを確認していた。

在沖フィリピン人女性は、日本語、英語、タガログ語、地方語という 4 つの言語を基盤に、多元的アイデンティティを構築していた。しかし、このような多元的アイデンティティが統合されていく過程には、「アイデンティティの揺れ」があり、母語と第二言語の間での往来があり、そして、古いアイデンティティから新しいアイデンティティへの更新があり、様々な模索を通して構築されていくものであることがわかった。

本論文の 7 章の結論では、さらに、社会的構築主義の視点で、在沖フィリピン人女性のアイデンティティと言語の関係を考察する。在沖フィリピン人女性は、日本語、英語、タガログ語、地方語という 4 つの文法などの言語的慣習を中心にして、4 つの自己としての主体性の感覚、つまりアイデンティティを構造化していることを述べる。また、在沖フィリピン人女性は、妻、母親、嫁、就労者、フィリピン人としての自分の経験をストーリーとして語ることによって、そのストーリー構築が彼女達のアイデンティティ構築を促し、さらに、そのストーリー構築には、沖縄人夫をはじめ、その家族、職場の上司や同僚、同国人のフィリピン人達など彼女達を取り巻く他者の存在が不可欠であることを述べる。

第５章　在沖フィリピン人女性のジェンダー観と
沖比国際結婚夫婦間コミュニケーション

第１節　研究の背景と目的

筆者は、これまで、２つのインタビュー調査を行ってきたが、いずれの調査においても、フィリピン人妻と沖縄人夫のジェンダー観（例：性役割観など）には相違が見られ、この相違が夫婦間コミュニケーションにおける問題の要因の一つとなっていることが示された。

例えば、「第３章　沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程」では、フィリピン人妻が沖縄の年中行事に参加することに煩わしさを感じている事例が挙げられた。沖縄の祭事の中で、男性が仕切り、料理など下準備で働きまわるのは女性であるなどの性役割観を押し付けられることに対して葛藤を感じているフィリピン人妻の事例が見られた。

また、「第４章　在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ」のインタビュー調査では、調査協力者全員が、結婚前、フィリピンで暮らしていた時は、自分の父親が家事や育児に協力的であったと答えたが、沖縄に嫁いでから、妻だけに家事や育児が任されていることに驚きを感じたと語った。

このように、ジェンダー観（性役割観など）についての夫婦の考え方の相違は、しばしば、夫婦の葛藤課題となることがあり、さらに、沖縄人とフィリピン人の夫婦の性役割観やジェンダー観は、文化的背景の違いなどから、異なっていることが考えられ、このことがきっかけとなり、沖比夫婦間でのコミュニケーションにおいて、様々な問題が生じることが推察できる。

本稿では、以下の２点のリサーチ・クエスチョンを立て、調査を行い、その結果を考察する。

1）在沖フィリピン人女性は、どのようなジェンダー観を培ってきたのか。また、沖縄人夫との関わりの中で、どのようなジェンダー観を作り上げ、どのような性役割観を実践しているのか。彼女達のジェンダー観は、沖縄人夫とのコミュニケーションに、どのような影響を与えているのか。

2）在沖フィリピン人妻と沖縄人夫の夫婦間コミュニケーションにおいて、どのようなジェンダー観の違いによる言語態度が見られるのだろうか。この言語態度は、フィリピン人妻と沖縄人夫の夫婦間の力関係にどのような影響を及ぼしているのか。

第２節　先行研究

ここでは、「フィリピン人女性のジェンダー観」について、そして、「夫婦間コミュニケーションとジェンダー」についての先行研究を紹介する。

2.1. フィリピン人女性のジェンダー観について

この項では、フィリピン人女性のジェンダー観について知るために、「フィリピンの歴史と女性」、「現代のフィリピン人女性のジェンダー観」に区分して、先行研究を紹介する。

2.1.1. フィリピンの歴史と女性

1）スペイン植民地化以前（～1521 年以前）

冨安（1994）によれば、スペイン統治以前、バランガイと呼ばれる村々に分かれていたフィリピンでは、男女は水に浮かぶ一本の竹が二つに割れて平等に創られたという創造神話があり、もともと女性は男性と平等な立場にあり、商業活動も対等に行っていたという。族長が死ぬとその後を継ぐのは長男であるが、男子が生まれなければ、女子が族長を継ぐことは可能であった。男女ともに読み書きを習い、平等に所有権や相続権が与えられていた。伝統的に、性役割分業の区分はなく、女性は家から外に出て農業に従事し、男性は家にいて家事を行うこともあった。家庭での女性の地位は高く、大きな影響力を持ち、経済的管理能力もあり、子育ての役割も平等であった（冨安、1994:63）。

結婚上の慣習は、女性と男性が平等であり、一夫一婦が通常の形であった。離婚の場合も、子供の養育権や、共有の財産は夫婦の間で平等に分けられ、再婚も自由であった。女性が夫以外の男性と性交渉を持つことは社会で寛大に許され、もし妻が夫以外の男性の子を産んでも、その子は嫡出子とされ、夫は相手の男性を罰することはできたが、妻を棄てることはできなかった（冨安、1994:63）。

このように、スペイン植民地化以前のフィリピンでは、女性も、社会的、経済的、文化的に、ある程度、男性と対等な地位や権利が認められていたことがわかる。男性が女性よりも特権を行使していた側面もあるが、それは制度的なものではなく、慣習的なものだけであった。

2）スペイン統治下のフィリピン（1521 年～1898 年）

16 世紀の前半フィリピンはスペインの支配下におかれ、人々の言葉や生活様式もスペイン化した。カトリックの布教は、蓄妾制度、奴隷制度を廃止して女性の地位を認めたが、一方で離婚を禁止し、再婚も認めなかった。厳格なカトリックの戒律によって、妻を離婚できない男性は愛人を別の家に住まわせるなどの習慣が生まれた。この様に、スペイン社会のマチズモの価値観がフィリピン社会に持ち込まれ、男女の二重規準が産まれた。カトリックの教義は、聖母マリア崇拝のもとに母性を理想化して、女性に高い道徳水準を課すと同時に多産という価値基準によって多くの子供を持つ母親を高く評価するようになった（冨安、1994:64）。

スペイン支配が女性に与えた影響のうち、プラスの結果をもたらしたのが教育の普及であった。1589 年マニラに初めて創設された女子大学では、良家の子女が教育を受け、結婚して子供を産み、つつましく暮らす理想の女性像が培われていった。17 世紀以降、カトリ

ックの宣教に伴っていくつかの学校が作られた。19 世紀には地方に師範学校が開設されヨーロッパの女性達の受けた教育と同レベルの教育が行われた。多くは修道女か、良き妻・母となるためのものであった（冨安、1994:64）。

このように、16 世紀の半ばまでには、フィリピンの共同体は崩壊し、スペインの植民地政策によって、ヨーロッパの階級構造がそのままフィリピン社会に浸透していった。この新しい制度の下で、政治領域における男性の特権が行使され、女性は公式の地位を占めることはなかった。

3）米国統治下のフィリピン（1898 年～1942 年、1945 年～1946 年）

米国統治時代において、フィリピン人女性の生活に変化をもたらしたものは、主に、次の 3 点であると言える。

1）米国資本主義経済がもたらした生産労働と再生産労働[10]の分離

2）米国の自由主義的な思想や行動様式が有産・中産階級女性に与えた影響

3）女性参政権の獲得

米国がフィリピンを植民地にした真の目的は経済、政治的なものだった。米国は資本主義先進国となり、フィリピンを自国の資本主義の膨張、蓄積のために利用した。この時期の経済発展は女性労働、性的分業に大きな影響を与えた。資本主義経済がフィリピンの経済の奥深く浸透し、生産労働と再生産労働は明確に分かれた。以前の女性の独立した生産活動が賃金労働に変えられ、多数の女性が再生産労働に従事するようになった。また、米国の性教義は、フィリピン人の性的習慣に影響を与え、多くの女性が、性行動は出産のためであると信じ、理想の母親、家族像を指向するようになった（エヴィオータ、2000:131）。

一方、米国の教育と文化習慣は有産階級と中産階級の女性の性的、社会的行動に強い影響を及ぼした。自由主義的な思想や行動様式はマニラその他の都市で、女性の振る舞い、服装、考え方を変えた。女性の活動領域は産業、専門職、社会活動の分野に広がっていった。しかし、女性の活動は、自分の階級や、妻、母親としての責任にふさわしい関心に基づいて行われた（エヴィオータ、2000:145-147）。

フィリピンでは、1920 年代、第一波女性運動の波を受けて、女性達の活動が盛んになり、その結果、1937 年には女性に参政権が与えられた。多くのフィリピン人男性が女性の参政権獲得や専門職への就業は家族と家庭生活に悪影響を及ぼすので好ましくないと主張した。これに対し、有産・中産階級の女性参政権論者は議論を投げ返し、女性の政治領域への参加は望ましいと主張した。（エヴィオータ、2000:147-148）。

このように、米国植民地下で、有産・中産階級の女性達が、自由主義的な行動や思想の影響を受けて、生産労働分野に進出し、男性と対等な経済的・社会的・政治的地位を獲得していく一方で、彼女達の再生産労働の領域は、下層の労働者階級の女性が家政婦という

[10] 再生産労働とは、直接生産活動に結びつかない、従って直接に報酬を受け取ることのない労働（間接的に報酬を受け取る労働）。生産活動が円滑に行われるための基盤を支える労働である。例えば、専業主婦の家事、出産、育児のような仕事をいう。（フランスの社会学者、ピエール・ブルデューの言葉）

形で担っていた。女性の間で、有産・中産階級と下層階級の階級格差ができ、下層階級の女性の犠牲のもとに、有産・中産階級の女性の平等が保障された。

4）独立後の女性（1946 年～2000 年）

フィリピンの女性運動の第二波は、1960 年代に登場し 1970 年初頭まで続いた。この運動は、階級支配、外国支配に対する闘争だった。この闘争はで、初めて、女性達は、経済支配や性的抑圧からの女性解放を提起した。

1972 年に戒厳令が布告され、マルコス政権は合法的な運動を禁止し、女性運動のメンバーも地下に潜らざるを得なくなった。政府軍との対峙により、投獄されたり、性的虐待、強姦、虐殺された女性も少なくなかった（エヴィオータ、2000：184）。

マルコス大統領の対立候補者ベニグノ・アキノが 1983 年に暗殺されたのをきっかけに、Peope Power「人民の力」が結集され、マルコス大統領は国外へ追放された。その翌年の 1984 年に女性組織が合同して、ガブリエラ（Gabriera：General Assembly Binding Women for Reforms, Integrity, Equality, Leadership and Action）が結成された。当初、Gabriela は、女性問題に取り組むことよりも、マルコス政権に抵抗するため女性の力を結集することを重視していた。しかし、1986 年のマルコス政権崩壊により、ガブリエラは、ジェンダーの視点から問題に取り組むフェミニスト運動へと方向転換していった（Roces、2010:37）

1986 年に民主主義を取り戻してから、女性運動家たちは勢いをつけていった。様々なセクター（百姓、都市部の貧困層、イスラム教徒女性、先住民、移民、労働者、メディア）の女性たちが、組織を作り、様々な女性問題（女性の健康、リプロダクティブ・ヘルス・ライツ（性と生殖に関する健康・権利）、セクシャリティ、ドメスティック・バイオレンス、レイプ、近親相姦、買売春、女性のための法律、慰安婦[11]など）への取り組みが行われた。特に、非政府組織（NGO）の成長は、目覚ましく、女性の国際会議や国連会議などで活発に発言を行った。1990 年代には、多数の女性組織が生まれ、もはや Gabriela だけでは、フィリピンの女性運動について語れなくなった。こうして、フィリピンでは、女性運動は主要な社会勢力として成長していった。

2.1.2　現代のフィリピン人女性のジェンダー観

フィリピンは、日本と比較して、女性の職業上の地位や専門職者に占める比率が高い。例えば、世界経済フォーラムが毎年発表している『グローバル・ジェンダー・ギャップ・レポート』（2014）によれば、男女平等指数ランキング 142 か国中、フィリピンは 9 位なの

[11] 日本軍は、1941 年 12 月、アメリカ領であったフィリピン・ルソン島へ上陸し、直ちにマニラを陥落させ、1942 年 1 月から軍政を実施した。日本軍の軍政下で、フィリピン人は激しいゲリラ戦を展開し、抵抗運動を行った。日本軍はゲリラ討伐を理由に残酷な作戦を実行した。フィリピンでの BC 級戦犯裁判では、起訴 381 件の内、住民虐殺が 138 件、強姦が 45 件となっている。フィリピンでは、マニラをはじめ、占領地の各都市に軍慰安所がつくられ、日本人、朝鮮人、中国人の慰安婦が送り込まれたが、現地のフィリピンの女性も慰安婦にされた。マニラには、12 軒、北部ルソン島に 1 軒、中部ビサヤ地方に 1 軒、パナイ島イロイロ市に 2 軒、他にもセブ島、レイテ島、南部ミンダナオ島にも慰安所があり、朝鮮人、台湾人、フィリピン人の慰安婦が従事させられていた。
（http://www.awf.or.jp/1/philippine-00.html）

に対し、日本は 104 位である[12]。また、国会の女性議員の比率は、192 か国中、フィリピンは 50 位で 27.20%なのに対し、日本は 156 位で 9.50%[13]、管理職に占める女性の比率は、フィリピンが 54.8%に対し、日本は 10.6%である[14]。男性に対する女性の所得比率は、フィリピン 0.59 に対し、日本 0.46 となっている。このように、女性の経済・政治的な地位では、フィリピンより日本が遅れをとっている[15]。

酒井（1994）は、中間階層のフィリピン人女性の労働状況について調査した。中間階層のフィリピン人を対象に、「職業で性による差別がありますか」という質問を尋ねたところ、「無い」と答えた人が 68%に上った。これは、中間層では、男女の所得格差がほとんどなく、職場での昇進・昇格がほぼ男女平等に行われているためであった。また、酒井（1994）は、仕事と家事の両立について調査しているが、例えば、北欧・欧米諸国を別として、多くの資本主義国では、女性の就業率が、20 代で高く、30 代で一度低くなり、子育て後また高くなるという「M 字型」をしているが、フィリピンでは、この傾向が当てはまらなかった。

つまり、中間層のフィリピン人女性は、仕事を継続するために結婚や子供を産むことをあきらめたり、日本のように子育てのために仕事を中断して家庭に入る女性がほとんどいないことがわかった。社会保障制度や女性が働くための社会的整備が未発達であるフィリピンにおいて、女性達は結婚や子育てをどのように乗り越えているのか。酒井（1994）は、貧富の差が大きいフィリピンでは、裕福な家庭では家庭の雑事はメイドの仕事であると述べる。エリート女性達が、社会の色々な舞台で活躍できるのも、保育所などの社会的設備が未発達なフィリピンでは、貧困層の女性達が低賃金で子守やメイドとして、上層あるいは中間層の働くエリート女性達を支えているからであると指摘している（酒井、1994:55-56）。

花崎（1994）は、フィリピン人の性別役割分業観を世帯月収ごとに調査している。「男は外で働き、女は家族を世話すべき」という性別役割分業について、月収 2000 ペソ以下では、74%が、2001～3000 ペソでは 62.4%が、3001～5000 ペソでは 56.5%が、5001～10000 ペソでは 48%が、10001～20000 ペソでは 36.3%が、20001～30000 ペソでは 25.4%が肯定的であった。月収が増加するごとに性役割分業に対する否定の割合は増加しており、月収が低くなるごとに性別役割分業に対する肯定の割合が増加していた。よって、下層階級に比べて、中間階層が、また、中間階層より上級階層が性別役割分業に否定的であり、月収が多ければ多いほど、男女平等志向が強くなることがわかった（花崎、1994:98）。

以上のような現代のフィリピン人女性のジェンダーに関する状況をまとめると、統計上、日本と比較して、フィリピンは、女性の職業上の地位や専門職者に占める比率が高い。し

---

12 男女平等（ジェンダー・ギャップ）指数ランキング・国別順位（2014）－世界経済フォーラム、（http://memora.jp/ranking/world/wef_global_gender_gap_report_2014.php）

13 国会の女性議員比率　国際比較統計・推移　http://www.globalnote.jp/post-3877.html

14 「「2020 年 30%」の目標の実現に向けて」内閣府・男女共同参画推進連携会議（http://www.gender.go.jp/kaigi/renkei/2020_30/index.html）

15

かし、それは、社会福祉の進んだ北欧諸国などのように働く女性の社会保障制度や社会的整備が整っているからではなくて、フィリピンには、階級的格差があり、中間階層・上級階層の女性達が、貧困層の女性をメイドとして雇うだけの経済的余裕があるため、家事や育児をメイドに任せて、企業、官庁、学校で働けるという条件が整っているからである。こういう階級格差があるからこそ、一部の中間階層以上の女性の経済的・社会的地位が保障されているという状況がある[16]。

2.2. 夫婦間コミュニケーションとジェンダーについて

タネン（2003）は、著書『わかりあえる理由、わかりあえない理由』で、男女は生まれながらにして異なった文化の中で育つものであるため、両者間の会話は、「異文化間コミュニケーション」であると主張している。会話スタイルにおける性差をきちんと認識することで、はじめて男女間の会話における真の問題に立ち向かうことができるのであり、それを話し合いで解決するための真の「共通語」を手にすることができると述べている（タネン、2003:15）。

以下、タネン（2003）の著書を参考に、男と女の会話に見られるコミュニケーションパターンの相違を見ていく。タネンは男は＜地位＞で話し、女は＜和合＞で話すと指摘している。つまり、男は互いに一段上か一段下かという＜地位＞を重んじる階層的な序列の中に身を置いて行動していると言う。そうした世界では、会話は自分の優位を獲得または維持し、他人から見下されたりなめられたりしないようにわが身を守るかけ引きだと考えられる（タネン、2003:33-34）。一方、女は互いに親密か疎遠かという＜和合＞を重んじる人間的な結びつきのネットワークの中に身を置いて行動していると言う。そうした世界では、会話は互いを認め合い、支持し合い、合意を生み出し、周りからのけ者にされないためにわが身を守るかけ引きであると指摘している（タネン、2003:34）。男は社会を「競合」の場として捉え、その中で自らの地位を築くために奮闘し、女は社会を「共同体」として捉え、その中で互いの「和合」を築き、孤立を避けるために奮闘しているのである（タネン、2003:34）。

また、タネンは、男は「非対称性」的関係を求め、女は「対称性」的関係を求めると指摘する。＜和合＞を支える人間関係の本質は「対称性」であり、＜地位＞を支える人間関係の本質は「非対称性」であると述べる。ここでいう「対称性」とは、人と人は同じであり、互いに近しい存在であって、横並びの一線に立っているという相互関係で、「非対称性」

---

[16] 松並（2007）は、フィリピン社会においては、男女格差の問題よりも、階層格差の方が深刻な問題であると指摘している。中間階層以上の女性達は経済的に自立していて、男女平等意識が高いということが言えるが、その中間階層の女性達の経済的自立を支えているのは、底辺の労働者階級の女性達である。労働者階級の女性達は、低賃金、劣悪な労働環境、自分たちの育児・家事労働など過重な負担に耐えながら働き続けなければならない。労働者階級の女性達は、階層格差の犠牲となり、伝統的性役割分業に縛られ、二重の負担を強いられている状況がある。

とは、人と人は異なり、互いに離れた存在で、階層の中で上下の異なった地位に立っている相互関係である。＜和合＞のもつ「対称性」が女の「共同体」を作り、＜地位＞のもつ「非対称性」が男の「競合」を作り出すと述べている（タネン、2003:38）。

ここで、タネンの指摘した男女のコミュニケーション・パターンの相違をまとめてみると、以下のようになる。

1）男は＜地位＞で話し、女は＜和合＞で話す。

2）男は「非対称性」的関係を求め、女は「対称性」的関係を求める。

以上のように、男は、相手との会話において、常に誰が上で誰が下かという地位を求め、相手とは独立した自己を確立し、互いに競合し合いながら、上下関係を確認する「非対称性」的関係を求める傾向がある一方で、女は、相手との会話において、互いの相違が最小限に抑えられ、平等・対等な関係の中で、親和が求められる和合を大切にし、「対称性」的関係を求める傾向があることがわかる[17]。

本稿では、タネンの指摘する男女のコミュニケーション・パターンの相違を参考にしつつも、会話の背後にある不平等な男女の関係性がコミュニケーションに反映されているという視点[18]を導入して、在沖フィリピン人女性と沖縄人夫の夫婦間コミュニケーションで生じる非対称性的・対称性的関係を求める言語態度を分析し、これらの言語態度の背後に見られる沖比夫婦間の力関係について考察していく。

第3節　結果

本章の調査協力者は、E さん、K さん、L さん、M さん、N さん、O さんの 6 人の在沖フィリピン人女性である。（本章の調査方法と調査協力者の属性については、「第 1 章　序論　第3節　調査方法と調査協力者の属性」を参照。）ここでは、この 6 人のフィリピン人女性を対象にしたインタビュー調査の結果を基に、「在沖フィリピン人女性のジェンダー

---

17 れいのるず秋葉（2004）は、デボラ・タネン（2003）の著作『わかりあえる理由、わかりあえない理由』について、この本では、男性文化と女性文化はもともと異文化のようなものとされ、男と女の問題が異文化間コミュニケーションには付き物だと誤解され、＜差異ではあっても差別ではない＞を含意する文化相対論に還元されやすいと述べている。こうした文化相対論的アプローチを＜性差別の現実を覆い隠すもの＞として批判しており、文化相対論アプローチは、＜言語と性差＞研究全体から見れば大きな影響はないと指摘している（2004:14）。

18 サリー・マコネル・ジネー（2004）は、「女たちによる意味の（再）生産」の論文の中で、基本的には、異性間会話では、男は女の上位に立つ傾向があると指摘している。つまり、マコネル・ジルは、混成会話で会話を支配するのが男、支持するのが女というパターンが決まっているのは、相対的に文化が違うからという問題ではなく、会話の背後にある不平等な男女の関係性がコミュニケーション・パターンに反映されているからで、これは政治的な問題であると言っている。この不平等な言語コミュニケーション・パターンは、会話を支配している政治構造の内側で生産され、再生産されるものである。マコネルは、女たちと男たちが力を再配分することによって、フェミニストが望む新しい言語共同体を構築することができると主張している（32）。

観」、「家庭内の性的役割分業の実践」、「夫婦間コミュニケーションにおいて見られる言語態度」について述べる。

3.1. 在沖フィリピン人女性のジェンダー観

この項では、在沖フィリピン人女性のジェンダー観を知るために、「調査協力者の生育環境」「男／女らしさに関する意識」「性的役割分業と男女共同参画への意識」「男女平等社会の現状について」の 4 つの区分に分け、インタビュー調査の結果を報告する。

3.1.1. 調査協力者の生育環境について

本稿では、調査協力者の生育環境について知るために、インタビューで、以下の 3 つの質問を行った。1）子供の頃、家庭で決定権を握っていたのはだれか。2）母親の就労状態について。3）父親の子育て参加や家事への姿勢。

まず、1）の質問について、家族の決定権を握っているのは、「父親」であると答えた女性が 6 人中 4 人であった。「母親」と答えた人は 2 人であった。例えば、M さんは、父親の職業が兵隊だったため、父親は家族の規則を作って、子供達を厳しくしつけていた。また、O さん、L さん、K さんも、家族のことは、全て、父親が決定し、母親と子供達はそれに従っていたと語った。一方で、「母親」が決定権を握っていたと語った女性は、父親が仕事でほとんど家にいなかったので、家のことは全て母親に任されており、母親が家のことを決めていたと語った。半数以上の女性が、家族の決定権は父親にあったと答え、残りの女性も、父親が仕事で忙しくて不在の場合にのみ、母親が父親の代わりに決定権を行使していたようである。

次に、2）の質問について尋ねたところ、母親は専業主婦だったと答えた女性が 3 人、残りは、洋裁などの内職（1 人）、軒先での小さなサリサリストアの経営（1 人）、市場で場所を借りて行う商売（1 人）など零細商業に携わっていた。父親の仕事は、軍人、警察官、自営業、職人などであった。よって、家族の主な収入源を稼ぐのは父親であり、母親は、専業主婦、または、零細商業に携わり、家計を補助的に助ける役目を果たしていた。

3）の質問について尋ねたところ、L さん以外、全ての女性が、自分の父親は、子育てや家事に協力的だったと答えた。例えば、O さんの場合、家庭での料理、子供の世話、買い物は父親の仕事だった。父親は母親を大切にしていたので、あまり、母親に負担をかけないようにしていたと語った。E さんの父親も家事や育児に協力的であり、E さんは、フィリピンでは、男が家事や育児を手伝うのは当たり前だと語った。

彼女達の語りから、家族の主な収入源を稼ぐのは、父親であり、父親の収入を補助的に助ける役割をしているのは、母親であることがわかった。この点は、沖縄を含め日本の一般的な核家族の形態と一致していた。しかし、今回のインタビュー調査で、フィリピンでは、父親は外で働くと同時に、家庭でも、家事や育児に協力的であり、フィリピン人の父親は、外でも家でもよく働く印象があることがわかった。これは、外で働いて、家では育

児や家事を妻にまかせっきりの沖縄の伝統的な男性の印象とは異なっていた。

3.1.2. 男／女らしさに関する意識

調査協力者の男／女らしさ[19]に関する意識について知るために、以下の 5 つの質問を行った。1）今の自分の性に満足しているか。2）自分のことを女らしいと思うか。3）「女は女らしくあるべき」という考えに賛成か反対か。4）他者から「女らしくあれ」と求められた場合どう感じるか。5）両親はあなたを女らしく育てたと思うか。

まず、1）の質問について、N さんを除いて全員が、「自分は女であることに満足している」と答えた。N さんは、「今度、生まれ変わるとしたら男になりたい」と答えた。その理由について、男の方が「何でもできる」「器用だから」と答えた。

次に、2）の質問について、4 人の女性が「自分は女らしい」と答え、2 人が「自分は女らしくない」と答えた。「女らしくない」と答えた理由について、「自分は性格が男っぽい」「男性のする仕事にあこがれる」というものだった。

3）の質問について、6 人全員が、「女は女らしくあるべき」という考え方に賛成だった。

4）の質問について、他者から「女らしくしなさい」と求められた時、3 人の女性は、「自分は自分なので気にしない」と答えた。残りの 3 人は、「嫌な気はしない」と答え、周りが「女らしくしなさい」と求めるのであれば、それに従うと答えた。

最後に、5）の質問について、4 人の女性が、「子供の頃、女の子は将来、結婚したら家庭に入るので、家事をきちんとできるように教えられた」と答えた。残りの 2 人の女性は、「男の兄弟と分け隔てなく、自分らしく育てられた」と答えた。

以上のように、6 人中 5 人の女性は自分が女であることに満足しており、また、自分は女らしいと思っていた。また、全員が、「女は女らしくあるべき」という伝統的な考え方に賛成であった。また、6 人中 3 人の女性が、他者から「女らしくしなさい」と求められたら、それに従うと答え、さらに、6 人中 4 人の女性が、子供の頃、女の子だからということで家事を教えられたと答えた。よって、本稿の調査協力者の男／女らしさに関する意識については、どちらかというと、「男らしさ」「女らしさ」に縛られない男女平等的意識よりも、「男らしさ」「女らしさ」に従うという意識を持っている女性がいることが推察できる。

3.1.3. 性的役割分業と男女共同参画への意識

調査協力者の性的役割分業と男女共同参画への意識を知るために、以下の 3 つの質問を行った。1）「男は外で働き、女は家庭を守る」という考えに賛成か反対か。2）「女性は子供ができたら、仕事を辞めて、子育てに専念した方がいい」という考えに賛成か反対か。3）「子供ができても、協力して共働きをする」という考えに賛成か反対か。

---

[19] フィリピンはカトリック教信者が多いため、聖母マリア崇拝のもとに母性を理想化して、女性に高い道徳水準を課すと同時に子供を持つ母親を高く評価する傾向がある。仕える女性、仕える母親という処女マリアを強調し、マリアを女性の理想像として崇拝する傾向がある。フィリピン人女性にとって、「女らしさ」とは、この処女マリアの理想像基づいて構築された部分が大きいと考えられる。

まず、1）の質問について、4 人の女性が「男は外で働き、女は家庭を守る」という考えに反対であった。男も女も仕事を持った方がいいという考え方であった。残りの 2 人は、「どちらとも言えない」という回答だった。

次に、2）の質問について、L さんを除いて 5 人の女性が、「女性は子供ができたら、仕事を辞めて、子育てに専念した方がいい」という考えに反対だった。子供を産んでも、仕事をしたければ、続けた方がいいという考え方だった。賛成だった L さんは、仕事をすると、子供達のために学校の準備をしたり、食事を作ってあげる時間が無くなるからという理由だった。

3）の質問について、L さんを除く 5 人の女性が「子供ができても、協力して共働きする」ことに賛成であった。やはり、男も女も、子供が産まれても、仕事をしたければ、協力して共働きする方がいいという考え方であった。

以上のように、調査協力者の性的役割分業と男女共同参画への意識については、男も女も伝統的な考え方に縛られず、仕事をしたかったら、した方がいい、子供を産んでも、女性が仕事を辞める必要はなく、男女、共に協力し合って働き続けた方がいいという考えであった。性的役割分業と男女共同参画への意識については、本稿の調査協力者は、比較的、男女平等主義的な考え方を持っていることが窺える。

3.1.4. 男女平等社会の現状について

調査協力者が沖縄とフィリピンの男女平等社会の現状について、どのように考えているかを知るため、以下の 2 つの質問を行った。1）沖縄は男女平等社会だと思うか。2）沖縄とフィリピンはどちらが男女平等社会だと思うか。

まず、1）の質問について尋ねたところ、「沖縄は男女平等社会だと思う」と答えた人は、6 人中 5 人であった。その理由として、結婚して子育てしながら仕事をしている女性が多いこと、そして、建設関係や運転手など、フィリピンでは男性の仕事と考えられている職業に女性が進出していることを挙げた。

次に、2）の質問について尋ねたところ、「フィリピンよりも沖縄の方が、男女平等社会である」と答えた人は、6 人中 4 人であった。その理由として、沖縄には、共働きの夫婦が多いことを挙げた。一方で、「沖縄よりもフィリピンの方が、男女平等社会である」と答えた人は 6 人中 2 人であった。その理由として、フィリピン人の男性は、家事や育児に協力的であることを挙げた。

以上のように、本稿の調査協力者は、沖縄の方が男女平等社会だと思っている女性とフィリピンの方が男女平等社会だと思っている女性の 2 つのタイプに分かれた。沖縄の方が男女平等社会であるという理由については、例えば、フィリピンでは男性が就くと思われている職業に女性が進出していること、そして、共働き夫婦が多いことを挙げた。フィリピンの方が男女平等社会であるという理由については、フィリピン人男性の方が、沖縄人男性より家事や育児に協力的であるというものだった。

3.2. 家庭内の性的役割分業の実践

在沖フィリピン人女性の夫婦間での性的役割分業の実践について知るため、本稿の調査協力者に、「あなたの夫は家事や育児に協力的ですか。」という質問を投げかけ、彼女達の語りを引き出した。その結果、「夫が家事や育児に協力的である」と答えた女性は 2 人、「夫が家事や育児に協力的でない」と答えた女性は 2 人、「以前は協力的でなかったが、現在は協力的になった」と答えた女性が 2 人であった。この結果をまとめると、彼女達の性的役割分業の実践は次の 3 つのタイプに分類することができる。

1）平等主義的性的役割分業の実践
2）伝統主義的性的役割分業の実践
3）伝統主義的実践から平等主義的実践への変化[20]

この項では、この 3 つのタイプの性的役割分業の実践について、在沖フィリピン人女性の語りを通して見ていく。

3.2.1. 平等主義的性的役割分業の実践

M さんと N さんの夫は家事や育児に協力的であった。例えば、M さんの夫は、家庭で、洗濯や皿洗い、料理をする。平日、M さんが仕事で遅く帰宅する時には、夫が料理を作っている。夫は子どもの面倒もよく看るし、娘は、夫によくなついているという。N さんの夫は、家庭内で、洗濯係をしていた。また、夫が子供達を保育園に送迎してくれた。N さんの夫婦は共働きなので、どちらか早く帰宅した方が、食事の準備をした。

ここでは、M さんの語りを紹介したい。

語り 1　**沖縄は、男性はあんまり、でも私の旦那は、やりますよ、洗濯とか料理とか、やってますよ、手伝い、お互いに、うん、でも、私仕事する時、旦那さんが、ご飯作って、夕飯、でも、休みの時、土曜日日曜日、私が、全部やるんです。≪じゃあ、旦那さんは、housekeeping とか。≫あー、やります。（子供の面倒）も、やります。…食事の準備する。私も、たまに、気分が悪い時、旦那さんが全部やる、そうそう。…皿洗いも、うん。うん、洗濯も。掃除も。買い物も、必ず一緒に。たまに自分で。（M さんの語り）**

M さんの語りによると、M さんの夫は家事を全般的にやる。M さんが仕事の時は、夫が夕食を作り、M さんの仕事が休みの土・日曜日は、M さんが家事を引き受けた。夫は子供の面倒も看てくれるし、M さんが病気の時は、夫が家事を全部やってくれる。このように、M さんの夫婦は、共働きで、夫も妻を手伝い、協力して、家事・育児の分担をしている様子が窺えた。

3.2.2. 伝統主義的性的役割分業の実践

O さんと L さんの夫は家事や育児に協力的ではなかった。例えば、O さんの夫は、仕事

[20] 「平等主義的性的役割分業の実践」を行っている女性が 2 人、「伝統主義的性的役割分業の実践」を行っている女性が 2 人、「伝統主義的実践から平等主義的実践に変化」した女性が 2 人いた。それぞれ、2 人ずつに分かれ、明らかに「性的役割分業の実践」に違いが見られたので、3 つに分類した。

が忙しく、ほとんど家にいないので、家事や育児を手伝わなかった。L さんの夫は、自分の物だけは洗濯したり料理を作ったりすることはできたが、家族のためにはやらなかった。また、子供のことを気にかけて、妻に尋ねることはあっても、実際に子供の面倒を看ることはしなかった。以下、O さんの語りを紹介する。

語り 2　≪旦那さんは、家事とか、育児には協力的ですか。≫家事はしないです。何もしないね。あんまりしないですね。（子供の世話も）私が全部。≪洗濯、掃除、買い物。≫やらないです。…大変な。≪夫にもっと協力的になってほしいと。≫そうですね。あのね、もっと協力的に、自分が悪いのかなあと思ったりもする、それとも、親 が悪いのかわからないんですけど、それとも仕事が忙しくって、お家にいなかったので、そういう、育児、最初からやってないんですね、だから、教えることもできないんですね、最初から一緒にやっていれば、教えることもできたかな、そしたら、一緒にやることできたんじゃないかな、でも、いまさら、子供も大きくなってて、やっぱり、年取ってて、いまさらやる、…だから、しょうがないですよね、で、例えば、この人、husband が小さい時から、もう、親が教えてくれたら、当たり前のようにやってくれると思うのかな、でも、husband はお父さんもいないんですよ、背中見れないんですよ、お父さんもいなくて、2 歳の時に亡くなったから、男として、お父さんとしての姿が見れなくて、そういうのも悪い、影響あるのかなと思って、だから、たまには嫌なんだけど、まあ、いろいろなこと考えて、許されるじゃないかなと。≪O さんは変えようと思いますか。≫遅いと思ってます。変えられないかな。（O さんの語り）

O さんの夫は、ほとんど家にいないので、家事や育児は妻にまかせっきりである。夫に家事や育児を教えようと思っても、家にいないので教えることができない。夫は、2 歳の時に父親を亡くし、母子家庭に育った。母親が全て家のことをやっていたので、家事や育児は、当然、妻の仕事であると思っていた。もし、幼い頃から、母親が息子に家事を教えていたら、今頃、夫はもっと協力的になっていただろうと語った。O さんは、もう、今さら、夫を変えようとしても遅いと思っている。以上のように、O さんの夫は、家事や育児は妻の仕事であるという考えを持っており、妻も夫の考えや態度は変わらないと思って従っている。

3.2.3. 伝統主義的実践から平等主義的実践への変化

E さんと K さんの夫は、結婚当初、家事や育児に協力的ではなかった。しかし、彼女達は、夫に家事や育児の仕方を教え、夫が家事や育児に参加できるよう促したので、夫は徐々に協力的になっていった。ここでは、E さんの事例を紹介する。

語り 3　親戚、うん、親戚だったから、「おーい、お茶」、座ってるだけだのに、と思うんだけど、「新聞、持ってこい」、は、テレビ見てるだけなのに、奥さんは仕事してるし、奥さんは台所ですぐご飯作ってから、それで、また、新聞？え、こんななのおと思うぐらい、もう、よかった、旦那こんなじゃないから、あった。…あ、年輩だからね、やっぱし、あー、昔、こんなだなあと思って、もう、家で、旦那、こんなしたくないなあと思う、もあった、だから、旦那はしな

い、だから、旦那はわかってる。≪じゃあ、今は変わってきている。≫変わってるんじゃない、でも、最初から、私はもう、旦那は、しないから、私は、もう、パンツはこっち、はい、こっちはタオル、自分でもって、とにかく、場所、…だから、旦那はもう、わかってる、だから、これは言わない、自分は最初からもう、こんなしてたから、うん、何もしてないんだったら別に、でも、旦那は今はもう、今まで、もう最初からだから、もう。≪旦那さんは、子育てとか家事とか協力的。≫まあ、最近っていうのか、子供産んでから、どんどん大きくなってから、一緒にやってる、洗濯とか。≪食事は？≫作るよ。≪洗濯、掃除？≫もう、教えてから。そうそうそうそう、最初はやらないよ。最近は、買い物もできるし、だから、子どもができてから、もう少しずつ。うん。もう、教えた。…うん、だって、いつもだけ、私は大変でしょ、仕事もしてるし、うん、子供の面倒も、看るもしないといけないし、もう、じゅくのも、長男が、何ていう、喘息だったから、大変だった、うん、しょっちゅう病院、夜中、病院。(E さんの語り)

E さんは、夫の親戚の家で、居間でテレビを見て座っている親戚の男性が、台所で忙しく働いている妻に向かって、「おーい、お茶」「新聞持ってこい」と言っている様子を見て驚いている。E さんは、自分の家庭では、夫にこのような態度をとってほしくないと思ったので、パンツやタオルの場所を夫に教えて、自分の物は自分で取りに行くように促したり、子供が産まれてからは、掃除、洗濯、皿洗い、食事の作り方を夫に教えている。また、E さんの長男は喘息だったので、病院へ連れて行ったり、子供達を塾へ送り迎えするのは夫がやるようになった。このように、E さんの夫は、最初は、家事や育児に協力的ではなかったが、E さんが、夫に家事や育児を教え、協力するように促したので、夫の態度も非協力的なものから協力的なものへと変えられていった。

3.3. 夫婦間コミュニケーションに見られる言語態度

沖比夫婦間コミュニケーションにおいて、夫婦の間で、どのような関係性が構築されているのかを探るために、本稿の調査協力者を対象に、「夫婦間で上下関係（夫が上で、妻が下）を感じることがあるか」という質問を行ったところ、N さん、O さん、L さんの 3 人が「上下関係を感じることがある」と答えた。一方で、M さん、E さん、K さんの 3 人が「上下関係を感じたことがない」と答えた[21]。

このような上下関係や平等関係がどのように構築されているのかをさらに探るために、彼女達に、1）非対称性的関係を求める言語態度と 2）対称性的関係を求める言語態度についての質問を行った。

1）の非対称性的関係を求める言語態度とは、一般的に男性に見られる態度であることが知られている。先行研究では、男性は、相手との会話の中で、命令したり、何かを教えたり、誰が上で誰が下かという非対称性的関係や競争的関係を求める傾向があることが実証

[21] 「上下関係を感じる」女性と「上下関係を感じない」女性の夫婦の年齢差を比べたところ、「上下関係を感じる」女性は、夫との間に 40～10 歳以上の年齢差があった。「上下関係を感じない」女性は、1 人を除いて、2 人は、夫との間に 10 歳以下の年齢差があった。夫との年齢差が上下関係を感じる要因の 1 つであることも推察できる。今後、インタビューを重ねて検証したい。

されている（タネン、2003：中村、2001）。本稿の調査協力者である沖比夫婦の間でも、特に夫の態度にこのような男性に一般的な言語行動が見られるかどうかを知るための質問を行った。例えば、「夫は妻に命令したり、怒鳴ることがあるか」「夫が妻に説教をすることはあるか」「夫が妻の話をさえぎったり、話題を変えることがあるか」「夫が妻に相談しないで一人で決めることがあるか」などの質問を行った。

2）の対称性的関係を求める言語態度とは、一般的に女性に見られる態度であることが知られている。先行研究では、女性は相手との会話の中で、提案したり、褒めたり、丁寧な言葉を使って、相手との対等な関係を築き、対称性的関係を求める傾向があることが実証されている（タネン、2003：中村、2001）。沖比国際結婚夫婦の間でも、このような女性に一般的な言語行動が、特に夫の側に、見られるのかどうかを知るための質問を行った。例えば、「夫は妻に提案することがあるか」「夫は妻を褒めることがあるか」「夫は妻の話を傾聴するか」「夫は妻に共感するか」などの質問を行った。

その結果、全ての調査対象者の語りの中で、1）非対称性的関係を求める言語態度と、2）対称性的関係を求める言語態度の両方が確認された。しかし、夫婦関係で上下関係を感じたことがあると答えた 3 人の女性の語りの中で、夫の非対称性的関係を求める言語態度が見られ、上下関係を感じたことがないと答えた 3 人の女性の語りの中で、夫の対称性的関係を求める言語態度が見られる傾向があった。

ここでは、彼女達の語りを通して、1）非対称性的関係を求める言語態度、2）対称性的関係を求める言語態度について詳しく見ていきたい。

3.3.1. 非対称性的関係を求める言語態度

N さん、O さん、L さんは、夫との間に上下関係を感じることがあると答え、この 3 人の語りの中で、夫が非対称性的関係を求める言語態度をとっている様子が見られた。この項では、この 3 人の女性の語りを紹介する。

まず、初めに、N さんの語りを紹介する。

語り 4　うーん、説教、結構、説教されたかな。うん。やっぱり、生まれも育ちも違うさあね。うん、やっぱり、説教、この件で、説教された。≪例えば？≫うーん、そうだね、やっぱり、何ていうんですか。私はやっぱりね、生活も違うさあね。こっちと。うん、日本とフィリピンも生活が違うから、うん、その件で説教された。「あっちは、こんなして食べるかも知らん、こっちはこんなして食べるんだよ」みたいな感じで。…うん、料理の仕方とか。≪もう夫に従う？≫そうそう、あっちに従うんですね。…うん、（夫に）任した。…そう、その方が平和。あっちも年上だし、もう、あっちに任せて。あっちのいいように。もう反対したら、また、喧嘩になるから。うん、それより、うん、はいはい、こっちに、うん、従います。（N さんの語り）

N さんは、日本人とフィリピン人の生活態度が違うという点について夫に指摘され、N さんが日本人の生活態度に合わせるように説教されることがあったと語った。例えば、料理の仕方を指摘され、フィリピンのやり方ではなく、日本のやり方で料理を作るように促さ

れた。夫に説教された時、N さんは、夫の言う通りにした。その理由を、N さんは、もし、夫の言うことに反対すると、喧嘩になるので、夫に素直に従う方が、家庭が円満で平和になるからだと語った。

次に O さんの語りを紹介する。

語り 5　≪何かいろいろ教えたりとか。≫そうですね、教えたりしますね、よく怒られる、怒られるっていうか、言われるっていうのが、フィリピンの、あー、時間守ること、守らないんですよね、フィリピン人、1 時間、30 分遅れるとか、遅刻するとか、そういうのが当たり前なんですよね、時間も守らない人が多い、なので、husband も時間守らない、それで、怒る、怒るっていうか、もうイライラする。…うん、家族、自分は、例えば、あの、集まり、集まりで、家族で集まるんだったら別に 5 時だったら 5 時で、ぴっしり来ないといけないっていうのなくていいんじゃないですか、だけど、どんな人でもどんな時でも、よく、そこが 5 時だったら、5 時でぴったし、か、5 時前にはいる。…でも、だから、で、小っちゃい子がいると、準備ができない時は、本人はもう、行く、万端、もう行くって感じなんですよ、でも、ねえ、お母さんは、これもやらないといけない、これもやらないといけない、遅くなるんですよね。…出るの、でも、本人は、これまで待ってる。それで、時間だけは守ってみたいな話するんですよ、で、この、これが、いつものあれ、説教みたい、これは、大事なのよね、時間はね。（O さんの語り）

フィリピンにはフィリピン・タイムというのがあって、約束の時間から 30 分～1 時間、遅刻することはよくあるとのことである。夫は、時間を守らないフィリピンの習慣に対して、よく思っておらず、妻が時間を守らないことに対して怒った。例えば、家族で外食の約束をして、時間通りに、妻や子供達が来ない時、夫は怒った。O さんは、母親として、子供の支度を手伝ったり、どうしても遅くなってしまうのだが、夫は、そんな妻の苦労にはお構いなしに怒った。そして、時間だけは守るようにと説教を始めた。さらに、O さんの語りを見てみよう。

語り 6　だけど、あ、厳しいのはね、沖縄の文化とかやらないといけないことは厳しいなんですよ。…だから、必ず、厳しく、たぶん、それが、押し付けなのかもしれない、なんか、あの、やるべき、これだけ、強いのかも。お盆、正月、あいさつ回りはかならずやらないといけない、自分は嫌なんですよ。…あの、いやになってくるというのがあるのかなあ、で、すごく、いやなって来る時に、「自分たちだけで行って」言うんですよ、自分が言うんですよ、「一緒に行かないといけない、それかならず行こう」って、言う、だけど、自分は「嫌っ」て、「嫌っ」て言えないんですね。子どもに大事に、文化だから、教えないといけない、だから、それも「嫌っ」て言えないんですよ、自分の意見が言えない、の時がそれなのかもしれない、これ大事だから、沖縄の文化は。…親戚周り、お盆はみんなで、お盆の終わりとか、お迎えとかそういうのがあるんですよ。…で、お正月は、挨拶しないといけない、自分は、あの、あんまり、もう、シャイなので、行きたくないんですよ、だけど、行く、行かないといけない。でも、行かないと、子どもたちも行かないんじゃない、教えないといけないから、嫌でも行く、だから、それが、押し付け、husband はこれは大事だから、これはかならず行かないといけないんだけど、

行かないと子供も行かない、でも、必ず行く、子どもは連れて行きたいから、だから、子どもが嫌でも、「行こうー」って言ったら、みんな行くんですよ、「はーもう、早く、行こう行こう行こう」ってあんな感じ。（O さんの語り）

沖縄には、盆や正月には、親戚周りをするという習慣が根強く残っている。シャイな O さんは、この親戚の挨拶回りが苦手だった。しかし、夫は、妻は家族と一緒に親戚周りをしなければならないと言うので、嫌といえなかった。母親として、子供達にも、沖縄の文化を教えないといけないので、O さんは、渋々、親戚周りをした。夫は、母親が行かないと、子供も行かなくなるので、沖縄の習慣を子供達に教えるためにも、妻はかならず、親戚周りに行くべきだと思っている。O さんにとって、これは、夫からの押しつけに感じている。

最後に、L さんの語りを見てみよう。

語り 7　恨みがいっぱいあるから。恨みがいっぱいあるからね。いろんなことがアレして、冷たすぎて。それとも、自分、あれと思ってるの、自分、なんか、お母さん、あの、夫婦、夫婦の権利が、なんか、しなかった。なんか、二人一緒の時、権利の、何の権利、例えば、あの、なんか、生活のあれは、もう、これ、私に勉強させたい、それじゃなくて、自分のお姉さんにはさせる。だから、それが、私の力、なんか信用してないねえとかそんな思って。…例えば、なんか、あの、前、事故遭って、外、病院、何か月も行ってたから、ほんとは、なんか、電気代とか、いろいろのは、私、自分、今まで自分でやってるから旦那、支払。私、病院にはできないさあね、それで、私に出せなくって、自分のお姉さんにお金渡して、これを支払してと、そんな、っていうのは、なんか、お金取りたいんじゃなくて、自分もお嫁さんだから、結婚した人だから、それ、私達の、あの、なんか、自分の、なんか、責任あるんだよねっとか、ね、それが、させないで、だから、どういう意味なのとか、そんな。だから、それも、一つの恨み、なって、ねえ、と、あの、子供になんか、私の息子が、肺キキュウなって、あの、話ししてないさあね。いろいろの相談もしないから、それでね、息子が病院の、あの、なんか、通ってるのが、ほしい、その時、あの、息子が手術したから、で、学校行ったら、部活やるかやらないか、そんなで、外通ってて、私に相談しないで、連れてきてちょうだいと、なんとか、先生といろいろ話あるから、私に相談しないで、お姉さんたち、お姉さんに、連れてきてもらってる。この、その時に、あの、予約あるからって、何も言わないで、あの、自分の兄弟に、連れてきてとかそんな言ってるね。…あと、もう一つ、その時、聞いたときに、あの、息子が、なに、その時、「うるさい」とか言ってたから、私、何の話だっけ、「うるさい」とか言ってたよ。私も、うーん、なんか怒ってて、私に、息子のこと、病院の話、細かいこと、聞きたいから、自分が連れてきてるんではないからさ、お姉さんが。だから、いろいろ小さい時に、聞きたいさ、もちろん、自分の息子、その時に、あの、怒ってて、「うるさい」とかそんな言ってるんだよ。（L さんの語り）

L さんは夫に対する「恨み」が溜まっていた。様々な「恨み」が溜まって、夫との関係が冷めた状態になっていた。夫は、L さんに妻としての権利を与えてくれなかった。例えば、夫が交通事故に遭って入院した時、家庭で使う電気代の支払いを妻である L さんに任せず、

夫の姉に任せた。L さんは、自分が妻なのだから、当然、電気代の支払いを妻に任せるべきだと思った。もし、L さんが電気代の支払いの方法を知らないのであれば、夫は L さんに 1 人で支払いの手続きができるように教えてくれるべきだと思った。L さんは、夫が自分の力を信用していないと感じていた。また、L さんの息子が、肺の病気で手術をして入院した時、病院の手続きや学校で先生に息子のことを相談するのに、母親である L さんに任せず、夫は、自分の姉に任せた。L さんは、息子の入院手続きや息子の病気について先生に相談することなど、母親の自分に任せて欲しかった。しかし、夫は L さんを信用せず、自分の姉に任せた。また、L さんは息子の病気の経過を知りたかったので、夫に細かいことを尋ねているが、夫に「うるさい」と怒鳴られた。このように、L さんは、母親として、息子の病状のことを知る当然の権利を奪われていた。

以上のように、N さんは、夫に日本の生活習慣に従うように説教され、O さんは、夫に時間の観念について説教され、また沖縄の伝統習慣に従うように強く要求された。L さんは、妻として、母親としての権利を持つことを夫に認めてもらえず、恨みをつのらせていた。このように、彼女達の語りから、夫が妻に説教する、夫が妻に強く要求する、夫が妻の権利を認めないなどの非対称性的関係を求める言語態度をとることにより、夫が妻との間に上下関係を構築している様子が窺える。

3.3.2. 対称性的関係を求める言語態度

M さん、E さん、K さんは、夫との間に上下関係を感じたことがないと答えた。ここでは、この 3 人の語りを通して、沖縄人夫が対称性的関係を求める言語態度をとることによって、どのように夫婦の対等な関係が構築されているのかを見ていく。

まず、初めに、M さんの語りを紹介する。

語り 8 **≪旦那さんとはよくしゃべります？≫　うん、話します。たまに、うちで、私、帰る時、職場の、たまに、あの、なんか、事件がある時、これも、気分が悪い、こんな言ったら、もう、何かあった、職場で、旦那さんに、言うんです。…そうそう、嫌なことです、そう。…そうそう、1 日、あったことを。…そうそうそう。悩み、そうそう、旦那さんに言うんです。うん、私が言う、旦那さんに。たまに、私、元気ない、旦那さんが、「何で職場、何があったの」って聞く。 …そうそう。≪旦那さんが悩みを話すこともありますか。≫うん、旦那さんも、うん、ある、たまに、ある、あれ、たまに、あれ、兄弟と、たまに仲良く、ちょっと喧嘩したり。そうそう　そう、兄弟と喧嘩。（M さんの語り）**

M さんは、職場で何か問題が起こって気分が悪い時、帰宅後、夫にその事を打ち明けていた。その日一日あった出来事や職場で嫌なことがあって悩んでいる時、夫に相談した。また、M さんが元気がない時は、夫が M さんに何があったのか尋ねてくれた。夫が M さんに悩みを打ち明けることもあり、例えば、夫の兄弟との間に起こった問題を M さんに打ち明けた。M さんは職場での悩みを、夫は兄弟関係の悩みを、お互い打ち明け、問題を共有して、支え合っていた。

次に、E さんの語りを紹介する。

語り 9　≪夫が意見を言うこともありますか。≫うん、たまにね。でも、まあ、たまに、私も賛成する時もあるし、「いいんじゃない」と思う時もあるさ。うん、まあ、私がダメだったら、旦那も、そんなの無理はしない感じ。時もあるさ。でも、「ああ、いいなあ」と思ったら、私も、そんな、あの、反対もしない。でも、お互いで話して、どんながいいか。…そうそうそう、強く言わない。もう、わかってるはず。私が変ななるらしいんじゃないかな。うん、わかってると思う。私もそんなの、あんまり、旦那のこと、あんまり、何ていう、強く言わないから。私、うん、もう、やっぱし、態度が変わるさあね、態度が。だから、多分、これもあるんじゃないかな。やっぱり、その強くは言わない、旦那は。…旦那と二人で話し合って決める。（例えば、家族旅行とか）二人で話して、「行こうかあ」とか、まあ、旦那も、何ていう、あれは、話しやすい。　こんな時は、そんなの難しいことじゃない。うん、（何か大きい）もの買う時も。（E さんの語り）

E さんの夫は、自分の意見がある時は、はっきり E さんに話している。E さんが賛成すれば、その通りに行うし、E さんが反対したら、無理に自分の意見を押し通さない。夫は、強く意見を言うと、E さんの態度が変わることがわかっているので、強く自分の主張を押し付けることはしない。例えば、何か家の物を買うとか、家族旅行に行くとか、家族のことは二人で話し合って決める。E さんの夫は、自分の意見をはっきり言うが、妻の意見や気持ちを尊重して、互いに話し合いながら、対等な夫婦関係を築いている様子が窺える。

最後に、K さんの語りを紹介する。

語り 10　≪以前は、夫が不平不満を言ったりとか≫もう今、大丈夫なってる。うん。優しいよ。ただ、あの、酒の時だけ。もう今、なんか、ちょっと、前と違う。うん、飲み方もなんか違う。…≪前は、夫が汚い言葉したりとか≫あー、もう、今、大丈夫なったから。もう、ちょっと、変わってる。もう気をつけてる。私、いても、あんまり、あの「汚い言葉やらないでちょうだい。」って怒ってるから。うん、もう、やらない、大丈夫。…≪旦那さんとは、毎日、会話してますか。≫うん、やってるよ。…朝から、朝から、コーヒー作って、コーヒー飲んでから、ご飯食べる、食べてから。畑。仕事の話はやってる。あの、で、あの、野菜のこと、どんななるか、キビはこんな、仕事のこと。たまに友達のことも（話す）。うん。≪K さんが悩んでることを話したりしますか。≫うん、あの、あれ、腰いたいとか。あの、腰いたい、ある時にさ、膝とか、うーん、病院行きたいなあ。うん、うん。≪旦那さんも K さんに自分の悩みを話したりしますか？≫あ、うん、する。…もう、あれの、前の、前の奥さんの娘とか、うん、なんか、ヘルプやりたいとか、なんとか、こんな感じ。うん。うん。うん、あっ、自分の娘も、あれ（ヘルプ）、やるよ。旦那は。お互い。（K さんの語り）

K さんは、前回の「沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程」でインタビューした時の調査協力者の一人で、夫が罵倒したり、不平不満を言うなど否定的言語コミュニケーションをとり、上手くいっていない夫婦の事例として紹介した。あれから 1 年、K さんの夫の態度に変化が見られた。夫は、あまり酒を飲まなくなり、二人で農作業の仕事をしてい

る時も、K さんが「汚い言葉やらないでちょうだい」と怒りを見せたことによって、夫は K さんを罵倒することがなくなった。夫婦はよく会話をするようになった。例えば、K さんは、朝食の時に夫と二人で仕事のことや友達のことを話す。また、K さんは、現在、腰と膝が痛くて悩んでおり、そのことを夫に打ち明け、病院通いをしている。夫もまた、自分の悩みを打ち明け、前妻の娘に経済的援助をしたいということを K さんに相談している。このように、K さんは、夫との間に上下関係を感じなくなったと述べ、夫に自分の悩みを打ち明けたり、また、夫も K さんに自分の悩みを打ち明ける等、互いの悩みを共有し、支え合うことで対等な関係性を築いこうとしている様子が窺えた。

第 4 節　考察

ここでは、「3. 結果」で紹介した事例を基に、「在沖フィリピン人女性のジェンダー観」「在沖フィリピン人女性の性的役割分業の実践」「夫婦の関係性を構築する言語態度」についての考察を行う。

4.1.　在沖フィリピン人女性のジェンダー観

ここでは、在沖フィリピン人女性が、どのようなジェンダー観を培ってきたのか、前述した「3.1. 在沖フィリピン人女性のジェンダー観」の結果を基に考察していく。

「3.1.1　調査協力者の生育環境について」の結果から、本稿の調査協力者は、フィリピンで過ごした幼少期から青年期にかけて、家族の主な収入源を得るのは父親の役割であり、その収入を補助的に支える役割を担っているのが母親であるという家庭環境に育っていることがわかった。父親が一家の主な稼ぎ手、母親が補助的役割を担うという考え方は、彼女達の現在の状況にも影響を与えていると推察できる。本稿の調査協力者は、全員、仕事を持っているが、N さんを除いて、残りは全て、パートタイムという身分であり、主な収入源は夫に頼っていた。外国人ということが、正規雇用の障害となっていることも考えられるが、彼女達は、自分が正規雇用でないことに悲観的な様子はなく、今の自分たちの職業的地位に満足しており、夫が一家の主な稼ぎ手、妻が補助的役割という考え方に肯定的な様子が窺えた。

他方、これらのフィリピン人女性達は、フィリピンでの生育環境の中で、父親が一家の主な稼ぎ手でありながら、家庭では家事や育児に協力的であり、家族サービスを担う父親という印象を持っていた。この点は、仕事中心で家事や育児は母親にまかせっきりの傾向がある一般的な沖縄の父親の印象とは異なっていた。実際に、彼女達は、語りの中で、自分の沖縄人夫が、家事や育児に協力的でないことに驚きを隠せない様子を見せていた。彼女達は、沖縄人夫について、家族サービス精神旺盛なフィリピン人男性とは異なる印象を持っていることが窺えた。このように、在沖フィリピン人女性は、夫は家庭の主な収入源を得て一家を支えると同時に、家事や育児にも協力的であるという理想像を持っていることが推察できる。

次に、「3.1.2. 男／女らしさに関する意識」の結果から、本稿の調査協力者の全員が、「女は女らしくあるべき」という伝統的な考え方に賛成であった。また、6 人中 3 人の女性が他者から「女らしくしなさい」と求められたら、それに従うと答え、さらに、6 人中 4 人の女性が、子供の頃、女の子らしくするように育てられたと答えた。彼女達は、「男らしさ」「女らしさ」に縛られない平等主義的意識よりも、「男らしさ」「女らしさ」に従う伝統的意識を持っている傾向が窺えた。この点は、彼女達が全員、熱心なカトリック信者であることを考えると、仕える女、仕える母親という処女マリアを強調し、マリアを女性の理想像として崇拝させ、女性に女らしさを求めるカトリックの教義が、彼女達の意識に影響を与えているのではないかと推察できる。

しかし、「3.1.3. 性的役割分業と男女共同参画への意識」の結果では、「男は外で働き、女は家庭を守る」という伝統的な考えに縛られず、男も女も仕事をしたければ、仕事をした方がいい、出産後も、女は仕事を続けたければ、続けた方がいい、男女、共働きで働き続けた方がいいという考え方に賛成の女性が 6 人中 5 人いた。

彼女達がこのようなジェンダー意識を持つ理由は 2 つ考えられる。まず、1 つは、フィリピン社会での女性の職業上の地位が高いことが考えられる。先行研究では、フィリピンの中間層では、男女の所得格差がほとんどなく、職場での昇進・昇格がほぼ男女平等に行われているため、職業で性による差別がないと答えたフィリピン人が 68%に上っている。本稿の調査協力者も、このようなフィリピン社会での女性達の平等主義的意識の影響を受けているのではないかと推察できる。もう一つの理由は、沖縄社会は、共稼ぎ夫婦が多いことが考えられる。本稿のフィリピン人女性は、周囲の沖縄人女性達が、結婚して出産後も、子育てをしながら働き続けている状況を目の当たりにしており、彼女達もこれに触発されて、仕事を持つようになったことが、数名の語りから窺うことができた。

一方で、彼女達は、このような考えを持ちながらも、経済的に自立しているというわけではなく、パートタイムで、夫の収入を補助的に支えている身分であり、ここでも、女は仕事を持った方がいいが、それは、補助的収入を得る仕事で良しとしている傾向がある。

最後に、「3.1.4. 男女平等社会の現状について」の結果から、本稿の調査協力者は、沖縄の方が男女平等社会と思っている女性と、フィリピンの方が男女平等社会と思っている女性とに分かれた。沖縄の方が平等と思っている理由として、共働き夫婦が多いことや、男性の職業分野に女性が進出していることを挙げ、フィリピンの方が平等と思っている理由として、フィリピン人男性の方が沖縄人男性よりも家事や育児に協力的であることを挙げた。

本稿の在沖フィリピン人女性の性的役割分業やジェンダーに対すつ意識についてまとめると、以下の 4 つの点が指摘できる。

1）父親は一家の主な稼ぎ手であり、母親は補助的役割を担う一方で、父親は家事や育児に協力的であることを期待する。

2）カトリック教義の影響を受けて、「女らしさ」「男らしさ」に従う伝統的意識

を持つ。

3）仕事に関しては、妻は、補助的収入を得る仕事でもいいので、出産後も外で働いた方がいい。

4）沖縄社会は、夫も妻も共働きで働いている夫婦が多いという点で、男女平等社会と捉えているが、一方で、沖縄人夫が家事や育児に協力的でないと思っている。

4.2. 在沖フィリピン人女性の性的役割分業の実践

ここでは、在沖フィリピン人女性が、どのようなジェンダー観のもとに、どのような性的役割分業を実践しているのかを考察していく。

「3.2. 家庭内の性的役割分業の実践」の結果では、本稿の調査協力者の性的役割分業の実践は、1）平等主義的性的役割分業の実践、2）伝統主義的性的役割分業の実践、3）伝統主義的実践から平等主義的実践への変化の 3 つに分類することができた。ここでは、3 つの分類について、在沖フィリピン人女性のジェンダー観と沖縄人夫のジェンダー観を考慮に入れながら、彼女達の性的役割分業の実践について考察していく。

まず、1）平等主義的性的役割分業の実践では、沖縄人夫が家事や育児に協力的であり、家庭内で、夫と妻が分担して家事や育児を行っていた。この夫婦のジェンダー観については、両者とも、「家事や育児は夫と妻で協力して分担するもの」という考えがあることが推察できる。夫と妻は、同じジェンダー観を共有しているため、家庭内での性的役割分業に関して、夫婦間での葛藤は少ないと考えられる。

次に、2) 伝統主義的性的役割分業の実践については、夫が家事や育児に協力的ではなく、妻が一人で家事や育児を担っている場合である。この夫婦のジェンダー観については、妻は「家事や育児は夫と妻で協力して分担するもの」という考えを持つ一方で、夫は「家事や育児は妻がやるもの」という考えを持っている。妻は、夫のジェンダー観を変えることはできないと思っているので、夫のジェンダー観に従って、性的役割分業を行っている。この場合、妻は、自分のジェンダー観と実際の性的役割分業の実践が矛盾しているので、かなりの葛藤を経験していることが推察できる。このタイプに属する在沖フィリピン人女性は、この矛盾や葛藤を解決するために、自分のジェンダー観を夫のジェンダー観に近づけるように変化させていることが推察できる。

最後に、3）伝統主義的実践から平等主義的実践への変化については、最初、夫は家事や育児に協力的でなかったが、妻が夫に家事や育児のやり方を教えることによって、夫が家事や育児に協力的になった事例である。この夫婦のジェンダー観については、妻の側は「家事や育児は夫と妻で協力して分担するもの」という考えだが、夫の側は、最初の「家事や育児は妻がするもの」という考えから、「家事や育児は夫と妻で協力して分担するもの」という考え方に変化している。このタイプの夫婦は、妻のジェンダー観は変わらないが、夫のジェンダー観が妻のジェンダー観に近づくように変化していた。妻が夫に家事や育児を

教えるという努力により、夫のジェンダー観が変えられ、性的役割分業の実践も、伝統主義から平等主義へと変化していた。

このことから、本稿の調査協力者である在沖フィリピン人女性は、2 つのタイプに分けることができる。一つは、夫のジェンダー観に合わせて性的役割分業を実践するフィリピン人女性である。もう一つは、自分のジェンダー観を貫き通し、自分のジェンダー観に合った性的役割分業を夫にも要求するフィリピン人女性である。生育環境、性的役割分業、男女共同参画への意識調査から、彼女達のジェンダー観は比較的、男女平等志向であることがわかったが、一方は、夫の伝統的ジェンダー観に従い、他方は自分の平等的ジェンダー観を貫き実践していた。

この 2 つのタイプに分かれる理由については、生育環境、男／女らしさに関する意識、性的役割分業や男女共同参画への意識について彼女達の語りを比較してみたが、大きな違いが見つけられなかった。今後、更にインタビュー調査を実施して、この理由を探求していく必要がある。

4.3. 夫婦の関係性を構築する言語態度

「3.3. 夫婦間コミュニケーションに見られる言語態度」では、夫婦間で上下関係を感じる女性と、上下関係を感じない女性の 2 つのタイプが見られ、前者は、夫が非対称性的関係を求める言語態度をとることによって、妻との上下関係を構築し、後者では、夫が対称性的関係を求める言語態度をとることによって、妻との間に平等関係を構築している様子を、事例を通して見ることができた。ここでは、夫婦がどの言語態度をとることによって、どんな力関係を構築しているのか、構築主義の観点から考察したい。

中村（2001）は、「構築主義」について、社会の中の知識や個人のアイデンティティは厳然として存在しているのではなく、歴史・社会的に作り上げられており、この過程において、言語が大きな働きをしているとする概念であると述べる（90）。「言語が社会を構築する」という主張の中の「言語」とは、社会的実践である。中村（2001）は、「ことばを使う行為（ディスコース）」を社会の権力構造と結びつけ、社会構造と「ディスコース」の間に相互関係があると指摘する（90）。

中村（2001）は、ディスコースと社会の関係を①ディスコースによって「知識・イデオロギー・常識」が作り上げられる視点と、②ディスコースにおいて我々がアイデンティティや人間関係を作り上げる、この 2 つの視点を指摘している（90）。人間は、ディスコースによって「知識・イデオロギー・常識」を作り上げ、さらにアイデンティティや人間関係を作り上げることによって、社会構造を構築していく。

中村（2001）は、複雑に入り組んだ言語行動と社会構造を分析するため、「ディスコース」という概念に、三つの異なる社会レベルを対応している（96）

社会秩序	ディスコース秩序
社会的制度	ディスコース・タイプ
直接の社会状況	ディスコース実践

（中村、2001:97　図 5.2）

「ディスコース秩序」は、ディスコース実践の体系を指し、その社会全体の「社会秩序」に対応する概念である。ディスコース秩序には、例えば、知識、イデオロギー、常識などが含まれる。「ディスコース・タイプ」は、学校・家庭・職場・病院・警察・軍などの「社会的制度」において行われるディスコースを捉える概念である。「ディスコース実践」は、個々の社会状況において実際に人々が言葉を使う行為を指す（97）。

例えば、この概念を在沖フィリピン人女性の事例に適応するとすれば、ディスコース秩序では、フィリピン人女性がどのようなジェンダー観（ジェンダー・イデオロギー）を持っているのかを指摘し、そして、沖縄人夫とのコミュニケーションにおいて、つまり、家庭というディスコース・タイプ（社会的制度）の中で、どのようなジェンダーに関するディスコース実践（例：性役割分業の実践など）が行われているのかということを分析し、彼女達の言語行動と社会構造の関係を明らかにすることができると考える。

ここでは、中村（2001）の「ディスコース」概念を参考に、「ことばを使う行為（ディスコース）」を通して、在沖フィリピン人女性と沖縄人夫が、どのようなディスコース秩序を持ち、どのようなディスコース実践を行い、そして、夫婦の間で、どのような力関係が構築されているのかを考察していきたい。

4.3.1. 夫婦間の上下関係

「4.3.1. 非対称性的関係を求める言語態度」では、夫との間に上下関係を感じると答えた、N さん、O さん、L さんの語りを見てきた。N さんの夫は、N さんに、沖縄の生活習慣に従うようにと説教することによって（語り 4）、O さんの夫は、O さんに、時間の観念について（語り 5）、子供達への伝統習慣継承について強要することによって（語り 6）、L さんの夫は、L さんに妻の権利を与えないという言語態度によって（語り 7）、妻との間に非対称性的関係を作り、その結果、妻が夫との間に上下関係を感じる状況を作り出していた。

ここでは、中村（2001）のディスコース概念（97）を参考に、さらに、この 3 人の事例を詳しく考察していきたい。

N さんの語りの中では、沖縄とフィリピンの生活習慣が違うことから、例えば、夫が、料理の仕方について、沖縄のやり方に従うように、N さんに説教している（語り 4）。夫の考えの中には、「郷に入っては郷に従え」、つまり、沖縄にいるのだから沖縄の生活習慣に従うことが当然であるというディスコース秩序があることが推察できる。あるいは、この言語態度の裏には、フィリピンの生活習慣よりは、沖縄の生活習慣に従った方が有益だと考えているとも推察できる。いずれにしても、夫は、夫婦は対等な立場で、互いの生活習

慣や文化を尊重し、N さんの出身地フィリピンの生活習慣や文化を N さんのために生活に取り入れるという配慮が少ないように思われる。

O さんの語りの中で、夫はフィリピン人の時間を守らない習慣に対して批判的態度をとり、家族との外食の集合時間さえも、妻にしっかり守るように教えていた。O さんは、子供の支度を手伝わなければならず、時間に間に合わない時もあるが、そんな時でも、夫は妻の苦労を構わず、妻を怒った（語り 5)。沖縄にはウチナー・タイムというものがあり、これは、しばしば、他府県の人から、時間にルーズという理由で批判されることがある。O さんの夫は沖縄人であるが、他府県の人がウチナー・タイムを批判するように、フィリピン・タイムを批判的に見ている様子が窺える。

また、O さんの夫は、沖縄の伝統習慣にきちんと従うことを O さんに求めた。内気な O さんは、盆や正月の親戚周りが苦手であった。できれば、夫と子供達だけで行ってほしいと思っていた。しかし、O さんが行かなければ、子供達も行かなくなり、沖縄の伝統習慣を子供達に継承できなくなることを恐れた夫は、O さんも一緒に親戚周りをするように強要している。O さんは「嫌」と言えず、夫に従っている（語り 6)。夫は、O さんに、沖縄の伝統習慣を子供達にしっかり継承していくのは母親の役目であるとし、沖縄の母親のあるべき規範を押し付けている様子が窺える。

L さんの語りでは、夫は自分が交通事故で入院している間、家庭で使用している電気代の支払いを、妻の L さんに任せず、夫の姉に任せていた。L さんは、自分が妻なのだから、当然、家庭の電気代を夫が支払えない時は、妻が代わりに支払いに行く責任があると感じていたが、夫は、L さんのことを信用していない様子であった。また、L さんの息子が、肺の病気で入院した時、夫は、入院の手続き、医者とのやり取り、学校で息子のことを先生に相談するのに、母親である L さんに任せず、夫の姉に任せていた。医者と話すことができなかった L さんは、息子の病状を知りたかったので、夫に尋ねたら、「うるさい」と怒鳴られている（語り 7)。この夫の言語態度の背後には、おそらく、L さんがフィリピン人であるということで、沖縄の事情をよく知らず、日本人並みの日本語を話せないという理由で、電気代の支払い、病院での手続き、医者とのやり取り、学校での先生とのやりとりを、L さんには任せられないと思っているのかもしれない。もし、それが理由なら、L さんが、自立して、妻として母親としての責任を果たせるように、一から教えてあげることもできるはずだが、夫は、最初から、L さんに、妻として母親としの役割を果たす機会を与えようとせず、自分の姉に任せているという状況だった。

N さん、O さん、L さんの語りの中に見られる、このような非対称性的関係を求める夫の言語態度の背後には、「沖縄にいるのだから沖縄の生活習慣に従うのが当然」「フィリピンより沖縄の生活習慣や文化に従う方が有益である」「沖縄の伝統習慣を子供達に継承していくのは母親の役目」「フィリピン人妻には任せられない（信用できない)」などのディスコース秩序が働いていると推察できる。そして、このディスコース秩序のもとに、夫が妻に説教する、夫が妻に強く要求する、夫が妻に権利を与えない、という非対称性的関係を

求める言語態度をとるというディスコース実践を行っていると見ることができる。

このフィリピンの習慣・文化・民族性を生活の中にと入れることをせず、沖縄のそれを強く主張して取り入れ、母親・妻の規範を押し付けたりする、などのディスコース秩序のもとに、夫が非対称性的関係を求めるディスコース実践を行うことによって、そして、妻がこのディスコース実践を受け入れて従うことによって、在沖フィリピン人妻と沖縄人夫との間に、上下関係が構築されていると考えることができる。

4.3.2. 夫婦間の平等関係

「3.3.2. 対称性的関係を求める言語態度」では、夫との間に上下関係を感じないと答えたMさん、Eさん、Kさんの語りを見てきた。Mさんの夫は、Mさんが元気のない時、何があったのかを尋ね、Mさんに悩みを打ち明けるように促すことによって（語り8)、Eさんの夫は、自分の意見をはっきり言うと同時に、妻の意見や気持ちも尊重しながら、互いに話し合うことによって（語り9)、Kさんは、自分の悩みを夫に打ち明け、夫もまた自分の悩みを打ち明け、互いの問題を共有することによって（語り10)、夫婦が互いに対等な関係性を築いている様子が窺えた。ここでは、さらに、この3人の事例を詳しく考察していく。

Mさんの語りの中では、Mさんが職場で、嫌なことがあったり、何か問題が起こって気分を悪くしている時、夫がMさんの気持ちを察して、職場で何があったのか尋ねている。そして、Mさんは、職場で起こった問題や自分の悩みを打ち明けている（語り8)。Mさんの夫は、妻の気持ちを察して、妻に悩みを打ち明けることを促すことによって、妻との間に対称性的関係を作り、夫婦間での平等関係を構築している様子が窺える。

Eさんの語りの中では、夫は、自分の意見をはっきり述べるが、妻の反応を見て、妻が賛成であれば、それを実行するし、妻が反対であれば、それを押し付けないという態度をとっている。妻の気持ちや態度を察して、自分の意見を強く押し通さず、夫婦二人で話し合って決めるようにしている（語り9)。夫は、自分の意見を押し通さず、妻の気持ちや意見を尊重して、互いに話し合うという対称性的関係を求める言語態度をとることによって、平等な関係を築いている様子が窺える。

Kさんの語りの中では、朝食の時に、夫婦が互いに仕事の話をしたり、友達の話をしたりしている。また、Kさんは、夫に、腰痛や膝痛など健康上の問題を打ち明け、夫もまた、前妻の娘に経済的支援をすることについて、Kさんに相談している（語り10)。ここでは、夫婦が互いの悩みを共有し、支え合うという対称性的関係を求める言語態度をとることによって、夫婦の間に平等関係を構築している。

Mさん、Eさん、Kさんの語りの中に見られる、このような対称性的関係を求める言語態度の背後には、「夫婦は互いの気持ちや意見を尊重しながら、話し合うべきである」「夫婦は問題を共有し合うことで支え合うべきである」などのディスコース秩序が働いていることが推察できる。そして、このディスコース秩序のもとに、夫が妻の気持ちを察して悩

みを言語化することを促す、夫婦が互いに話し合う、夫婦が悩みを互いに打ち明けるという対称性的関係を求める言語態度をとるなどのディスコース実践を行っていると見ることができる。

フィリピン人妻と沖縄人夫が互いの意見や気持ちを尊重し合い対等な立場で位置づけられるというディスコース秩序のもとに、夫婦が対称性的関係を求めるディスコース実践を行うことによって、在沖フィリピン人妻と沖縄人夫との間に、平等関係が構築されていると考えることができる。

第 5 節　まとめ

これまで、在沖フィリピン人女性の性的役割分業の実践と沖比夫婦の力関係、そして、その関係性を構築している言語態度について見てきたが、この 3 つの関係を見てみると次の表のようになる。

表 1

	性的役割分業の実践	夫婦の力関係	言語態度
M さん	平等主義的性役割分業	平等関係	対称性的関係を求める言語態度
N さん	平等主義的性役割分業	上下関係	非対称性的関係を求める言語態度
O さん	伝統主義的性役割分業	上下関係	非対称性的関係を求める言語態度
L さん	伝統主義的性役割分業	上下関係	非対称性的関係を求める言語態度
E さん	伝統主義から平等主義	平等関係	対称性的関係を求める言語態度
K さん	伝統主義から平等主義	平等関係	対称性的関係を求める言語態度

N さんを例外として、平等主義的性役割分業を実践している M さん、伝統主義的性役割から平等主義的性役割に変化した E さんと K さんは、夫婦の間で、平等な関係が構築される傾向があった。一方で、伝統主義的性役割分業を実践している O さん、L さんは、夫婦の間で、上下関係が構築される傾向が見られた。このように、性的役割分業の実践と、夫婦の力関係の間には、相関関係があることが推察できる。

また、平等主義的性役割分業を実践する夫婦の間では、「家事や育児は夫婦で分担するもの」というディスコース秩序が共有されているが、伝統主義的性役割分業を実践する夫婦の間では、「家事や育児は妻がやるもの」というディスコース秩序が夫の側にあって、妻がそれに従っていた。

さらに、平等関係が構築されている夫婦の間では、「フィリピン人妻と沖縄人夫は互いに意見や気持ちを尊重し合い、対等な立場で位置づけられる」というディスコース秩序のもとに、対称性的関係を求める言語態度が実践されているのに対し、上下関係が構築されている夫婦の間では、「沖縄にいるのだから沖縄の生活習慣に従う」「フィリピンより沖縄の生活習慣や文化に従う方が有益である」「沖縄の伝統習慣を子どもに継承していくのは母親の役目」「フィリピン人妻には任せられない」などのディスコース秩序のもと、在沖フィリピン人女性が、沖縄の生活習慣や伝統習慣に従うことを強要されたり、フィリピンの生活

習慣や文化を尊重してもらえなかったり、沖縄の母親・妻としての規範を押し付けたれたり、フィリピン人ということで妻の権利を認めてもらえないという状況に置かれていた。

構築主義では、「ディスコース秩序」や「ディスコース実践」は、言葉を媒介にして構築されるものであるという考えがある。したがって、支配的な言説（ディスコース秩序）に従う言語態度（ディスコース実践）を行うことによって、その支配的なディスコース秩序を維持し再生産することができる一方で、支配的なディスコース秩序に対抗する言語態度をとることによって、支配的なディスコース秩序を転覆したり、変化させたりすることもできると考える。

例えば、O さんと L さんは、「家事や育児は妻がやるもの」という夫のディスコース秩序に従って、伝統主義的性役割分業を実践（ディスコース実践）することにより、この伝統主義的なディスコース秩序を維持し再生産していた。また、「フィリピンの生活習慣に従うよりも沖縄のそれに従う方が有益である」「沖縄の伝統習慣を子供達に継承していくのは母親の役目」「フィリピン人妻には任せられない」などの夫のディスコース秩序に従って、非対称性的言語態度を受け入れることにより、夫婦の間で、上下関係が維持され、再生産されていた。

一方で、E さんと K さんは、「家事や育児は夫婦で分担するもの」という妻のディスコース秩序に従って、平等主義的性役割を実践することにより、夫の伝統的なディスコース秩序を変化させていた。また、「フィリピン人妻と沖縄人夫は互いに意見や気持ちを尊重し合い、対等な立場で位置づけられる」というディスコース秩序のもと、対称性的関係を求める言語態度を実践することによって、平等関係を維持することができた。

これらの事例が示していることは、夫婦が互いに共有しているディスコース秩序は、在沖フィリピン人女性が、沖縄人夫との間で、言葉をどのように使うかという行為によって、つまり、どのようなディスコース実践を行うかによって、その夫の、あるいは夫婦で共有しているディスコース秩序を維持したり再生産することもできるし、また、そのディスコース秩序に対抗するディスコース実践を行うことで、その夫婦の間で支配的なディスコース秩序を転覆させたり、変化させたりして、夫婦の関係性をより良い方向へと変えていくことも可能であるということを示唆している。

このように、フィリピン人女性は、「フィリピン人」「女性」であることによって、夫との非対称性的関係の底辺に置かれやすいと推察できる。しかし、言葉を通して、彼女達は、夫のディスコース秩序を変化させて、夫との対称性的関係を構築していくこともできるという可能性が、いくつかの事例においても示唆されていることが明らかとなった。

第 7 章では、社会的構築主義の視点に基づいて、フィリピン人女性が「伝統的実践を行う妻」と「平等主義的実践を行う妻」の「立場づけ」をどのように行っているのか、また、この「立場づけ」の概念を通して、フィリピン人女性たちが自分の満足できるアイデンティティを構築し、自分の有利な「立場」を確立していく方法について議論する。

第 6 章　フィリピン人妻に対する沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為についての考察

第 1 節　研究の背景と目的

これまで、第 3 章で、フィリピン人妻と沖縄人夫の抱える葛藤課題とその葛藤課題を調整する方法について、上手くいっている夫婦と上手くいっていない夫婦の事例を比較した結果、上手くいっている夫婦では、沖縄人夫がフィリピン人妻に合わせてコミュニケーション・スタイルを高コンテキストから低コンテキストへと変えて、相互関係を深める努力をしている一方で、上手くいっていない夫婦では、沖縄人夫のコミュニケーション態度が変化せず、さらに、沖縄人夫がフィリピン人妻に対して偏見を抱いていることがわかった。また、第 4 章では、在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティについて考察した結果、フィリピン人女性は、日本語、英語、タガログ語、地方語の 4 つの言語を使い分け、その状況に応じて、妻、母親、嫁、就労者としてのアイデンティティを構築していることがわかった。さらに、第 5 章では、在沖フィリピン人女性のジェンダー観と沖縄人夫との夫婦間コミュニケーションについて考察した結果、伝統主義的性役割観を実践しているフィリピン人妻と平等主義的性役割観を実践しているフィリピン人妻の 2 つのタイプが見られ、前者は、沖縄人夫との間に非対称性的関係性を、後者は、沖縄人夫との間に対称性的関係性を構築する傾向があった。

この章では、夫婦関係が上手くいっていない夫婦の中でも、特に深刻な DV や離婚問題を抱えた 4 人の在沖フィリピン人女性を対象にインタビュー調査を行い、彼女達の事例を基にフィリピン人妻に対する沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為が夫婦の関係性を悪化させ、彼女達を DV 被害者や離婚へと導いた要因を考察する。彼女達に対する沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為についての考察を深めることにより、夫婦間の言語行為、非言語行為の相互作用を通して、夫婦の間にどのような不平等な関係性が構築されているのかを探っていく。

統計的データによれば、2012 年、日本での DV 相談件数は 89,490 件に上り、その内外国人被害者からの相談件数は 1,750 件で、さらにその内タガログ語を話す被害者が 715 件で最も多く、外国籍相談者全体の 41%を占めていた[22]。また沖縄県の国際結婚夫婦の離婚件数「夫日本人・妻外国人」58 件の内、フィリピン国籍妻との離婚は 22 件で最も多く 38%を占めている[23]。沖比国際結婚が増加する中で、フィリピン人女性は様々な問題を抱え DV 等の被害者となっている。

---

[22] 内閣府男女共同参画局「配偶者暴力相談支援センターにおける配偶者からの暴力が関係する相談件数等の結果について（平成 24 年度分）」
http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/violence_research/soudan.html
（最終アクセス 2014 年 3 月 15 日）

[23] 厚生労働省平成 24 年人口動態調査「夫妻の国籍別にみた都道府県別離婚件数」
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001112761
（最終アクセス 2014 年 3 月 15 日）

筆者は、2011 年、沖縄県内のカトリック教会を拠点[24]に在沖フィリピン人女性の生活実態調査を実施した。この調査を通して、あるカトリック教会のフィリピン人シスターに出会った。彼女を通して、沖縄県 A 市に DV・離婚の問題を抱えた 4 人のフィリピン人女性がいることを知った。これらフィリピン人女性の DV・離婚問題を明らかにすることによって、在沖フィリピン人女性が沖縄人夫との間に抱える夫婦間コミュニケーションの問題に対する理解を深めることができるのではないかと考えた。

本章では、在沖フィリピン人女性がジェンダー、外国人、マイノリティーという弱い立場で周縁化されやすいことから、暴力が起こる背景に夫妻の間に「支配－従属」関係があると捉える。また、DV・離婚問題を抱える沖縄人夫とフィリピン人妻の夫婦間での「支配－従属」関係がどのような言語・非言語行為を通して構築されるのか、社会的構築主義の視点から考察する。

第 2 節　暴力の定義と DV の暴力形態

本章では、暴力の定義に、相手に危害を加えたり傷つけたりする行為にとどまらず、相手に対して優位に立つものを利用して相手を服従させたり自己の考えや価値観を押し付ける行為も含める。優位に立つものを利用することは、経済力、権力、マジョリティーの立場など、社会的・経済的・政治的力を利用することであり、力を利用して劣位な立場にある者を服従させ支配することを暴力と定義したうえで、DV の問題を議論していく。

同じ国籍同士の夫婦間の DV には次の９つの暴力形態がある。１）身体的暴力、２）社会的隔離、３）心理的暴力・言葉による暴力、４）経済的暴力、５）性的暴力、６）子供を利用した暴力、７）強要・脅迫・威嚇、８）男性の特権をふりかざす、９）過小評価・否認・責任転嫁（「夫（恋人）からの暴力」調査研究会，2002: 16-19）である。

また、上述した同じ国籍同士の夫婦間の一般的な形態１)～９）に加えて、フィリピン人女性の場合、10）法的立場を利用した暴力（夫が在留資格の更新に協力しない)、11）文化的暴力（妻に日本の文化を強要し、妻の国の文化を否定する)、12）言葉の差別（日本語が上手く使えない妻を侮辱する）（松代，2004: 76）などの形態がある。

この章では、暴力が起こる背景には、沖比国際結婚夫婦の間に、「沖縄人夫の支配とフィリピン人妻の従属」という上下関係が構築されているという前提に立つ。社会的構築主義では、言語によって人間の関係性が構築されると考える。言語は人間の関係性を構築するうえで不可欠なものとなる。本章では、DV・離婚問題を抱えた沖比国際結婚夫婦の間に「沖縄人夫の支配とフィリピン人妻の従属」という関係性が構築されるという視点に立って、この関係性が、どのような言語・非言語行為を通して構築されているのか、社会的構築主義の視点から、在沖フィリピン人女性 4 人の事例を通して考察していく。

[24] フィリピンは人口の 8 割がカトリック教徒であることから、沖縄に在住しているフィリピン人女性もカトリック教会を拠点にフィリピン・コミュニティーを形成している場合が多い。

第３節　事例の紹介と内容の分析

DV の暴力形態の枠組みに沿って A 市に住む 4 人のフィリピン人女性の事例を分析した結果、9 つの暴力形態が見られ、日本人夫婦（同じ国籍同士の夫婦）の DV と共通の形態（3.1. ～3.6.）、日本人配偶者を持つフィリピン人女性に特有の形態（3.7. ～3.8.）、そして A 市在住フィリピン人女性に見られた形態（3.9.）が明らかになった。

この 9 つの暴力形態を非言語行為と言語行為の 2 つのカテゴリーに分けてみたい。非言語行為とは、言葉以外の手段によるコミュニケーションであり、言語行為とは、言葉を発することによるコミュニケーションである。非言語行為のカテゴリーは、3.1. 経済的暴力、3.2. 身体的暴力、3.3. 社会的隔離に分けられ、言語行為のカテゴリーは、3.4. 心理的暴力・言葉による暴力、3.5. 男性の特権をふりかざす、3.6. 強要・脅迫・威嚇、3.7. 法的立場を利用した暴力、3.8. 文化的暴力、3.9. 親族との関係に分けられる。これらをまとめると、表 1 のようになる。これらの暴力形態の分類を基に、在沖フィリピン人女性 4 人の事例を見ていく。

表１　非言語行為・言語行為のカテゴリー

非言語行為	言語行為
3.1. 経済的暴力	3.4. 心理的暴力・言葉による暴力
3.2. 身体的暴力	3.5. 男性の特権をふりかざす
3.3. 社会的隔離	3.6. 強要・脅迫・威嚇
	3.7. 法的立場を利用した暴力
	3.8. 文化的暴力
	3.9. 親族との関係

3.1.　経済的暴力

本調査の調査協力者である 4 人のフィリピン人女性は皆、何らかの経済的暴力を受けていた。A さんは夫が生活費を渡さないこと、B さんは夫のギャンブル依存症、C さんは夫が安定した収入を入れないこと、D さんは夫の多重債務で苦しんだ。ここでは A さんの語りを見てみたい。

> 自分の給料、自分が持ってるんじゃないですか。やっぱり…日本人が奥さんだったら給料あげてるでしょう。…だからバカにしてる可能性もあるさ。やっぱり、日本人じゃないから、子供の手当ても、普通は奥さんにあげるんじゃないですか。…私外人だから、馬鹿にされる。（日本人の）奥さんがいたらよかったねって私言うさ。だって、日本人だったら、やっぱりちゃんと、あれするじゃない。フィリピン人だから、あれさ、教えてくれないさ、特にお金のこと。（A さんの語り）

A さんは、外国人であるという理由で夫から一人前の妻として認めてもらえず生活費の管理も任せてもらえないと感じている。A さんのように、外国人妻は一般の日本人妻と金銭感覚が違うという理由や母国へ多額の送金をしてしまうという恐れから、夫が妻に生活費を

渡さず、その結果フィリピン人女性が経済的暴力の被害者となることが考えられる。

夫は妻に「生活費を渡さない」という非言語行為を行うことによって妻をコントロールしていることがわかる。妻は夫の許可なしに自由に使える金銭がなく、夫から金銭がもらえなくなることを恐れて、常に夫の顔色を見て行動しなければならない。A さんは夫に支配され管理されている状態であり、ここでは、夫が経済的力を利用して、「生活費を渡さない」という非言語行為を通して、夫婦の間に「支配－従属」の関係性を構築していることがわかる。

3.2. 身体的暴力

身体的暴力には蹴る、殴る、顔を平手打ちする、首を絞める、凶器で攻撃するなどの形態があるが、C さんは夫から顔を殴られるなどの身体的暴力を受けていた。

> **夜仕事してたんですよ、（夫が）迎えに行ってから帰りに、ちょっとお酒飲んでたんですよね。「ビール買って」て言ったんですよ。「お金ない」って言ったんで、「仕事してるのに何でお金ないか」って言って、「自分も仕事してるでしょっ」て、喧嘩になって、「殴るか」って「喧嘩したい」って言ったんで、「殴るか」「いいよ、殴ってもいい」って、もうやらないと思ったんで、ほんとに殴ったんで。…車の中で殴ってて、泣いてたんで、ちょっと怖くなって車の中で「助けてー助けてー」、誰もいないしちょっと山の辺りに連れて行ったんですよ。…「うるさかったら、あんた殺すからよ」って言ってて、だから黙って泣いてて。…顔も腫れて一週間も休んだんですよ、仕事、あれからだけじゃないんですよね。…何回ぐらいもあって、友達の所逃げたんですよね。1 か月くらい子供連れて。（C さんの語り）**

C さんはビールを買うお金のことで夫と口論になり、夫に顔を殴られ顔が腫れ、1 週間仕事を休んだことを語っている。このようなことは何度も続き、そのたびに C さんは子供たちと友人宅へ避難することを繰り返している。C さんの夫は妻と口論になった時、「妻を殴る」という非言語行為を行うことで、C さんを黙らせ、夫に従うように仕向けている。DV は力の強い者が弱い者を従わせるために、自分の力を利用することを意味するが、C さんの夫は、身体的力を使うことによって、妻を支配しコントロールしようとしている様子が窺える。C さんの夫は「妻を殴る」という非言語行為を通して、妻との間に「支配－従属」関係を構築している。

3.3. 社会的隔離

DV には、誰と会い、どこへ行くのかなど、女性の行動を監視したり制限したりする社会的隔離という暴力形態がある。A さんはその被害者である。

> **たまに教会行くとか。でもグループとかあんなのは入ってない。友達でもあまりいない。だって、あんまり（夫が）出さない。最初の頃、ずっと家に出さないでしょう。自分（夫）ばっかりお酒飲みに行って、毎日、私、家に、自分（夫）の親のこと（面倒看て）。（A さんの語り）**

DV を行う夫は妻を常にコントロールしたいと思っているので、妻が夫以外の人々と深く

関係を築くことで夫以上に知識を身に付けたり妻に協力者ができたりすることを恐れ、妻の社会的関係を制限する。A さんもまた、教会に行くことや、フィリピンコミュニティーに入ることを夫に制限されていた。カトリック信者が 8 割を占めるフィリピン人はカトリック教会を通じてコミュニティーを形成する場合が多く、教会やフィリピン・コミュニティーは同国人同士での情報交換や母語で話すことによってストレスを発散する場になっているが、夫に教会やコミュニティーへの参加を制限されることによって、A さんは孤立感を高め、悩みを相談する場もなく DV の被害者でい続けざるを得ない状態であった。このように、A さんの夫は妻が教会やコミュニティーに参加することを制限するという非言語行為を行うことによって、妻を孤立させ力を奪い、そして、妻をコントロールすることによって、不平等な関係性を構築していた。日本に両親や親戚がいないフィリピン人女性はただでさえ孤独を感じやすいが、夫の制限によって A さんがますます孤立感を強めていることが窺える。

3.4. 心理的暴力・言葉による暴力

フィリピン人女性たちは夫から「殺す」「死ね」「出てけ」「気ちがい女」「馬鹿」「ボケ」などと罵倒されて精神的に傷つけられていた。夫はできる限り妻をコントロールしたいと思っているので、妻が自分の気持ちに反する行動をとったり自分の思い通りに行動しないと気分を害して罵倒することで怒りの気持ちを発散すると同時に、罵倒することによって妻の意志を挫き妻の行動を制御していると考えられる。以下に C さんの語りを紹介する。

> **言葉、悪い言葉ばっかり、「くるす（方言で「殺す」という意味）」とか、…「出てけ」とか手も出す。言葉きついんで、「死ね」とか胸持ってもういつか殺そうって酔っぱらってる時はいつか殺そうって考えてたあるもんで。…旦那さんが、もう夜は飲みに行くんですよね。帰りは酔っぱらってるでしょう。うちは眠って、いつかこの言葉がいつも「くるす」とかあんなに言ってるんでいつか酔っぱらってるから、いつか殺されるかなぁって、考えたんです。（C さんの語り）**

C さんは夫から「殺す」「死ね」「出てけ」などのきつい言葉を浴びせられている。夫が酔っぱらって帰ってくるたびに、C さんは殺されるのではないかという恐怖の中で夜を過ごしていた。彼女は夫の言葉の暴力によって、自尊心を傷つけられるだけでなく、自己の存在に対する危機感を覚えながら生活していた。このように、C さんの夫は妻を「殺す」「死ね」「出てけ」と罵倒するという言語行為を通して、妻に恐怖心を与え力を奪い、妻を支配しコントロールしようとしている様子が窺える。夫の「妻を罵倒する」という言語行為が、夫婦間で「支配－従属」関係を構築していることがわかる。

3.5. 男性の特権をふりかざす（性役割の押し付け）

フィリピン人女性たちは、育児、家事、介護などの性役割観についての夫との考え方の相違がしばしば夫婦間での口論の原因となり DV や離婚に発展していることを語っている。例えば、A さんは次のように語っている。

ほとんど子供は私一人で。逃げてるみたい。日本人いつも家にいない。…手伝わないように逃げてる。…全部、女がやるの。…日本人として、あっちのやり方もあるし、私にもいつも言うんだけど。なんかさ、男って怠け者と思うよ。…お父さんも女が何でもやるって。…私が全部やるの当たり前みたい。…フィリピンでは、男と女、平等だけど、日本は絶対、平等じゃない。（A さんの語り）

A さんは夫と舅から育児、家事、介護の性役割を押し付けられて不満を抱いていた。フィリピン人女性は一般的に母国で男女平等の感覚を培っていることから、日本の家父長的家族文化に違和感を抱く傾向がある。D さんも夫の家族観に関して違和感を抱いていた。

一番問題は（夫が）娘（の面倒を看てくれないこと）、私いない間に何もやってくれない。…家に帰って冷蔵庫の中に材料はあるんですけど、自分のご飯もあるし、その時、なんか自分で作って、やっぱり娘がうちにいる、自分が作らないと娘は食べられないんですよね、私がいないから。で、自分でラーメン作って、娘が部屋に出たら、「ちょうだい」って言ったら、「何で最初から言わないの」って言われて、だったら、ほんとに、なんていう、心じゃなくて、なんか、娘それが言われたんだったら、「ああいいよ、どうぞ、私がまた作るから」って、それが普通ですよね。…家族いるから、give & take わかりますよね。（D さんの語り）

D さんは夫が娘の面倒を看てくれないことに不満を持っていた。フィリピンには家族を大切にする文化があって、家族の絆やつながりを自分のことよりも優先する価値観があるが、夫にはそれが理解できず、D さんに育児、家事の性役割を押し付けていた。この価値観の相違が理由で夫との関係が悪化し、現在、D さんは離婚まで決意している。

A さんと D さんの場合、夫が妻に育児、家事、介護を押し付けるという言語行為を通して、夫の都合のいいように妻を従わせコントロールしようとしている様子が分かる。夫が妻に「育児、家事、介護を押し付ける」という言語行為を行うことによって、夫婦の間に上下関係が構築されている様子がわかる。

3.6. 強要・脅迫・威嚇

強要・脅迫・威嚇は、「危害を加えるぞ」「別れるぞ」「自殺する」などと言って脅す、物を叩きつける、女性の持ち物、大切にしている物を壊すなどの形態の暴力を含む。C さんや D さんの事例では、こうした強要・脅迫・威嚇の暴力が見られた。

１回、来たんですよ。たまたま下にあったんで、「来て」て言って、「いや」って言ったんですけど、「下で話があるから来て」って、降りたんですよね、下。「何の話」って。で、「お前これでいいか」って話した、「もう離婚したいの？」って、「うん、離婚したいよ」って、「もうあんなに離婚するんだったらよ、お前殺すからよ、いつか」って言ってたんですよね。「もし、あんなにこれがいいんだったら、殺す、殺す、覚えとけよ」って言ってたんですよ。（C さんの語り）

C さんが夫の暴力から逃れて子供を連れて引越したが夫に居場所を突き止められてアパートの前で話をしている場面である。C さんは「離婚したい」と言ったが、夫が「離婚するなら殺す」と脅迫している。C さんは別居後も夫から脅迫を受け安全な生活を脅かされてい

た。

> 10 月に喧嘩して「別れる」って言ったんですよ。「別れるんだったら殺すよ」って言われて、「じゃあ、いいよ、殺してもいいよ」って言ったんですよ。その時は包丁の所に行って、あの、開ける前に私止めたんですよ。「もう、やめなさい、子供がいるから」って言って、「何でほんとにくるすよ」って言われて、「それだったら、もう話すればいいんじゃないか」って言ったのね。で、ほんとに、あの時、もう、なんか、凄い喧嘩して、もう娘も見てたんですよ。（D さんの語り）

D さんは昼も夜も働きづめであるが、娘の面倒を看てくれない夫の態度に不満を持っていた。別れ話を切り出したところ「別れるんだったら殺す」と脅され、台所の戸棚から包丁を持ち出そうとしているところを D さんが止めている。D さんは別れたい理由を説明したが、夫は納得せず離婚にも反対している。D さんは今、夫と別居中である。

C さんと D さんは、夫と離婚したいという意思表示をしたところ、夫に「離婚するんだったら殺す」「別れるんだったら殺す」と脅迫の言葉をかけられている。このように、夫は脅迫の言葉をかけるという言語行為を通して、妻を威嚇し恐怖心を植え付け、自分に従わせようとしている。夫は脅迫の言葉をかけるという言語行為を繰り返すことによって、妻との間に上下の関係性を構築していると考える。

3.7. 法的立場を利用した暴力

法的立場を利用した暴力は外国人女性が被る特有の暴力である。日本人との結婚を目的に在留している外国人女性の場合、在留資格の更新に夫の協力が必要となる。夫はこれを利用して妻が言う通りにしなければ在留資格の更新に協力しないと言って脅す。彼女らは在留資格が更新できなければ母国へ帰国しなければならない。夫の目的は、法的立場を利用して妻を自分の支配下におき、コントロールすることである。夫の脅しにもかかわらず、もし妻が反抗したり逃げだしたりして夫の思い通りにならなければ、夫は妻をコントロールするという目的を果たせなくなるため、このようなコントロールできない妻とは離婚して本国へ帰国させるしかないと考えている。A さんの事例を見てみよう。

> 喧嘩したら、もう私も出るとか別れようとか。…ビザのこと、イミグレーションの何とか何とか、自分（夫）が悪くても、やっぱり、私たち外人だから、結局、ビザの問題、…ビザ切れるとか、だからイミグレーション行ったら帰らんといけんみたいな感じ。…私たち外人だから。いつも、みんな言うけど、フィリピン人が日本人騙してるって、でも結婚したら、結局、逆に私達ビザで来てるから、ビザ切れるから、あっちのことはイミグレーションに言うとか、もし、逃げたらとか、どっか行ったらとか。（A さんの語り）

フィリピン人女性にとって日本人との結婚は経済的地位の上昇をもたらすため、日本人との結婚は人生の成功を意味する。また日本人と結婚したフィリピン人女性の在比家族は彼女たちに経済的支援などの過剰な期待をする。家族の期待を裏切ることなく日本人との結婚生活を維持し日本に滞在し続けることが彼女たちの目的になる。A さんは夫と喧嘩をして家を出たいと思う時でも、夫が入国管理局に通報して在留資格の更新ができなくなれば

母国へ送還されることを恐れて強い態度に出られず、夫の言うことを聞かざるを得ない。Aさんはフィリピン人女性が日本人男性を騙していると聞かされているが、在留資格がなければAさんは日本に滞在できず､Aさんの方が夫にコントロールされていると感じている。このように、夫は日本人であるという自分の強い法的立場を利用して、妻との間に不平等な関係性を構築していることがわかる。

3.8. 文化的暴力

文化的暴力も外国人女性が被る特有の暴力である。文化的暴力とは、外国人妻が母語を話すのを禁じたり外国人妻の文化を否定して日本の文化を押し付けたりすることである。

> おじいちゃん（舅）はいつも言ってるさ。私と９歳の娘いるでしょ、タガログ語でしゃべるさ、私。わかる言葉（日本語）使ってとか、あんな感じ。「日本語しゃべれ」とか。…悪い言葉言ってるんじゃないかって。…なんか、自分の悪口みたいな。…だから、お父さん（舅）があんな言うから、旦那さんも「日本語しゃべれ」って。（Aさんの語り）

Aさんが舅や夫の前で娘とタガログ語を話すと、「日本語でしゃべれ」と日本語を話すことを強制される。舅は、Aさんと娘がタガログ語で舅の悪口を言っているのではないかと疑っている。Aさんは子供との会話で母語でないと気持ちを伝えられない時もあるので、子供と母語で話すことは大切だと思っているが、舅と夫はそれを理解してくれない。このように、Aさんが娘と母語で話すことを禁じ、日本語を話すことを強要するという言語行為を通して、夫と舅はAさんとの間に上下の関係を構築していることが考えられる。

3.9. 親族との関係

夫との関係だけではなく親族との関係も夫婦間の問題に影響している。A市など沖縄県の地方には今も根強く残っている門中制度の問題がある。門中とは父系血族によって結びつく集団のことで、この集団内では親族の結束が強く、男性親族を中心に祖先祭祀などの年中行事が行われる。祭事は男性が仕切り、料理など下準備で動き回るのは女性であるなどの性役割観が見られる。このような伝統的習慣が残っている地方ではしきたりに従うことのできない女性は夫や親族から非難を受ける対象となり、さらに夫から暴力を受けたり離婚へとつながったりする可能性がある。Aさんの夫の家族も親族関係が密で、親族同士集まってよく酒を酌み交わし交流を深める習慣があった。

> 来たばかりの時、１年か、２年くらい、毎日、これの兄弟、朝までお酒飲んでよ。全部私一人で片付けて、もう大変だったさ。もうあの家は、もうみんなが入りっぱなし、孫たちも。本当に疲れました。だって次の日仕事なのに遅くまで飲むとか。お父さんがいつも自分が相手して欲しい。…人の気持ちがわからない。…みんなで、日本にああいうの多いさ、こそこそ、フィリピンなんか、私の性格は本人に言う人だけど、なんか、こそこそ、いない人が、いない人に。…みんながしゃべっていて、で、結局、後からすべるでしょう、口。こそこそ、私の話ばっかり、みんながやってる、この兄弟みんなよ。（Aさんの語り）

A さんの家は、夫が長男なので兄弟や親族が集まる場所になっていた。結婚当初、兄弟たちが押しかけてきて朝まで酒を飲んで帰って行った。A さんは翌日仕事があるにもかかわらず、朝まで起こされて付き合わされた。このような親族の集まりでは、嫁は料理の準備、接待、後片付けなどの精神的・肉体的負担を負わされる。また、このような習慣に馴染めない A さんに対して夫の親族がこそこそ陰口を言っていじめることもあった。

A さんは嫁という立場で夫の親族から精神的・肉体的負担を負わされた挙句、その負担に A さんが耐えられないとわかると親族から陰口を言われるなど非難を受けた。ここでは、夫とその親族が A さんに料理、接待、後片付けなどの負担を負わせるという言語行為や、親族が陰口を言って非難するという言語行為を通して、A さんを夫や親族に従わせるという「支配－従属」関係を構築していることが窺える。

第 4 節　考察

これまで、3.1. から 3.9. まで、9 つの暴力形態に分けて、4 人のフィリピン人女性の事例を見てきた。9 つの暴力形態の言語行為、非言語行為という手段を使って、夫は妻を傷つけたり、妻に対して優位に立つものを利用して妻を服従させたり、自己の考えや価値観を押し付けたり、妻を支配しコントロールしながら、「沖縄人夫の支配とフィリピン人妻の従属」という上下関係を構築していると考えられる。ここでは、社会的構築主義の視点から、さらに、この「支配－従属」の夫婦関係が言語行為、非言語行為を通して、どのように構築されるのか、詳しく考察する。

社会的構築主義では、「社会を構築する」という時に、「言説」、「社会的慣行」、「社会構造」が密接にかかわっていると主張する（バー、1997 : 83）。例えば、女らしさについて流布している「言説」は、女性を、慈しみ深い、自然に近い、感情的、共感的、傷つきやすいなどとして、しばしば構築する。ここから、女性は、特に子供の世話に能力を発揮し、夫や子供のために夕食を作り、病気の子供の世話をしたり、家族の中で、母親・妻としての「社会的慣行」を実践する。この「女性は家庭的・母性的である」という「言説」が「真理」であると信じられた時、女性は、その「真理」に従って「社会的慣行」を実践し、その結果、女性は、子供の世話をする能力はあるが、管理職や責任ある地位の仕事には向いていないという「言説」が作られ、そして、社会の中で権力のある立場に就くことができず、よって、「男性支配・女性従属」の「社会構造」が構築されていくと考える。

このように、「言説」、「社会的慣行」、「社会構造」は密接に関連しており、特に、ある「言説」が「真理」の刻印を受け、他のそれが受けないのは、相対的に権力のある集団の為であると言う（バー、1997 : 85）。「女性は家庭的・母性的である」という「言説」が「真理」として認識されるのは、未だに、男性が社会の中で権力のある集団であり、その権力を持った男性の利益を維持するために、この女性に対する「言説」が作り出されている。女らしさについて流布している「言説」は、男性の権力を維持するために役立っているのである。

ここでは、「言説」、「社会的慣行」、「社会構造」の概念を用いて、在沖フィリピン人女性が被る沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為を分析してみたい。まず、言語行為のサブカテゴリーに属する 2）心理的暴力・言葉による暴力の事例について分析してみたい。心理的暴力・言葉による暴力の事例では、夫から「殺す」「死ね」「出てけ」「気ちがい女」「馬鹿」「ボケ」などと罵倒されて、フィリピン人妻は精神的に傷つけられていた。在沖フィリピン人女性に対するインタビュー調査から、これらの心理的暴力・言葉による暴力の背後に見られる沖縄人夫の「言説」には、例えば、「妻は、罵倒するに値する存在」「妻を罵倒することによって自分に従わせる」などがあることが推察できる。なぜ、このような「言説」が生まれたのか、それは、さらに、沖縄人夫がこれまでどのような環境の中で生きてきたのかを分析する必要があるが、本稿では、沖縄人夫からのデータを得ることができなかったので、今後の課題としたい。この「言説」のもとに、沖縄人夫は、「殺す」「死ね」「気ちがい女」など、妻を罵倒するという「社会的慣行」を行っている。この「妻を罵倒する」という「社会的慣行」を繰り返し行うことによって、沖縄人夫は、「夫の心理的優位性、妻の心理的劣位性」という力関係を構築することに成功し、これが「支配-従属」の夫婦関係という「社会構造」を作り出している。

次に、非言語行為のサブカテゴリーに属する 1）経済的暴力の事例について分析してみたい。夫が妻に生活費を渡さないという経済的暴力の背後には、在沖フィリピン人に対するインタビュー調査から、例えば「フィリピン人妻は一般の沖縄人妻と金銭感覚が違い経済的計画性がない」「母国へ多額の送金をしてしまう」という「言説」があることが推察できる。この「言説」がどこから生まれてきたかの調査は今後の課題であるが、この「言説」のもとに、沖縄人夫はフィリピン人妻に生活費を渡さないという「社会的慣行」を行っており、この「社会的慣行」を繰り返すことによって、夫婦の間に、「夫の経済的優位性、妻の経済的従属性」という関係性が構築され、これが不平等な「社会構造」を作り出している。

さらに、言語行為のサブカテゴリーに属する 3）男性の特権をふりかざすでは、夫の「言説」と妻の「言説」を見ることができる。沖縄人夫の「言説」は「妻が家事・育児・介護をするのは当然」であり、フィリピン人妻の「言説」は「夫は、妻と協力して家事・育児・介護をする」である。それぞれ異なる「言説」のもとに、夫は、妻に一切の家事・育児・介護を押し付ける、妻は、夫に家事・育児・介護を手伝うことを要求するという「社会的慣行」を行っている。ここでは、夫と妻の「言説」が衝突している。そして、A さんの場合は、夫に負けて、夫の「言説」に従うという「社会的慣行」を、D さんは、夫の「言説」に反発して、離婚という「社会的慣行」を決意している。A さんの場合は、この「社会的慣行」によって「家庭内での夫の優位性、妻の従属性」という力関係が構築され、D さんの場合は、夫の支配から脱け出すために離婚という道を選んでいるが、シングルマザーとして、さらに過酷な道を歩んでいる。

このように、沖縄人夫とフィリピン人妻は、文化的背景や性別が異なることから、それ

ぞれ、自分が「真理」であると信じている異なる「言説」を持っている。しかし、社会的構築主義の概念では、権力を持っている人が「真理」と思っている「言説」の方が、社会一般的に、「真理」として信じられやすいという考えがある。沖縄人夫は、男性であること、そして沖縄人であることによって、経済的・社会的・文化的に強い影響力を持っていると考えられ、沖縄人男性が持っている「言説」が沖縄社会では、一般的に認められやすく、フィリピン人妻は、沖縄人男性の「言説」に従わざるを得ず、不利な立場におかれやすい状況を生み出している。

沖比国際結婚夫婦間の DV・離婚問題の背景には、沖縄人夫がフィリピン人女性に対する差別意識に基づいた「言説」を持っており、その差別意識に基づいた「言説」が、沖縄社会では、「真理」として一般的に許容されているため、その「言説」に基づいて、沖縄人夫がフィリピン人妻に対して差別的な「社会的慣行」を繰り返すことによって、沖縄人夫とフィリピン人妻の間に「支配-従属」の力関係が構築されていく。この「支配-従属」の力関係を変えていくためには、フィリピン人女性の声を反映した「言説」を引き出し、これも「真理」として、社会に一般的に認識してもらう必要がある。彼女達の「言説」を社会に広く反映させていくことによって、夫の差別意識に基づいた「言説」を覆し、夫婦間の差別的な「社会的慣行」を変更し、「社会構造」を変えていくことを可能にすることができると考える。

第 7 章　結論

これまで、「第 3 章　沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程」、「第 4 章　在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ」、「第 5 章　在沖フィリピン人女性のジェンダー観と沖比国際結婚夫婦のコミュニケーション」、「第 6 章　フィリピン人妻に対する沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為についての考察」の各章で、インタビュー調査で得られたデータを基に、沖縄人男性と結婚した在沖フィリピン人女性達の事例を考察した。ここでは、社会的構築主義の理論的枠組みを用いて、各章の結果をさらに考察し、この博士論文全体の結論を導き出したい。本章で社会的構築主義を理論的枠組みとして用いる理由は、2 つある。まず、1 つ目に、この理論では、人間のアイデンティティや人間の関係性は、言語によって構築されると考える。本論文の調査でも、在沖フィリピン人女性が自分のアイデンティティを構築し、沖縄人夫との夫婦関係を構築していく過程で、言語が重要な役割を果たしているということを、筆者自身が実感できたからである。そして、2 つ目に、言語を媒介にして、在沖フィリピン人女性が健全なアイデンティティを構築し、沖縄人夫との建設的な関係を構築していくために、何らかの提言ができると考えたからである。

7.1.　沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程

「第 3 章　沖比国際結婚夫婦の葛藤課題とその調整過程」では、10 人の在沖フィリピン人女性のインタビュー調査で得られたデータを基に、分析・考察した結果、次の 3 つのことがわかった。(1) 夫婦間での葛藤課題の調整過程において、フィリピン人妻が沖縄人夫に言語コミュニケーションによる働きかけを行っていること。(2) フィリピン人妻の働きかけに対して、沖縄人夫が肯定的コミュニケーション態度をとるか、否定的コミュニケーション態度をとるかによって、「上手くいっている夫婦」[25]と「上手くいっていない夫婦」[26]に分かれること。(3) 沖縄人夫は高コンテキスト・コミュニケーション態度[27]を、フィリピン人妻は低コンテキスト・コミュニケーション態度[28]をとる傾向があり、「上手くいっている夫婦」では、夫の高コンテキスト・コミュニケーション態度が低コンテキスト・コミュニケーション態度に変化している傾向が見られることである。

---

[25] 「上手くいっている夫婦」とは、1) フィリピン人妻自身が、自分は沖縄人夫と上手くいっていると考えている。2) 過去に、夫婦間で DV や離婚問題が生じた経験がなく、カトリック教会の神父やシスターに相談した経験がない。3) カトリック教会の神父やシスターが、日頃の交流を通して、この夫婦は何の問題もなく、上手くいっている夫婦であると判断している。

[26] 「上手くいっていない夫婦」とは、1) フィリピン人妻自身が、自分は沖縄人夫と上手くいっていないと考えている。2) 夫婦間で DV や離婚問題が生じ、カトリック教会の神父やシスターに相談したことがある。3) カトリック教会の神父やシスターが、日頃の交流を通して、この夫婦はなんらかの問題を抱え、夫婦関係が上手くいっていないと判断している。

[27] 高コンテキスト・コミュニケーションは、意図や意味をコンテキストや非言語メッセージで表現することが強調される。特定の地域に 1 つの民族が定住する場合に、このコミュニケーション・スタイルが用いられる傾向があり、ここでは言葉よりも文脈や状況に情報が埋め込まれている。(Ting-Toomey & Chung、2006：矢吹、2012)

[28] 低コンテキスト・コミュニケーションは、意図や意味が、いかに明白な言語メッセージを通して表現されるかに強調がおかれる。人々が移動型の居住形態をとり、多民族多言語が混じり合う場合に、このコミュニケーション・スタイルが用いられる傾向があり、ここでは状況よりも、言葉に情報が含まれている。(Ting-Toomey & Chung、2006：矢吹、2012)

本節では、3 つ目の「沖縄人夫は高コンテキスト・コミュニケーション態度を、フィリピン人妻は低コンテキスト・コミュニケーション態度をとる傾向があり、『上手くいっている夫婦』では、夫の高コンテキスト・コミュニケーション態度が低コンテキスト・コミュニケーション態度に変化している傾向がある」という結果に焦点を絞って、社会的構築主義の理論的枠組みで考察する。なぜなら、沖縄人夫の（高コンテキストから低コンテキストへの）コミュニケーション態度の変化について、その要因を社会的構築主義の観点から考察することによって、沖比国際結婚夫婦において、建設的な夫婦関係を築いていくために、言語がどのように重要な役割を果たすことができるかということを提示することができると考えたからである。

夫婦間のコミュニケーション態度の相違について、次の 3 つの観点から、社会的構築主義の理論的枠組みで考察する。3 つの観点は次の通りである。1）なぜフィリピン人妻は低コンテキスト・コミュニケーション態度をとり、沖縄人夫は高コンテキスト・コミュニケーション態度をとる傾向があるのか。2）なぜ「上手くいっている夫婦」では、沖縄人夫のコミュニケーション態度が高コンテキストから低コンテキストへ変化したのか。3）なぜ「上手くいっていない夫婦」では、沖縄人夫のコミュニケーション態度が高コンテキストから低コンテキストへ変わらないのか。

まず、1 つ目の観点、1）なぜフィリピン人妻は低コンテキスト・コミュニケーション態度をとり、沖縄人夫は高コンテキスト・コミュニケーション態度をとる傾向があるのか、について議論する。その要因は 2 つある。まず 1 つ目に、文化的背景の相違があると考えられる。日本は単一民族国家と言われ、「高コンテキスト文化」を持つ国であると考えられている。例えば、石井・久米・長谷川・桜木・石黒（2013：119）は、「高コンテキスト文化」の例として、日本の文化は、他の研究者によって頻繁に言及されてきたと述べる。日本では、言葉そのものに含まれている意味を理解するよりも、その言葉が発せられた文脈や状況を理解しようとする。例えば、同じ言葉でも、それを発した人が若者か老人かで意味が全く異なってくる。このように、日本人は、その言葉の背後にある文脈や状況などのコンテキストや非言語メッセージを重視する傾向があり、沖縄人夫も日本文化の影響を受けているために、高コンテキスト・コミュニケーション態度をとる傾向があると考えられる。

他方、フィリピンは、他のアジア諸国と異なる歴史的背景を持っている。スペインに 333 年間、米国に 50 年間、植民地として支配されていた歴史があり、欧米文化の影響を強く受け、言語コミュニケーション重視の文化を持つ傾向がある（宮島・長谷川、2000）。さらに、フィリピンは、多民族多言語国家である。100 以上の言語が話されていることから、互いに言語コミュニケーションを通して意思疎通を図る必要性があるため、フィリピンは日本よりも「低コンテキスト文化」を持つ傾向があると考えられる。よって、フィリピン人妻は低コンテキスト・コミュニケーション態度をとる傾向があることが推察される。このように、沖比国際結婚夫婦が互いに異なるコミュニケーション態度をとる要因として文化的背

景の相違があることが考えられる。

次に、2 つ目の要因として、性差が考えられる。例えば、タネン（2003）は、男性は「地位」で話し、女性は「和合」で話すと述べている（33）。男性は互いに一段上か一段下かという、「地位」を重んじる階層的な序列の中に身を置いて行動し、女性は互いに親密か疎遠かという、「和合」を重んじる人間的な結びつきのネットワークの中に身を置いて行動している（33-34）。また、女性は「親和」を求め、男性は「独立」を求める傾向がある。女性の間では、お互い親しみを和すことが重視される一方で、男性の社会は他人に従属・依存しないことが重視される（35）。このように、妻は、夫との間に「和合」や「親和」を求めるために、言語コミュニケーションを通して、夫のことをより良く理解しようと努め、精神的に密接な繋がりを求めようとする。よって、低コンテキスト・コミュニケーション態度をとる傾向がある。一方で、夫は、妻との間に「地位」や「独立」を求めようとする。夫は、妻との関係を上下関係と捉え、妻は自分よりも下の者とみているので、言語コミュニケーションを介して、積極的に妻を理解する必要もない。それよりも、夫婦関係の文脈や状況を妻に理解してもらいたいと思っている。そのため、夫は非言語コミュニケーションをとることによって、自分の威厳を保持していると考えられる。よって、高コンテキスト・コミュニケーション態度をとる傾向がある。このように、沖比国際結婚夫婦が互いに異なるコミュニケーション態度をとる要因として、性別の相違があると考えられる。

これまで、フィリピン人妻と沖縄人夫が異なるコミュニケーション態度をとる要因として、文化的背景や性別の相違があることを述べてきたが、この要因を、さらに、社会的構築主義の観点から考察してみたい。社会的構築主義では、言説とアイデンティティの関係について次のように定義している。

> われわれが他者とのコミュニケーションにおいて使う文化的に利用可能な言説から、われわれのアイデンティティは構築されると言うことができる。人びとのアイデンティティは、多くの異なる「糸」を巧妙に織り上げることによって獲得される。年齢の「糸」（たとえば、子ども、若い大人、あるいはとても年寄りかもしれない）、階級（職業、収入、それに教育水準によって左右される）、エスニシティ、ジェンダー、セクシャル・オリエンテーション等々のそれがある。これらすべてが一緒に織り上げられて、人のアイデンティティの織物を作り出す。これらそれぞれの構成要素は、われわれの文化に存在する言説―年齢、ジェンダー、教育、セクシャリティ、等々の言説―を通じて「構築され」る。われわれは、これらの事柄についての入手可能な特定の「諸ヴァージョン」の組み合わせであり、最終的所産なのだ（バー、1997：79）。

社会的構築主義では、コミュニケーションにおいて使う文化的に利用可能な言説から、人々のアイデンティティは構築されると説く（バー、1997）。この考えに基づいて、沖縄人

夫のアイデンティティを考えてみたい。沖縄人夫は、フィリピン人妻とのコミュニケーションにおいて、様々な文化的に利用可能な言説を持っている。例えば、年齢、階級、エスニシティ、ジェンダー、セクシャル・オリエンテーション等の色々な属性があり、これらの選択肢の中から、利用可能な言説を選び取って、個人というアイデンティティを構築している。

在沖フィリピン人女性のインタビュー調査に基づくデータから浮かび上がってくる沖縄人夫のアイデンティティは、例えば、妻よりも年上であり、妻よりも収入が高く経済的に自立しており、沖縄人、日本人であり、男性であり、異性愛者であると推察できる。このように、「高年齢」「経済的自立」「沖縄人・日本人」「男性」「異性愛者」であるといった属性の組み合わせが沖縄人夫という最終的所産を構築している。例えば、「高年齢」「経済的自立」「男性」といった属性は、「年功序列」「独立」「地位」「男らしさ」を重視するというイメージを与え、「沖縄人・日本人」といった属性は、「暗黙の了解」「空気を読む」など非言語メッセージを重視するというイメージを与えるかもしれない。

このような文化的に利用可能な言説の中には、コミュニケーション態度も含まれる。例えば、沖縄人夫には、高コンテキスト・コミュニケーション態度や低コンテキスト・コミュニケーション態度などの利用可能な選択肢がある。しかし、沖縄人夫は、「高年齢」「経済的自立」「男性」「日本人・沖縄人」といったアイデンティティを確認し、維持していくために、つまり、「独立」「地位」「威厳」「男らしさ」を保つうえで、高コンテキスト・コミュニケーション態度を選択しているかもしれない。逆に、高コンテキスト・コミュニケーション態度を選択することによって、「高年齢」「経済的自立」「男性」「日本人・沖縄人」といった意識に基づくアイデンティティを構築しているかもしれない。

フィリピン人妻の場合も同様で、フィリピン人妻は、「夫より若い」「経済的依存」「女性」「フィリピン人」という属性を組み合わせてフィリピン人妻というアイデンティティを構築している。フィリピン人妻が低コンテキスト・コミュニケーション態度を選択することによって、「親和」「和合」「依存」「女らしさ」といった自分のアイデンティティを確認し維持しているかもしれない。逆に、これらのアイデンティティを構築し維持していくために、低コンテキスト・コミュニケーション態度を選択しているとも考えられる。

以上をまとめると、なぜ、フィリピン人妻と沖縄人夫が異なるコミュニケーション態度をとる傾向があるのか、その要因は、フィリピン人妻と沖縄人夫は、それぞれ、自分の居場所に適したアイデンティティを構築しようとしている。アイデンティティを構築する際に、フィリピン人妻と沖縄人夫は、それぞれ自分たちが生きてきた社会や文化の中で、様々な利用可能な言説を保持しており、その言説の中から選び取って、自分というアイデンティティを構築していく。沖縄人夫は、日本文化・沖縄文化・男性文化の中で培ってきた高コンテキスト・コミュニケーション態度を選択することで、自分のアイデンティティを構築していると考えられ、フィリピン人妻は、フィリピン文化・女性文化の中で培ってきた低コンテキスト・コミュニケーション態度を選択することで、自分に適したアイデンティ

ティを構築していると考えられる。やはり、沖縄人夫が高コンテキスト・コミュニケーション態度をとり、フィリピン人妻が低コンテキスト・コミュニケーション態度をとる傾向があるのは、彼らの生きてきた文化的背景（沖縄文化・日本文化・フィリピン文化）の違いや、性別（男性文化・女性文化）の違いが大きいのではないかと考える。これらの文化的に利用可能な言説の中から、自分に適切と思われる言説を選び取って、彼らは、それぞれのアイデンティティを構築していると言える。

次に、2 つ目の観点、2）なぜ「上手くいっている夫婦」では、沖縄人夫の高コンテキスト・コミュニケーション態度が低コンテキスト・コミュニケーション態度に変化しているのか、について議論していく。

社会的構築主義では、パーソナリティとは、社会的に構築されたものであると見なしている。パーソナリティを人びとの内部でなく、人びとの間に存在すると考える（バー、1997：41-42）。例えば、人なつこい、親切な、内気な、自意識の強い、愛嬌がある、気難しい、軽率なといった、パーソナリティのタイプを表す言葉があるが、もし、その語で説明されるその人が、たった 1 人で無人島に暮らしているとすると、それらの語の大半は、その意味が全く失われる（42）。それらの語を、まるでそれらの語が記述しているその人の内部に存在する実体を指すかのように使うけれども、ひとたびその人の他者との関係がなくなれば、それらの語は無意味になってしまう。それらの語は、人びとの他者への行動を指しているからであると考える（42）。

次に、自分と親しい人について考えてみる。その人と一緒にいて、自分は冷静で合理的だと思うかもしれない。その親しい人は、いつも難局に次々と見舞われているらしく、世の中を難なくこなしてゆくかのような自分の能力を畏れ敬っている様子である（バー、1997：43）。一方、一緒にいる時、自分が正反対であるような人の場合を考えてみる。この人と一緒の時、自分はいつも悩みをぶちまけ、その人の助言を求めている（43）。要するに、どちらが本当の自分かを問うのは、無意味であり、それらは両方とも本当であって、しかも、それぞれの「自分」は、他者との関係の所産にほかならず、自分の関係を形成する社会的な出会いから、社会的に構築されていると述べる（43）。

この社会的構築主義の視点から、なぜ「上手くいっている夫婦」では沖縄人夫の高コンテキスト・コミュニケーション態度が低コンテキスト・コミュニケーション態度に変化しているのか、その要因を議論してみたい。在沖フィリピン人女性を対象にしたインタビューでは、10 人中 7 人の女性が、自分の沖縄人夫のパーソナリティを「無口」「寡黙」「大人しい」という言葉で表現していた。しかし、7 人中 4 人の女性が、妻が話しかけることによって、夫が自分の悩みや考えを言語化するようになり、コミュニケーション態度が以前と異なることを語った。これら 4 人の女性は、夫婦関係が上手くいっているケースに含まれる。

なぜ、沖縄人夫のコミュニケーション態度が変化したのか。おそらく、以前は「高コンテキスト文化」という日本の文化が沖縄人夫のパーソナリティにも影響を与えていたのか

もしれない。沖縄人夫が育ってきた文化や社会では、それほど語らなくても、周囲が自分を理解してくれたのかもしれない。また、性差という点では、「男性はあまり語らない方がいい」などの男性文化の影響があるとも考えられる。さらに、夫婦関係において、妻との非対称的関係性を求めることが理想と考え、自分よりも下の立場にある妻に自分のことを理解してもらうために、一部始終、自分のことを語る必要はないと思っていたのかもしれない。沖縄人夫が、「無口」「寡黙」「大人しい」というパーソナリティを構築する要因としては、彼が育ってきた社会や文化（例えば、高コンテキスト文化、男性文化、非対称的夫婦関係を求める文化など）の中で、人々との関係性を通して、彼が構築していったものであると考えられる。

しかし、低コンテキスト文化を持つフィリピン人女性と結婚したことにより、「無口」「寡黙」「大人しい」というパーソナリティが、必ずしも、理想の夫を構築するのに適した資質ではないと認識することによって、沖縄人夫は、フィリピン人妻との関係性の中で、適切な「自分」を模索していったと考えられる。フィリピン人妻は、沖縄人夫が自分に悩みや考えを打ち明けることを喜んでいた。それで、沖縄人夫は「無口」「寡黙」「大人しい」というこれまで構築してきた「自分」を変えて、妻の反応に応え、積極的に自分の悩みや考えを打ち明けていくという低コンテキスト・コミュニケーション態度へと変えていったのではないか。その結果、夫は妻に自己開示をすることにより、妻との信頼関係を上手く築いていくことができ、夫婦の関係性や絆を深めていき、上手くいっている夫婦としての関係性を構築していくことに成功したのではないか。

「無口」「寡黙」「大人しい」といったパーソナリティを沖縄人夫の内部に存在するものとして見るのではなく、社会的な出会いや関係の所産として、つまり、社会的に構築されたものとして見ることによって、そこに、沖縄人夫が「無口」「寡黙」「大人しい」といった固定的自己を持つものではなく、フィリピン人妻との夫婦間の相互作用によって、妻のパーソナリティに調和した可変的な自己を臨機応変に構築していったと考えることができる。沖縄人夫は、社会的関係性の中で、状況から状況へと変化して、多数の潜在的諸自己を持つことができると筆者は考える。

3 つ目の観点、3）なぜ「上手くいっている夫婦」では、沖縄人夫のコミュニケーション態度が変化している一方で、「上手くいっていない夫婦」では、沖縄人夫のコミュニケーション態度が変化しないのか、その要因を考えてみたい。上述したように、沖縄人夫が高コンテキスト・コミュニケーション態度をとる要因としては、彼が育ってきた社会や文化（例えば、高コンテキスト文化、男性文化、非対称的夫婦関係を求める文化など）の中で、人々の関係性を通して、彼が構築した態度であると考える。

しかし、「上手くいっている夫婦」では、沖縄人夫が、フィリピン人妻との社会的関係性の中で、臨機応変にコミュニケーション態度を変えることができたのに対し、「上手くいっていない夫婦」では、コミュニケーション態度を変えることができなかった。この沖縄人夫は、彼が育ってきた社会や文化の中で培ってきた態度を頑なに守り通しているように見

える。フィリピン人妻が自分の悩みや考えを言語化するように求めているにもかかわらず、彼は、非言語態度を固持している。その要因としては、まず、第一に、沖縄人夫がフィリピン人妻を対等なパートナーとしてみなしていないことが考えられる。インタビューでも、「上手くいっていない夫婦」のフィリピン人妻から、夫がフィリピン人に対して偏見を持っているということが語られた。このように、沖縄人夫は、フィリピン人妻を、フィリピン人ということで、あるいは、女性ということで、一段低い立場においていると考えられる。よって、自分よりも低い立場にある妻に合わせて、自分のコミュニケーション態度を変えて、自分をさらけ出す必要性はないと考えていることが推察できる。

第二に、沖縄人夫は、フィリピン人妻の低コンテキスト文化よりも、自分の高コンテキスト文化が優れていると考えているのかもしれない。ここでは、フィリピン文化に合わせて、自分のコミュニケーション態度を変える必要はなく、フィリピン人妻が変えるべきだと思っており、自文化中心主義の考えを持っていると推察できる。このように、沖縄人夫が自分のコミュニケーション態度を変えない要因としては、沖縄人夫が、フィリピン人または女性に対して偏見を持ち、さらに、自文化中心主義の考えを持っていることが推察できる。

しかし、社会的構築主義では、この偏見や自文化中心主義という考えも、その沖縄人夫が、社会的関係性の中で構築してきたものであり、何かのきっかけを通して、変えることができると主張する。偏見や自文化中心主義の考えの背後には、例えば、「フィリピン人は金のことばかり」「沖縄文化がフィリピン文化より優れている」といった様々な言説によって構築されていると考える。これらの言説がどこから生まれ、そして、これらの言説に基づく偏見や自文化中心主義的考えがどのように構築されたのか、今後、さらに追求していく必要があると考える。

7.2. 在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ

本論文の「第 4 章　在沖フィリピン人女性の言語意識とアイデンティティ」では、在沖フィリピン人女性が、日本語、英語、タガログ語、地方語[29]の 4 つの言語を、それぞれの状況で使い分け、多元的アイデンティティを構築していく様子を窺うことができた。このような多元的アイデンティティが構築されていく過程には、「アイデンティティの揺れ」があり、母語アイデンティティと日本語アイデンティティの間での往来があり、古いアイデンティティから新しいアイデンティティへの更新があり、様々な模索を通して構築されるものであることがわかった。この節では、在沖フィリピン人女性が、言語を使って、様々な

[29] フィリピンの国語はフィリピノ語、公用語は英語である。その他に、フィリピンでは 100 以上の言語（地方語）が話されている。フィリピンの言語はすべて、オーストロネシア語族に分類される。フィリピン人のおよそ 90%が 9 大言語の内の 1 つを話す。9 大言語とは、タガログ語（主にマニラとルソン島中部）、セブアノ語（セブ島、レイテ島、ネグロス島で話されるほか、フィリピン中部の共通語）、イロカノ語（ルソン島北部の西海岸沿い、またルソン島北部全体の共通語）、ヒリガイノン語（パナイ島、ネグロス島）、ビコル語（ルソン島南東部）、サマル・レイテ語（サマル島、レイテ島）、カパンパンガン語（ルソン島中部）、パンガシナン語（ルソン島中部）、マラナオ語（ミンダナオ島中央部）を指す（宮本・寺田、1994：100）。

アイデンティティを構築していく過程を、さらに深く検証するために、社会的構築主義の理論的枠組みで考察する。

社会的構築主義者であるバー（1997）は、人としての自身の感覚が、いかにその基礎を言語の使用に持っているかを明らかにするために、2 つのアプローチを参考にしている。1 つ目のアプローチは、哲学者アルチュセール（Althusser、1971）によるもので、人間は、他者から言葉で「呼びかけられる」ことによって、その人の立場づけが行われ、その人のアイデンティティが構築されていくと見る。2 つ目のアプローチは、サービン（Sarbin、1986）に代表されるもので、人間の個人的歴史とアイデンティティの感覚が、文化的に使える物語の諸形式から生じるものと見る（バー、1997：191）。

バー（1997）は、アルチュセールを参考にしながら、他者は、主体としての諸個人に「問いを発し」、あるいは「呼びかける」と述べる。それは「おい、そこにいる君！」と大声で呼びかけ、あるタイプの人としてその人に耳を傾けさせる。他者に呼びかけられた人だと、その人が認識した時、その人は既にそういう人になっている。他者は特定の種類の人として（老人として、ケアする人として、労働者として、犯罪者として）、その人に話しかけ、そしてさらにその人は、それらの主体の立場を避けることができない。その人の選択は、それらを受け入れるか、それともそれらに抵抗しようとするかであって、もし人々が特定の主体の立場を受け入れる、ないしは抵抗できないとなれば、人々はその立場がもつ諸権利と諸義務の体系の中に封じ込められると述べる（216）。

ここで、在沖フィリピン人女性の事例を、この社会的構築主義の視点から考察してみたい。在沖フィリピン人女性は、日本語、英語、タガログ語、地方語の 4 言語を状況によって使い分ける。例えば、彼女達は、家庭内で、夫・子供・義父母との間で日本語を使用する。彼女達は、日本語を話すという言語活動に参入することによって、まず、「私」という語で自己を認識し、「私」という語が規定する「私とはこういうものである」という信念を獲得し、その信念に従って、自己を構築していく。さらに、家族や親戚から、「母親」「妻」「嫁」と呼ばれることによって、これらの呼び名が規定する「母親、妻、嫁とはこういうものである」という信念を獲得し、家族や社会が期待する「母親」「妻」「嫁」としての行為を遂行していく。「私」「母親」「妻」「嫁」という語を使うこと、または、そういう語で呼ばれることによって、あたかも、それらの自己が実在しているように見立てて、フィリピン人女性達は、家庭という道徳的領域の中で、「私」「母親」「妻」「嫁」としての役割を遂行していく。社会的行為者としてのフィリピン人女性達は、その沖縄の文化のローカルな道徳規則に則って、家庭の中で、何とか無難な仕方で自分自身を表現しようと努力する。日本語が話されている社会の中で、日本語を使って、沖縄の家庭の道徳規則に則りながら、「私」「母親」「妻」「嫁」としてのアイデンティティを構築していく。

フィリピン人女性は、4 つの言語を使って、4 つの言語構造の中で、少なくとも 4 つのアイデンティティを構築している。例えば、英語を使用する中で、「I」や「me」、タガログ語を使用する中で、「ako」や「ko」というように、異なる自己を構築し、それぞれの状況に

よって、自己として行為を遂行していく。つまり、主体的自己というものが、始めから、フィリピン人女性の内部に存在しているというよりは、フィリピン人女性が、日本語の言語活動に参入し、「妻」「母親」「嫁」と呼ばれることによって、「妻」「母親」「嫁」としてのアイデンティティを構築し、さらに、英語の言語活動に参入し、「就労者」として立場づけられることによって、「就労者」としてのアイデンティティ、タガログ語、地方語の言語活動に参入し、「フィリピン人・地方出身者」としてのアイデンティティを構築していく。言語は、活発な遂行的役割を持っており、それぞれの道徳的枠組みの中で、言語を発することによって、または、言語で呼びかけられることによって、その行為を遂行し、その結果、アイデンティティが構築されていくと考える。

さらに、バー（1997）は、ハレを参考にして、発達とは、その文化の言語的および説明的規則を使って説明を作り上げる人の能力が、ますます洗練されたものになってゆく過程であると述べる（197）。この能力が、初期の段階では、乳児とその養育者との間に生じる社会的相互作用を通じて発達するものと見る（197）。大人は、赤ん坊たちが欲望、意図、欲求等々を持っているかのように、彼らと相互作用し話しかける。その結果、乳児たちは、彼らもまた言語を発達させるにつれて、それらの言葉で自分の経験を次第に構造化するようになると指摘する（197）。

フィリピン人女性達は、日本語、英語、タガログ語、地方語の文法規則を用いて、それぞれの状況で、「私」「I」「ako」という異なる自己を表現していく。それぞれの言語的および説明的規則を使って自己を説明する能力が洗練されたものになっていく過程で、彼女達の言語アイデンティティも洗練されたものへと発達していく。例えば、事例では、フィリピン人女性が日本語能力の限界を感じることによって、「アイデンティティの揺れ」を経験していた。これは、彼女達が、今後、さらに、日本語の説明的規則を獲得し、説明能力を高めていくことによって、この「揺れ」を克服し、さらに、アイデンティティを洗練されたものへと発達させていく段階であることを示している。

これらのことをまとめると、在沖フィリピン人女性は、日本語、英語、タガログ語、地方語という言語構造に参入する中で、それぞれの言語の文法規則に則って、自分自身を説明する社会的に無難な仕方を習得し、それらの慣行に熟達して、それらを自分の目的のために使用する。それぞれの言語的慣行を訓練して、自己のアイデンティティを発達させていく。フィリピン人女性達が言語を発達させるにしたがって獲得する個我の経験は、彼女達の経験を構造化していく。この構造化は、彼女達の使用する言語の、特定の内的理論、文法的規則等によって可能になる（201）。在沖フィリピン人女性は、それぞれの文化や社会の中で、言語の内的理論や文法規則を熟達することにより、彼女達の個人的体験を「自己」と呼べる意味のある体系へと体制化する。しかし、この個我は、異文化間で異なるものであって、彼女達の 4 つの文化の個我のヴァージョンは、それぞれの言語の基礎にある文法ないし理論に基づいて構築されていると考えるのである。

次に、2 つ目のアプローチで、バー（1997）は、サービンを参考に、人間は自分の経験

を物語的構造として把握し、他者に対して、自分の経験を話す時も物語的構造として説明すると述べる（205）。つまり、人々はストーリーによって自分の経験を体制化する（205）。自分の経験を物語的構造で語るという形式は、人間の諸文化を通じて偏在することだと言う（205）。人々は、それを、初めと半ばと終わりのあるストーリーとして話す。自分の経験に物語の意味を付与するために、「ストーリー構築」をするのである。人々は無意味と思われる出来事でさえ、テーマに沿って、自分の話を作り上げていく。

例えば、在沖フィリピン人女性は、インタビューの中で、自分の経験した出来事を、ストーリーとして語ることによって、自分の経験に何らかの意味を付与し、それを構造化し、されにそれが、彼女達のアイデンティティ構築へとつながっている。O さんは夫と話をしている時、日本語能力に限界を感じ、戸惑い、混乱を経験したことを自分のストーリーとして語ることによって、妻としてアイデンティティの揺れを経験していることを実感し、また、N さんは、言語能力の不足によって妻としてのアイデンティティに揺れを感じたとき、さらなる日本語習得に力を入れることによって、それを克服したことをストーリーとして語ることによって、E さんは、言語能力の不足に劣等感を感じた時、「バハラ・ナ」（「やるだけやった、後は神に任せる」という意味）という価値観を取り入れ、その劣等感を克服したことを自分のストーリーとして語ることによって、妻としての自己アイデンティティを構築していた。さらに、D さんは、フィリピンで子沢山の家庭に育ち、母親の愛情を一身に受けた経験がないために寂しい幼少期を過ごしてきたこと、そして、同じ気持ちを子供には味あわせたくないと感じ、自分の母親を反面教師として、子供を少なく産んで、愛情をたっぷり注いで育てるという教育方針をストーリーとして語ることによって、母親としての自己のアイデンティティを構築していた。このように、フィリピン人女性は、自分の経験を物語として語ることによって、その経験を構造化し、何らかの意味を付与し、その結果、その物語的構造が、彼女達のアイデンティティを構築することを促していた。

また、バー（1997）は、自分自身の経験を構築する物語は、単に私的なものではないと述べる（209）。ストーリーの構築に当たって、人々は自分のストーリーの共演者達の存在に依存している。人々が物語的説明を通して、自分のアイデンティティを構築する時、その人のストーリーの中で重要な役を演じている他の人々のストーリーと一致していなくてはならないと主張する（209）。つまり、人々は、自分のストーリーの中で、自分を支えてくれる他者の存在に頼っているのであり、自分のアイデンティティ構築には、物語が他者に容認され、また、他者との協議によって支えられていなければならないと述べる（209）。

例えば、義父母との関係で葛藤を抱えていた D さんは、息子の卒業式、夫の交通事故という 2 つの出来事を通して、義母との関係性が良い方向へ変えられたことをストーリーとして語った。その語りの中で、以前は、葛藤を抱える妻としての自己を認識していた D さんが、現在では、義父母との関係性が改善され、前向きに夫婦生活を送るために努力する妻として、自分のアイデンティティを構築していく様子を見ることができた。D さんが、自分のアイデンティティ、つまり、自分が何者かの見方を構築する時に、その D さんの説

明の中に登場する義母、息子、夫の存在は、重要な役割を果たしている。D さんは、息子の卒業式と夫の交通事故という 2 つの出来事の中で、自分自身に対する義母の見方が良い方向へと変化していったことを認識した。この義母の D さんに対する積極的な視点は、D さんが肯定的な嫁としての自己アイデンティティを構築するのを促している。このように、D さんがストーリーを構築する時、D さんは、義母、息子、夫などの共演者達の積極的な意欲に依存しており、D さんが物語的説明を通じて、自己のアイデンティティを構築するために、その共演者達は、重要な役割を果たしている。D さんは、自分自身を支えてくれる義母、息子、夫の積極的意欲に、自分のアイデンティティを頼っているのであり、物語は、この他者との協力関係によって紡ぎだされる織物のようなものである。

これまで、社会的構築主義の視点で、在沖フィリピン人女性のアイデンティティと言語の関係性を考察してきたが、以上をまとめると、まず、1 つ目に、人々の文化の特定の言語的慣習、例えば、内的理論や文法的規則等を中心にして、人々の自己としての主体性の感覚が構造化されているということ、つまり、フィリピン人女性の場合、日本語、英語、タガログ語、地方語という 4 つの文法ないし理論などの言語的慣習を中心にして、彼女達は、少なくとも4つの自己としての主体性の感覚を構造化しているということである。2つ目に、人間は自分自身とその生活を物語の視点から経験するということ、つまり、フィリピン人女性は、妻、母親、嫁、就労者、フィリピン人としての自分の経験をストーリーとして語ることによって、そのストーリー構築が彼女達のアイデンティティ構築を促しており、さらに、そのストーリー構築には、他者の存在が不可欠であり、よって、アイデンティティ構築というのは他者の存在に頼っているということである。

7.3. 在沖フィリピン人女性のジェンダー観と沖比国際結婚夫婦間コミュニケーション

本論文の「第 5 章　在沖フィリピン人女性のジェンダー観と沖比国際結婚夫婦間コミュニケーション」では、「構築主義」の「ディスコース概念」[30] を基に、在沖フィリピン人女性の沖比夫婦間コミュニケーションの問題を分析した。その結果、C さんと D さんは、「家事や育児は妻がやること」という夫の「ディスコース秩序」に従って、伝統的性役割分業を実践（ディスコース実践）することにより、この伝統的な「ディスコース秩序」を維持し再生産していた。一方で、E さんと F さんは、「家事や育児は夫婦で分担するもの」という妻の「ディスコース秩序」に従って、平等主義的性役割分業を実践（ディスコース実践）することにより、夫の伝統的な「ディスコース秩序」を変化させていた。これらの事例が示していることは、夫婦が共有している「ディスコース秩序」（伝統的・平等主義的性役割観）は、在沖フィリピン人女性が、沖縄人夫との間で、言葉のやり取りを通して、どのような「ディスコース実践」（性役割観の実践）を行うかによって、例えば、伝統的な

[30] 「ディスコース概念」とは、「ディスコース秩序」「ディスコース実践」「ディスコース・タイプ」の 3 つの概念のことである。「ディスコース秩序」とは、例えば、知識、イデオロギー、常識など社会で支配的な言説のことを指す。「ディスコース実践」とは、個々の社会状況において、実際に人々が言葉を使う行為を指す。「ディスコース・タイプ」とは、学校・家庭・職場・病院・警察・軍などの「社会的制度」を指す。この 3 つの「ディスコース」が関係性を持ちながら社会が構築されていくと考える。

「ディスコース秩序」を維持したり再生産することもできるし、また、その「ディスコース秩序」に対抗する平等主義的な「ディスコース実践」を行うことで、その夫婦の間で支配的な「ディスコース秩序」を転覆させたり変化させたりして、夫婦の関係性をより良い方向へ変えていくことが可能であるということを示唆している。この節では、この結果を踏まえて、さらに、沖比国際結婚夫婦間コミュニケーションの問題を、社会的構築主義の視点から考察していきたい。

社会的構築主義では、人間主体が言説により生み出されると考えることは前にも述べた。この理論では、個我、セクシュアリティ、年齢、人種等々についての文化的に利用可能な流布している諸言説によって、人々のアイデンティティは構築されていると見る（214）。例えば、諸言説によって、人々が自他を表現できる概念的レパートリーができる（214）。「女らしい」とか「若い」とか「外国人」といった人を描写する仕方をもたらす。加えて、それぞれの言説は、人々に限られた数の「位置」をもたらす（215）。例えば、セクシャリティに関する人々の諸言説には、「ゲイ」と「ストレート」があって、人々がどちらの言説を使うかによって、その人が占める「主体の立場」が決まる。全ての言説は、その内に潜在する「主体の位置」を持っており、それらは、それらの言説内に置かれる人々の「主体の位置」を決める（215）。

例えば、在沖フィリピン人女性は、夫婦間の性的役割分業において、伝統的実践を行うか、平等主義的実践を行うかという諸言説の中で選択を迫られる。夫に従って伝統的実践を行うフィリピン人妻は、伝統的性役割分業を実践する妻としての「主体の立場」を占める。一方で、夫の考え方を変えて平等主義的実践を行うフィリピン人女性は、平等主義的性役割分業を実践する妻としての「主体の立場」を占める。利用可能な流布している諸言説の中で、どちらの言説を選択するかによって、その人の言語的諸慣行が決まり、そして、その人の「主体の立場」が決定されていく。

その「主体の立場」が決まることによって、その特定の言説内で、彼女達が自分のために行ったり要求したりしてもいいことは何か、あるいはいけないことは何か、自分たちの言語行為に可能性と限界をもたらす。例えば、伝統的性役割分業という言説を選択したフィリピン人女性は、その言説内で、彼女が行うことは、夫の助けなしに家事・育児を実践することであり、家事・育児に協力することを夫に要求してはいけないという言語行為に限定される。一方で、平等主義的性役割分業という言説を選択したフィリピン人女性は、その言説内で、彼女が夫に家事や育児に協力することを要求してもいいという言語行為の可能性を開くことができる。このように、フィリピン人女性が性役割分業について利用可能な諸言説のうち、どの言説を選択するかによって、フィリピン人女性の妻としての「主体の立場」が決められ、そして、その言説内で、してもいいこと、してはいけないことの言語的諸慣行が決定されていく。

また、社会的構築主義では、人々が諸言説を選択することによって「立場」を決めていく過程で、自分を「立場づけ」する時、他者との協議が必要であると考える。人々は特定

の言説を使うことによって、自分で立場を採用するかもしれないし、あるいは、自分のストーリーで他の話し手に付与する役割を通じて彼らに立場を「割り当てる」かもしれない（バー、1997 : 223）。他の話し手は、その割り当てられた立場を採用するかもしれないし、その立場を望まないかもしれない。また、反対に、自分が他者のストーリーの中で、他者によって、ある立場を割り当てられるかもしれないし、その立場が、自分の望む立場とは異なっているかもしれない。このようにして、多くの種類の主体の立場が、それぞれの状況に置いて展開され、そしてそれらは参加者たちによって、提供されたり、受容れられたり、主張されたり、あるいは抵抗されたりしている（223）。それぞれの参加者が「状況の定義」を上手く成し遂げようと努力している。

在沖フィリピン人女性の事例では、伝統的性役割分業を実践する妻と平等主義的性役割分業を実践する妻の 2 つの立場が見られた。これらの「立場づけ」において、フィリピン人妻は、沖縄人夫とどのように協議をしたのだろうか。伝統的性役割分業を実践するフィリピン人女性は、夫に家事・育児を協力してもらいたいと願っていた。フィリピン人妻は、最初、家事や育児を教えることにより、沖縄人夫に対して、「家事・育児に協力的な夫」という「立場づけ」を行った。しかし、沖縄人夫は、自分に割り当てられたこの「立場」を望んでいなかった。その「立場」に抵抗を示し、反対に、妻に対して「家事・育児を担う妻」という「立場づけ」を行った。フィリピン人妻は、夫の抵抗にあって、夫が望まないのであれば無理にその立場を押し付けることはできないと考え、そして、夫の妻に対する「立場づけ」を受け入れることによって、伝統的性役割分業を実践する妻としての立場を慣行した。一方で、平等主義的性役割分業を実践するフィリピン人妻は、沖縄人夫が妻に対して行った「家事・育児を担う妻」という「立場づけ」に抵抗を示した。そして、沖縄人夫に家事・育児を教えることによって、「家事・育児に協力的な夫」という「立場づけ」を行った。夫はこの「立場」を受け入れて、家事・育児に協力的になった。このようにして、平等主義的性役割分業を実践するフィリピン人妻は、「伝統的な妻」という立場に抵抗を示し、反対に、夫の伝統的な態度を変える努力をして、「家事・育児に協力的な夫」という「立場づけ」を夫に行うことによって、平等主義的性役割分業を実践した。

このように、伝統的性役割分業を実践する夫婦では、夫の主張が強く、夫側が妻に行った「立場づけ」が受け入れられている一方で、平等主義的性役割分業を実践する夫婦では、妻の主張が強く、妻側が夫に行った「立場づけ」が受け入れられている。なぜ、一方の夫婦では、夫の意見が強く夫の「立場づけ」が受け入れられ、他方の夫婦では妻の意見が強く妻の「立場づけ」が受け入れられているのか。この違いは、言語能力の差にあるのかもしれないし、意志が強く説得する能力の差異かもしれない。この要因を追求する調査は今後の課題としたいが、ここで明らかなことは、この社会的構築主義の「立場づけ」の概念が、在沖フィリピン人女性がどのような言説に支配されているのか、そして、彼女達は、沖縄人夫との間で、どのような「立場づけ」を行っているのか、沖縄人夫との間で、どのような協議をして、この「立場づけ」が成立したのか、という見方を与えてくれることで

ある。在沖フィリピン人女性自身が、これらのことに気づくことによって、彼女達が夫婦間で、自分の満足なアイデンティティを協議できる方法や、彼女達が望むように振る舞い行為する方法を模索することができるかもしれないと考える。さらに、社会的構築主義では、「立場づけ」と個人的変化について次のように主張している。

社会的構築主義の言説的立場づけの枠組み内では、個人が変化を遂げる第一歩は、人々の主体性を形成している諸言説およびそれらによってもたらされる諸立場を認識することであるという（バー、1997：230）。例えば、ある女性は、自分の人生を上手くやっていけないという感情の抑うつを訴えている。彼女は、自分の幼い子供達のことをしばしば怒るので自分は悪い母親であるとか、年配の自分の母親の世話をしたがらないので自分はダメな娘であると感じている。しかしその問題を個人のレベルよりも、むしろ社会的レベルに向け直すことで、その女性が自分を抑うつではなく、抑圧されていると見ることが可能になるという（230）。母性、女らしさ、家族生活等々の諸言説は、女性達を、心理的、社会的、経済的に女性自身の最善ではない諸慣行に携わるようにさかんに促す（230）。抑うつというより、抑圧されていると自分を捉えることで、自分自身について、そして自分の問題にどのように取り組むかについて、異なる見方を模索することができる（231）。利用可能な諸言説と諸立場を検討することによって、人々は個人的に不利な立場を避けて、もっと有利な諸言説の諸立場を占めようと努力することができるかもしれない（231）。

例えば、伝統的性役割分業を実践するフィリピン人妻は、子供達と一緒に過ごし、子供達の要求のために自分のそれは犠牲にする「良い母親」の言説や、夫に献身的に使え、夫のために自分の時間を犠牲にする「良い妻」の言説の中で、思い切って自分のやりたいことができない、自分らしく生きられない、パートタイムの仕事と家事・育児の二重の負担の中で抑圧されていると感じるかもしれない。しかし、そんな言説と異なる、または、それに対抗する「母親・妻」としての諸言説の存在に気づくことによって、自分が個人的にダメージを受ける「良い母親・妻」の諸言説に立場付けられることに対し抵抗する方法、そして有益な諸言説の諸立場を要求する方法を見いだすことができるかもしれない。つまり、異なる言説、対抗する言説、そして有益な言説を認識することによって、自分の置かれている不利な諸立場に位置づけられることに抵抗する方法を模索し、自分が満足できるアイデンティティを構築したり、自分の有利な「立場」を確立することができるのではないかと考える。

以上のことをまとめると、在沖フィリピン人女性は、利用可能な諸言説によって自分を表現できる概念的レパートリーを持っており、彼女達がどちらの言説を使うかによって、彼女達の「主体の立場」が決まる。例えば、伝統的性役割分業、平等主義的性役割分業などの諸言説があり、フィリピン人女性がどちらの諸言説を選択するかによって、「伝統的実践を行う妻」、「平等主義的実践を行う妻」という彼女達の「主体の立場」が決められていく。また、フィリピン人女性達は、自分を「立場づけ」する時、沖縄人夫との協議を行っている。例えば、伝統的性役割分業を実践する夫婦では、最初、妻が夫に対して行った「家

事・育児に協力的な夫」という「立場づけ」に夫が抵抗感を示し、最終的に、夫が「家事・育児を担う妻」という「立場づけ」を妻に受け入れさせている。平等主義的性役割分業を実践する夫婦では、夫が行った「家事・育児を担う妻」という「立場づけ」に妻が抵抗感を示し、逆に、夫に「家事・育児に協力的な夫」という「立場づけ」を受け入れさせている。このように、在沖フィリピン人女性が現在の自分の「立場」を決定する過程には、沖縄人夫との相互作用が行われているのである。これらの「立場づけ」の概念は、在沖フィリピン人女性達が、どのような言説に支配されているのか、沖縄人夫との間でどのような協議をして現在の「立場」を受け入れるようになったのか、これらのことを認識させてくれる。もし、現在、自分の「立場」に満足していない、あるいは、自分の「立場」を不利と思っている在沖フィリピン人女性がいるとすれば、この「立場づけ」の概念で、自分の状況を把握することによって、今までの「立場づけ」に抵抗する方法や、さらに、自分の「立場」を有利にするために諸言説を新たに採用する方法を模索し、自分が満足できるアイデンティティを構築し、自分の有利な「立場」を確立する道を見つけることができると考える。

7.4. フィリピン人妻に対する沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為についての考察

「第 6 章　フィリピン人妻に対する沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為についての考察」では、相手に対して優位に立つもの、例えば、経済力、権力、マジョリティーの立場など、社会的・経済的・政治的力を利用して、相手を服従させたり自己の考えや価値観を押し付ける行為、つまり、力を利用して劣位な立場にある者を服従させ支配することを暴力と定義し、フィリピン人妻が被る沖縄人夫の暴力的言語・非言語行為について考察した。

また、DV・離婚問題を抱える沖比国際結婚夫婦間では「沖縄人夫の支配とフィリピン人妻の従属」という力関係が構築されているという前提に立ち、沖比国際結婚夫婦間でこの「支配・従属」関係が言語・非言語行為を介して、どのように構築されているのかということを、社会的構築主義の理論的枠組みで考察した。社会的構築主義では、「言説」「社会的慣行」「社会構造」の概念を用いて、社会が構築されていく過程を説明している。

この概念を用いて、DV・離婚問題を抱えた在沖フィリピン人妻と沖縄人夫の間で、どのように「支配－従属」関係が構築されているのかを考察した結果、DV・離婚問題を抱えたフィリピン人妻は、沖縄人夫が自分に対して、「妻は罵倒するに値する存在」「妻を罵倒することによって自分に従わせる」「フィリピン人妻は一般の沖縄人妻と金銭感覚が違う」「母国へ多額の送金をしてしまう」「妻が家事・育児をするのは当然」などの言説に表れる差別意識を持っていると感じていた。この「言説」に表れる差別意識の下で、沖縄人夫が、心理的暴力、言葉による暴力、経済的暴力、男性の特権をふりかざす、などの差別的「社会的慣行」を行うことにより、夫婦の間に「支配－従属」の関係性（社会構造）を構築していることがわかった。

沖比国際結婚夫婦間の DV・離婚問題の背景には、沖縄人夫がフィリピン人女性に対する

差別意識に基づいた「言説」を持っており、その差別意識に基づいた「言説」が、沖縄社会では、「真理」として一般的に許容されているため、その差別意識を反映した「言説」に基づいて、沖縄人夫がフィリピン人妻に対して差別的な「社会的慣行」を繰り返すことによって、沖縄人夫とフィリピン人妻の間に「支配-従属」の力関係が構築されていく。この「支配-従属」の力関係を変えていくためには、フィリピン人女性の声を反映した意識に基づく「言説」を引き出し、これも「真理」として、社会に一般的に認識してもらう必要がある。彼女達の意識に基づく「言説」を社会に広く反映させていくことによって、夫の差別意識に基づく「言説」を覆し、夫婦間の差別的な「社会的慣行」を変更し、「社会構造」を変えていくことを可能にすることができると考える。

7.5. まとめ

ここでは、まず、在沖フィリピン人女性が沖縄社会で健全なアイデンティティを構築するために、そして、彼女達が沖縄人夫と建設的な夫婦関係を構築するために、ホスト社会の人々（家族、親戚、隣人、教会の人、コミュニティーなど）が、どのようなサポートをしていくことができるのかということを提案する。さらに、本章の考察を踏まえて、在沖フィリピン人女性の現状を改善していくために、どのような調査研究を実施する必要があるのか、今後の課題について述べる。

在沖フィリピン人女性は、日本語、英語、タガログ語、地方語という言語構造に参入することによって、それぞれの言語の文法規則に則って、自分自身の主体性の感覚を構造化していく。言語の文法規則などの言語的慣行を訓練し熟達することによって、彼女達は、ますます複雑な自己のアイデンティティを発達させていく。言語的慣行の熟達は、日々の人々との相互作用の中で達成されていく。ホスト社会の人々は、彼女達との日々の相互作用に積極的、意欲的に関わることによって、彼女達の言語的慣行を訓練し熟達させ、結果的に、彼女達が健全なアイデンティティを発達させていくことを促すことができると考える。よって、日常的にフィリピン人女性に関わる機会のあるホスト社会の人々は、彼女達が言語能力を発達させて健全なアイデンティティを構築できるように、彼女達の生活に温かい関心を寄せながら、言語コミュニケーションによる彼女達への積極的な働きかけを行っていくことが大切である。そうすることによって、彼女達が言語的慣行を熟達し、より成熟したアイデンティティを発達させることができると考える。今後の研究課題としては、例えば、日本語、英語、タガログ語、地方語という、それぞれの言語に則って、在沖フィリピン人女性達は、どのような主体性の感覚というものを構造化しているのか、言語が主体性の構造化にどのような影響を与えているのか、その構造化された主体性の内容について、さらに調査していく必要がある。そして、彼女達がそれぞれの言語的慣行を熟達することによって、どのように自己のアイデンティティを発達させるのか、時系列的にインタビュー調査を繰り返し考察する必要があると考える。

また、在沖フィリピン人女性は、妻、母親、嫁、就労者、フィリピン人としての自分の

経験をストーリーとして語ることによって、自己のアイデンティティを構築していく。そのストーリーを構築する上で、そのストーリーの中に登場する他者の存在は重要な役割を果たしている。その他者のフィリピン人女性に対する積極的・肯定的な視線が、彼女達の健全なアイデンティティを構築することを促している。ホスト社会の人々は、フィリピン人女性の存在を肯定的姿勢で受け止めること、そして、彼女達が紡ぎだすストーリーをしっかり傾聴することによって、彼女達は、前向きに沖縄社会で適応して生きていく自己としてのアイデンティティを確立していくことができると考える。そのためには、ホスト社会の人々は、日常生活の中で、彼女達のこれまで生きてきた経験や現在の状況に関心を寄せながら、彼女達の紡ぎだすストーリーを肯定的に受け止め理解する努力が必要である。そうすることによって、彼女達の肯定的なアイデンティティの構築を促すことができると考える。本論文の調査研究では、まだまだ事例が少なく内容が限られていたので、研究課題としては、さらにインタビュー調査を実施して、在沖フィリピン人女性が自分の経験をストーリーとして語ることによって、彼女達がどのようなアイデンティティを構築しているのか、彼女達のアイデンティティの様々な側面を把握していくことが重要である。

次に、在沖フィリピン人女性が沖縄人夫と建設的な夫婦関係を築いていくために、沖縄人夫とフィリピン人妻の両者のためにできることを述べてみたい。まず、沖比国際結婚夫婦間コミュニケーションの問題点として、DV・離婚問題を抱えた夫婦の間では、夫が妻についての差別意識に基づく「言説」を使うことによって、暴力的言語態度をとるという「社会的慣行」を行い、その結果、夫婦間で「支配・従属」という社会的関係が構築されていると述べた。また、「上手くいっていない夫婦」では、夫のコミュニケーション態度が変化せず、その要因として、夫が持つフィリピン人女性に対する偏見や自文化中心主義の「言説」が影響を与えていることを述べた。このように沖比国際結婚夫婦が問題を抱える原因として、夫がフィリピン人に対する差別的意識や偏見、自文化中心主義の態度を支える「言説」を慣行していることが推察できる。したがって、ホスト社会にできることは、これらのフィリピン人妻に対する否定的な「言説」を変えていくことである。例えば、これらの「言説」に対抗できるようなフィリピン人妻についての説得力のある肯定的な「言説」を社会に浸透させていくことが必要である。そのためには、啓蒙活動の一環として、フィリピン人女性の文化、慣習、経験等について、もっと深く知ってもらえるようなセミナー、講演会、ワークショップなどを実施する必要がある。在沖フィリピン人女性の現状を深く知ってもらうために、どのような効果的で説得力のあるセミナー、講演会、ワークショップを考案することができるのか、その内容を研究することも今後の課題である。さらに、問題を抱えたフィリピン人女性とインタビューを重ねることによって、沖縄人夫が抱いている妻に対する差別的「言説」、フィリピン人女性に対する偏見や自文化中心主義的考えの「言説」がどこから生まれてきたのかを探る必要がある。そして、これらの否定的「言説」を変えていくために、どのような在沖フィリピン人女性の視点に立った新しい「言説」を模索することができるか考える必要がある。

在沖フィリピン人女性は、様々な諸言説の中から、どの言説を使うかによって、自分の「主体の立場」づけを行っていた。夫婦間で「立場づけ」を行うときには、沖縄人夫と協議を重ねていく中で、それぞれの「立場」を確立していた。在沖フィリピン人女性の中には、自分の「立場」に満足していない、あるいは、自分の「立場」を不利と思っている女性もいると推察できる。この場合、ホスト社会は、彼女達に、自分がどのような「言説」に支配されて、現在の「立場」に位置づけられているのか、また、沖縄人夫と、どのような協議をして、この「立場づけ」が成立したのか、認識させることによって、これまでの「立場」を変えていく方法や、自分の「立場」を有利にするための諸言説を見つけて採用する方法を模索し、彼女達が、満足できるアイデンティティを構築したり、自分の新しい「立場」を確立できるようにサポートしていくことができると考える。そのためには、自分たちの周囲にいるフィリピン人女性達が夫や家族との関係において、どのような「立場」に置かれているのか、そして、彼女達はその「立場」に満足しているのかということに関心を持ち、彼女達に働きかけることが大切である。彼女達が今の「立場」に不満であれば、夫や家族とどのような話し合いによって、今の「立場」に位置づけられたのか、彼女達の話を親身になって傾聴するだけでも、彼女達は、自分で今の「立場」を満足なものに変えていく方法を模索し発見することができるかもしれない。また、今後の研究課題としては、在沖フィリピン人女性が沖縄人夫との相互作用において、自分の「立場づけ」をする時に、自分が満足できる「立場づけ」を行うために、沖縄人夫とどのように協議をすればいいのか、その有効な方法を、彼女達に提案するための調査研究が必要である。

在沖フィリピン人女性は、外国人、マイノリティー、女性であることで、夫との関係において周縁化されやすい傾向がある。これらのフィリピン人女性をサポートしていくためには、啓蒙活動など、社会に働きかけていく方法と、カウンセリングなど個人的サポートと、両側面からの支援が肝要であると考える。また、研究の分野では、在沖フィリピン人女性の言語とアイデンティティの関係性や、沖比夫婦間コミュニケーションの問題点について深く解明するために、異文化コミュニケーションをはじめ、社会言語学の分野でのさらなる探求が必要である。

参考・引用文献

アーヴィング・ゴッフマン（1987）『スティグマの社会学』石黒毅訳、せりか書房。
阿不都熱西提・阿不都勒提甫（2010）「在日ウイグル人の言語使用とアイデンティティ—「民考民」「民考漢」の言語意識調査から—」『民族紛争の背景に関する地政学的研究：報告書』第 18 巻、88-99。
石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人（2013）『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション—多文化共生と平和構築に向けて』、有斐閣選書。
石井由香（2003）「移民の居住と生活—現状と展望—」駒井洋監修、石井由香編著『移民の居住と生活』（pp. 20-55）、明石書店。
井出祥子（1992）「言語とアイデンティティー」『月刊言語』250 号、28-33。
伊藤孝惠（2006）「外国人妻の夫婦間コミュニケーションの問題—先行研究の整理から—」『山梨大学留学センター紀要』第 2 巻，17-24。
伊藤孝惠（2009）「国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の認識：「夫日本人、妻外国人」夫婦の夫婦単位での特徴を中心に」『言語文化と日本語教育』第 38 号，20-29。
井上修平（2004）「在日フィリピン人エンターテイナーとその家族に関する一考察—神奈川県横須賀市での実態調査をとおして—」『政治学研究論集』第 20 号，pp. 37-56。
ヴィヴィアン・バー（1997）『社会的構築主義への招待—言説分析とは何か』田中一彦訳、川島書店。
A・E・フルツェッティ、N・S・ジェイコブソン（1998）「第 7 章　大人の親密さについての行動学的概念化に向けて：夫婦セラピーの意味するもの」、E・A・ブレックマン（編）『家族の感情心理学』北大路書房，pp. 127-148。
エリザベス・ウイ・エヴィオータ（2000）『ジェンダーの政治経済学—フィリピンにおける女性と性的分業』佐竹眞明・稲垣紀代訳、明石書店。
岡本夏木（2000）「意味の形成と発達」『意味の形成と発達』（pp.1-28）ミネルヴァ書房。
「夫（恋人）からの暴力」調査研究会（2002）「1 章　ドメスティック・バイオレンスとは」『ドメスティック・バイオレンス』有斐閣，11-24。
戒能民江（2002）『ドメスティック・バイオレンス』不磨書房。
柿原武史（2009）「第 8 章　南米出身者と日本人の国際結婚夫婦とその家族の言語使用状況」河原俊昭・岡戸浩子編著『国際結婚—多言語化する家族とアイデンティティ』（pp. 245-275）、明石書店。
河原俊昭（2004）「在住フィリピン人女性の新しい言語アイデンティティ」小野原信義・大原始子編著『ことばとアイデンティティ』（pp. 177-200）、三元社。
河原俊昭（2009）「第 9 章　国際結婚の言語を考える」河原俊昭・岡戸浩子編著『国際結婚—多言語化する家族とアイデンティティ』（pp. 276-309）、明石書店。

窪田光男（2005）「第 3 章　演じられたアイデンティティの理論的背景」『第二言語習得とアイデンティティ』（pp. 33-46）、ひつじ書房。
K・M・リンダール、H・J・マークマン（1998）「第 6 章　家族のコミュニケーションと否定的感情の調節」、E・A・ブレックマン（編）『家族の感情心理学』北大路書房, pp. 109-126。
厚生労働省　人口動態統計（2013）
厚生労働省人口動態調査「夫妻の国籍別にみた年次別婚姻件数」
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001112811　（最終アクセス 2014 年 3 月 15 日）。
厚生労働省（2013）「厚生統計要覧 第 1 編人口・世帯 第 2 章人口動態 婚姻件数、年次×夫妻の国籍別」閲覧日 2014 年 3 月 31 日。
戈木クレイグヒル滋子（2010）『質的研究方法ゼミナール増補版―グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ』医学書院。
酒井嘉子（1994）「女性と労働」『現代フィリピンにおける「中間階層」の研究』（pp. 50-62）、アジア女性交流・研究フォーラム専門委員会。
佐竹眞明、ダアノイ、M．A．（2006）『フィリピン－日本国際結婚―多文化共生と移住―』めこん。
定松文（1996）「家族問題―定住外国人の家族生活と地域社会―」宮島喬、梶田孝道編『外国人労働者から市民へ―地域社会の視点と課題から―』有斐閣，pp. 65-82。
真田信治（2006）「第 6 章　言語意識」『社会言語学の展望』（pp. 161-190）、くろしお出版。
サリー・マコネル・ジネー（2004）「第 2 章　女たちによる意味の（再）生産」れいのるず秋葉かつえ・永原浩行編著『ジェンダーの言語学』（pp. 23-48）、明石書店。
ジョン・ライアンズ（1987）『言語と言語学』近藤達夫訳、岩波書店。
施利平（2000）「婚姻満足度の規定要因としてのコミュニケーション―国際結婚夫婦を対象としたカップル単位の分析から―」『年報人間科学』第 21 巻，159-174。
施利平（2001）「夫婦間コミュニケーションに関する一考察―国際結婚夫婦のアンケート調査から―」『人間科学研究』第 3 号，183-196。
鈴木規之・玉城里子（1997）「沖縄のフィリピン人―定住者としてまた外国人労働者として―（2）」『琉球大学法文学部紀要』第 58 巻、229-260 頁。
平英美・中河伸俊（2000）『構築主義の社会学―論争と議論のエスノグラフィー』世界思想社。
高橋聡（2012）「言語教育における、ことばと自己アイデンティティ」『言語文化教育研究』10（2）、37-55。
高畑幸（2003）「国際結婚と家族―在日フィリピン人による出産と子育ての相互扶助―」『移民の居住と生活』駒井洋監修，石井由香編著，明石書店，pp. 255-291。

竹下修子（1997）「国際結婚カップルの異文化適応に関する研究」『日本社会病理学会』第12号，91-102。
竹下修子（1997）「国際結婚カップルの結婚満足度」『ソシオロジ』第42巻第1号，41-57。
武田丈（2005）『フィリピン女性エンターテイナーのライフストーリー――エンパワーメントとその支援』関西学院大学出版会。
デボラ・タネン（2003）『わかりあえる理由　わかりあえない理由―男と女が傷つけあわないための口のきき方8章』田丸美寿々訳、講談社。
東海林麗香（2006）「夫婦間葛藤への対処における譲歩の機能：新婚女性によって語られた意味づけ過程に焦点を当てて」『発達心理学研究』第17巻第1号，1-13。
冨安兆子（1994）「フィリピン社会の変容と宗教」『現代フィリピンにおける「中間階層」の研究』(pp. 63-95)、アジア女性交流・研究フォーラム専門委員会。
仲里和花（2013）「沖縄県在住フィリピン人女性の生活実態調査」、『九州コミュニケーション研究』第11号、
中澤進之右（1996）「農村におけるアジア系外国人妻の生活と居住意識―山形県最上地方の中国・台湾、韓国、フィリピン出身者を対象にして―」『家族社会学研究』第8号，81-96。
中村桃子（2001）『ことばとジェンダー』勁草書房。
日本弁護士連合会編（2000）「第Ⅱ部　夫から妻への暴力　第2章　背景と原因」『ドメスティック・バイオレンス防止法律ハンドブック』明石書店，84-116。
花崎正子（1994）「フィリピンの中間階層にみられる性別役割分業観」『現代フィリピンにおける「中間階層」の研究』(pp. 96-118)、アジア女性交流・研究フォーラム専門委員会。
比嘉敬（1983）『沖縄大百科事典 下巻』沖縄タイムス社。
平山順子・柏木恵子（2001）「中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？」『発達心理学研究』第12巻第3号，216-237。
平山順子・柏木恵子（2004）「中年期夫婦のコミュニケーション・パターン：夫婦の経済生活及び結婚観との関連」『発達心理学研究』第15巻第1号，89-100。
藤本伸樹（2006）「フィリピン女性「エンターテイナー」の直面する問題を通して日本の人身売買を検証する」『人権問題研究所紀要』第20号，pp. 29-63。
法務省入国管理局　在留外国人統計（2006／2014）
法務省在留外国人統計　http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001111233（最終アクセス2014年3月15日）。
法務省（1991）『平成3年版 在留外国人統計』法務省入国管理局。
松代東亜子（2004）「日本における外国籍女性とドメスティックバイオレンス―アジア人女性への支援現場から」『フェミニストカウンセリング研究』第3号，69-80。
松並知子（2007）「在にフィリピン人の見た日本のジェンダー意識」『アジア女性研究・アジア女性交流・研究フォーラム』第16巻、pp. 56－66。
松本佑子（2004）「国際結婚とドメスティック・バイオレンス―アジア系外国人女性の事例を中心に―」『研究紀要』第15号，聖徳大学，55-62。

宮島喬・長谷川祥子（2000）「在日フィリピン人女性の結婚・家族問題―カウンセリングの事例から―」『応用社会学研究』第 42 号，立教大学社会学部研究室（編），1-14。
宮本勝・寺田勇文（1994）『アジア読本　フィリピン』、河出書房新社。
矢吹理恵（2012）「日米国際結婚夫婦における葛藤課題の調整過程：課題の認知の言語化をめぐる質的分析」『家族心理学研究』第 26 巻第 1 号，54-68。
山本雅代（2013）「「日本語―フィリピン諸語」異言語間家族の言語使用状況：「言語の威信性」を枠組みに」『国際学研究』2（1）、9-19。
横井彩（2005）「第 10 章　ジェンダー政策とドメスティック・バイオレンス―日本と韓国の政策と意識」渡辺秀樹（編）『現代日本の社会意識』慶應義塾大学出版会，201-227。
れいのるず秋葉かつえ・永原浩行（2004）『ジェンダーの言語学』、明石書店。

Deborah Tannen（1990）*"You Just Don't Understand,"* Harper Collins Publishers Inc, NY.
Gudykunst, W.B. & Ting-Toomey, S. (1988). *Culture and interpersonal communication*. New bury Park, London, New Delhi: Sage Publications.
Hall, E.T. (1992). *Beyond culture.* MA: Peter Smith Publisher.
Mina Roces（2010）'Rethinking 'the Filipino woman'：a century of women's activism in the Philippines, 1905-2006,' Edited by Mina Roces & Louise Edwards, *"Women's Movements in Asia"* (pp. 34-52), Routledge, NY.
Ting-Toomey, S. & Chung, L. C. (2005). *Understanding intercultural communication*. New York, Oxford: Oxford University Press.